京都府遺跡調査概報

第 26 冊

1. 志　高　遺　跡
2. 国道9号バイパス関係遺跡
   千代川遺跡第12次
3. 長岡宮跡第185次
4. 木津地区所在遺跡
   (1) 瓦　谷　遺　跡
   (2) 上人ケ平遺跡
   (3) 第27・28地点（菩提1・2号墳）

1987

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その活用及び研究を行い，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することを目的として各種の事業を行っていますし，併せて，常により精密な調査を心がけ，より正確な記録を作成し，これらを後世に伝えるべく，日々努力しているつもりであります。そうした基本姿勢の下で，当調査研究センターが昭和61年度に実施した発掘調査は，41件にのぼりますが，本書に収めましたのは，志高遺跡・国道９号バイパス関係遺跡・長岡宮跡第185次・木津地区所在遺跡の４件，遺跡数にして６か所の発掘調査の概要です。その他の遺跡については，数冊の冊子にまとめています。本書を含めて，これらが関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となれば幸いです。また，当調査研究センターでは，「京都府遺跡調査報告書」・「京都府埋蔵文化財情報」も刊行しておりますので，あわせて御活用いただければ幸甚です。

なお，本書に掲載した調査の実施にあたりましては，発掘調査を委託された建設省近畿地方建設局，近畿郵政局，住宅・都市整備公団の方がたをはじめ，京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会・亀岡市教育委員会・向日市教育委員会・木津町教育委員会の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業等に従事していただきましたことを明記して，これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和62年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は

　1.　志高遺跡　　2.　国道９号バイパス関係遺跡　　3.　長岡宮跡第185次

　4.　木津地区所在遺跡

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 志高遺跡	舞鶴市字志高	昭和61. 4. 17 ～ 昭和62. 3. 20	建設省近畿地方建設局	肥後　弘幸
2. 国道９号バイパス関係遺跡 千代川遺跡	亀岡市千代川町北ノ庄	昭和61. 5. 19 ～ 昭和62. 1. 26	建設者近畿地方建設局	森下　衛
3. 長岡宮跡第185次	向日市上植野町馬立6-1	昭和62. 1. 17 ～ 昭和62. 3. 4	郵政省近畿郵政局	竹井　治雄
4. 木津地区所在遺跡			住宅・都市整備公団	
(1) 瓦谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂字瓦谷・鰯谷	昭和61. 6. 2 ～ 昭和62. 3. 18		伊賀　高弘
(2) 上人ケ平遺跡	相楽郡木津町大字市坂字上人ケ平	昭和61. 12. 11 ～ 昭和62. 3. 14		戸原　和人 荒川　史
(3) 第27・28地点	相楽郡木津町大字市坂字向山81	昭和61. 10. 4 ～ 昭和61. 11. 26		荒川　史

3.　本冊の編集には，調査第１課資料係が当った。

目　次

1.　志高遺跡昭和61年度発掘調査概要…… 1
2.　昭和61年度国道 9 号バイパス関係遺跡発掘調査概要……17
3.　長岡宮跡第 185 次発掘調査概要……37
4.　木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要……43
(1)瓦谷遺跡……47
(2)上人ケ平遺跡……83
(3)第27・28地点…… 102

挿 図 目 次

志高遺跡

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　第３次～第７次調査位置関係図…… 2
第 3 図　Ａ地区縄文時代土層図…… 3
第 4 図　Ａ地区弥生時代遺構図…… 4
第 5 図　古墳時代後期～奈良時代中頃遺構図…… 6
第 6 図　奈良時代後半～平安時代初頭遺構図…… 7
第 7 図　Ｂ地区下層遺構図…… 8
第 8 図　１号墓出土弥生土器……10
第 9 図　Ｃ地区遺構図……12
第 10 図　Ｃ地区出土弥生土器……13

千代川遺跡

第 11 図　調査地位置図……19
第 12 図　土層断面図……20
第 13 図　調査地平面図……21
第 14 図　古墳時代後期土坑群平面図……23
第 15 図　奈良～平安時代遺構図……25
第 16 図　出土遺物実測図(縄文・弥生時代)……28
第 17 図　出土遺物実測図(石器)……29
第 18 図　出土遺物実測図(古墳時代１)……30
第 19 図　出土遺物実測図(古墳時代２)……31
第 20 図　出土遺物実測図(奈良～平安時代１)……32
第 21 図　出土遺物実測図(奈良～平安時代２)……33
第 22 図　出土遺物実測図(鎌倉時代)……34

長岡宮跡第185次

第 23 図　調査地位置図……37
第 24 図　調査地周辺地形図……38
第 25 図　トレンチ配置図……40

第 26 図　トレンチ土層図……40
第 27 図　出土遺物実測図……41

木津地区所在遺跡

(1)　瓦谷遺跡

第 28 図　調査地位置図……44
第 29 図　瓦谷遺跡・上人ケ平遺跡両調査区位置図……45
第 30 図　瓦谷遺跡20・39・48bt トレンチ配置図……46
第 31 図　瓦谷遺跡20bt 遺構配置図……48
第 32 図　瓦谷遺跡20bt・鰯谷22bt 断面図……49
第 33 図　ＳＸ2001西辺溝埴輪出土状況図……51
第 34 図　ＳＸ2002実測図……52
第 35 図　ＳＸ2004実測図……53
第 36 図　ＳＸ2005・2006実測図……55
第 37 図　ＳＸ2007実測図……56
第 38 図　ＳＸ2009実測図……57
第 39 図　ＳＸ2009断面実測図……57
第 40 図　瓦谷遺跡20bt 出土遺物実測図(1)……58
第 41 図　瓦谷遺跡20bt 出土遺物実測図(2)……60
第 42 図　瓦谷遺跡20bt 他出土遺物実測図(3)……62
第 43 図　瓦谷遺跡10bt 他実測図……65
第 44 図　瓦谷遺跡51・52bt 実測図……66
第 45 図　瓦谷遺跡10・51・52bt 断面実測図……67
第 46 図　瓦谷遺跡(鰯谷22bt)実測図……69
第 47 図　瓦谷遺跡48bt 遺構実測図……70
第 48 図　瓦谷遺跡39・48bt 断面実測図……71
第 49 図　ＳＤ4805遺物出土状況……73
第 50 図　瓦谷遺跡39bt 遺構実測図……74
第 51 図　ＳＤ4807遺物出土状況……76
第 52 図　ＳＤ4807出土土器……76
第 53 図　瓦谷遺跡39・48bt 出土遺物実測図(1)……78
第 54 図　瓦谷遺跡39・48bt 出土遺物実測図(2)……79
第 55 図　瓦谷遺跡39・48bt 出土遺物実測図(3)……80

第 56 図　瓦谷遺跡39bt出土木製品実測図(1)……81
第 57 図　瓦谷遺跡39bt出土木製品実測図(2)……82

(2)　上人ケ平遺跡

第 58 図　上人ケ平遺跡調査地位置図……84
第 59 図　上人ケ平遺跡34・35・36bt遺構実測図……85
第 60 図　上人ケ平遺跡5・6・19bt遺構実測図……87
第 61 図　SX1920実測図……88
第 62 図　上人ケ平遺跡2・8bt遺構実測図……89
第 63 図　上人ケ平遺跡15・19・21bt断面実測図……90
第 64 図　上人ケ平遺跡11～13・15～17・20・21bt遺構実測図……91
第 65 図　上人ケ平遺跡21bt 3トレンチ，市坂5号墳関連遺構実測図……94
第 66 図　上人ケ平遺跡6・34・35bt出土遺物実測図……96
第 67 図　上人ケ平遺跡SD0805出土遺物実測図……97
第 68 図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図(1)……98
第 69 図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図(2)……100
第 70 図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図(3)……101
第 71 図　上人ケ平遺跡20bt出土遺物実測図……101

(3)　第27・28地点（菩提1・2号墳）

第 72 図　第27・28地点(菩提1・2号墳)地形測量図……103
第 73 図　第27・28地点(菩提1・2号墳)断面実測図……105

付　表　目　次

千代川遺跡

付 表 1　古墳時代後期土坑群一覧表……23
付 表 2　奈良～平安時代掘立柱建物跡一覧表……26
付 表 3　墨書土器一覧表……33

木津地区所在遺跡

(1)　瓦谷遺跡

付 表 4　瓦谷遺跡48bt　溝SD4805出土木製品一覧表……77

図 版 目 次

志高遺跡

図版第１　(1)Ａ地区縄文時代前期後葉全景(北西から)
　　(2)縄文時代前期遺物出土状況
図版第２　(1)Ａ地区弥生時代全景(北西から)
　　(2)Ａ地区方形竪穴式住居跡群(北西から)
図版第３　(1)Ａ地区掘立柱建物跡群(下層，北西から)
　　(2)Ａ地区掘立柱建物跡群(上層，北東から)
図版第４　(1)Ｂ地区弥生時代墳墓群全景(南東から)
　　(2)Ｂ地区弥生時代全景(南から：手前がＳＸ86231)
図版第５　(1)Ｃ地区全景(北東から)
　　(2)竪穴式住居跡(ＳＨ86246：北東から)

千代川遺跡

図版第６　(1)調査地遠景(南からの空中写真)
　　(2)調査地全景(東からの空中写真)
図版第７　(1)５トレンチ(奈良時代遺構面)全景(北東から)
　　(2)掘立柱建物跡(ＳＢ12074)検出状況(西から)
図版第８　(1)５トレンチ東半部奈良時代素掘り溝群検出状況(南から)
　　(2)５トレンチ(弥生時代遺構面)全景(東から)
図版第９　(1)６トレンチ全景(南東から)
　　(2)掘立柱建物跡(ＳＢ12107)検出状況(西から)
図版第10　(1)掘立柱建物跡(ＳＢ12108・12109)検出状況(北から)
　　(2)土坑(ＳＫ12076)検出状況
図版第11　(1)７トレンチ全景(南から)
　　(2)ＳＤ12121遺物出土状況(西から)
図版第12　(1)８トレンチ全景(西から)
　　(2)９トレンチ全景(南から)

長岡宮跡第185次

図版第13　(1)調査前全景(東から)

(2)トレンチ全景(東から)
図版第14　(1)トレンチ4(西から)
(2)トレンチ1・2・3(西から)
図版第15　(1)トレンチ1断面(北から)
(2)トレンチ2断面(北から)
図版第16　(1)トレンチ3断面(西から)
(2)トレンチ4断面(北から)

木津地区所在遺跡

(1)　瓦谷遺跡

図版第17　(1)瓦谷遺跡20bt全景―1(南南東から)
(2)瓦谷遺跡20bt全景―2(上方が北)
図版第18　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2001と埴輪棺群(西から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2001西辺溝と埴輪棺等(右上方が北)
図版第19　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2001-1(移動埴輪片を残した状態，南西から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2001-2(西から)
図版第20　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2004-1(連繋部被覆埴輪撤去後の状態，東から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2004-2(北小口閉塞状態，北から)
図版第21　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2005(南から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2007(西から)
図版第22　(1)瓦谷遺跡20bt　トレンチ西半部全景(北から)
(2)瓦谷遺跡20bt　ピット群検出状況(北から)
図版第23　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2003・SX2008(手前，南東から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2008(東から)
図版第24　(1)瓦谷遺跡20bt　SX2009(葺石)の残存状況(東から)
(2)瓦谷遺跡20bt　SX2009断ち割り横断面近接状況(西から)
図版第25　(1)瓦谷遺跡10btトレンチ全景
(2)鰯谷22btトレンチ全景(北から)
図版第26　(1)瓦谷遺跡51・52bt検出状況(Ⅱトレンチ，北から)
(2)瓦谷遺跡51・52bt　漆喰井戸検出状況
図版第27　(1)瓦谷遺跡48btトレンチ全景(北から)
(2)瓦谷遺跡48bt　SD4905検出状況(北から)
図版第28　瓦谷遺跡48番地地区　遺物出土状況

図版第29　瓦谷遺跡出土遺物―1

図版第30　瓦谷遺跡出土遺物―2

(2)　上人ケ平遺跡

図版第31　(1)上人ケ平遺跡現況(北西から)

(2)上人ケ平遺跡34bt遺構検出状況(西から)

図版第32　(1)上人ケ平遺跡6bt遺構検出状況(南から)

(2)上人ケ平遺跡6bt　SK0601(北から)

図版第33　(1)上人ケ平遺跡5bt検出状況(南から)

(2)上人ケ平遺跡16bt東部検出状況(南から)

図版第34　(1)上人ケ平遺跡19bt1トレンチ遺構検出状況(西から)

(2)上人ケ平遺跡19bt　SK1909検出状況(上方が南)

図版第35　(1)上人ケ平遺跡8bt遺構検出状況(北から)

(2)上人ケ平遺跡8bt2トレンチ遺構検出状況(北西から)

図版第36　(1)上人ケ平遺跡8bt　SD0805検出状況(西から)

(2)上人ケ平遺跡8bt　SK0803遺物出土状況(左が北)

図版第37　(1)上人ケ平遺跡15bt遺構検出状況(北から)

(2)上人ケ平遺跡20bt遺構検出状況(北から)

図版第38　(1)上人ケ平遺跡21bt1トレンチ遺構検出状況(南から)

(2)上人ケ平遺跡21bt2トレンチ遺構検出状況(東から)

図版第39　(1)上人ケ平遺跡21bt3トレンチ・上人ケ平5号墳全景(北西から)

(2)上人ケ平遺跡21bt3トレンチ遺構検出状況(1)(南西から)

図版第40　(1)上人ケ平遺跡21bt3トレンチ遺構検出状況(2)(南西から)

(2)上人ケ平遺跡21bt遺物出土状況(西から)

(3)　第27・28地点(菩提1・2号墳)

図版第41　(1)第27・28地点(菩提1・2号墳)全景

(2)第28地点(菩提2号墳)調査状況

図版第42　(1)第28地点(菩提2号墳)調査トレンチ全景

(2)第27地点(菩提1号墳)調査トレンチ全景

1. 志高遺跡昭和61年度発掘調査概要

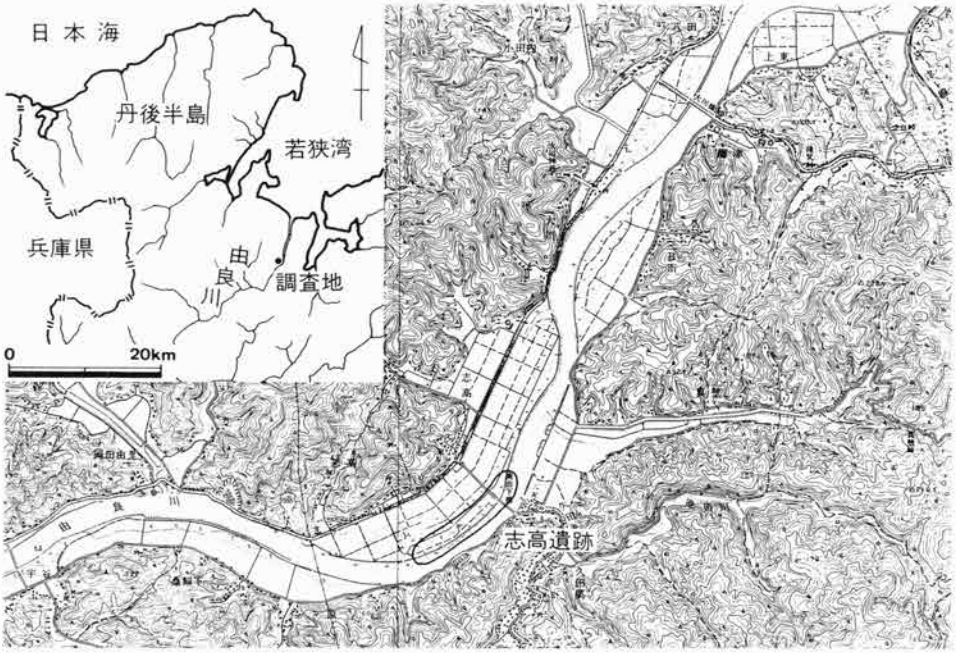
（第７次調査舟戸・岡安地区）

1. は じ め に

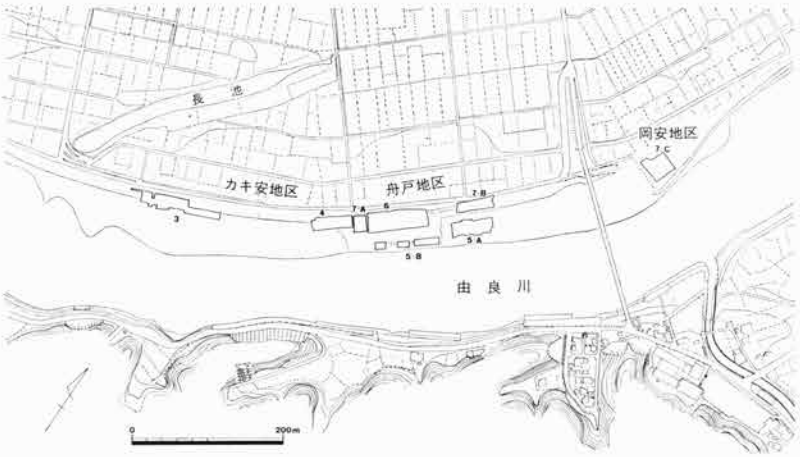
志高遺跡は舞鶴市字志高に所在し，京都府最大の河川由良川の河口から約10km上流の左岸，自然堤防上に立地する。由良川は，京都府北桑田郡美山町に源を発し，大小100余りの支流を併合させながら，146kmを流れ，日本海若狭湾に注ぐ。その中流域では，綾部盆地・福知山盆地の小平野を形成するものの，下流域では平野を形成しない。下流域においては，狭い谷を極めて緩やかに流れるため，しばしばおこる洪水が形成する狭長な自然堤防を形成している。志高遺跡もそのような自然堤防の上に立地している。

志高遺跡は，建設省近畿地方建設局福知山工事事務所から依頼を受けて，同所の経費負担により，同所が行う由良川改修工事に先立ち，昭和55年度から継続調査されている。昭和55年度から昭和58年度までは，舞鶴市教育委員会が現地調査を行った。昭和59年度からは当調査研究センターが現地調査を行った。なお，昭和62年度・63年度は，当調査研究センター調査分の整理・報告作業を行う予定である。

これまでの調査によって，志高遺跡は，縄文時代前期から由良川の大洪水によって集落



第１図　調査地位置図（1/25,000）



第２図　　第３次～第７次調査位置関係図（1/1,000）

が山裾に移転する明治40年まで継続的に営まれた複合集落遺跡であることが判明している。

縄文時代前期の遺構はこれまでの調査では検出されていないものの，昨年度の調査途中に付近で包含層が確認されており，そこから前期全時期にあたる土器・石器が多量に採集されている。また，後期の土坑が第３次調査で確認されており，遺物は，第４・５・６次の各調査でも出土している。弥生時代は，この地において大集落が営まれる時期である。第３次調査では，前期の住居に伴うものと考えられる柱穴群が検出されており，第３・４・６次調査では，中期の方形周溝墓群および円形竪穴式住居跡群が検出されている。古墳時代前期の遺構は多くは検出されていないが，第６次調査の旧河道と報告されている遺構から多量に古式土師器が出土している。また，包含層内から小型仿製鏡が出土している。後期の住居跡が，第４次調査・第６次調査で検出されている。奈良時代は，掘立柱建物跡が第３次調査・第６次調査で検出されている。建物は数回にわたって建て替えられている。第６次調査で検出された建物群は倉庫群を伴っていた。この建物群は平安時代初頭に廃絶する模様である。平安時代以降は，特に顕著な遺構は検出されていないが，中世のものと思われる柱穴が検出されている。また，江戸時代の集落跡が第５次調査を含め各調査で確認されている。

今回の第７次調査は，当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・小山雅人，同調査員三好博喜・肥後弘幸・鍋田　勇が担当し，本概要は肥後が執筆した。現地調査は昭和61年４月17日に着手し，昭和62年３月20日に終了した。その間，舟戸地区の２か所（A・B地区）と岡安地区（C地区）の計３地区で調査を行った。A地区では，縄文時代草創期から前期にかけての集落跡，弥生時代中期の集落跡および古墳時代末期から平安時代初頭にかけての集落跡を検出した。B地区では，弥生時代中期の墳墓およびそれに伴うと考えられる

遺構，古墳時代・奈良時代の遺構群を検出した。C地区では，弥生時代後期の集落跡と古墳時代中期の集落跡を検出した。調査に際しては，舞鶴市教育委員会，舞鶴市史編纂室，京都府教育委員会，京都府立丹後郷土資料館，京都府中丹教育局，舞鶴地方振興局，志高地区，久田美地区の方々等のご協力を得た。地元の有志の方々には，作業員・調査補助員・整理員として，調査に参加していただいた。また，多くの学生諸君には，調査補助員・整理員として，調査に協力していただいた。(注1) 加えて，多くの諸先生・諸先輩の方々にも，御指導・御助言いただいた。特に，舞鶴市教育委員会吉岡博之氏には，何度も現地・整理事務所に御足労願い，御指導・御助言をいただいた。(注2) 記して感謝の意を表する。

2. A地区の調査

A地区は，第4次調査地区と第6次調査地区の間に位置する。第6次調査の際，この地区の露頭で，縄文時代前期の遺物が多数表面採集されていた。なお，この地区の地区割りは，第6次調査に使用したものを用いた。A地区の調査面積は900m²である。

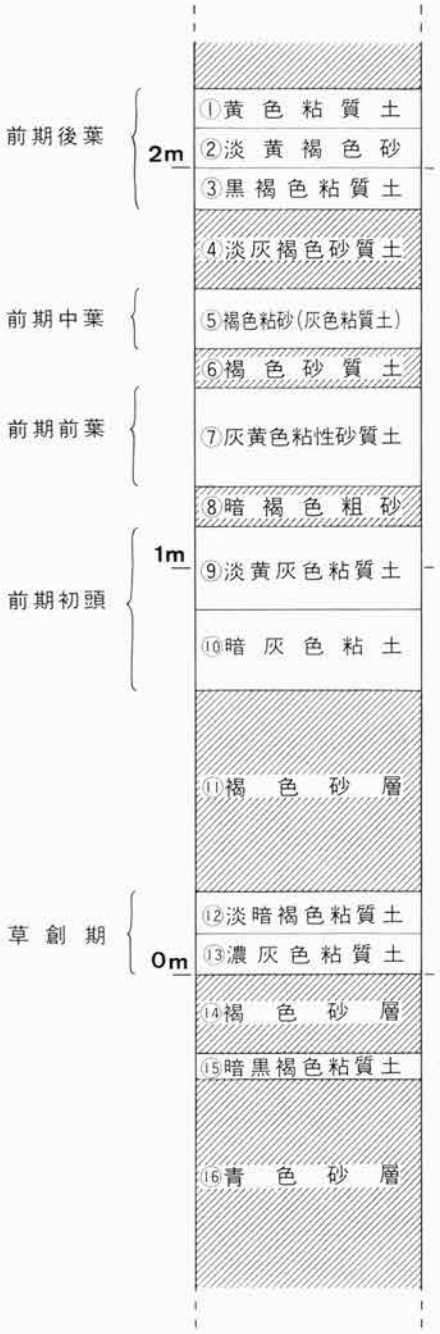
(1)縄文時代　弥生時代の遺構面の下1.8mの無遺物層を挟んで厚さ約2.0mにわたる包含層が存在した。この包含層は，13層に分層でき，第3図のとおり，粘質土と砂質土の互層から形成されている。整理箱にして約120箱におよぶ遺物が出土した。

草創期　縄文時代包含層最下層，地表下約6.5m・標高0.0～0.3mのところで2層の包含層を確認した。調査面積は約30m²である。現在の由良川の水面下にあたり，浸水が著しいため遺構検出作業は行えなかった。出土した遺物は，草創期の土器群約30点である。爪形文土器・回転縄文土器・条痕文土器等が混在しているが，摩滅しているものはない。遺物の出土した層よりもさらに下層にも包含層の可能性がある層が存在した。

前期初頭　地表下約5.5m・標高0.8～1.1mのところで2層の包含層・遺構面を検出した。調査面積は，約130m²である。ここでは，住居跡の輪郭を検出できなかったものの4基の炉跡と石組遺構を検出した。出土した遺物は，羽島下層Ⅱ式に代表される土器群と各種石器である。動物遺体も数か所で検出したが，遺存状況がきわめて悪かったため，採集することはほとんどできなかった。

前期前葉　地表下約5.2m・標高1.2～1.4mのところで北白川下層Ⅰ式に代表される土器群と各種石器を含む包含層を検出したが，顕著な遺構は，存在しなかった。

前期中葉　地表下約4.9m・標高1.6～1.7mのところで包含層および遺構面を検出した。検出した遺構は，焼土坑を持つ土坑(住居跡か)・不定形な土坑およびピットである。出土した遺物は，北白川下層Ⅱ式に代表される土器群・各種石器および玦状耳飾りをはじめとする石製品である。



第3図　A地区縄文時代土層図

前期後葉　地表下約4.4m・標高1.9～2.2mのところで包含層および遺構面を検出した。検出した遺構は，住居跡と思われる直径約8.0mを測る不整形な円形土坑(SH86301)・炉跡2基および土器溜り等である。SH86301からは，多数の剥片石器等が出土した。出土した遺物は，大歳山式・北白川下層Ⅲ式に代表される土器群・各種石器である。

(2)弥生時代(第4図)　第4次調査・第6次調査で中期後葉の住居跡が検出されており，この地区でも住居跡等の遺構が検出されることが当初から予想された。地表下2.5m・標高4.0mのところで，円形竪穴式住居跡5基をはじめ，土坑・溝状遺構・ピット等を検出した。

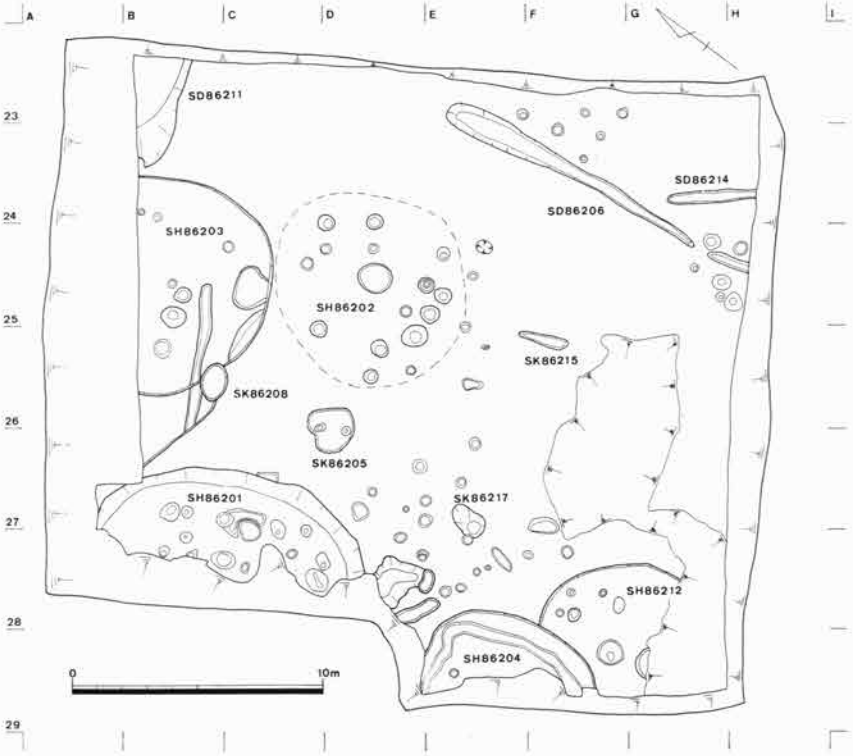
竪穴式住居跡SH86201は，第4次調査で検出された竪穴式住居跡23と同一のものであり，推定直径13mを測る大型のものである。床面上で鉄製品・環状石斧等が出土した。

竪穴式住居跡SH86202は，炭・灰の堆積する中央土坑を持ち，中央土坑を中心に柱穴を配するものである。壁は流失していた。

竪穴式住居跡SH86203は，その約半分が，調査地外へと広がる。中央土坑と考えられるものは，検出できなかった。

竪穴式住居跡SH86204は，その一部を検出したにとどまる。SH85205・SH85210と同様，浅い溝状遺構を持つ。第4次調査で検出されていないので，住居跡でない可能性もある。

竪穴式住居跡SH86212は，約4分の1を検出したにとどまる。中央土坑を持つ。この住居の床下から銅剣形の磨製石剣が出土した。この磨製石剣は，床下の直径約15cmを測る小



第4図　A 地 区 弥 生 時 代 遺 構 図

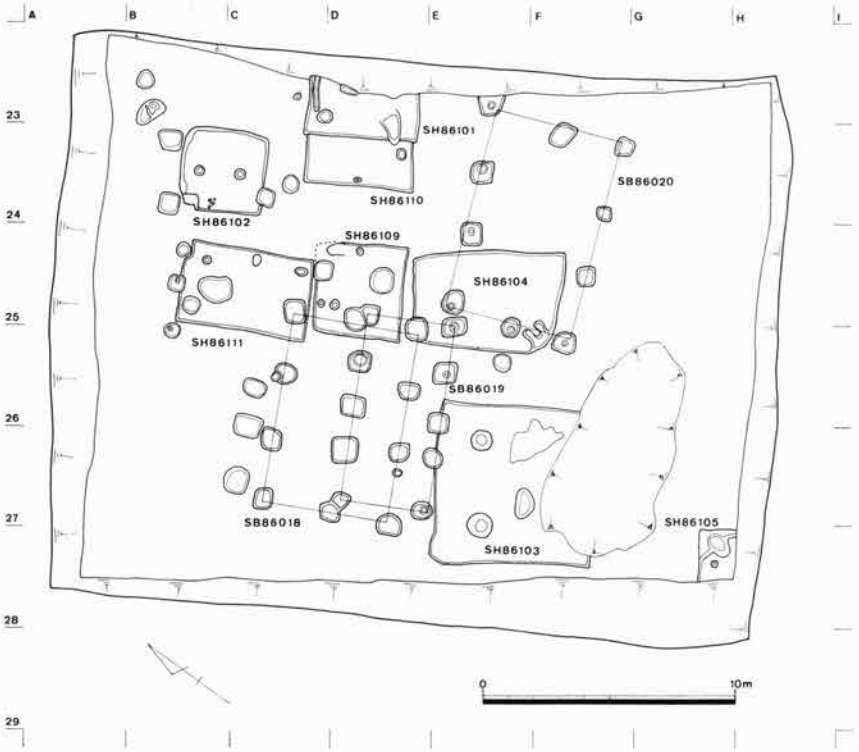
ピット内にたてかけられた状態で出土した。このピットの上の床面には，石器の製作台の可能性がある石皿状のものが置かれていた。出土状態・石剣がほぼ半分に折られていたことから，埋納されていた可能性がある。

検出した5基の住居跡は，大型のSH86201以外は，直径6～8mを測るものである。また，各住居跡からは，中期後葉の土器および管玉等が出土している。

住居跡以外には，溝状遺構・土坑等の遺構を検出した。多くが住居跡とほぼ同じ時期のものであるが，溝状遺構SD86206は，やや古い遺構の可能性がある。

(3)古墳時代後期～奈良時代初頭(第5図)　志高遺跡において，方形の竪穴式住居の営まれた時代である。第4次調査・第6次調査の隣接する地区で古墳時代末期から奈良時代初頭にかけての住居跡が検出されているので，数基の住居跡の検出を予想していた。地表下2.2m・標高4.3mのところで，竪穴式住居跡8基・屋外炉2基と予想外に多くの遺構を検出することができた。

竪穴式住居跡SH86101は，第6次調査のSH85101と同一の住居跡である。4m×6mの長方形の平面形を持つ。南東隅付近に竈を持つ。切り合い関係にあるSH86110に後出する。



第５図　　古墳時代後期～奈良時代中頃遺構図

竪穴式住居跡SH86102は，一辺3.5mの正方形の平面形を持つ小型の住居跡である。竈を西隅付近に持ち，柱穴は２つである。

竪穴式住居跡SH86103は，一辺6.5mの正方形の平面形を持つやや大型の住居跡である。床面で焼土を検出したが，竈は，検出できなかった。柱穴は，４本と推定できる。

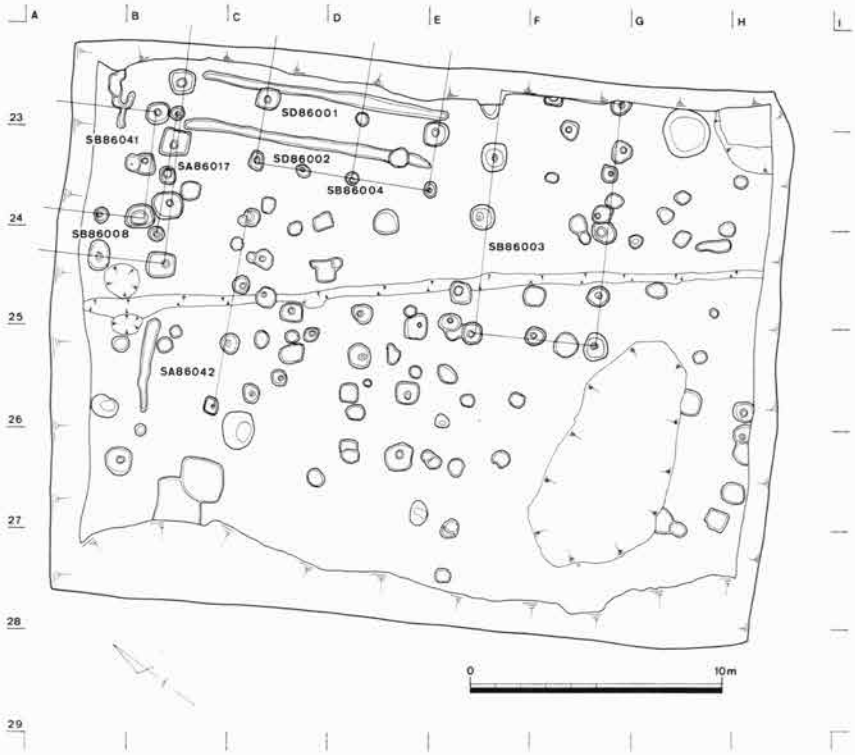
竪穴式住居跡SH86104は，4m×6mの長方形の平面形を持つ住居跡である。南隅付近に竈を持つ。

竪穴式住居跡SH86105は，その一部を検出したにとどまる。竈を北隅付近に配する。

竪穴式住居跡SH86109は，上記の５基の住居跡よりやや下層で検出した一辺3.5mの正方形の平面形を持つ小型の住居跡である。竈を北隅付近に持つが，竈はやや内側に入り込んでいて，いわゆる青野型住居に属するもののようである。

竪穴式住居跡SH86111は，3.5m×5mの長方形の平面形を持つ住居跡である。西隅に竈をもち，床下には，土坑を有する。

屋外炉？SX86106・SX86107は，SH86102・SH86103の横で検出した，焼土坑である。２基のいずれもに甕１個体が置かれていた。住居に伴う屋外炉の可能性がある。



第6図　奈良時代後半～平安時代初頭遺構図

各住居跡からは7世紀から8世紀初頭にかけての遺物が出土している。

(4)奈良時代～平安時代初頭(第5図・第6図)　第6次調査において隣接地区から，掘立柱建物跡群が検出されている。今回の調査は，この建物群の広がりおよび配置の解明をひとつの目標とした。また，第6次調査では，上層の建物群と下層の建物群をはっきりと区別できなかったので，今回は2層の遺構検出面を設定した。なお，下層の建物群は，前述の竪穴式住居跡群とほぼ同じところで，上層の建物群は，地表下1.8m・標高4.7mのところで検出した。

下層の建物群　3棟の掘立柱建物跡を検出した。

掘立柱建物跡SB86018は，2間×3間の建物跡である。梁間5.2m・桁行7.5mを測る。上層で検出したSB86004･SB86008と方位をほぼ同じくする。

掘立柱建物跡SB86019は，1間×4間の建物跡である。梁間3.6m・桁行7.5mを測る。

掘立柱建物跡SB86020は，2間×3間の建物跡である。梁間5.2m・桁行8.1mを測る。第6次調査で検出されたSB85017・SB85046と方位をほぼ同じくする。

上層の建物群　4棟の掘立柱建物跡をはじめ，柵列・溝状遺構等を検出した。ここでは

建物跡だけを報告する。

掘立柱建物跡SB86003は，２間×４間の建物跡である。梁間4.8m・桁行9.6mを測る。第６次調査で検出されたSB85003と方位を同じくする。

掘立柱建物跡SB86004は，２間×３間以上の建物跡で，南側に庇を持つ。庇部分を含めない梁間は，3.9mを測る。

掘立柱建物跡SB86008は，２間以上×４間のやや大型の建物跡である。柱の掘形は，他の建物と隔絶して大きく一辺１m前後を測る。SB86004・SB86018と方位を同じくする。

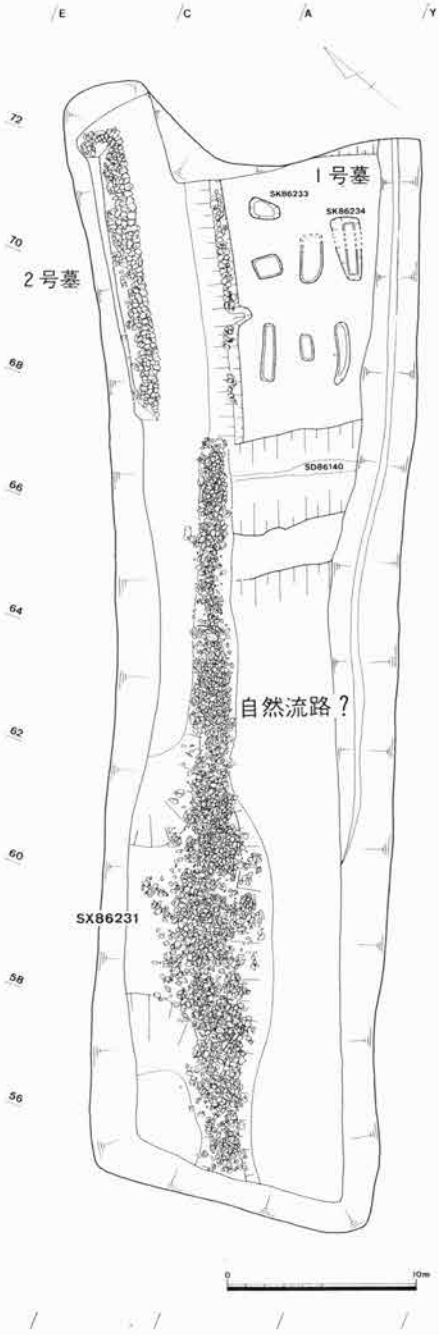
3.　B地区の調査

この地区は，第５次調査地区と接する地区である。第６次調査で検出した氾濫原もしくは旧河道の対岸の検出及び各時代の遺構の検出を目標とした。

奈良時代の包含層の下で上層の遺構群を，古墳時代前期の洪水層の下で下層の遺構群を検出した。なお，この地区の割り付けは，第５次調査に用いたものを使用した。調査面積は，850m²である。

(1)上層の遺構群

古墳時代前期の土坑２基・氾濫原（旧河道？）・古墳時代後期の竪穴式住居跡２基・奈良時代の竪穴式住居跡２基および中世墓３基を検出した。なお，中世墓の１基からは，龍泉窯青磁椀が２点出土している。



第７図　　B地区下層遺構図

(2)**下層の遺構群**(第7図・第8図)

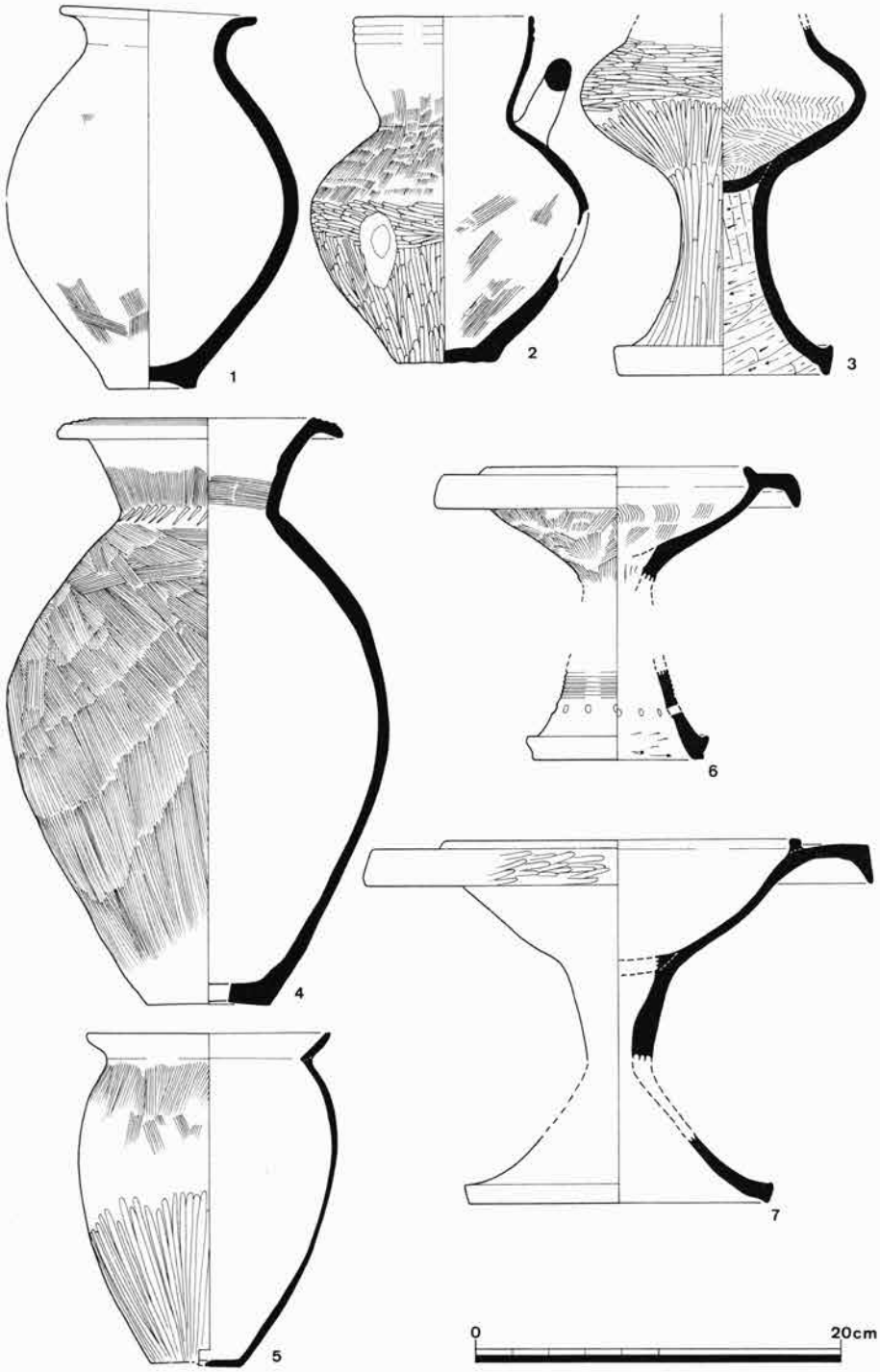
弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)に伴う遺構群を検出した。

検出した遺構は，溝状遺構(SD86140)・自然流路跡・貼り石を持つ方形周溝墓(1号墓・2号墓)および性格不明遺構(SX86231)である。

溝状遺構(SD86140)　幅約5m・検出面からの深さ約1.5mを測る溝状遺構である。最下層から，中期の土器に混じって縄文時代後期の土器・黒曜石製の石鏃等が出土した。遺物の出土状況およびその位置関係からこの溝は，第5次調査で検出されたSD84040と同一のものと考えられる。

自然流路跡　弥生時代中期から古墳時代前期にわたって機能していた幅80mを測る落ち込みである。第6次調査で旧河道と報告されている対岸にあたると考えられる。第5次調査でも確認されており，SD84042として報告されている。現在この落ち込みについては後述するSX86231との関係もあってその性格を検討中である。

1号墓　北西斜面に長さ6m以上にわたる2段の貼り石をもつ墳墓である。北西斜面の外側には2号墓と共有していると考えられる溝がある。ただし，この溝は1号墓の造営時には大半が埋まっていたと考えられる。西隅の貼り石は，屈曲しておわる。南西側には，墓域を区画する溝も貼り石も検出できなかった。南東側は，調査地を一部拡張して墳丘の範囲を確認しようと試みたが，墳丘の残欠を確認することはできなかった。墳丘の南東辺は，調査の便宜上設置した排水溝のところで終わっていたものと考えられる。なお，北東辺は，すでに失われていたが，一部甕形土器の置かれていた斜面を確認することができた。墳丘の規模は8m×9mほどであったと考えられる。墳丘には，厚さ10～20cmほどの整地土もしくは盛土が存在し，4基の土坑が営まれていた。土坑SK86234は唯一棺状の痕跡を確認した墓坑である。棺上には，壺形土器(第8図4)・甕形土器(第8図5)が供献されていたと考えられる。4は拡張した口縁部に凹線文を，頸部には刻み目を施した壺形土器である。口縁部が一部欠けていた以外は，完形であった。底部は穿孔されている。5は「く」の字の口縁部を持つ甕形土器である。日常に用いられていたものらしく下半部には煤が付着している。底部中央が割られている。土坑SK86233は，浅い土坑状の遺構である。台付き壺(第8図3)・水差し形土器・高杯形土器(第8図6･7)が出土した。攪乱によって遺構の上半部が失われた際にこれらの土器もその一部を失ったが，本来はほぼ完全な形で供献されていたものと考えられる。水差し形土器の底部も中央部が失われている。土坑SK86235からは壺形土器(第8図1)が出土した。ほかに墳丘北東斜面や南東斜面付近から甕形土器・壺形土器(底部穿孔)・水差し形土器(第8図2)が出土している。これらの土器群は畿内第Ⅳ様式に併行するものと考えられる。



第8図　1号墓出土弥生土器

1・4：広口壺，2：水差し形土器，3：台付壺，5：甕，6・7：高杯，
SK233：3・6・7，SK234：4・5，SK235：1，1号墓付近：2

2号墓　南東辺と2隅および周溝を検出した。南東辺の長さは基底部で15.5mを測り，墳丘の高さは基底部から0.8mを測る。墳丘は，盛土を持たず，周溝を穿つのみである。周溝は幅3～4mを測る。この周溝の土砂の堆積から2号墓は1号墓に先行することが観察できた。貼り石は，主に花崗岩を用い，墳丘斜面に7～8段に平らな面を外側にして，丁寧に貼り詰められている。遺物は周溝内からは1点も出土しなかったが，わずかに貼り石の隙間から3点の土器片が出土した。甕口縁部，異様に大きな壺の頸部，櫛描文を施す壺体部である。

性格不明遺構(SX86231)　自然流路に向かって張りだす細長い石積み遺構である。全長は工事時の立会で確認した部分を含めると40m以上を測る。中央部と思われる幅広い部分は，当時の基盤層である灰色粘土を成形して，表面に人頭大の石を粘土の表面を覆い隠すように置かれたもので，さらに調査地の外側に広がるようすである。石材は，貼り石墓に用いられた花崗岩を多く用いているが，一部河原石等も使用している。石は，裾部にまで至っている。裾部から頂部までの高さは1.2mを測る。

4.　C地区の調査(第9図・第10図)

この地区は，岡田下橋よりも下流の字岡安地区にあたる。岡田下橋の改築時に橋桁の下から弥生時代後期の遺物が出土しており，この地区には，その時期の集落跡が存在していることが当初から予想されていた。

調査対象地の面積が調査面積に対して広大であったので，まず，中央部よりやや下流側で由良川に直交する5m×30mの試掘トレンチを設置した。調査の結果，このトレンチ内は，遺物を含まない砂質土と粘質土の堆積が著しく，遺構は存在しないと予想された。このため，すでに改修に伴う掘削で包含層の露頭していた上流側の地区に調査区を設定した。調査面積は試掘面積を含めて1,750m^{2}である。

検出した遺構は，竪穴式住居跡・掘立柱建物跡からなる弥生時代後期の集落跡と竪穴式住居跡からなる古墳時代中期の集落跡を検出した。なお，地区割りは，もよりの建設省の地区杭を基準に行った。

(1)弥生時代後期　弥生時代後期の包含層は淡黄褐色砂質土からなっており，各遺構はこの包含層を除去して検出した。

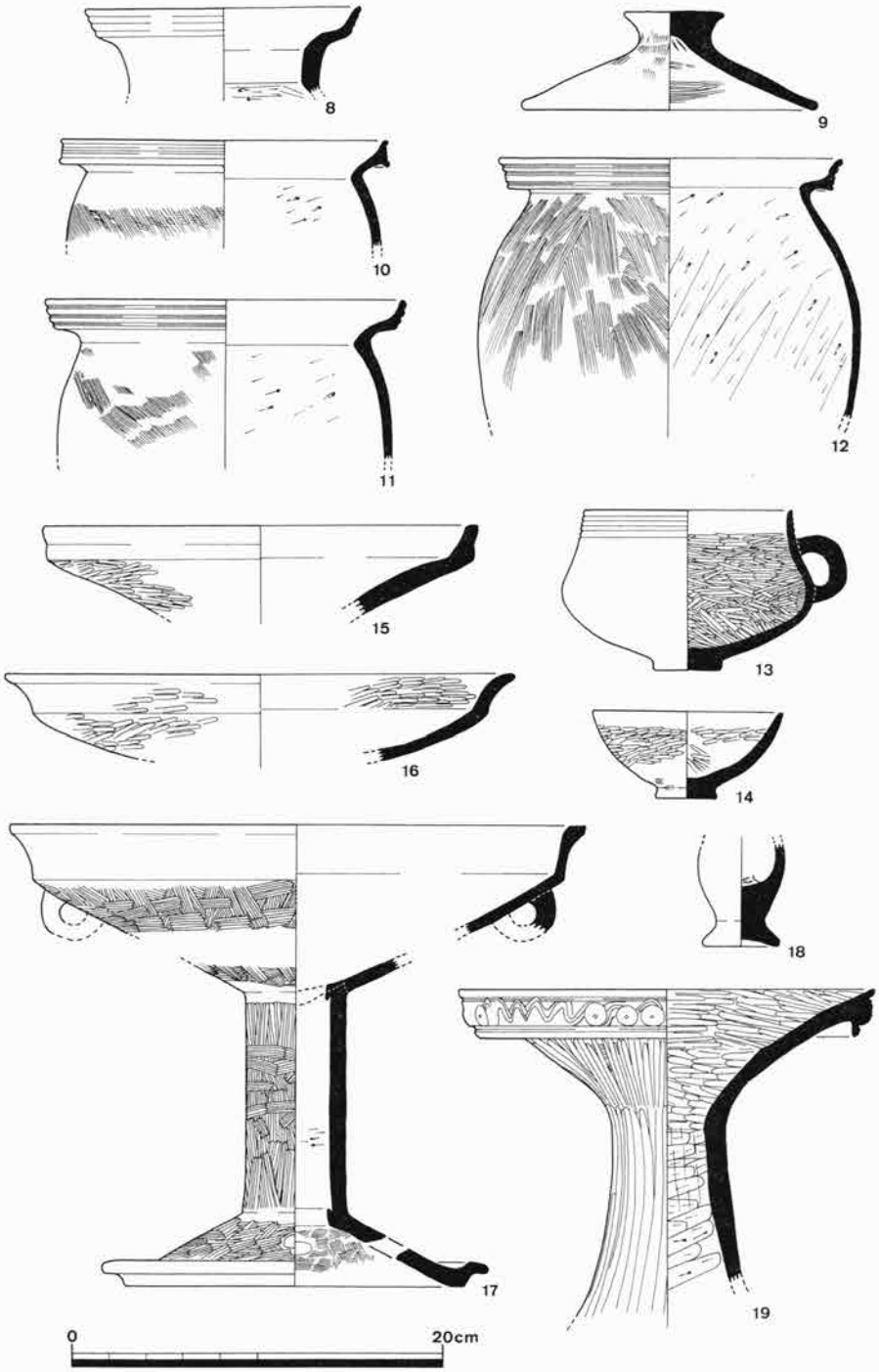
検出遺構(第9図)　竪穴式住居跡1基と3棟以上の掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構等を検出した。

竪穴式住居跡(SH86246)　3.5m×4m を測る隅丸方形のやや小型の竪穴式住居跡である。4本の柱穴・周壁溝・特殊ピットを検出することができた。また，床面上から弥生時

第9図　C 地 区 遺 構 図

代後期の土器類が出土した。

掘立柱建物跡(SB86240・SB86249・SB86250)　SH86246と同じく淡黄褐色砂質土を埋土とする柱穴から構成される建物跡である。SB86240は1間×2間の建物跡で，規模は2.4m×3.6mを測る。SB86249は1間×2間の建物跡で，規模は2.4m×3.0mを測る。SB86250は1間×1間の方形の建物跡で，規模は2.2m×2.6mを測る。



第10図　C 地 区 出 土 弥 生 土 器

8：壺，9：蓋，10・11・12：甕，13・14：鉢，16・17：高杯，15・19：器台

柱穴群　上記した3棟の建物以外にも数多くの建物が存在したらしく埋土を同じくする柱穴(ピット)を多数検出した。

土坑(SK86255・SK86265他)　SK86255はその一部を検出したにすぎないが,長方形もしくは方形を呈する平底の土坑である。床面からやや遊離した状態で第10図13の鉢形土器をはじめとする多量の土器が出土した。SK86265は舟底形を呈した土坑である。

その他の遺構　土器溜り(SX86256)は整理箱2箱分の遺物がぎっしりと集積していた。溝状遺構(SD86245)は長さ5.0m・幅0.8m・深さ0.5mを測る。第10図19の器台が出土した。

出土遺物(第10図)

整理箱にして約80箱の遺物が出土したがその多くは包含層(淡黄褐色砂質土)から出土したものである。現在まだ洗浄中という段階であるが，第10図にその一部を示しておく。器種は，壺形土器・甕形土器・蓋形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器・手づくね土器と各種ある。壺形土器は8で代表される型式以外にも数型式存在するようである。頸部が太いのを特徴とする。甕形土器は10～12に代表される口縁端部を拡張して擬凹線文を施すものが大半を占めると思われる。壺・甕ともに小さな平底の底部を持ち，体部内面に箆削りが観察される。9に代表される蓋形土器が存在する。鉢形土器は，13に代表される把手のついたカップ状のものと14のような小型の茶椀状のものがある。器台形土器は，15に代表される口縁部をやや直立気味にさせたものが大半を占めるが，19のように装飾性の強いものも存在する。高杯形土器は，口縁部を大きく外反させるものである。脚柱部は，17のように中空の円柱状のものと中実のものとがある。

(2)古墳時代中期(第9図)　淡黄灰色砂質土の上の褐色粘質土の途中から切り込む遺構群であるが，褐色粘質土中で十分検出することができず，最終的には前述した弥生時代後期の集落跡とほぼ同一面で検出することになった。ここでは，途中で検出した遺構は省略し，最終検出面で検出した3基の住居跡のみ報告する。

検出遺構　竪穴式住居跡(SH86241)　一辺6.5mを測る住居跡である。柱穴は2つしか確認できなかったが4つあったものと考えられる。床面中央部に焼土が広がっていた。

竪穴式住居跡(SH86247)　一辺約6mを測る方形の住居跡である。柱穴等は検出できなかったが床面中央部に焼土が広がっていた。床面上から高杯形土器を中心とする土器群が出土した。勾玉も床面上から出土している。

竪穴式住居跡(SH86248)　床面のみを検出したため，その平面形が不明である。しかし，ほぼ同位置の褐色粘質土中でSH86150という一辺約4mを測る方形の住居跡を検出しており，同一のものと考えられる。床面に焼土が観察できた。

出土遺物　整理箱にして20箱程度の遺物が出土している。まだ未洗浄のものが多く今回

は，報告するに至らなかった。

5. まとめにかえて

昭和55年度から行ってきた由良川改修工事に伴う志高遺跡の発掘調査も第７次調査をもって現地調査を終了した。ここでは，今までの調査を含めて，特にこの遺跡を考える上での問題点・課題および成果を掲げることで今回の概報のまとめに代えたい。

(1)由良川下流域における集落立地

はじめにで述べたように由良川下流域における集落跡は，多くは志高遺跡のような自然堤防上に営まれてきたことが最近の調査例からわかりつつある。由良川下流域において人々が住み始めるのは縄文時代草創期の時期からである。その後，この地域は，ほとんど絶えることなく人々が集落を営み続けている。何度も水害によって村を流されながらもである。人々をここに執着させた要因を，各時代ごとに考えていかなければならない。

(2)縄文時代草創期

Ａ地区で縄文時代草創期の包含層を確認することができた。近畿地方での草創期の報告例は極めて少なく，わずかに福知山市武者ケ谷遺跡の単独出土の隆線文系の小型の鉢の１例が報告されているだけである。今回出土した土器群は，近畿地方に縄文時代草創期の土器文化があったことを裏付けた。

爪形文・条痕文・回転縄文の３種の土器文様の共存について，いままで報告されている草創期の土器群のなかには，このようなあり方をするものはない。どのように考えるべきか今後の資料の増加に期待したい。

草創期の包含層は，標高0ｍ付近で検出した。前期初頭の炉跡群を標高0.８ｍのところで検出したことも考え合わせて，日本海側での縄文海進をどのように考えるか問題である。

(3)縄文時代前期

洪水における無遺物層と良好な包含層の互層を検出することができた。羽島下層Ⅱ式から大歳山式に至る土器が完形に復原できるものも含めて多数出土している。近畿地方の前期の編年を考える上で貴重な資料である。

(4)弥生時代中期

第３次調査以降，各調査で中期の遺構群を確認してきた。方形周溝墓群が第３次・第４次調査で検出され，この周溝墓群とは大溝を隔てて集落が営まれている。また，第６次・第７次調査Ａ地区ではこの集落の続きを検出し，集落の端には大きな自然流路の跡を検出した。第７次調査Ｂ地区では自然流路を隔てて対峙する貼り石墓群を検出した。今後，出土遺物等の検討を通して１つの集落と２つの墓域の関係を考えていく必要がある。

また，貼り石を持つ方形周溝墓の意義を丹後という地域性と中期後葉という時間のなかで考えていく必要性がある。

(5)古墳時代から平安時代初頭

7世紀から9世紀初頭にかけての建物群の変遷を考える上で良好な資料を第4次調査・第6次調査・第7次調査A地区で得ることができた。A地区を中心に広がる方形竪穴式住居跡群(平地式住居と考えられるものも含む)がある。この中では，竈を持たない大型のグループと竈を隅に持つ小型のグループが存在する。これらの住居跡群は，数回の建て替えの結果と考えられるが，建物の主軸方向は，明らかに意図的である。続く掘立柱建物群も数回(3～4回？)の建て替えが予想される。建物群は，母屋と倉庫から構成されているようである。建て替えに伴って主軸方向が変化しているが，建物配置は，時期毎に主軸方向が規制されている。この建物群は，9世紀初頭の大洪水により移転した模様である。

以上主に5点にわたって志高遺跡の現状での成果・課題および問題点を掲げてきた。今後，整理報告作業を行うにあたって以上のことを視点として掲げていきたい。

(肥後弘幸)

注1　調査に参加していただいた方は次の通りである(敬称略・五十音順)。

作　業　員　碇　弥生・池田　力・井上英子・今西アヤノ・今西和子・今西タキ・今西ひさ江・梅原トシ江・梅原文子・瓜生初枝・大島昭二郎・河崎和子・小谷弥太郎・多田よし子・永野澄慧・永野千代野・永野久枝・牧　鈴子・真下朝野・真下勝雄・真下重子・真下志津江・真下チセノ・真下トメ子・真下幸枝・増茂なみ子・水口和子・村上千里・森野石子・山崎源治

調査補助員　荒木尚之・淡路直樹・上田道人・浦田美由紀・大和田淳司・岡本英一・岸岡貴英・岸口定史・木村佳太・酒井彰子・鈴木良章・谷口　太・田中史生・平田　裕・藤田公徳・藤原陽一郎・真下定平・真下徳也・森本尚子・山尾　摂・山下雅子

注2　御指導・御助言いただいた方は次の通りである(敬称略・五十音順)。

網谷克彦・入江文敏・岡田晃治・岡村秀典・奥村清一郎・片岡　肇・金村允人・近藤喬一・近藤義郎・崎山正人・佐原　真・寒川　旭・杉本嘉美・瀬戸谷晧・妹尾周三・堤圭三郎・都出比呂志・土肥　孝・中川淳美・中嶌陽太郎・西尾克巳・羽渕賢良・原口正三・宮本一夫・森　浩一・森田兼夫・吉田金彦・渡辺貞幸

2. 昭和61年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要

はじめに

国道９号バイパス関係遺跡とは，建設省近畿地方建設局の依頼により国道９号バイパス建設に伴う事前調査を実施する予定ないしはすでに実施した遺跡の総称である。バイパス予定路線は京都市右京区大枝沓掛町から亀岡市・八木町・園部町を経て丹波町須知へ至る総延長約32kmに及ぶ。これにかかわる遺跡の調査は，昭和50年度から京都府教育委員会及び当調査研究センターが継続的に行っている。その成果は，すでに報告書として刊行され，中には篠窯跡群・太田遺跡・北金岐遺跡・小金岐古墳群などをはじめ口丹波地方のみならず府下の歴史を考える上で欠くことのできない貴重な成果を得たものも多くあった。

さて，今年度調査を実施したのは千代川遺跡である。千代川遺跡は，亀岡市千代川町に所在する。縄文時代から中世にわたる長期的な集落遺跡であるとともに，その北半部には丹波国府跡推定地や桑寺廃寺をも含み込んでおり，府下でも有数の大複合遺跡といえるものである。本遺跡では，その南半部ですでに調査が終了しており，弥生時代終末期～古墳時代・奈良～平安時代という２時期を中心とする集落跡を検出するなど多大な成果を収めている(第２・５次調査)[注1]。残る北半部についてはここが国府跡推定地の西辺部上に相当していることから，まず試掘調査を行いその成果を踏まえた上で計画的に調査を進めることとなった。試掘調査は昭和59年度に実施し，調査対象地のほぼ全域で弥生時代～中世にわたる多くの遺構・遺物が出土した。特に奈良～平安時代，すなわち国府が当地に置かれたと考えられている時期の遺物は非常に多く出土し，中には緑釉陶器・墨書土器などが含まれており，国府跡との関連が注目された。そこで次年度(昭和60年度)より対象地を年度毎にいくつかに区切って面的な調査を進めることとなった。今年度はその２年目に相当する。

現地調査は，約4,000m²を対象として昭和60年５月19日から翌62年１月26日までの間に実施した。調査を担当したのは，調査課主任調査員　水谷寿克，同調査員　森下　衛である。調査に際しては，亀岡市教育委員会・京都府教育委員会・京都府南丹教育局・口丹波史談会等の諸機関から多大な協力を得た。また地元有志の方々や京都学園大学学生をはじめとする学生諸氏には作業員・調査補助員・整理員として参加協力があった[注2]。記して謝意を表したい。なお，本概要の執筆は森下が行った。本調査にかかる経費は，すべて建設省近畿地方建設局が負担した。

千代川遺跡第12次発掘調査概要

1. 遺跡の概要

千代川遺跡は，亀岡市千代川町に所在し，亀岡盆地の北西部にそびえる行者山(標高471m)の北東麓に位置している。過去12次にわたる発掘調査が実施されているが，その成果から以下のことが確認されている。

①遺跡の範囲は，千々川の堆積作用によって形成された扇状地のほぼ全域(東西約1.2km・南北約1.6km)に及んでいる。

②検出された遺構・遺物から，縄文時代後期から中世(鎌倉時代)にわたる長期的な集落遺跡と考えられている。

③遺跡の北半部には，丹波国府跡推定地や桑寺をも含みこんでおり，府下でも有数の大複合遺跡といえる。

特に第3の点について，丹波国府跡の推定地として現在提唱されているいくつかの候補地の中では，この遺跡が最も可能性の高いところと考えられており，従前の調査成果からもこれを否定する資料よりも肯定する資料の方が多いように思える。(注3)

今回調査を実施したのは，先に述べたように千代川遺跡の中でもこの国府推定域の西辺部上に相当する部分で，昨年度の第10次調査地の北側に接する地区である。この地区は丹波国府跡を千代川町に比定する諸説の中でも藤岡謙二郎氏の説では東面する国庁域が想定されている部分にあたっており，非常に注目すべき点を有していた。(注4)

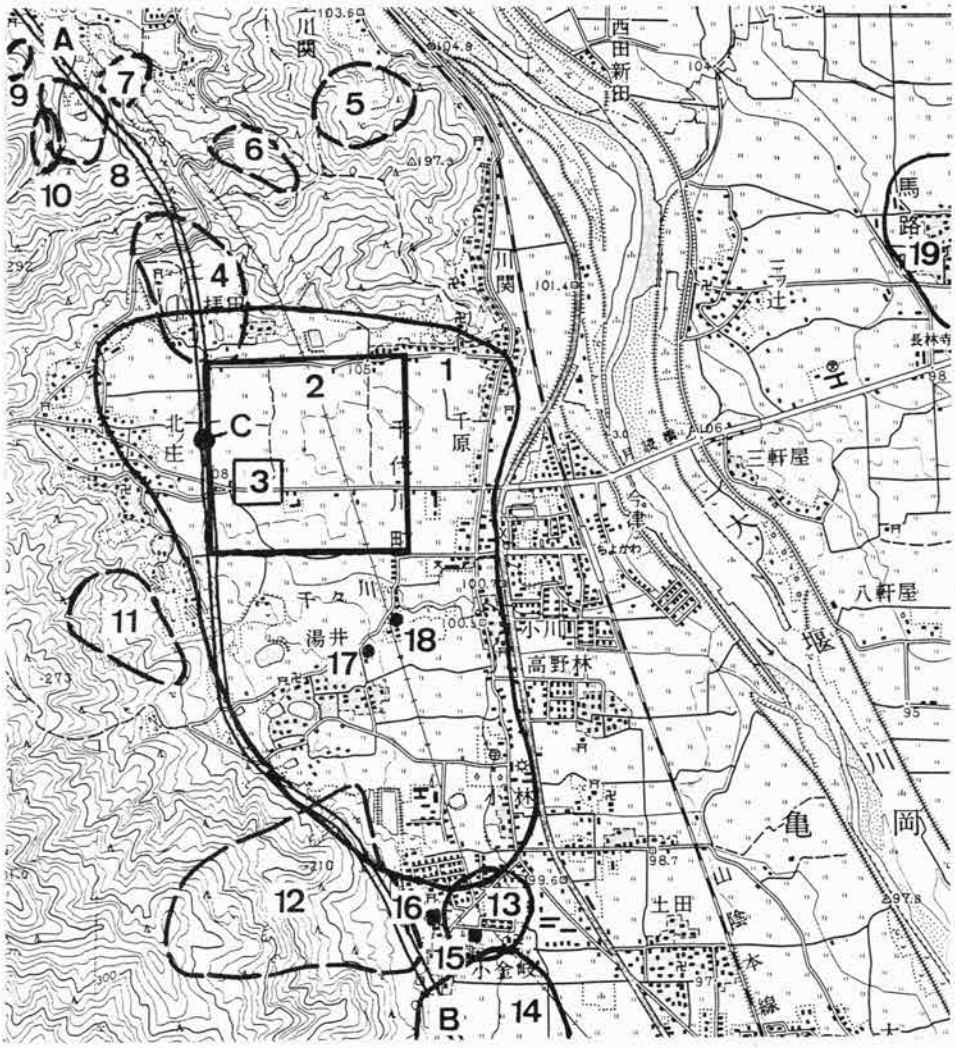
2. 調査経過

調査は，対象地内に5か所の調査区を設定し掘削を行った。まず，重機によって表土を除去する作業から開始し，その後人力によってそれ以下の土層の掘削を進めた。

調査地内の基本的な層序は，すでに周辺部で過去に実施した第9・10次調査などの成果(注5)から以下のごとく把握していた。

第1層　耕作土
第2層　淡灰色砂質土(近世の耕作土)
第3層　灰褐色土(中世の遺物包含層)
第4層　黒褐色土（弥生時代～平安時代の遺物包含層）
第5層　黄灰色粘土ないし砂質土(地山)

しかし，現在は水田化し比較的平坦な地形を呈す調査地も旧地形はかなり起伏に富んでいたようで，上記の土層がいずれの調査区でも一様に認めうるというわけではなかった。調査区のほぼ中央の6区が微高地状をなし，その南北両側(5・7・9区)が若干の凹地状を呈するというものであった。また，特に長期にわたる遺物を包含する黒褐色土も部分的に



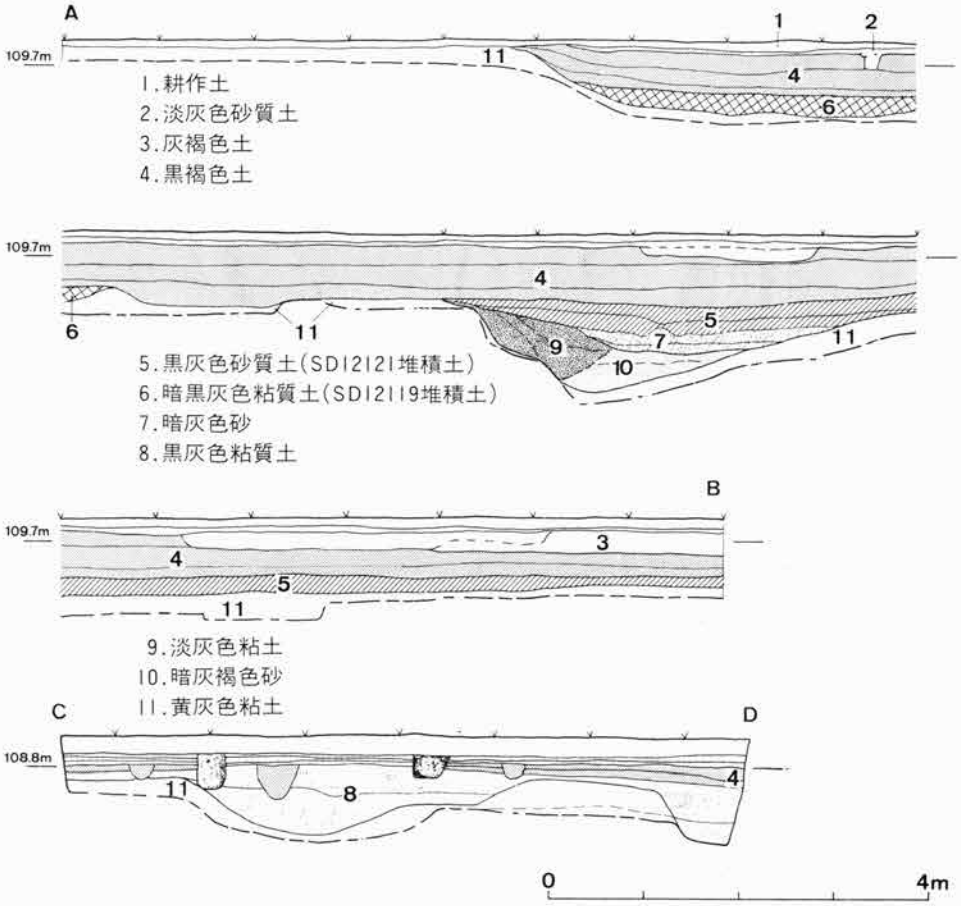
第11図　調査地位置図　(1/25,000)

1：千代川遺跡，2：丹波国府跡推定地，3：桑寺廃寺，4：拝田古墳群，
5：上川関古墳群，6：大法寺古墳群，7：内山古墳群，8：小谷古墳群，
9：堂山窯跡群，11：北ノ庄古墳群，12：小金岐古墳群，13：馬場ケ崎遺跡，
14：北金岐遺跡，15・16：馬場ケ崎1・2号墳，17・18：丸塚・丸塚西古墳，
19：馬路遺跡，A～B：バイパス予定路線，C：今回の調査地

細分しうることも判明した。

以下，各調査区毎の調査内容を簡単に記しておく。

5区　耕作土の除去後掘削を進めたところ，まず黒褐色土上面で中・近世に属する素掘り溝を検出した。続いて黒褐色土の掘削に移ったが，試掘調査(第9次調査)の成果からこれが数層に細分しうる可能性も考えられたため，約5cm毎に掘削を止め精査を繰り返した。

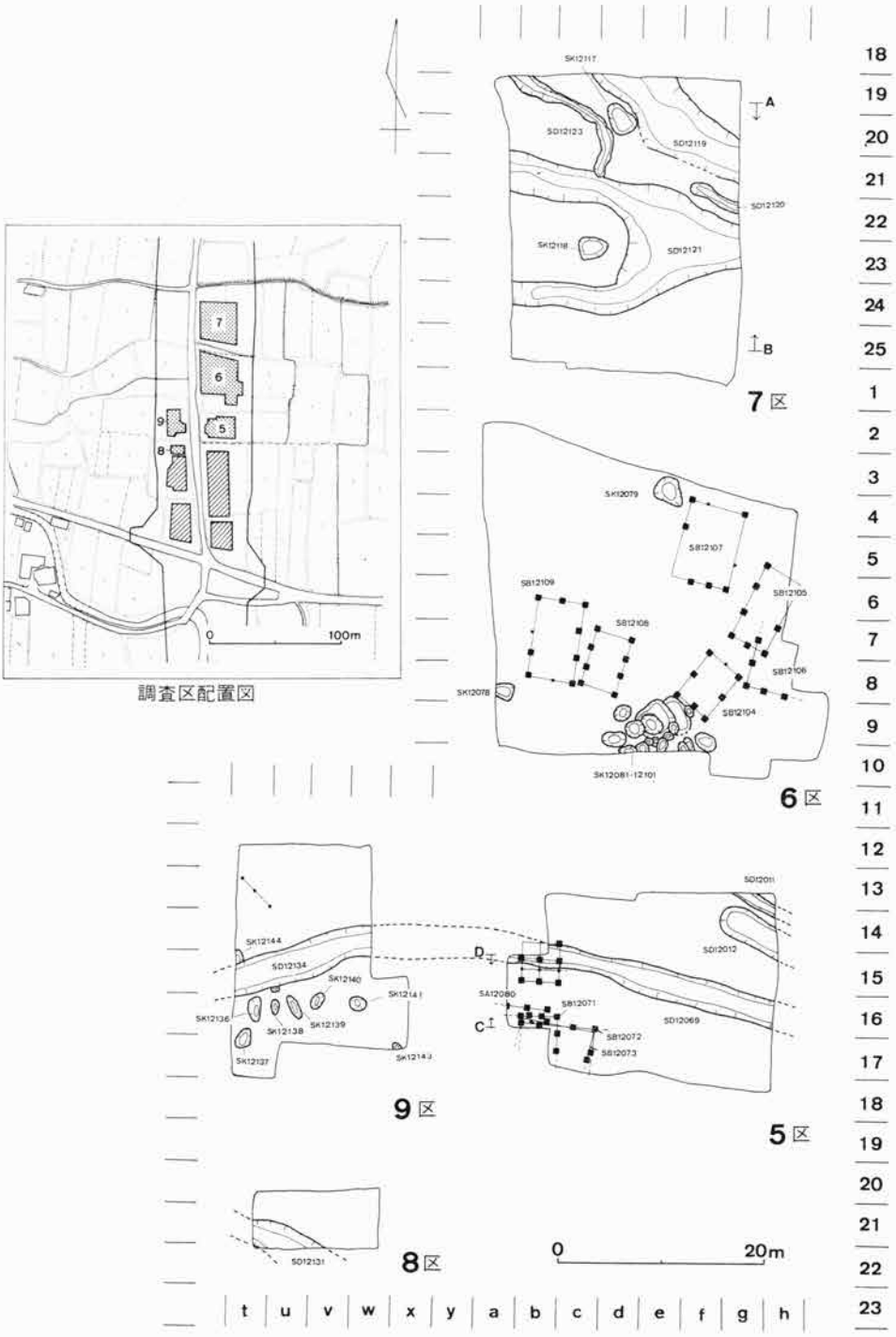


第12図　　土層断面図（図中のA～Dは第13図に対応）

その結果，下方へ行くに従い粘質土へと変化し，包含する遺物も奈良～平安時代のものから弥生時代・古墳時代のものへと徐々に変化した。また，上方の奈良～平安時代の遺物を中心に包含する部分もさらに2層に細分しうることも確認した。なお，黒褐色土の下には黒灰色粘土層・黄灰色粘土層の順に堆積を認めたが遺物は含んでいなかった。遺構面はこれら遺物包含層に対応した状態で，黒褐色土中において奈良～平安時代の遺構面を2面，その下方の黒灰色粘土上面で弥生時代後期の遺構面を確認した。

6区　ここで微高地状を呈していることから，大半の部分で耕作土除去後すぐに地山面を認めた。ここでは精査を行ったところ古墳時代後期の土坑群，奈良～平安時代の掘立柱建物群・土坑などを検出した。

7区　5区と同様に耕作土除去後，淡灰色砂質土・灰褐色土を掘削し，黒褐色土上面で精査を行ったところ，やはり中・近世の素掘り溝を検出した。その後，黒褐色土を掘削し



第13図　　調査地平面図（図中５・７区のＡ～Ｄは第12図のＡ～Ｄに対応する）

たが奈良～平安時代の遺構は認めえず，最終的に黄灰色土上面まで掘り下げたところで古墳時代の溝・土坑などを検出した。

8区　5・7区と同様，黒褐色土上面で素掘り溝を検出した。その後黒褐色土を掘削したがさほどの厚みはなく，すぐに黄灰色粘土上面へ至った。そして，ここで弥生時代後期の溝を検出した。

9区　本区では，耕作土の下に厚さ約20～30cmの盛土が認められた。その下方に灰褐色土を認め，これを除去すると黒褐色土層に至り，この上面で中世のピットを数か所認めた。さらにその下方に黒灰色粘土を認め，5区と同様にこの上面で弥生時代後期の溝・土坑を検出した。

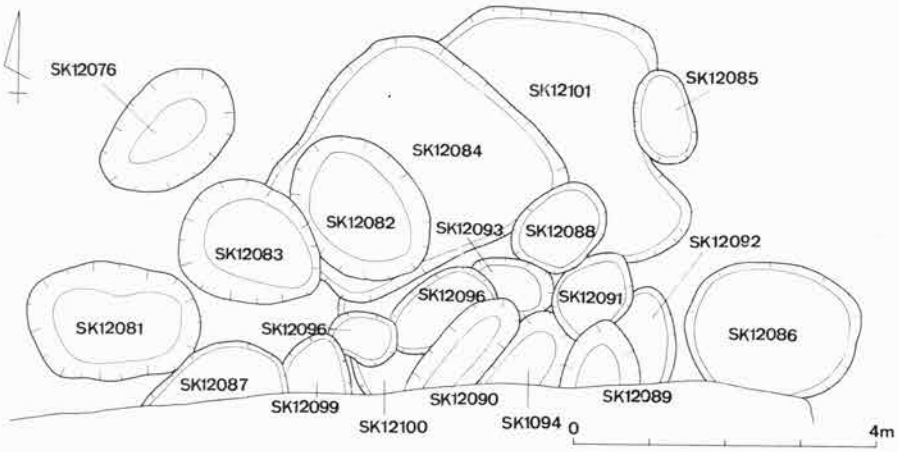
3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構には，掘立柱建物跡・溝・土坑がある。時期的には，弥生時代後期・古墳時代・奈良～平安時代のものを中心として，一部に縄文時代後期まで遡る可能性をもつものや，中・近世まで下がるものなどを認めた。以下，時代を追って主な遺構について概述する。

縄文時代後期　この時期の遺構と考えられるのは，溝(SD12123)である。幅約50cm・深さ約40cmを測る。7区北端で検出し，北西方向から南東方向へ大きくカーブしながらのびることを確認したが，7区中央部付近でSD12121に切られている。断面はU字状をなす。堆積土は暗茶褐色粘土で，今回検出した他の時期の遺構とは明らかに異なっていた。堆積土中から縄文時代後期に属すと思われる土器片が5点出土した。

弥生時代後期　この時期の遺構には溝2条(SD12131・SD12134；SD12069とは一連の遺構と考えられる)，土坑7基などがある。これらは，主に調査地の南半部(5・8・9区)で確認した。

溝はいずれも規模が大きく(SD12131は幅約2.5m・深さ約0.7m，SD12134は幅約3.0m・深さ1.2mを測る)，断面は逆台形状に近い。堆積土は暗黒褐色土で弥生時代後期の土器片が出土した。ともに6区南側の凹地状部内を東西に流れるものであるが，断面の形態などから見て自然流路跡とは考えられない。また，堆積土中から出土した遺物から見ると，これらが機能したのは，ほぼ弥生時代後期に限られると思われた。本調査区の南側に接する第10次調査地では同時期の竪穴式住居跡を1基検出し，その北側(今年度調査地)ないしは西側に集落跡の中心があると推測した。(注6) 両溝はこの住居跡と深くかかわりがあると考えられ，集落の環濠とまではいかないまでもその広がりの北限を画するものと理解される。また，これらの成果によって，弥生時代後期の集落跡は今年度の調査地の南西側に広がっ



第14図　古墳時代後期土坑群平面図

付表1　古墳時代後期土坑群一覧表（出土遺物は第19図参照）

遺構番号	規　模・形　態	出土遺物	遺構番号	規　模・形　態	出土遺物
SK12076	2.1m×1.4mの楕円形	19・20	SK12081	2.4m×1.6mの楕円形	4～6・13・17
SK12082	2.2m×1.7mの楕円形	9・15・16	SK12083	2.1m×1.7mの楕円形	18
SK12084	3m×3.2mの隅丸方形	1・10・11	SK12085	1.3m×0.8mの楕円形	
SK12086	2.4m×2mの楕円形	8	SK12087	不　明	
SK12088	1.4m×1mの楕円形		SK12089	不　明	
SK12090	1.6m×0.9mの楕円形	7	SK12091	1.1m×1mの円形	
SK12092	不　明	3	SK12093	1.2m×0.9mの楕円形	
SK12094	不　明	2・12	SK12095	1m×0.7mの楕円形	
SK12096	1.7m×1mの楕円形		SK12097	断面で一部確認	
SK12098	不　明		SK12099	不　明	
SK12100	不　明		SK12101	土坑掘削後一部を確認	

ていることはほぼ確実となったといってよいだろう。

このほか，9区を中心に土坑(SK12137～SK12144)を確認している。出土遺物が無く時期の比定材料を欠くが，埋土の状況からこの時期のものと理解している。

古墳時代　この時期の遺構には，溝2条(SD12119・SD12120)，自然流路跡1条(SD12121)，土坑23基(SK12117・SK12118・SK12076・SK12081～SK12101)がある。これらは，6・7区において確認した。出土遺物から，布留式並行期の古式土師器が出土し古墳時代前期と考えられるものと，6世紀中葉～末葉の須恵器・土師器が出土し後期と考えられるものに分かれる。

前期の遺構は，西方から２条の流れが７区中央付近で合流し東方へ向かう状況を確認した自然流路跡(SD12121)である。幅は合流点で約10ｍ，他で約3.0ｍを測り，深さは約0.4ｍであった。堆積土は黒灰色砂質土で土器片や木製品が多く出土した。

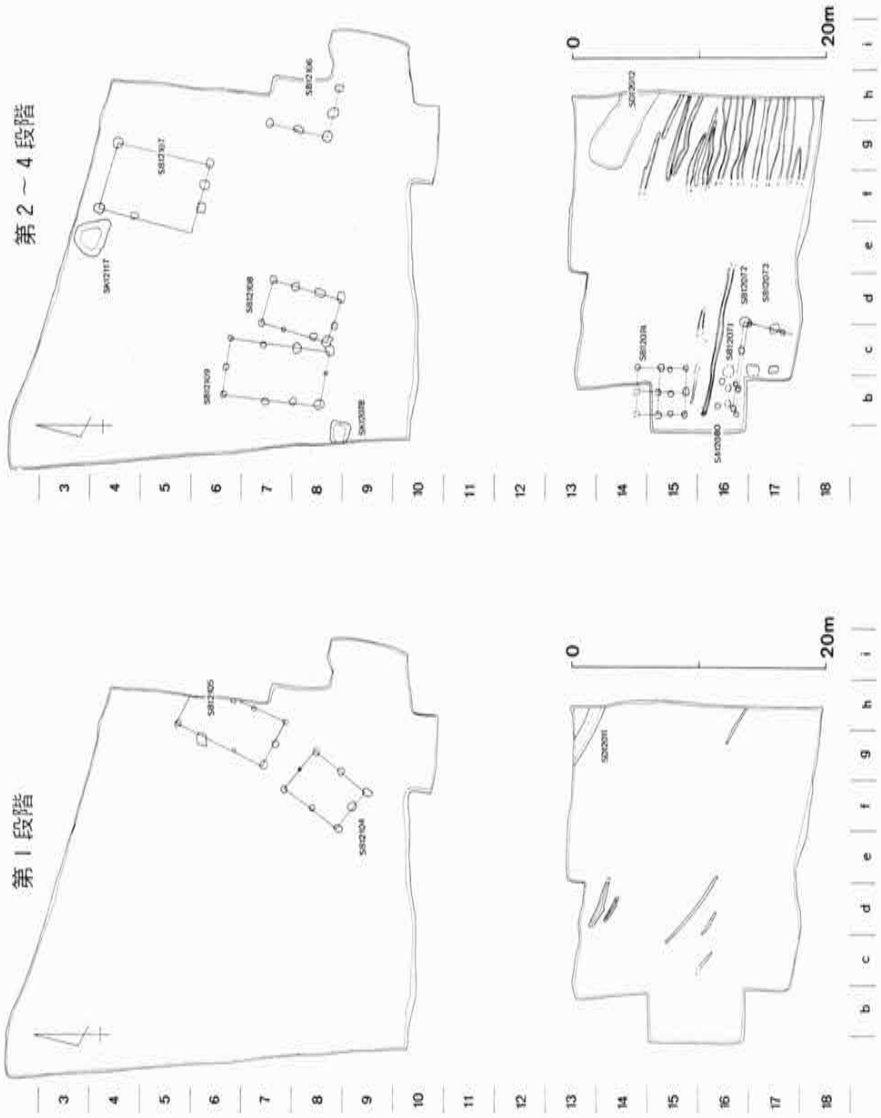
後期の遺構には，溝(SD12119･SD12120)，土坑(SK12117・SK12118・SK12076・SK12081～SK12101)がある。SD12119は７区の北東隅を北側から東側へ流れるもので，幅約4.5ｍ・深さ約0.3ｍを測る。堆積土は黒灰色土で，出土遺物は少なかったものの須恵器片や木製品などを認めた。SD12120はSD12119の南側をこれに接するように並行して東流するもので，幅約1.2ｍ・深さ約0.2ｍを測る。堆積土はSD12120と同一である。

SD12117･SD12118は７区で検出した土坑である。SD12117は７区北端付近で確認したもので，長径約3ｍ・短径約2ｍの楕円形を呈し，深さ約0.3ｍを測る。またSD12118は７区中央部付近で確認したもので，長径約2.8ｍ・短径約2ｍの楕円形を呈し，深さ約0.4ｍを測る。SD12118は第９次調査においてすでに検出していたもので，その際には検出面で多くの木製品が出土している。いずれも少量の須恵器片が出土した。(注7)

SK12076･SK12081～SK12101は６区南端で検出した土坑群である。ほぼ同一地点といってよいほど限られた範囲に，20基の土坑が複雑な切り合いを有しつつ営まれている。規模・形態は様々であったが，およそ2ｍ×1.6ｍ程度の楕円形を呈するものが多いようである(付表１)。時期的には６世紀中葉から末葉頃のものであった。また，出土遺物の中に滑石製の双孔円板や大型の須恵器杯身が認められた(試掘時出土)(注8)ことから，これら土坑の性格は集落の近傍で行われた何等かの祭祀にかかわる可能性が高いと考えられる。

奈良・平安時代　この時期の遺構には５・６区で確認した，掘立柱建物跡10棟・柵列１列，土坑２基・溝群(５区で確認した素掘り溝群)などがある。うち，掘立柱建物跡はその主軸の示す方向から４～５時期に分けてとらえうるものであった(付表２)。その主軸が真北から東へ約25～30°傾くもの(第１期)，約10°傾くもの(第２期)，約5°傾くもの(第３期)，ほぼ真北を向くもの(第４期)である。これらは，柱穴内出土遺物や切り合い関係などからカッコ内に示した順に変化していったと考えられる。時期的にはおよそ８世紀初め頃から９世紀初め頃の間で理解できるものであることも確認している。ここにみる方向の変化は，地形の傾斜に沿った向きのものから，現在地表に残る「条里制」ないし「条坊制」の地割りへ徐々に近づいていくものと理解され，その施工時期を考える上で非常に貴重な資料を得たといえるものであった。

また，このいずれかの時期に属すると考えられる土坑・溝も検出している。土坑は６区で２基(SK12078･SK12079)を確認した。SK12078は一辺約1.5ｍの隅丸方形を呈し，深さ約0.3ｍを測る。SK12079は径約2ｍの円形に近く，深さ約0.6ｍを測る。いずれもどの段



第15図　奈良～平安時代遺構図（左が第１段階，右が第２～４段階）

付表２　奈良～平安時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規　　模（東西×南北）	段階
S B12071	2間(2.6m)以上×2間(3.5m)以上	4
S B12072	3間(7.3m)以上×1間(2.8m)以上	2
S B12073	3間(6.9m)以上×1間(2.4m)以上	3
S B12074	2間(3.8m)×2間(3.8m)	4
S B12104	2間(3.7m)×2間(5.2m)	1
S B12105	2間(3.9m)×3間(7.6m)	1
S B12106	2間(4.0m)以上×2間(4.7m)以上	2
S B12107	3間(5.5m)×3間(7.6m)	2
S B12108	1間(3.6m)×3間(5.6m)	2
S B12109	2間(4.6m)×3間(7.9m)	3

階に対応するものか判然としない。ただ，わずかながら出土した遺物やその位置関係などから，SK12117が2段階，SK12078が3段階に相当するのではないかと推測された。5区では素掘り溝群を検出した。SD12011・SD12012を除いていずれも幅約30cm・深さ10～20cmを測るもので，後述する中・近世期に多い水田ないしは畑の耕作に伴う素掘り溝と同質のものと考えられる。5区ではこの時期の遺構を上・下2層に分けて検出した。第1段階とした掘立柱建物跡とほぼ同一方向を示す溝を下層から，第2段階の掘立柱建物跡とほぼ同一の方向を示す溝及び掘立柱建物跡を上層で確認したのである。その方向性や層位からみた前後関係からすれば，下層の素掘り溝群が第1段階，上層のものが第2段階に伴うと理解すべきであろう。なおSD12011・SD12012はちょうど微高地状を呈する6区の縁辺部を流れるものであり，第1・2段階に居住区と耕作地とを区切る境をなす施設であった可能性が高いと考えている。

先に記したように千代川国府説の中には本調査区を中心とする地点に国庁域を想定するものもあり，この時期の遺構は，それが官衙的施設としうるのかどうかといった点が非常に注目された。しかし，上記のように建物に伴う素掘り溝の存在から一定時期には居住区に近接する耕作地の存在が想定されること，また何よりも建物跡の規模が小さいことやその配置に官衙的な企画性を認めることができなかったことなどから，ここを国庁域と考えることはできないという結果が得られたといえる。また，掘立柱建物跡の方向の変化は「条里制」ないしは国府の設置に伴う「条坊制」の施工を示唆するともいえるが，その他の成果からは，ここを国府跡の一画と考えることについても多くの疑問をなげかけたと言えるだろう。

中・近世　第13図に示した主な遺構は以上であるが，このほかに黒褐色土上面で中・近世に属すると考えられる溝も多数検出している。多くは耕作に伴うと考えられる幅30cm前後・深さ10～20cmの素掘り溝であった。今回の調査区では，この時期にここが居住区として利用されたことを示す痕跡については，9区で柱穴ではないかと思われるピットを

数か所認めたにすぎない。この地区は，中世(鎌倉時代)以降には一面耕作地と化し，現在に至ったものと理解された。

4. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は整理箱約120箱に及んだ。内容としては，先にみた遺構と同様に，弥生時代後期・古墳時代・奈良～平安時代・中世(鎌倉時代)に属するものがそのほとんどを占め，他に縄文土器片などを少量認めるというものであった。以下，ここでは主なものを図示し，その概要を簡単に報告する。

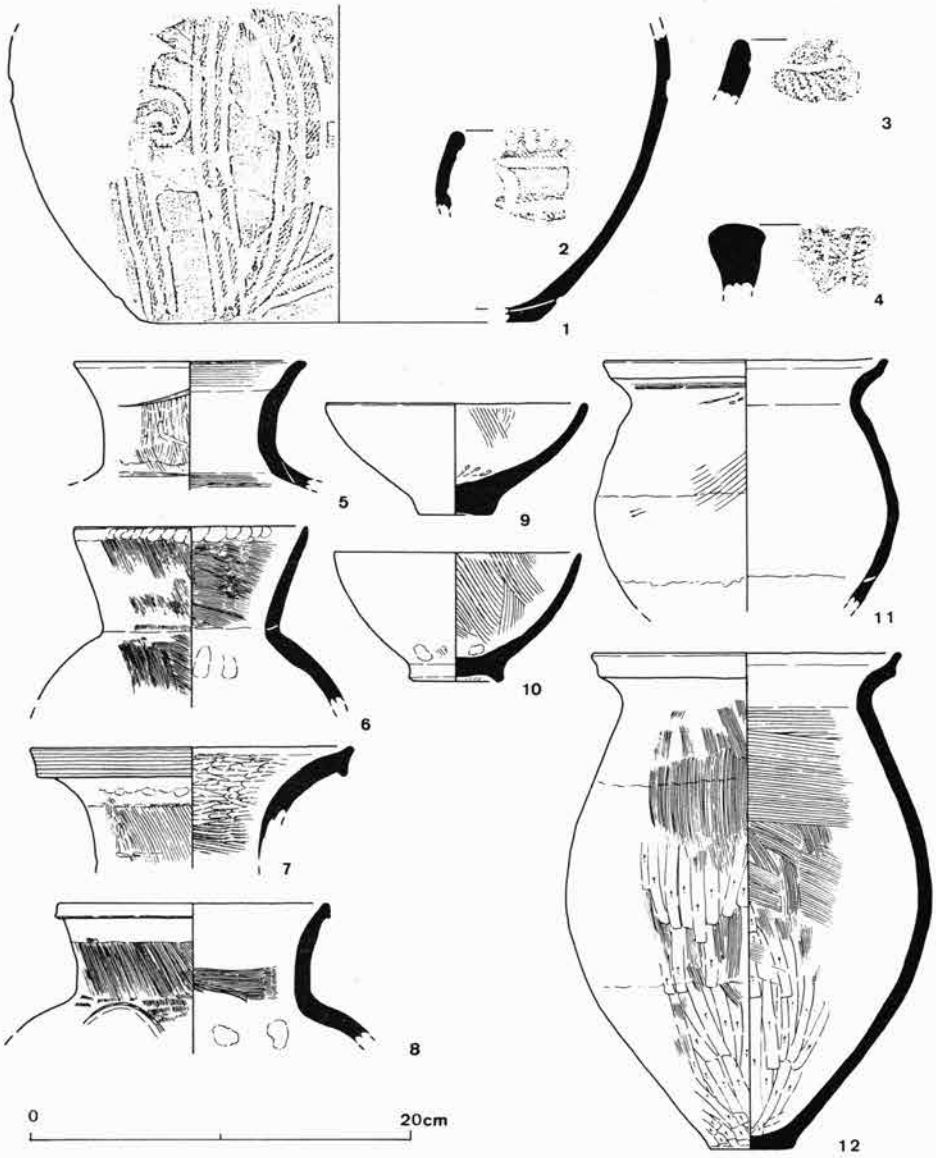
縄文時代(第16図1～4，第17図1～5)　この時期の遺物は，点数としてはわずかであるが，SD12123堆積土中および各区の遺物包含層中から出土している。土器片については，第16図1～4に示したように太い沈線と磨消縄文によって飾られるものが多く，縄文時代後期初頭頃に比定しうると考えられる。1・2は7区遺物包含層中，3・4はSD12123堆積土中から出土した。

また，包含層中から石鏃(第17図4・5)，石匙(同図2・3)や有舌尖頭器(同図1)などの石器もわずかながら出土している。いずれも他の時期の遺物に混ざって出土したものであり，細かな時期は把握できていない。

弥生時代(第16図5～12，第17図6)　この時期の遺物は，SD12131・SD12134堆積土中及び5・8・9区の黒褐色土中から主に出土した。いずれも弥生時代後期後半に属するものである。ここでは，SD12131・SD12134の堆積土中から出土した資料の一部を図示した。5・6・8は短頸壺ないしは直口壺として把握されるもので，5の頸部に一部ヘラ磨きを認めるほかは，主にハケ目・ナデ調整が施されている。また，8の肩部にはヘラ記号を認める。7は広口壺で，口縁端部は上下に拡張され面をなし，そこに擬凹線を施す。9・10は椀状をなす鉢である。11・12は甕である。甕の口縁部は，図示したもののように端部付近で屈曲し上方へ立ち上がる「受け口状」ないしは「複合口縁状」と呼びうる形態をなすものが多い。また体部に叩き目を施すものは少なく，ハケ目調整によるものが多い。このほかに磨製石鏃を1点認めた(第17図6)。粘板岩系の石材を用いたものである。

古墳時代(第18・19図)　この時期の遺物は，各遺構の埋土及び5～7区の黒褐色土中から出土した。特に，SD12121からは周辺部から流れ込んだような状態で古式土師器・木製品が多く出土し，SK12076・SK12081～SK12101からは須恵器・土師器とともに滑石製の双孔円板・木製品も出土した。

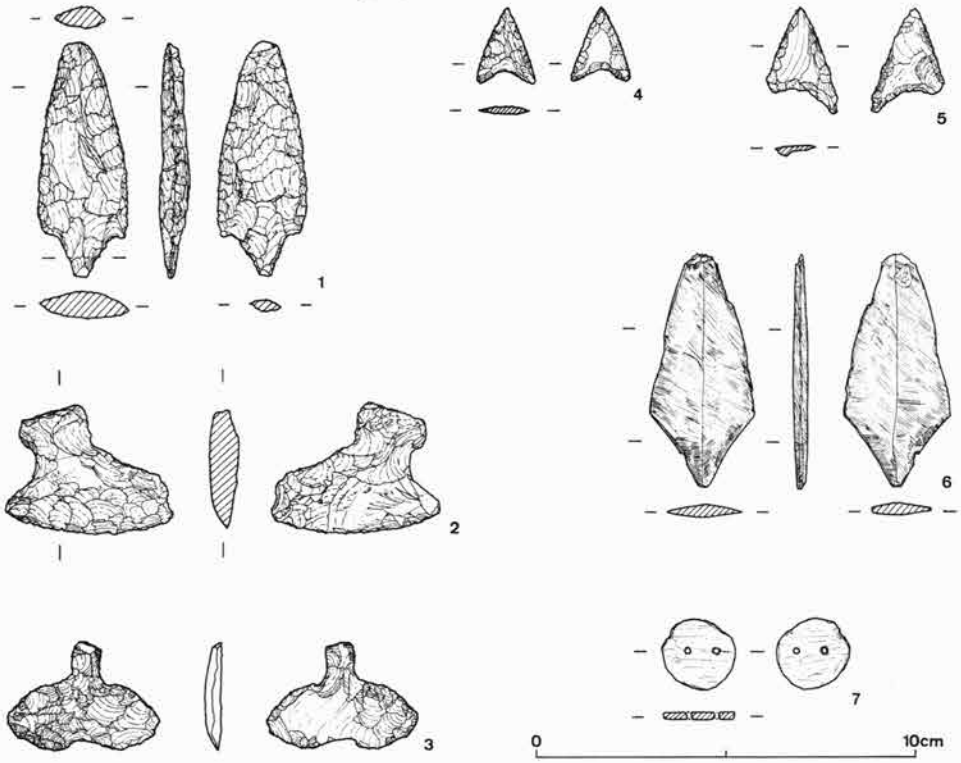
SD12121出土の土器は，布留式並行期に属する古式土師器である。第18図にはその一部を示した。1・2は小型丸底壺，3・4は壺，5・6は高杯，7～10は甕である。3は上外



第16図　　出土遺物実測図（縄文・弥生時代）
3・4：SD12123，5～7・12：SD12134，8～11：SD12131

方へ直線的にのびる口縁部を有す壺で，4は外反気味に上外方へのび端部が肥厚する口縁部を有すやや大形の壺である。また，8～10は布留式甕で，7はこれとほぼ並行する時期の在地的な甕と考えられる。なお，今回図示しえていないが，SD12121堆積土中からは土器に混ざり多くの木製品も出土している。

第19図には土坑群出土の須恵器杯身・杯蓋のみを示した。各土坑との対応関係は付表1

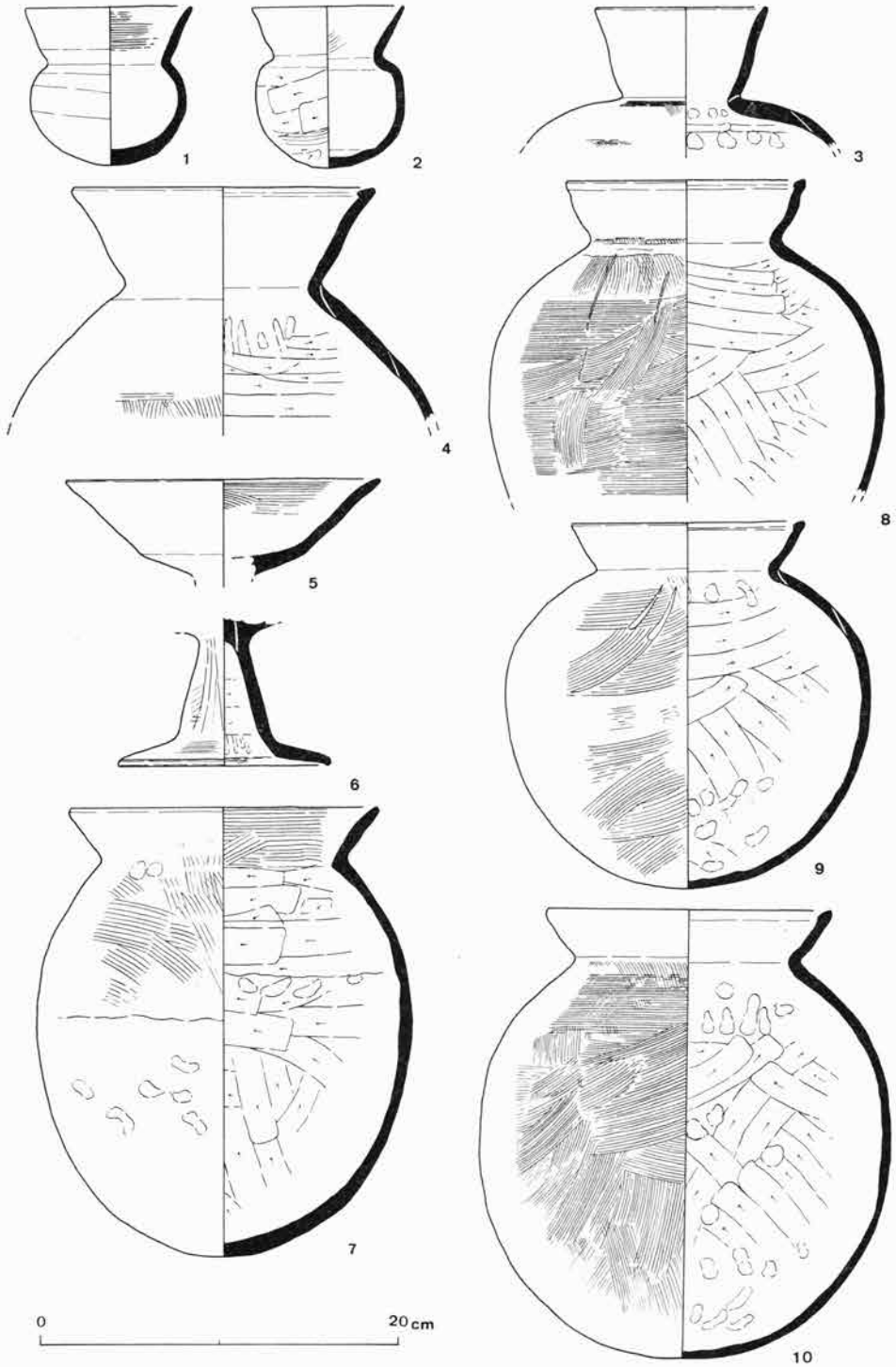


第17図　出土遺物実測図（石器）
1・2・4：6区耕作土中，3：9区黒褐色土中，5・6：7区黒褐色土中

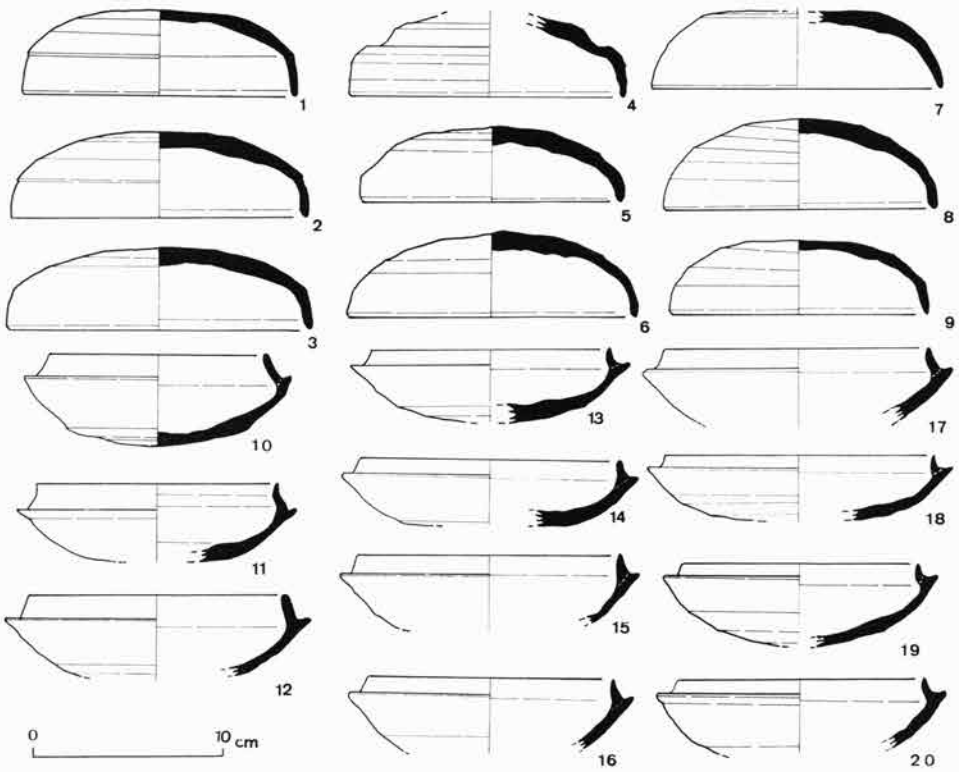
に示した通りである。6世紀中葉に近い時期のものから，6世紀末葉頃のものまでが認められる。なお，試掘調査の際にほぼSK12084の検出面で大形の須恵器杯身片が出土し，今回この土坑内からは滑石製の双孔円板（第17図7）が出土している。ともに，祭祀的な性格を有すものと理解されているものであり，本土坑群の性格を示唆するものと思われる。また，SK12076からは刀状を呈すると考えられる木製品が出土している。

奈良～平安時代（第20・21図）　この時期の遺物は，遺構に伴うものはわずかで，主に5・7区の黒褐色土中から出土した。ただ，量的には今回出土した遺物中で本時期のものが最も多い。ここではその中から主なものを図示した。

第20図に示したのは，須恵器杯身・杯蓋，土師器皿などである。1～11は須恵器杯蓋，12～18・32は高台のない須恵器杯身，19～31は高台を有す須恵器杯身，33～35は土師器皿，36は須恵器鉢である。図では，口径などをもとに任意にレイアウトしている。これを形態などをもとに時期的な面からみると，1・12など7世紀後半期まで遡りうるものや，36のように10世紀後半期まで下るものを一部含むものの，多くは8世紀中葉から後半期を中心と



第18図　出土遺物実測図（古墳時代1）



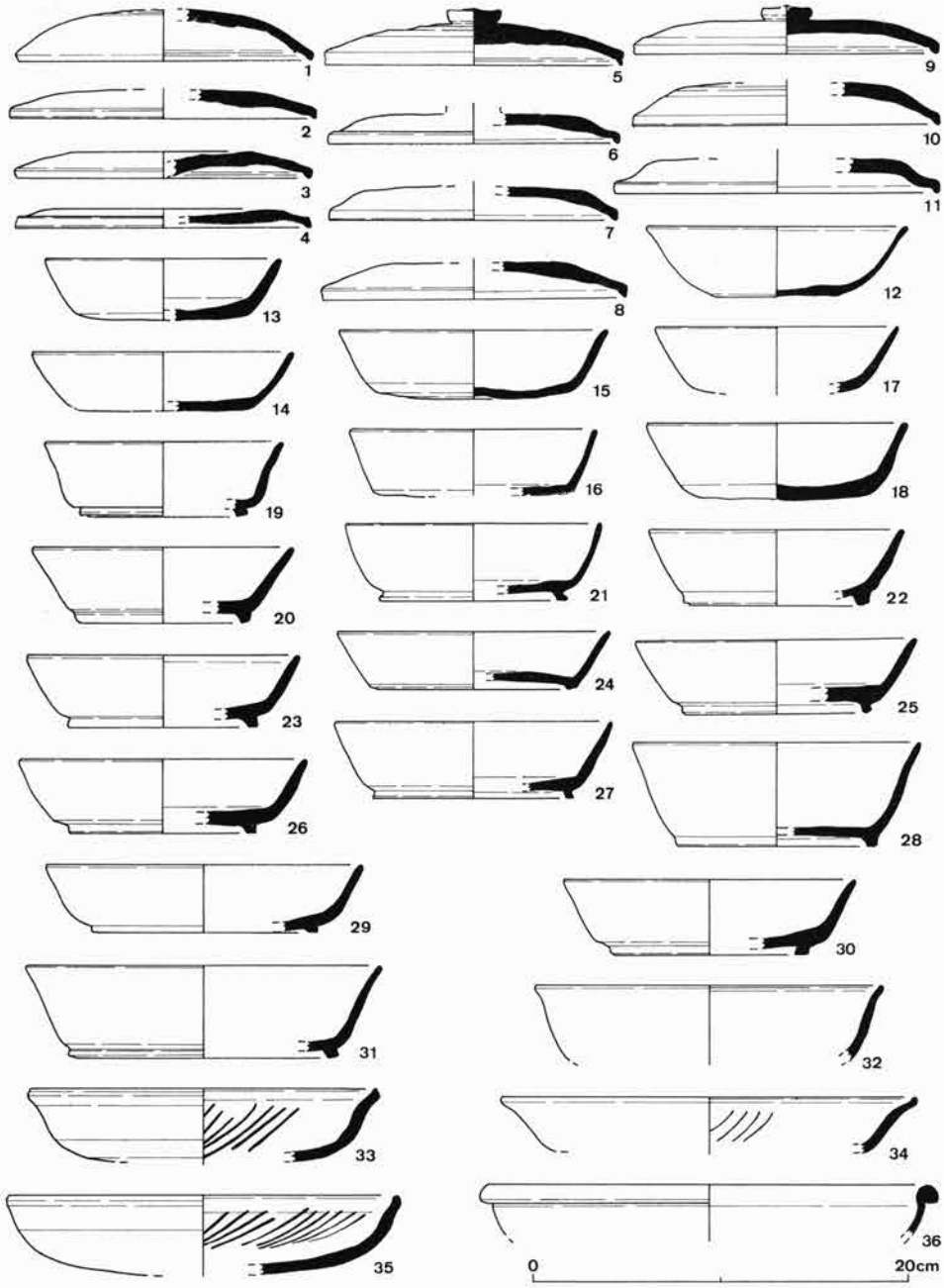
第19図　出土遺物実測図（古墳時代2・出土場所は付表1参照）

するもので占められる。なお，32に示した杯身の口縁端部の形態は，亀岡市篠窯跡群中の石原畑3号窯出土資料中の皿と共通するものである。(注9)

全体に土師器の出土量が須恵器に比べ非常に少ないという特徴を指摘しうる。

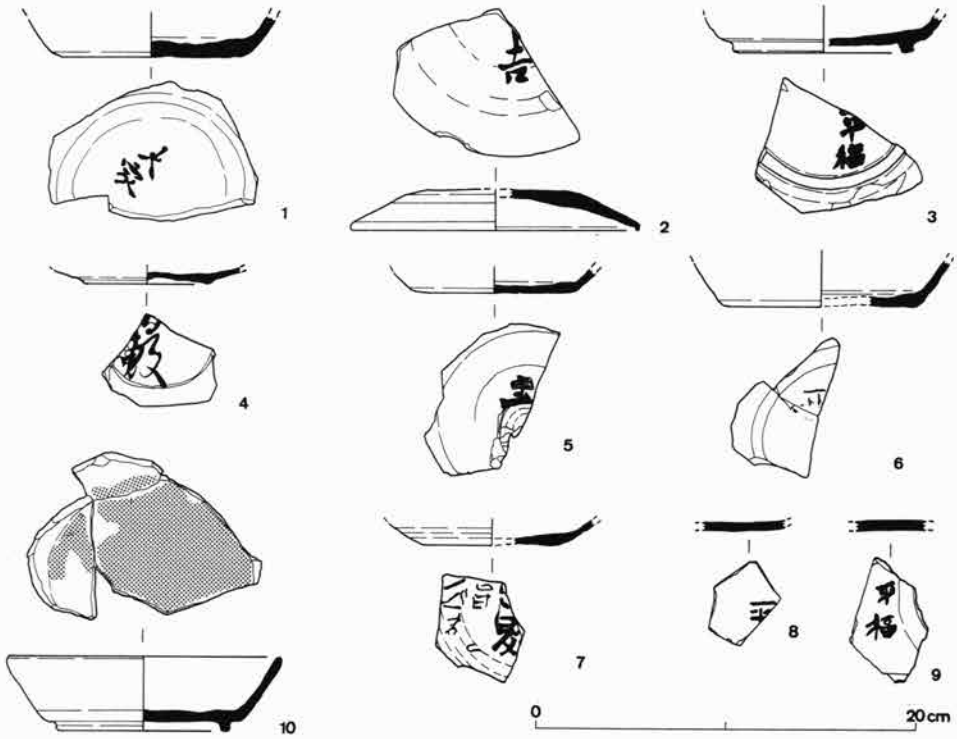
第21図には特異なものを抽出した。1～9が墨書土器(付表3)，10が内面に漆を塗った須恵器杯身である。墨書土器は，今回の調査で16点を認めた。試掘時にも5・7区に相当する部分で，「小家」・「福」・「大」などとかかれた墨書土器が4点出土しており，当該地からは合計20点の墨書土器が出土したことになる。うち，ここでは墨痕程度のものを除外した9点を図示した。また，10と同様に須恵器杯身の内面に漆を塗った資料は4例を認めた。いずれも5区の黒褐色土中から出土している。

鎌倉時代(第22図)　この時期の遺物は細片が多く，図示しうるものはわずかであった。1・2は，土師器皿で，口径8cm前後を測る。3・4は瓦器椀で，口縁部の形態からいわゆる丹波型と称しうるものである。5は白磁椀で玉縁状の口縁を有する。6は青磁椀で，外面に蓮弁を描く龍泉窯系の製品である。7は石鍋の口縁部片である。全体に瓦器椀・土師器皿が多くを占め，陶磁器類はわずかであった。いずれも細片化しており，当該地一帯が中世



第20図　　出土遺物実測図（奈良～平安時代１）

2・4・6～11・13・14・16・18・21・22・29～31・36：５区，24・26・34・35：６区，
1・3・9・12・15・17・23・25・27・28・32・33：７区，５・20：９区

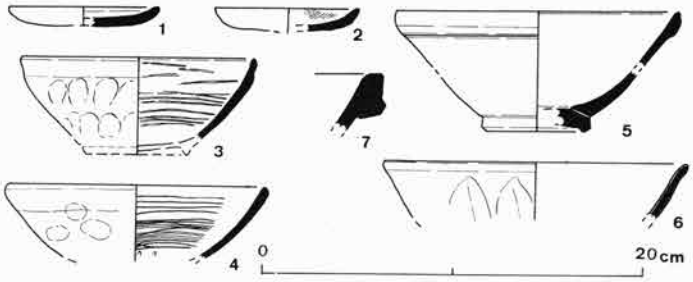


第21図　出土遺物実測図（奈良～平安時代２）
１・６・７：７区黒褐色土，２・３・５・８・９：５区黒褐色土，
４：６区耕作土

付表３　墨書土器一覧表

番号（第21図）	墨書	器種	墨書部位	出土位置
1	大家	須恵器・杯身	底部外面	7区　黒褐色土
2	吉	須恵器・杯蓋	天井部外面	5区　黒褐色土
3	平福カ	須恵器・杯身	底部外面	同上
4	□敷	須恵器・杯身	底部外面	6区　耕作土
5	吉カ	須恵器・杯身	底部外面	5区　黒褐色土
6	平カ	須恵器・杯身	底部外面	同上
7	敷その他	須恵器・杯身	底部外面	7区　黒褐色土
8	平	須恵器・杯身	底部外面	5区　黒褐色土
9	平福カ	須恵器・杯身	底部外面	同上

以降に耕作地化し，それに伴って遺物包含層が耕作土として利用されたことを示していると考えられた。時期的には，およそ13世紀後半期のものが主体をなす。



第22図　出土遺物実測図（鎌倉時代）
1～4：6区耕作土，5：9区灰褐色土，6・7：7区灰褐色土

5. ま　と　め

今回の調査で最も大きな成果は，やはり掘立柱建物跡をはじめとする奈良～平安時代の諸遺構を検出した事であろう。本調査区は先にも記したように推定丹波国府跡の西辺部上の一画を占めている。しかも，藤岡氏の説によると東面する国庁域が想定しうるところにあたっている。

調査の結果，検出した建物跡の規模やその配置にみる企画性などという面からみると，これを官衙的な施設とは到底考えることはできないと思われた。しかも，同時期の素掘り溝群の存在は，これらの建物跡が一般集落を構成していたことを示しているようであり，ここが国府の一画であった可能性に対しても疑問を抱く結果となった。ただ，その主軸の方向の変化は，「条里制」ないしは国府の設置に伴う「条坊制」の施工のような地形に左右されず東西南北を意識した土地区画的なものが8世紀頃には実施された可能性を示唆していると理解される。また，素掘り溝の存在も，大まかに分けた4段階の変遷の中では第1・・2期といった古い段階にのみ限って伴っている可能性が高く，ここに耕作地が放棄された画期を求めることも可能である。

しかし，いずれにしても当該区は国府跡推定域内とはいってもその西辺部に相当しており，今回の調査成果がどの程度周辺の同時期の遺構の特徴を反映しているのかさえ不明確である。そのため，これのみをもって千代川国府説について諸々を語れる訳ではない。今後の調査成果を待って充分検討したいと考えている。また，その際に改めて今回検出した諸遺構の性格についても，より正確な位置付けが可能と思われる。

また，上記の成果と同時に，縄文時代後期・弥生時代後期・古墳時代前期・同後期の遺構・遺物も確認している。特に，弥生時代後期・古墳時代前期・同後期については，出土した遺物の内容や検出した遺構の性格からすれば，近傍に集落跡が存在することは明らかだろう。中でも，弥生時代後期については，昨年度の第10次調査の成果[注10]を考え合わせると

本調査地の西南方向に広がっていることがほぼ確実になったといってよい。残る古墳時代の集落についても，その様相は来年度以降の調査によって徐々に明らかになるものと思われる。

以上，当該地では，縄文時代以来このように人々の居住が営まれ続けたことがおぼろげながら明らかとなった。しかし，中世(鎌倉時代)に至ると耕作地の拡大に伴って居住区はさらに丘陵裾部へと移動したのか，一帯は一面耕作地化され今日の田園風景が形成されていったようである。

(森下　衛)

注1　①水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982
②水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注2　調査作業員　八木初次・八木感一・並河義次・渡辺春三・八木千代江・八木よし子・原田敦子・山本美代子・八木淑子・松本菊栄・俣野利江・俣野ふじを・山内きくの・八木まさ子・八木美重子・山内タカ子・松山晃子・松本はつえ
調査補助員　佐竹　孝・山室　繁・横山憲郎・西垣真史・竹岡光男・大西智也・大西啓喜・西井淳也・川勝　修・中西　宏・本城洋一

注3　木下　良「丹波国府址」(『古代文化』16-2)　1966

注4　藤岡謙二郎「丹波の国府」(『国府』日本歴史叢書25　吉川弘文館)　1969

注5　①水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
②水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

注6　注5②に同じ

注7　注5①に同じ

注8　注5①に同じ

注9　石井清司ほか「篠窯跡群Ⅰ」(『京都府遺跡調査報告書』第2冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注10　注5②に同じ

3. 長岡宮跡第185次発掘調査概要

（7AN20E地区）

1. はじめに

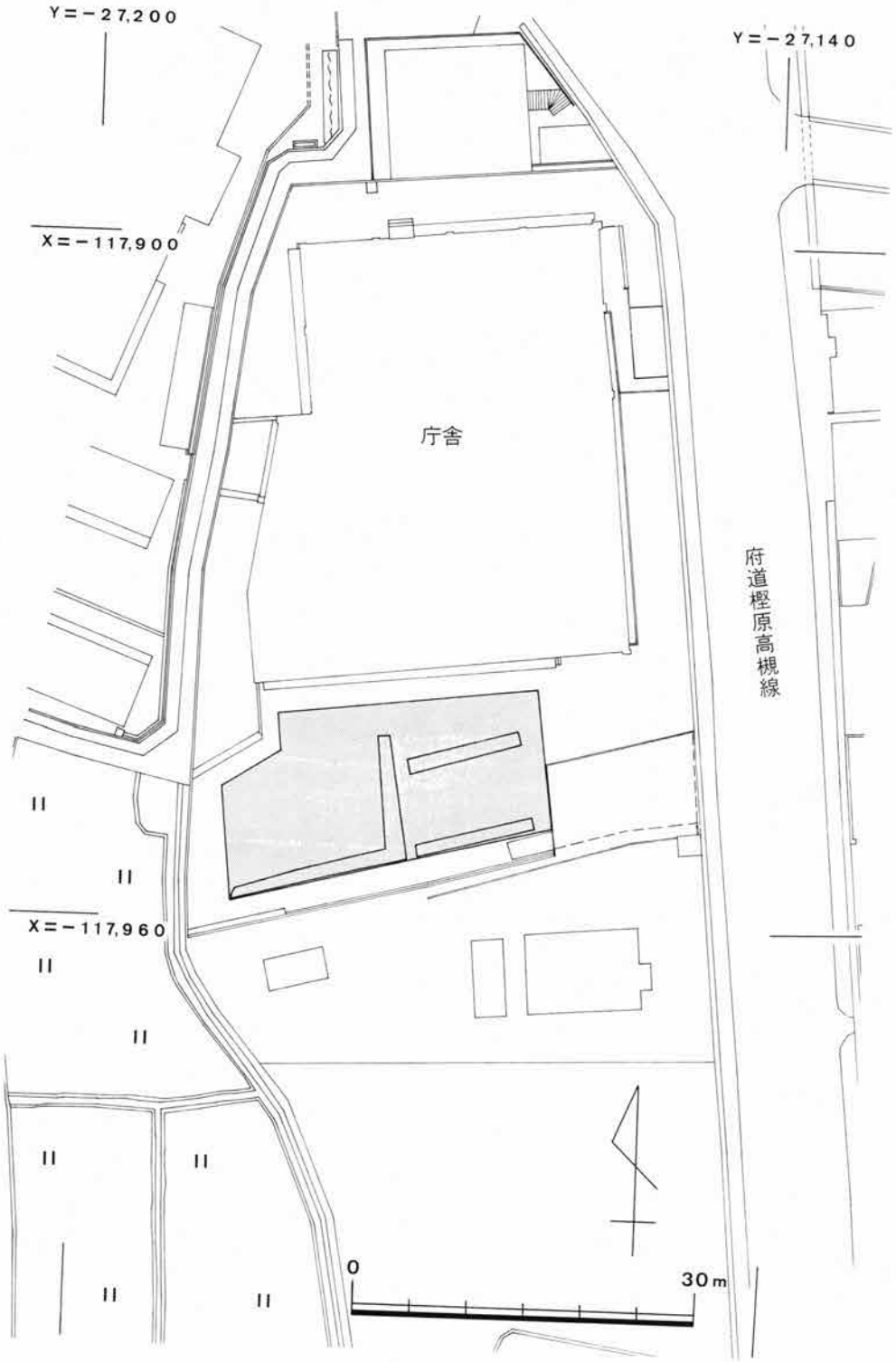
今回の調査は，郵政省近畿郵政局の依頼を受け，向日町郵便局庁舎の増改築工事に先立ち実施したものである。当該地(向日市上植野町馬立，ほか)は，宮域の南西部にあたり，急激な向日丘陵の傾斜変換線を経た小畑川の河床平野に位置しており，現在，水田，宅地の様相を呈している。周辺には長岡宮跡に関連する「島坂」，「滝ノ町」等の地名が残っており，また，近隣の発掘調査の成果では，長岡京期の遺構は検出されていないが遺物は多く出土している。このようなことから，長岡宮関係の遺構確認を中心にして，実施した。

調査は，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課主任調査員辻本和美，調査員竹井治雄の両名が担当し，昭和62年1月17日から同年3月4日まで費した。なお，調査にかかる費用は近畿郵政局が負担した。

2. 調査経過

調査対象地の庁舎南側の駐車場は，不整形ながらも四角形を呈しており，調査トレンチは駐車場の形状に合わせて不整形の四角形とした。調査面積は，約380m²である。調査地は，周辺水田との比高差が2mを測り，厚い盛土によって造成されている。このため，遺構面・遺物包含層の精査が非常にやりにくいことが分かり，あらかじめ盛土を調査地外へ搬出することにした。掘削に際しては盛土を覆う厚さ0.3mのコンクリートの表層があり，予想外に手間どった。盛土より下層には，厚い砂礫層があり人力で掘削した。この砂礫層は，調査地全域に広がり，かつ，厚さ2.0mを超えるものと推定されるため，砂礫層の全体を掘るのが不可能であったので，土層観察が重要であると考え，調査地縦横に幅1～1.2mの細長トレンチを

第23図　調査地位置図（1/50,000）



第24図　調査地周辺地形図

入れた。このトレンチでは移植ゴテ等を用いて遺物採集に努めた。地表下約4mの深さで，白色シルト(砂混じり)の地山が現われた。砂礫層からはコンテナー・バットで2箱分の遺物が出土した。

3. 層　　序(第26図)

調査地の標高は25.8mで，道路・水田より若干高い。遺構面及び遺物包含層は，地表下約2mから始まり，人力で掘削した「砂礫層」は厚さ2mに達した。この砂礫層は，旧小畑川の堆積層と考えられ，また，本調査の主な層であるため，詳しく記述したい。

第1層　駐車場を造成するための盛土である。主要な土は，外部から搬入された褐色土であるが，一部，庁舎建設の際に掘られた砂礫である。

第2層　黒灰色を呈する耕作土と固くしまった茶灰色の床土からなる。耕作土は，厚さ0.2mで，上面は盛土によって乱れている。床土は，厚さ0.2mで，下層に砂礫が堆積しており，比較的厚く，固くしまっている。

第3層　黄灰褐色を呈する粘質土が主である。厚さ0.2～0.25mで，上面は平坦であり，下面は小さな起伏がみられる。層中には腐植質が含まれ，耕作土，あるいは原野であったと推察される。

第4層　トレンチ東半部で確認した粗砂を主成分とする土層である。灰色砂礫(4層)を基盤層として東側に0.5～0.6m程落ち込み，砂礫・粗砂・砂・シルト等が互層をなし流路の痕跡をとどめる。旧小畑川の末期の流れを示しているものである。遺物としては土師器・須恵器・瓦器片が出土した。

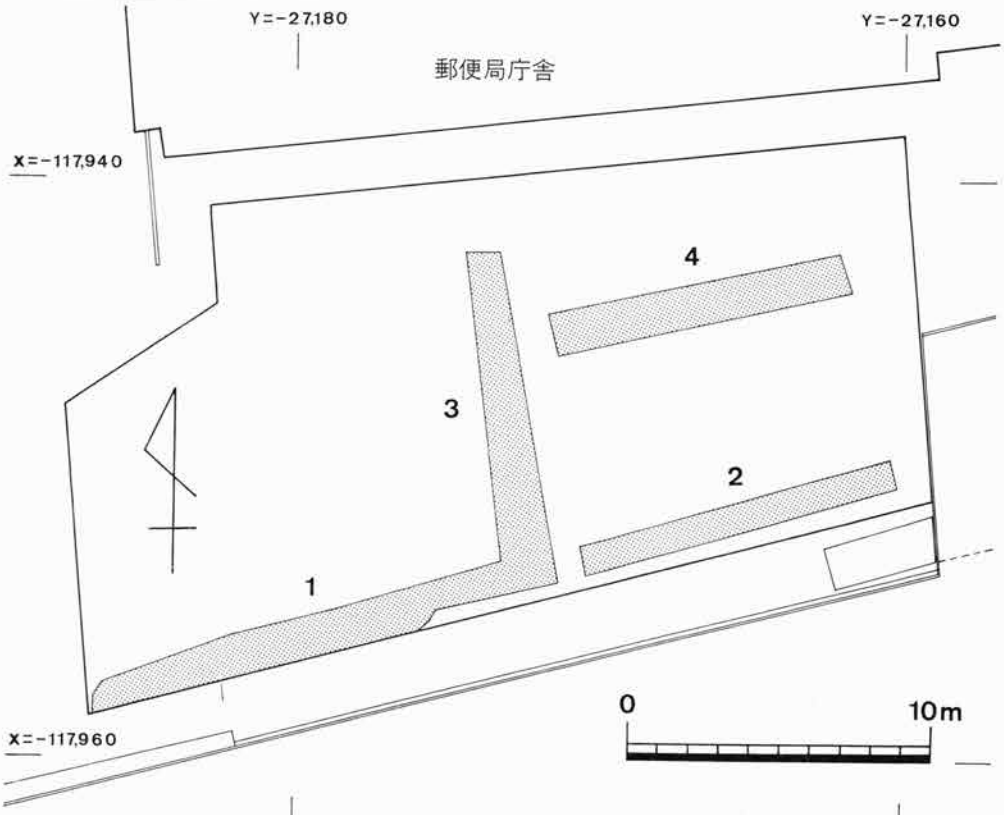
第5層　灰色を呈する長径2～5cmの小砂礫からなり，厚さ0.2～0.3mを測る。長軸の方向は一定しない。層中に含まれる遺物として土師器・須恵器・瓦器・陶器片等が出土した。

第6層　茶褐色を呈する長径3～10cmの中礫が主であり，間層として砂層・粘土塊がある。層の厚さは1～1.6mであり，一時に堆積したものかは不明である。礫の長軸方向は，多くが東西方向である。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦等である。

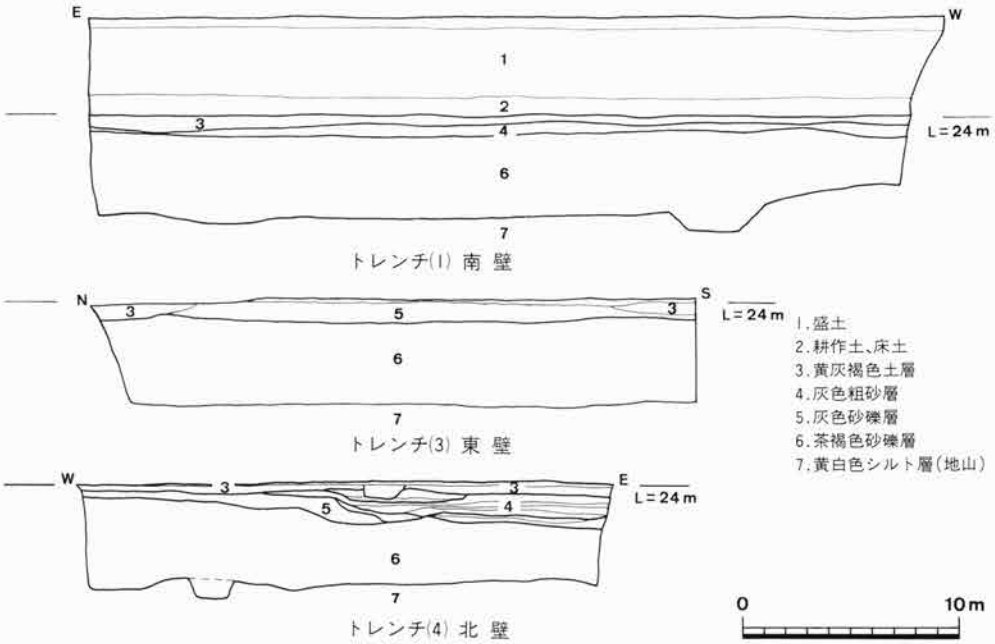
第7層　黄白色を呈するシルト層である。砂粒が含まれ，非常に固くしまっている。旧小畑川の河床面である。急激な砂礫の堆積によってこの河床面が削られており，その方向は南北方向を示している。遺物は出土しなかった。

4. 出　土　遺　物(第27図1～19)

出土した遺物は，土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦等の土器類である。これらは，ほとんど砂礫層から出土したもので，旧河道の埋没時期・性格を知る上で貴重な資料である。



第25図　トレンチ配置図



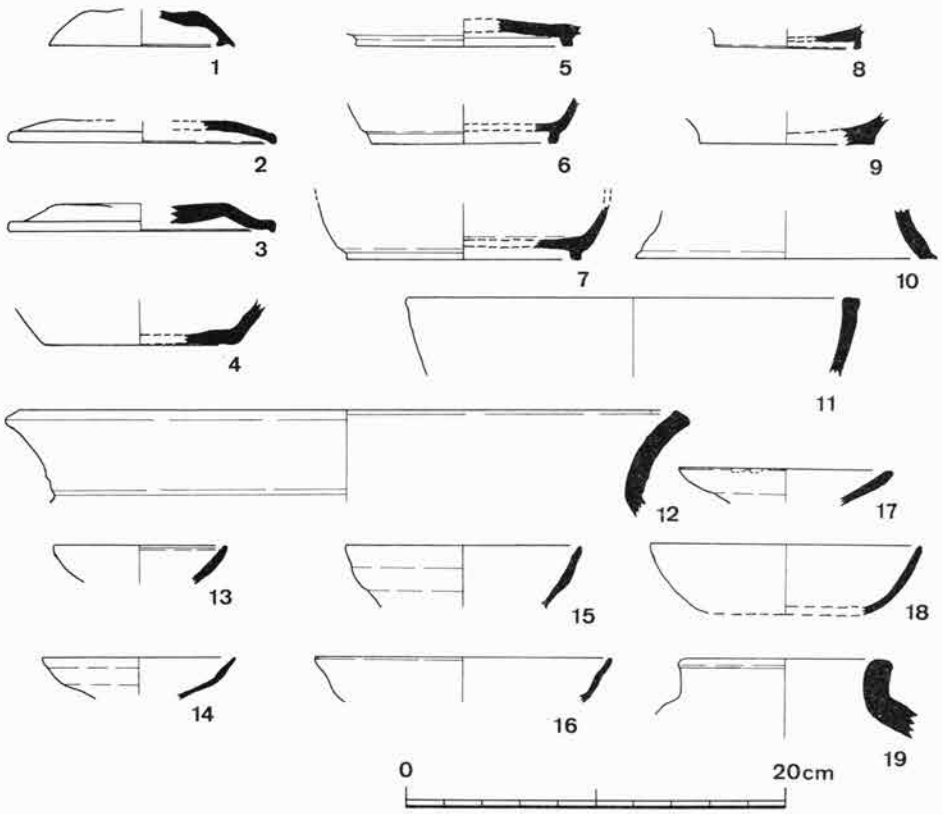
第26図　トレンチ土層図

トレンチ1　5は灰色砂礫から出土した須恵器杯である。茶褐色砂礫からは，2・5がある。2は，口径14.2cmの須恵器杯蓋である。天井部から口縁部は，なめらかに湾曲しており端部は丸くおさめる。15は，口径12.4cmの瓦器椀である。体部から口縁部にかけて内湾ぎみに斜上方にのび端部は丸くおさめる。

トレンチ2　灰色砂礫から3・6・13・16が出土している。3は,灰色を呈する口径14cmの須恵器杯蓋である。天井部はやや落ち込み気味であり，口縁部はゆるやかに屈曲し端部はまっすぐ下り丸くおさまる。6は，須恵器杯身である。高台は底面が内よりになりやや扁平している。13は，口径9.2cmの小ぶりの瓦器椀である。端部内面に明瞭な沈線が施されている。16は，口径15.7cmの器壁の薄い瓦器椀である。

茶褐色砂礫からは，1・7が出土している。1は，口径9.8cmの口縁部内面にかえりを持つ須恵器杯蓋であり，7世紀前半の頃のものと想定される。7は，逆台形の高台をもつ須恵器杯身である。

トレンチ3　12は，灰色砂礫から出土したもので口径36cmの須恵器椀である。口縁部内



第27図　出土遺物実測図

面は丁寧なナデ，外面は荒く仕上げている。端部は平坦面をもち傾斜する。

茶褐色砂礫から出土した19は，内外面茶褐色を呈する口径10cmの壺である。

トレンチ4　灰色砂礫から出土した14は，口径10.2cmの瓦器椀である。

茶褐色砂礫からは8・18が出土した。8は，須恵器杯であり高台がやや内傾している。18は，赤褐色を呈する口径15.8cmの土師器杯である。

4. ま　と　め

調査の結果，旧小畑川の範囲については砂礫層が調査地外へと広がり不明である。埋没過程としては2～3回の堆積の繰り返しが認められるが，その時期については，出土遺物から14世紀前半に求めることができる。

今回の調査では長岡宮を復元する資料は検出できなかったが，旧小畑川の流路を検出することができた。今後の資料の増加を待って，長岡京における小畑川の役割等について検討していきたい。

（竹井治雄）

4. 木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要

はじめに

この調査は，関西・文化学術研究都市の開発に関わり，住宅・都市整備公団からの依頼による木津町東部地区(木津町木津・市坂・梅谷・鹿背山)内に分布する埋蔵文化財の発掘調査である。調査は3年目にあたり，現在までに遺物散布地8か所と，古墳推定地7か所の調査を行っている。(注1) 本年度は，市坂地区で散布地2か所(瓦谷遺跡・上人ケ平遺跡)，古墳推定地2か所(菩提1・2号墳)の調査を行った(第28図)。

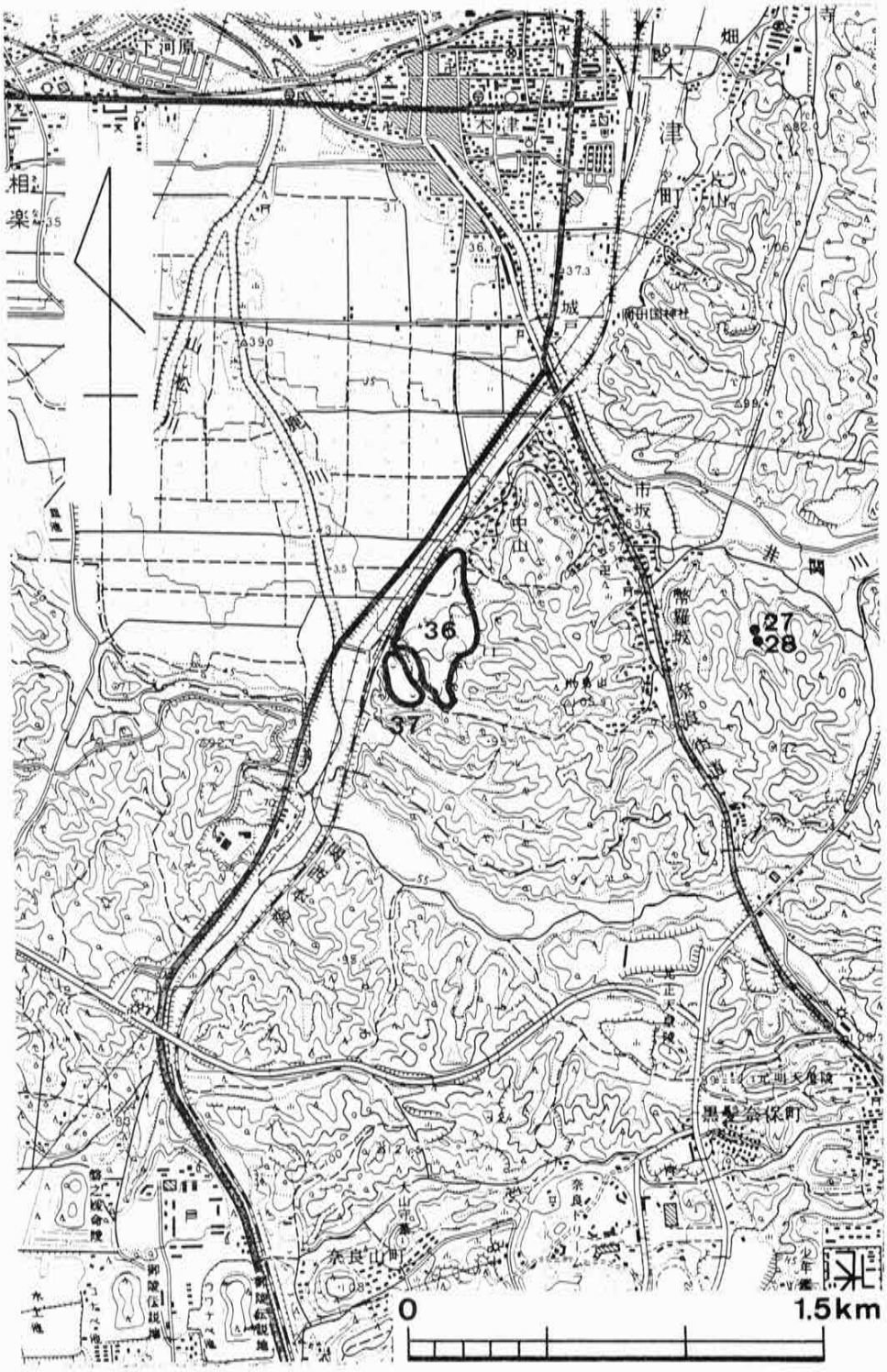
瓦谷遺跡は，相楽郡木津町の東部丘陵南西に位置し，標高100mの丘陵から西に開く谷部と小丘陵の先端付近，その裾に広がる扇状地にあたり，これまで土師器・須恵器の散布が知られていた。周辺には，瓦谷古墳や西山塚古墳が所在しており，瓦谷遺跡にはこれらの古墳に関わる遺構が埋蔵されていることが想定されていた。調査は，瓦谷10・20・39・48・51・52bt，鰯谷22btにおいて実施した。

上人ケ平遺跡は，木津町大字市坂字上人ケ平に所在し，瓦谷遺跡の南に位置している。標高は55～58mで，西に見下ろす平野部との比高差15～18mを測る台地状の地形を呈している。この遺跡は，木津町東部丘陵の中でも最も平野部に突き出しており，北部の京都，南部の奈良に対してたいへん眺望のきく立地である。この遺跡の周辺には，上人ケ平1～5号墳や，平城宮大膳職所用の瓦を焼いたと考えられている市坂瓦窯などが古くから知られている。昭和59年度の調査では，奈良時代の掘立柱建物跡や柵列，溝などが発見されており，奈良時代の土器や瓦，古墳時代の土器や埴輪などが出土している。今年度は，5・6・8・15・16・19～21・34～36btでの調査を行った。

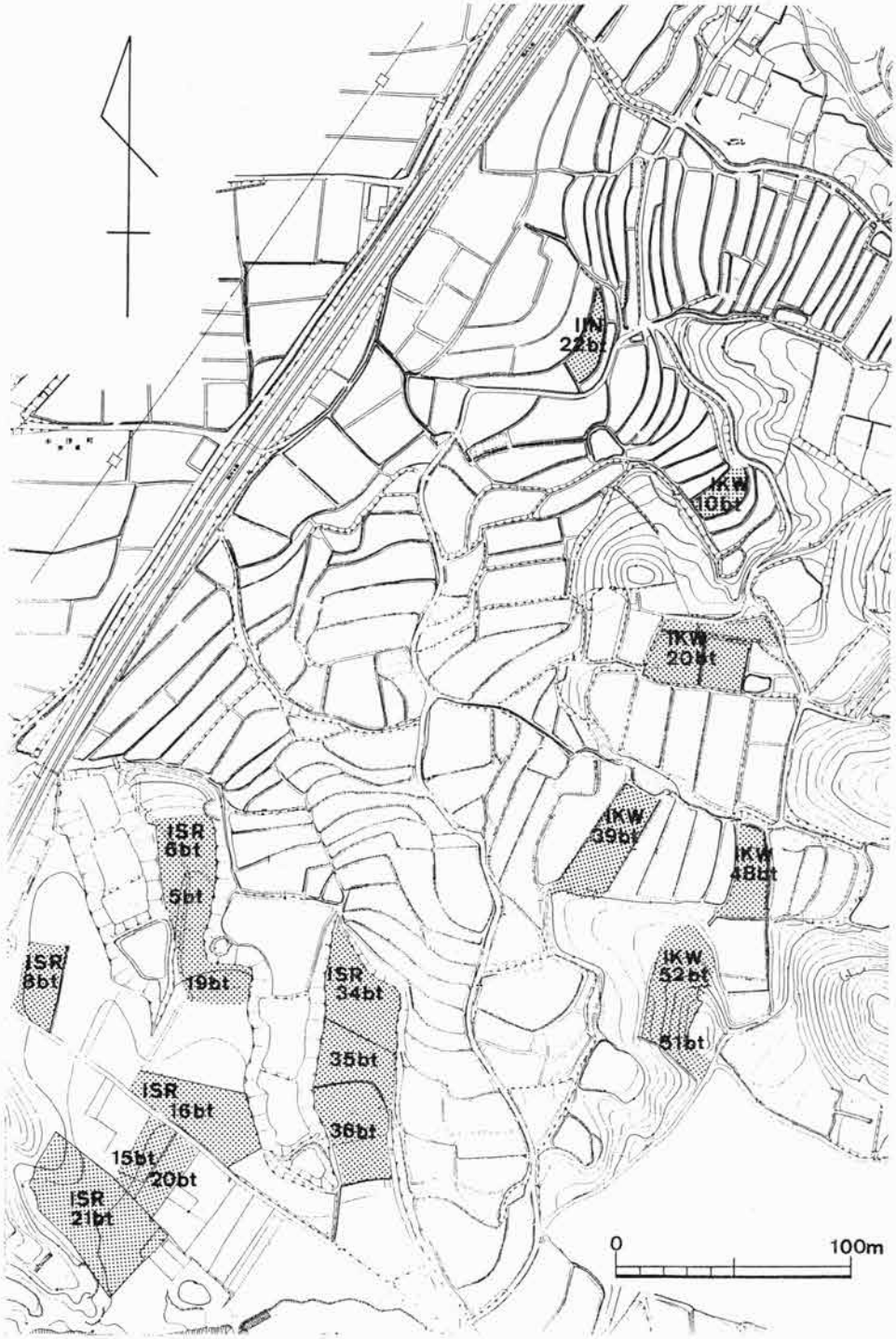
No.27・28地点(菩提1・2号墳)は，木津町大字市坂字向山81に所在し，井関川が開析した谷の一支谷を望む尾根の西側斜面に位置する。調査は，27地点と28地点の中央を結ぶ線を主軸ラインとしたトレンチを設定し，遺跡の有無を確認した。

調査は，当調査研究センター調査課　主任調査員　松井忠春，調査員　小山雅人・戸原和人・荒川　史・伊賀高弘が担当した。調査の期間には，昭和61年6月2日～昭和62年3月18日までを要し，調査面積は延べ約4,200m^{2}に及んだ。調査にかかる費用は，住宅・都市整備公団が負担した。

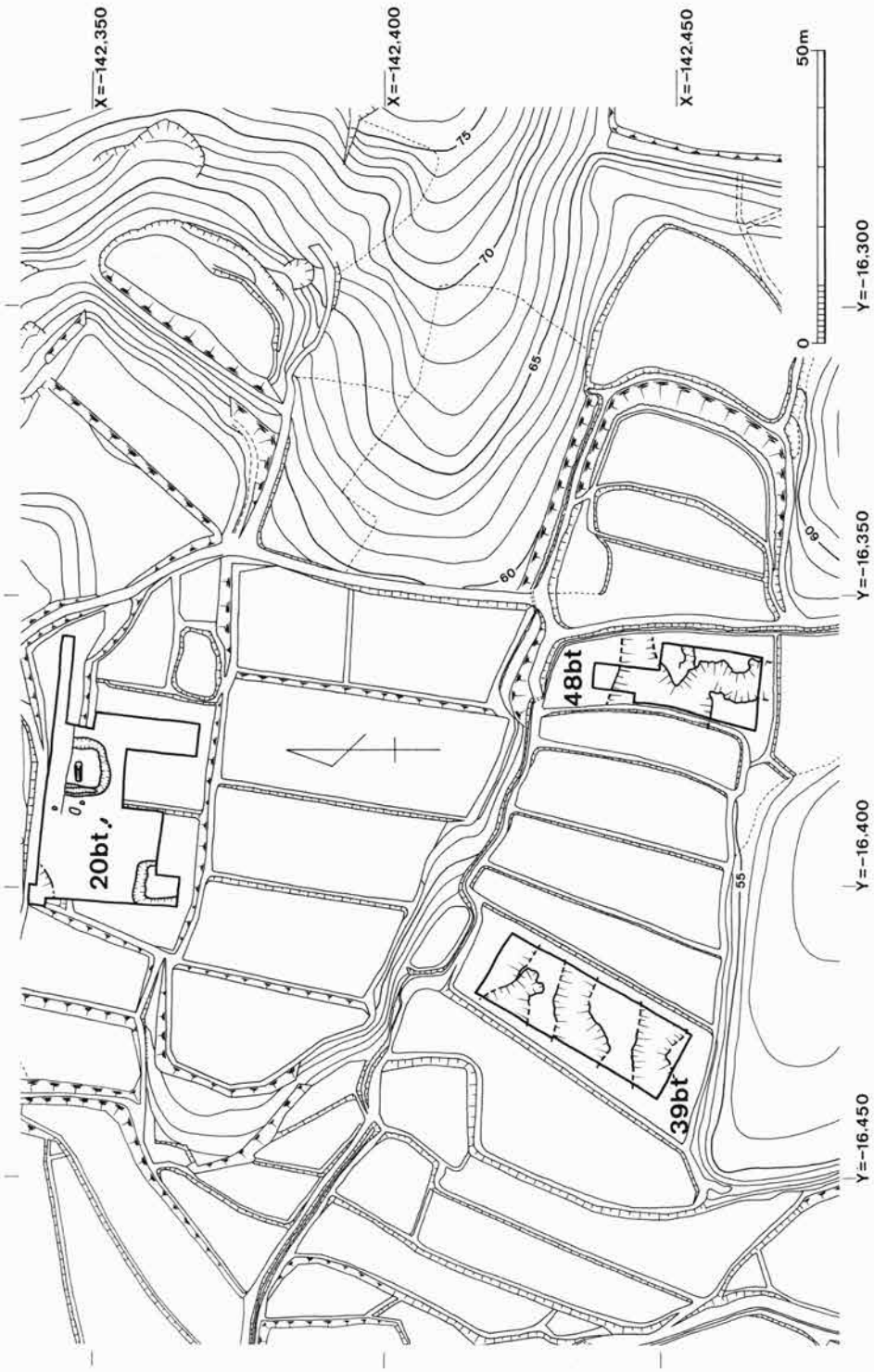
調査に当たっては，地元市坂地区，区長・開発対策委員長を始め，水田耕作中には，農家の方々に多大なるご協力を頂いた。また，調査に参加していただいた方々も多数にのぼる。(注2) この場を借り厚く御礼申し上げたい。　(戸原和人)



第28図　調査地位置図(27・28：菩提1・2号墳，36：瓦谷遺跡，37：上人ケ平遺跡)



第29図　瓦谷遺跡・上人ケ平遺跡両調査区位置図



第30図　瓦谷遺跡20・39・48btトレンチ配置図

(1) 瓦 谷 遺 跡

A 20bt(第29～42図，図版第17～24)

1. 調 査 の 概 要

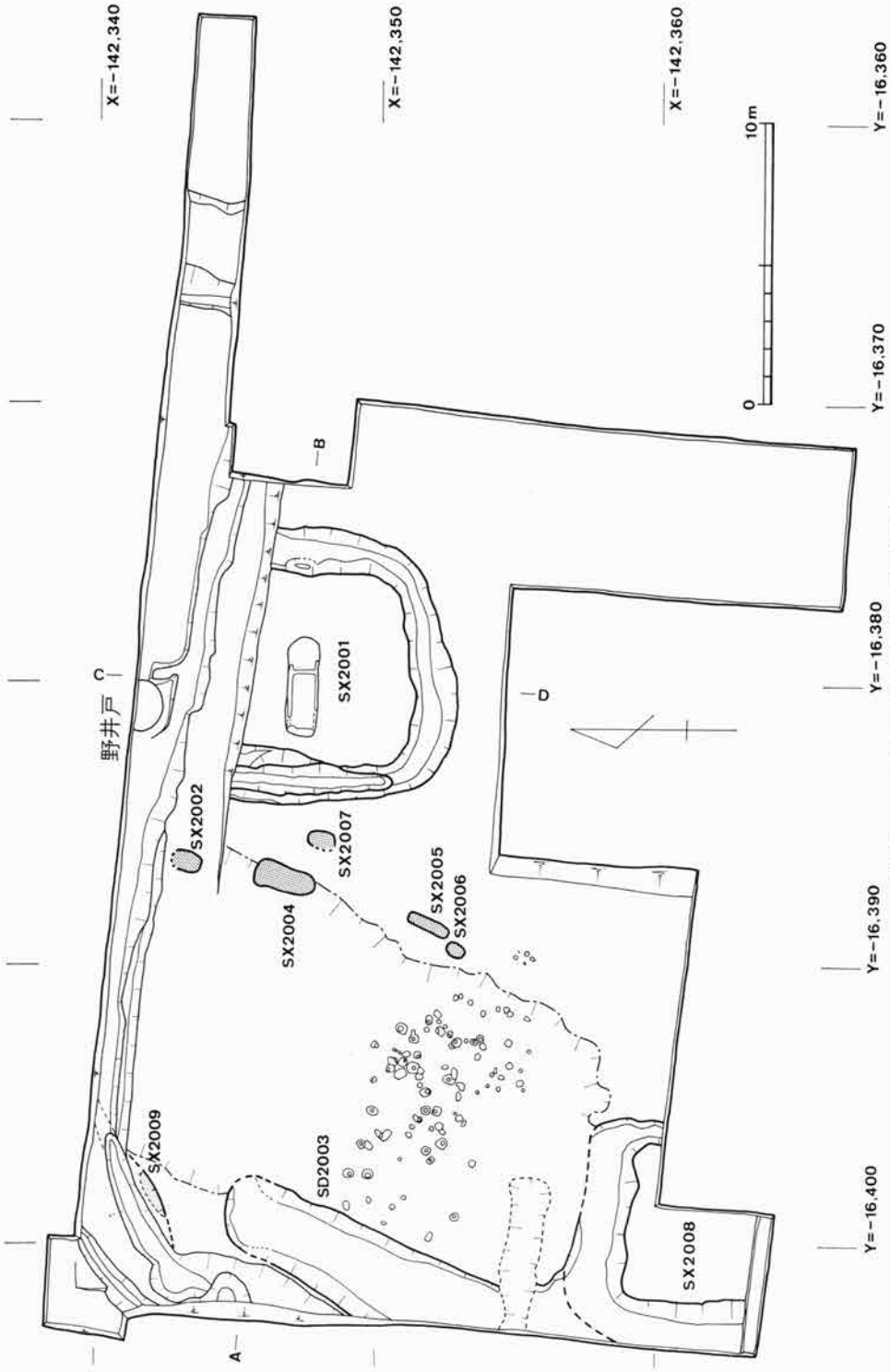
調査対象地は，丘陵から派生する幾つかの尾根のうちその末端に瓦谷古墳(注3)を立地せしめる尾根の先端付近に位置する。この尾根は，周知の塚である瓦谷古墳を残してその背後から尾根の基部にかけて長さ約100mに亘り棚田状に耕地化されている。瓦谷古墳に南接する20番地地区でも現状では4筆の耕地として利用されており，約0.5mの比高差をもたせて東から西へ下がり，北辺部がさらにもう一段低く造成されている(その中央部の標高は約56.0mで，平野部との比高15mを測る)。これらの耕地を単位に3本のトレンチを設定し，溜池のある東端の最も高い一筆を資材置場とした。調査を進める過程で，顕著な遺構の拡がりを確認したため，その面的な把握を目的として，各トレンチを拡張して繋ぎその際，一部を埋め戻して排土置場とした。

調査区内の基本層序は，上位よりⅠ.現耕土・床土，Ⅱ.現耕地を造成する際の盛土，Ⅲ.旧耕作土(旧耕地の畔を含む)とその造成の際の盛土，Ⅳ.古墳～奈良時代の遺物が若干出土する包含層(暗黄灰色砂質土)，Ⅴ.古墳～奈良時代の整地層(暗黄茶色粘質土)，Ⅵ.地山となる。この内，Ⅱ層は，基本的には，斜面上位の削平と下位への盛土によって耕地を水平化させる際の盛土部分に相当する。このような緩傾地の耕作化は，過去数次に亘って行われており，その都度畔の位置に変化がみられる(Ⅲ層)。Ⅳ・Ⅴ層は，耕地造成のため自然地形上位では削平を受けている。Ⅴ層は，旧自然地形の緩い落ち込み部分にのみみられる。Ⅵ層の地山は，粘質土系のいわゆる大阪層群に属す基盤層(淡褐灰色粘質砂土)とこれを開析する流れ堆積からなる(第32図)。

2. 検 出 遺 構(第31～39図，図版第17～24)

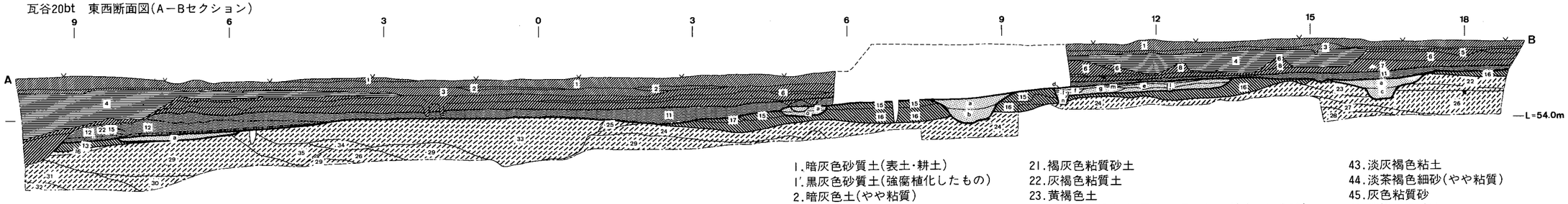
調査によって確認した主な遺構は，古墳時代の方墳2基，埴輪棺4基，土器埋納遺構1基，貼り石遺構1か所，奈良時代の溝1条，小規模な掘形のピット群である。これらは，いずれもⅤ層またはⅥ層上面で検出された。以下，各遺構の概要を遺構番号毎に説明する。

SX2001 調査区東寄りで検出した小規模な古墳(方墳)である。当番地内において最も低く削り出された北側の耕地の造成にともない，遺構の北辺部が約1.5mの段差をもって削り取られている。遺構の大部分が位置する上段耕地部分においては，南側ほど削平が激しいものの溝が途切れることなく概ね原形を保っている。周溝の掘削によって内側に削り

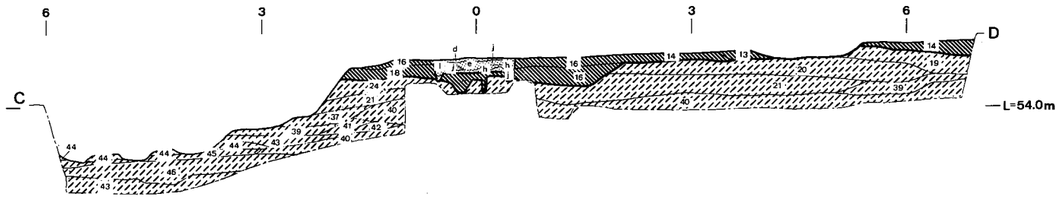


第31図　瓦谷遺跡20Lt遺構配置図

瓦谷20bt　東西断面図(A－Bセクション)



瓦谷20bt　南北断面図(C－Dセクション)

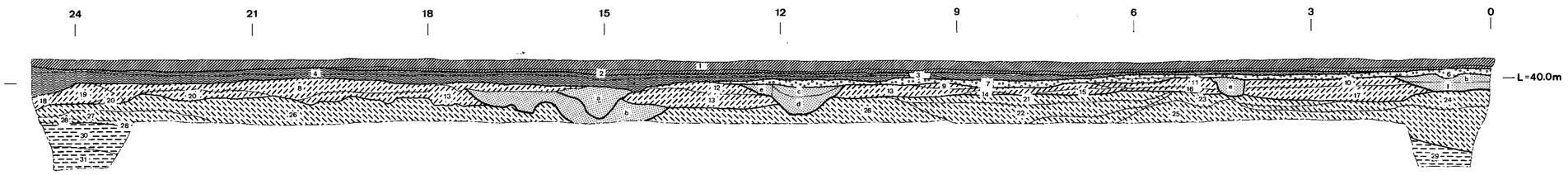


Ⅰ層　Ⅱ層　Ⅲ層　Ⅳ層　Ⅴ層　Ⅵ層

1.暗灰色砂質土(表土・耕土)
1'.黒灰色砂質土(強腐植化したもの)
2.暗灰色土(やや粘質)
3.灰色砂質土
4.黄褐色土(黄灰色土混)
5.灰褐色砂質土(床土)
6.暗褐灰色砂質土(旧耕土)
6'.暗褐灰色砂質土(暗黄灰色土混、旧畔)
7.褐灰色砂質土(江戸期の耕土？)
8.暗黄褐色砂質土
9.淡灰色砂質土
10.灰褐色土(旧床土)
11.茶灰色砂質土
12.黄茶色泥砂
13.暗黄灰色粘質土
14.黄茶色混礫土
15.茶灰色粘質土
16.黄茶色粘質土
17.暗黄灰色粘質土
18.淡茶灰色土
19.灰褐色混礫土
20.淡褐灰色粘質砂土
21.褐灰色粘質砂土
22.灰褐色粘質土
23.黄褐色土
24.灰褐色粘質砂土(西方で褐灰色粘質砂土に漸移)
25.淡黄灰色粘質砂土
26.淡褐灰色粘質砂土(小礫混)
27.茶褐色砂礫
28.淡褐灰色砂(礫少混)
29.淡褐灰色粘質土
30.灰白色砂質粘土
31.淡褐灰色粘質粗砂礫
32.灰色粘質細砂
33.淡茶褐色砂礫
34.淡灰褐色砂
35.褐灰色粗砂礫
36.淡褐灰色粗砂礫土
37.茶褐色粗砂礫(同色砂質土混)
38.淡褐灰色粘土
39.茶褐色粘質砂土
40.淡褐灰色粘質砂土(灰白色粘質砂土混)
41.淡灰褐色粘質土
42.茶褐色混礫土
43.淡灰褐色粘土
44.淡茶褐色細砂(やや粘質)
45.灰色粘質砂
46.淡褐灰色砂礫

遺構内埋土
a.暗黄茶色砂質土(周溝上層埋土)
b.暗茶灰色粘質土(周溝下層埋土)
c.暗茶灰色粗礫礫土(周溝下層埋土)
d.淡茶灰色土(やや砂質)
e.暗茶灰色土(小礫少混)
f.暗黄灰色土(細粒子)
g.茶褐色土(細粒子)
h.淡茶褐色土(やや粘質、細粒子)
j.茶灰色土(やや粘質)
k.茶褐色土(小礫混)
l.暗茶灰色土(小礫少混)
m.茶褐色土
n.淡黄茶色粘質土(赤灰色土斑状混)
o.茶灰色砂質土

鰯谷22bt　断面図(トレンチ東壁)



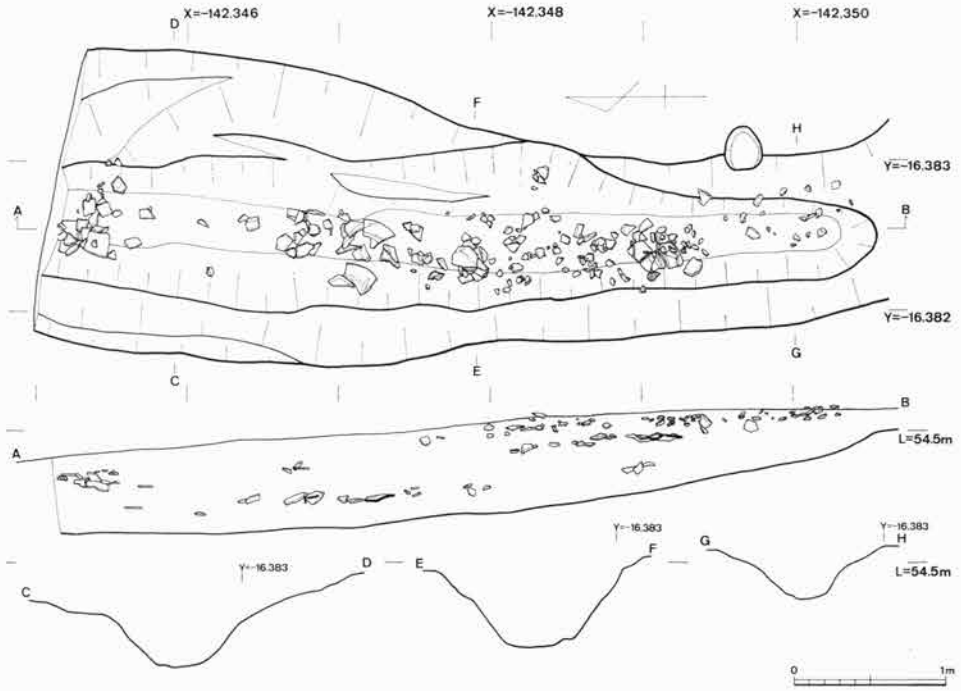
遺構内埋土
a.暗青灰色粘質砂土
b.暗灰色粘質砂
c.暗灰色粘質砂土
d.暗灰色粘質粗砂(礫少混)
e.暗灰色粘質土
f.褐灰色砂質土

Ⅰ層　Ⅱ層　Ⅲ層　Ⅳ層　Ⅴ層　Ⅵ層
(本文参照)

1.暗灰色砂質土(耕土)
2.灰色砂質土
3.暗青灰色粘質土(暗渠)
4.黄褐色土(床土)
5.灰褐色土
6.暗灰褐色土
7.暗褐灰色土(茶褐色土斑状混)
8.茶褐色混礫土
9.灰褐色粗砂礫土
10.茶褐色粗砂礫
11.淡褐灰色粗砂質土
12.褐灰色砂質土(茶褐色砂質土混)
13.灰色砂(淡褐灰色粗砂礫混)
14.灰色粘質細砂
15.褐灰色粗砂
16.淡灰色砂
17.淡褐灰色粗砂(同色粗砂礫混)
18.灰褐色粗砂礫
19.灰色粗砂質土
20.灰色粗砂土
21.淡青灰色粘質細砂
22.暗灰色粘質細砂
23.淡青灰色粘質細砂
24.淡青灰色粘質砂
25.灰色粗砂礫
26.青灰色粘質砂
27.灰褐色砂
28.灰色粘質砂
29.暗灰色粘質細砂(暗緑灰色同系土混)
30.暗灰色粘質砂土
31.暗青灰色粘質砂

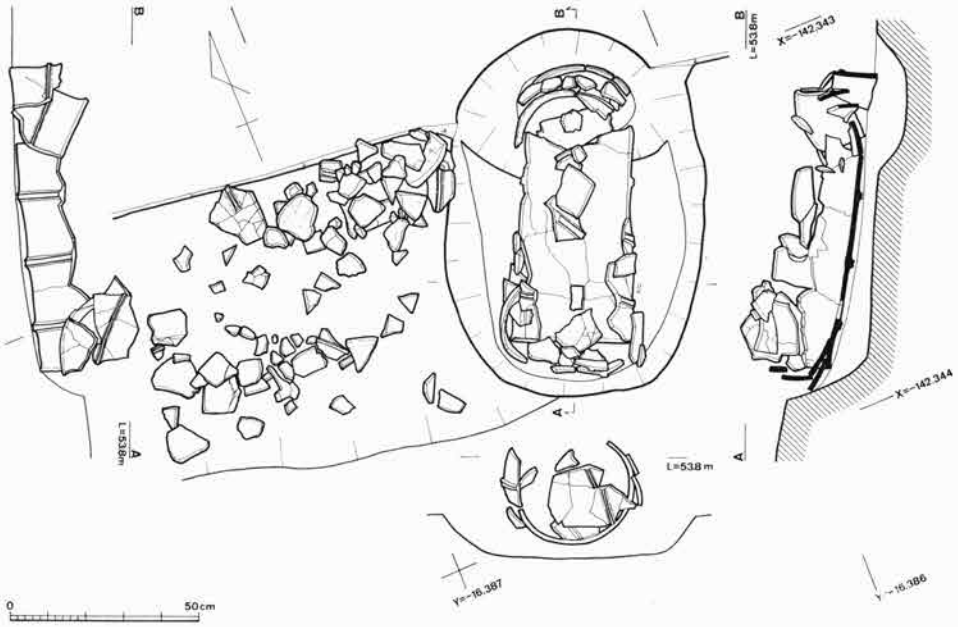
0　5m

第32図　瓦谷遺跡20bt・鰯谷22bt断面図



第33図　SX2001西溝埴輪出土状況図

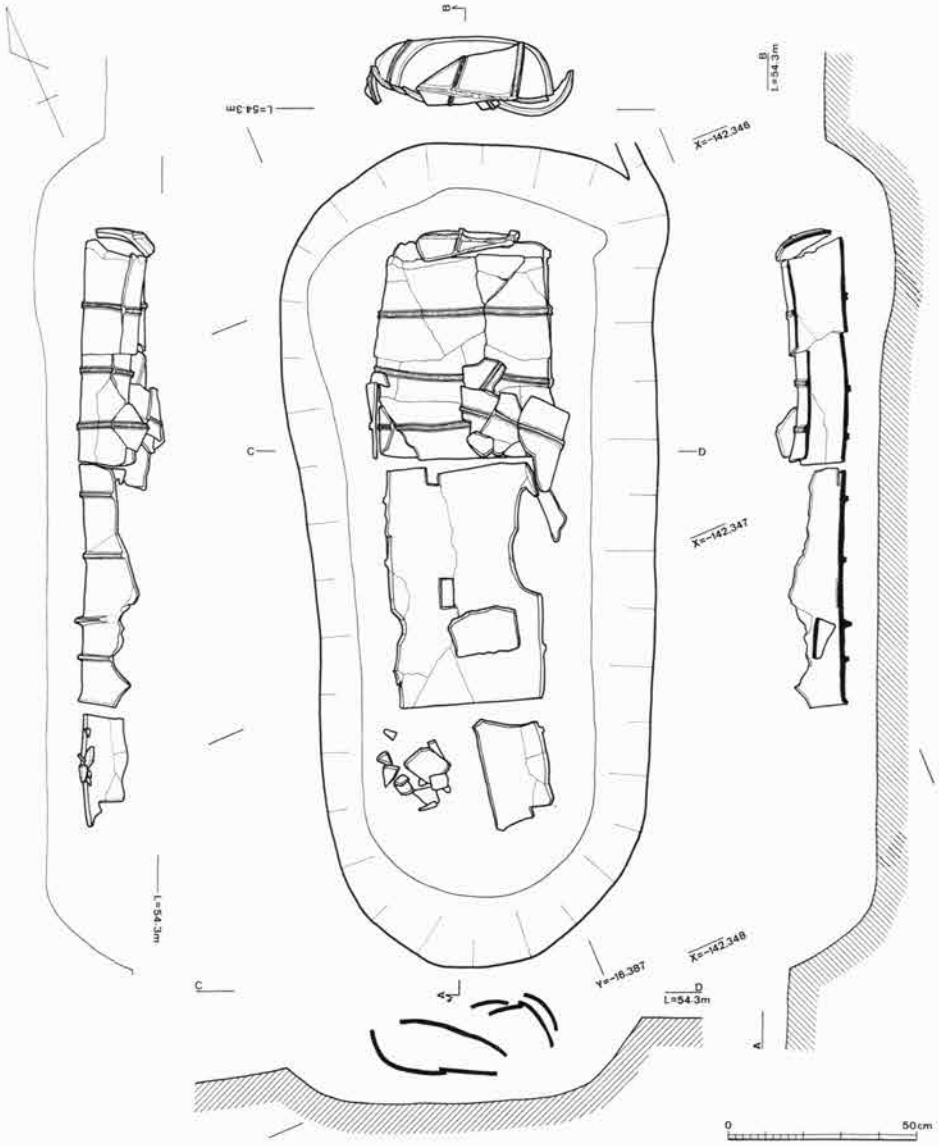
出された台状部は，北辺を失うものの全体としては隅丸方形プラン(上縁間の規模，東西7m・南北6m以上)を示すものと考えられる。周溝は，現状ではV層から掘り込まれ，溝底はわずかに地山面下に達する。周溝の断面形態は，緩やかに外上方に拡がるU字形を基本とする(検出面における幅1.0～2.0m，検出面からの深さ約0.3m)。西溝は，南西隅屈曲部から溝底を更に深く掘り込む2段構造をとり(傾斜変換線で示される下段溝の規模は，長さ5.5m以上，幅約1m，検出面からの深さ約0.6mを測る)，東溝においても一部掘り窪めたか所がある。周溝掘削の際の排土は，墳丘盛土に供給されたものと考えられるが，この盛土部分は，削平のため残存しない。周溝内，とりわけ西溝から埴輪類がまとまって出土した。それらは，いずれも溝底より若干高い埋土中にみられることから周溝の埋没とともに混入したもので，その多くは，元来墳丘上に樹立されていた埴輪が削平とともに溝内に崩落したものと考えられる。西溝からは土師器甕，碧玉製管玉1点が伴出している。墓坑は，台状部中央やや西寄りに位置し，主軸を周溝の方位の東西に揃える。平面形は隅丸長方形(長辺3.5m・短辺1.0m)を呈す。現状では，V層から掘り込まれる1段墓坑(検出面からの深さ0.2m)である。坑底は，地山面に達せず，広い平坦面をもち排水施設等はない。側面は，北長側面を除き垂直に近く立ち上がる。坑底の西寄りに組合式木棺(内法長1.9m・同幅0.8m・主軸の示す方位E2°30′S)の痕跡が残る。副葬品は，棺内・墓坑内ともに出土をみ



第34図　SX2002 実 測 図

なかった。

SX2002　調査区のほぼ中央北端部で検出した単棺式の埴輪棺である。近世の耕地整備にともなう崖状畔(比高差約0.5m)に近接したその下段地区に位置する。この地形改変によって棺体の上半部及び墓坑の北界を欠失するが，残存状況は相対的に良好であった。遺構の北西方約1.0mの範囲に破砕された埴輪片が密集して拡がっており，このことから削平の方向が看取されるとともに，削平される以前は，棺体がほぼ完存していたことが窺われる。墓坑は，隅丸長方形プラン(残存長0.8m・最大幅0.7m・検出面からの深さは0.2m)の一段墓坑で，坑底は，北半がやや深く掘り込まれるが，これが排水施設とは考え難い。坑底に厚さ10cmにわたって土を敷いて棺床とし，この上に棺体を埋置する。棺本体は一個体の普通円筒埴輪を転用したもので北側に位置する埴輪の基底部一段を打ち欠いて棺長を調整している。さらに，本体と同一個体の破片を閉塞埴輪と棺本体の間にできる半円形の隙間に補充することで，棺床を確保している(棺内法長70cm，棺主軸の示す方位N24°30′E)。両小口の閉塞は，南側と北側で様相が異なる。北小口は，普通円筒埴輪の口縁部を含む破片をさらに約三分の一截断したものを正立させることでこれを塞ぐ。一方，南側小口は，円筒埴輪片数個を横位あるいは縦位にあてがって閉塞している。南小口の閉塞は，それだけでは不安定なものであり，墓坑の埋め戻し作業と併行して行われたものと考えられる(閉塞埴輪を含めた棺全長81cm)。



第35図　SX2004 実 測 図

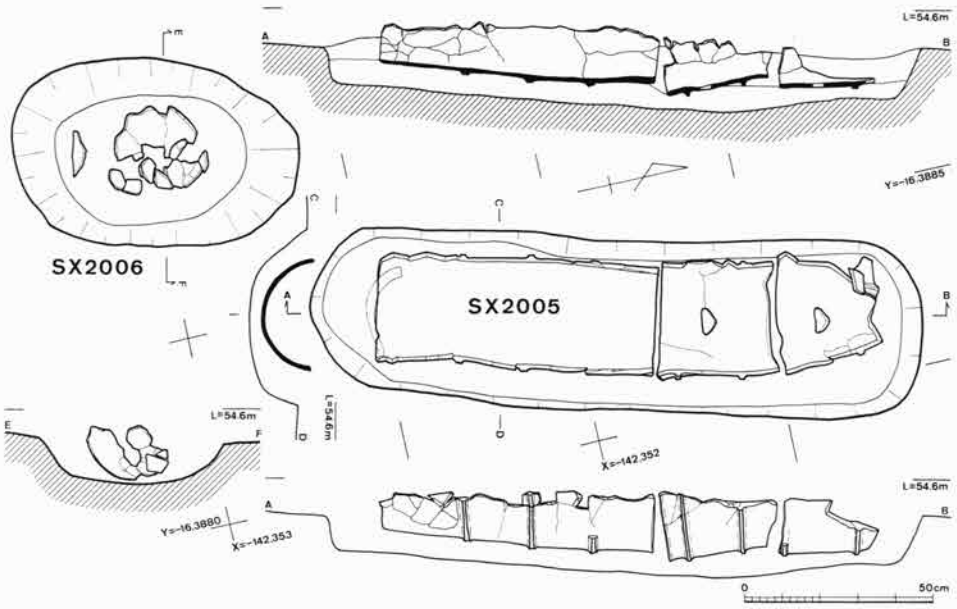
遺骸は，他の埴輪棺同様，棺内に土砂が充塡していたこともあって全く遺存しないが，棺の規模から小児埋葬が想定される。埋葬頭位に関しては，最大径の大きい口縁部を南に位置させることに加え，棺内底が墓坑底に規制されて南側ほど高く(比高差約8cm)，その南端付近に内面を上に向けた一辺 10cm 前後の埴輪片が枕状施設のように設置されていたことから，南枕であったと考えられる。棺内副葬品は皆無であり，墓坑内から碧玉製管玉1点が出土した。管玉は検出面付近の墓坑内埋土中から出土したため，この埋葬遺構の副

葬に供せられたものかどうか疑問が残る。

SX2003　調査区西端で検出した主軸を南北(N25°30′E)にもつ素掘り溝である。残存状態は悪く，耕作に伴う削平で南半部は，地山面に直接掘り込まれ元来の成立面が失われている。北側の斜面が立ち上がって途切れ，南はSX2008の一部と重複しながら調査区外にのびる平面形を示す(検出長15m)。断面は，幅の広い底部から斜面が緩やかに立ち上がる形態を基本とする(幅約3m・深さ約20m)。溝中埋土は，SX2001のそれと類似するが該当遺物がなく，土馬をはじめとする奈良期の遺物が若干出土している。

SX2004　SX2002の主軸に沿って南方2mに位置する埴輪棺で，SX2001西溝にも2m間隔で近接する。SX2002より一段高い面で検出されたがそれでも棺南半の遺存状態は悪く，南棺天井部および南閉塞埴輪を欠失する。墓坑は，平面隅丸長方形(長辺2.2m・短辺1.0m)で，現状ではV層から掘り込まれ，底部に平坦面を残す形状の一段墓坑である(検出面からの深さ0.2m)。坑底に厚さ10cmにわたって礫を含まない良質の土を敷いて棺床とし，この上に棺体を埋置する。棺本体の形式は，互いに基底部を打ち欠いた普通円筒埴輪1個体を連繋(北棺口縁と南棺打ち欠き部を合せ口にする)した複棺式である(内法長125cm・同最大幅49cm・主軸N21°00′E)。南棺使用埴輪は，通常の円筒形を呈するのに対して，北棺のそれは，透孔をもたない楕円埴輪を用いており，南棺天井部の欠失要因は，この点に起因する。また，両者が同一レベルに据え置かれた時に生ずる隙間を被覆するために設置されたと推定される口径の比較的小さな円筒埴輪片が現状では連繋部上面に倒れた状態で遺存している。北小口は，1個の鰭付円筒埴輪片を横位に当てがってこれを塞ぐ。遺骸は，天井部が残る北棺部分においても土砂が充塡しており全く遺存しない。棺底のレベル差はほとんどないが，使用埴輪の口径から判断して南枕が想定される。埴輪以外の伴出遺物はなく，副葬品，供献品は，当初からなかったものと考えられる。

SX2005　SX2004南方約3.0mで検出した埴輪棺である。近世に造成された耕地の山側に位置するため，斜面の水平化作業の一貫としての地形削平が及んだ領域に含まれる。したがってSX2002同様，この造作が遺構を削平し，現状では棺体下半部が遺存するのみである。墓坑の平面形は，隅丸長方形(全長160cm・最大幅45cm・検出面からの深さは13cm)で，現状では地山面に掘り込まれた一段墓坑である。坑底は，緩い舟底形を呈し棺体を埋置しやすく配慮している。棺の構造は，2個体の普通円筒埴輪を繋ぎ合わせて本体とする複棺式である。ほぼ完形の南棺使用埴輪の底部に，基底段を打ち欠いた上，更に体部中位を欠き取って長さを短縮させた北棺使用埴輪の口縁部を合わせ口にして連繋している(棺本体全長135cm・内法幅約25cm，棺の主軸N13°00′E)。小口の閉塞は，それに供された埴輪が残存せず，その方式，構造は詳かでない。この内，北小口の場合，棺北端の遺存状態

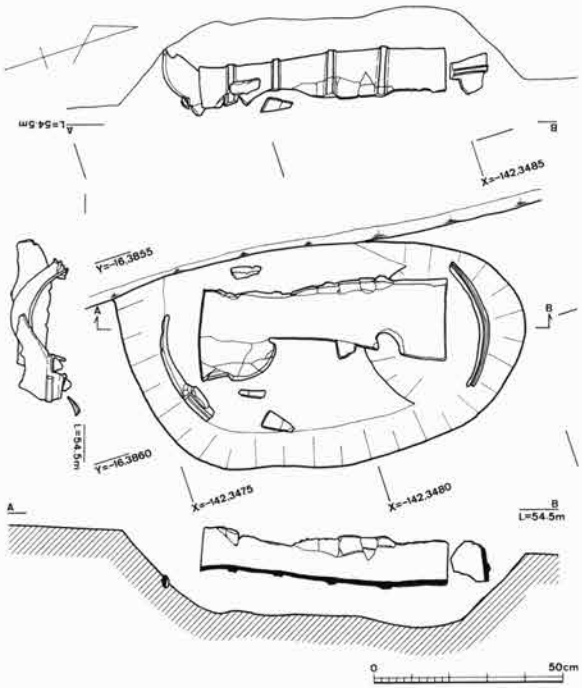


第36図　SX2005・2006 実 測 図

が悪く，削平の時点で欠失した可能性が指摘できる。一方，南小口では，幅2～3cmの帯状に土質の異なる領域が緩く円弧を描くように確認されたことから，樹皮等の有機物質による閉塞も考えられる。遺骸は，遺存しないが，棺底の比高(南端が北端よりも4cm高い)から判断して，南枕の埋葬頭位が推定される。副葬遺物は，棺内外ともに検出されなかった。

SX2006　SX2005の南西に接するように位置する土器埋納遺構である。削平が著しくその下部を留めるにすぎない。やや長円径の掘形(長径75cm・短径50cm・検出面からの深さ15cm)のほぼ中央部に丸底の土師器を埋納している。土器は，遺存状態が悪く，かつ体部上半を欠失するので器種を明確にし難いが，布留期の壺か甕であろう。底部に焼成後の穿孔がみられる。土器内，掘形内ともに伴出遺物等はない。周辺遺構のあり方から判断して，土器棺の可能性がある。

SX2007　SX2004の南東方1mに位置し，これに付随するような様相を呈する小規模な埴輪棺である。棺体上半部が削平を受けている。墓坑は，一部が畔際の排水溝に切られているが，平面長円形(長軸105cm・短軸約60cm・主軸N18°30′E)を呈し，現状ではV層を舟底形に掘り込んだ一段墓坑(検出面からの深さ18cm)である。この墓坑底に茶灰色土を敷いて棺床とし(厚さ約10cm)，その上面に棺本体を埋置するが，閉塞埴輪は，坑底から立ち上がってきた墓坑斜面に直接据え付ける。この場合，閉塞埴輪の方が本体よりも深く据え付けられていることから，本体の埋置に先行して閉塞埴輪を設置し，その後棺床上を敷いて閉塞埴輪を固定すると同時に，棺床を造作した可能性がある。棺本体の形式は，普通円筒



第37図　SX2007 実 測 図

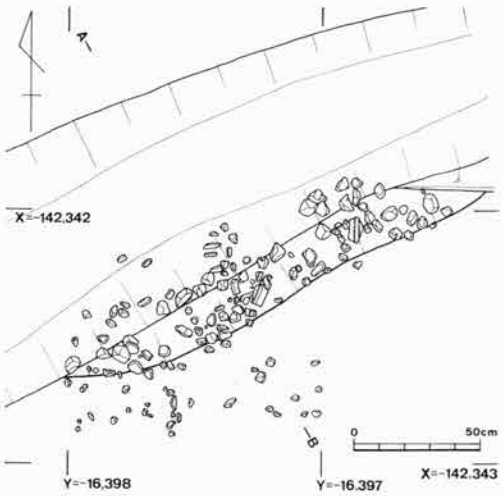
埴輪1個体（全長65cm）を口縁を北にしてそのまま転用した単棺式である。閉塞方法は，口径の大きな円筒埴輪，あるいは楕円埴輪の破片を正立させることで両小口を塞いでいる(閉塞埴輪によって画された内法長82cm)。棺底の比高差（南端が北端よりも5cm高い）から見て南枕であろう。遺骸，副葬遺物ともに検出されなかった。

SX2008　調査区南西隅で検出した溝状遺構である。東西に5mのびた溝（台状部の一辺に相当）の両端が南側に直角に曲折する平面形を呈し，さらに調査区外にのびる部分を残すが，全体としては，SX2001のような溝が方形に巡るような構造をとるものと推察される（溝幅は，北辺で約2m，検出面からの深さ約10cm）。現状では，近年の耕作が直接の原因とみられる削平が東側ほど著しく，台状部においても地山面が直接露呈している。東溝が幅を狭め，ほどなく途切れる傾向を示すのはこの削平に起因するからである。台状部上面には耕作に関連する凹凸があるのみで，主体部らしき痕跡は残らない。周溝中からの遺物も皆無である。以上のごとく，小規模な方形墳とする根拠は少ないが，可能性を指摘しておく。

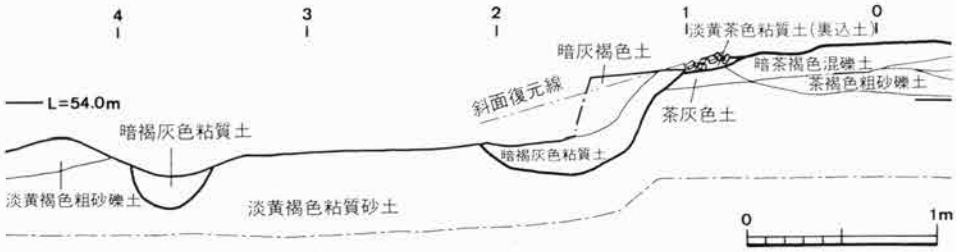
SX2009　調査区北西部で検出した集石遺構である。近年の畔とその両側の水田造成に伴う大規模な地形改変によって，集石の範囲は，わずかにその一部を留めるにすぎないが，元来はより広範に拡がっていたものと推定される。そのわずかな残存部分から判断するに，集石は基本的には重層することなく，かつその上面が幾分北側に向かって緩やかに傾斜（傾斜角約16°）していることなどから古墳の周濠の葺石と解すべきであって，この場合，調査区の北西に立地する瓦谷古墳の周濠内傾斜面の葺石の残骸とみるのが妥当であろう。構築は地山を掘り込むことによって周濠を掘開し（調査区内ではその大部分が破壊されて残らない），淡黄茶色粘質土の裏込土を介在させて拳大の自然石（濠掘開時に産出した石材を選定したものか）を一重に設けている。下位の石との重なりが浅く，個々の石材が独立している

点など，古墳の葺石としては，簡易な構造である。

この他，埴輪棺群とSD2003に挟まれた地区において建物としてまとめ難い小規模なピットが多数検出された。一辺 15～45cm 前後の隅丸方形または同規模の不整円形の掘形をもち，中に径10cm前後の柱痕跡を残すものもある。Ⅴ層ないしはⅥ層の地山面に掘り込まれるが，削平によって残存状態は悪い。上面に古墳時代の遺物を若干含むⅣ層が覆っており，掘形内の出土遺物こそないが，古墳時代の小規模な建物群の可能性が指摘できる。



第38図　SX2009 実 測 図

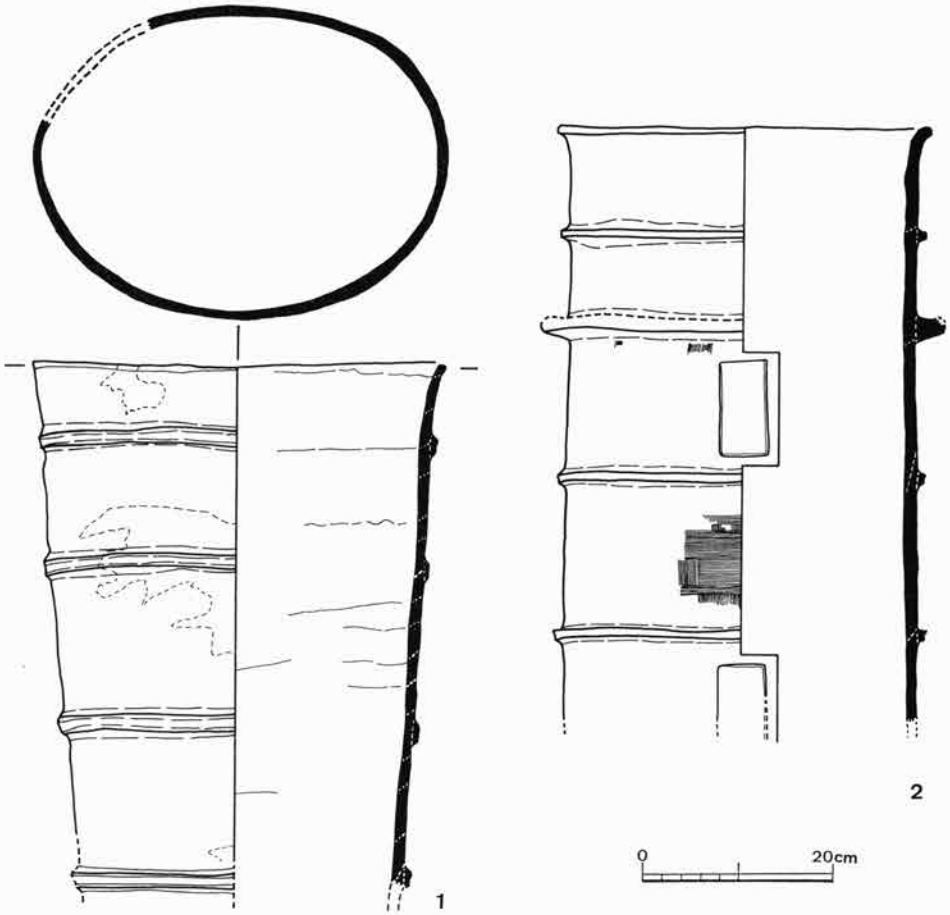


第39図　SX2009 断 面 実 測 図

3. 出 土 遺 物(第40～42図，図版第29)

瓦谷20番地内で出土した遺物は，ほとんどが古墳時代に属し，中でも埴輪類が大部分を占める。これらは，出土状態から三者に大別される。これを量の多いものから順に記すと，埴輪棺として利用されたもの，SX2001周溝内から出土したもの，そして，遺構に直接伴わず耕地化の造成土に混入したもの，となる。この内，後二者はその性格から細片化しているのに対し，前者は，横位に設けられたという遺構形態が幸いして完形近く復元図化することが可能である。そこで，ここでは埴輪棺本体に使用されていた埴輪を主にとりあげ，これに若干の形象および線刻埴輪を加えてその概略を記すこととする。

1は，SX2004北棺使用埴輪である。基部を焼成後に打ち欠いているため器高を明らかにし得ない(残存高55cm)。基部から口縁にかけて同曲率の楕円断面(口縁部で長径44cm，短径33cm)を呈する。口縁段が下段(約14cm)に比べて狭い(幅6cm)。輪積み粘土幅は，3cm前後でほぼ一定している。縦方向の丁寧な指ナデによって内外面を平滑に成形する。調整



第40図　　瓦谷遺跡20bt出土遺物実測図 (1)

技法に関しては,外面では縦ハケ(1次)→縦ハケ(2次)→部分的に断続的な横スリナデ(板ナデ),内面は，口縁に近づくほど傾度を強める左上がり縦ハケ(1次)→口縁部を除いて断続的な左上がり縦ハケ(2次)を用いる。原体の条線密度は，6本と11本(板ナデ)である。タガの形態は，側面が指腹による押圧で窪むM形で，幅が広い分突出度は大きくない。透孔は存在しない。焼成は土師質で，黒斑が外面の対向する位置に縦長に拡がる。赤色顔料が外面の広い範囲に塗付された痕跡が認められる。

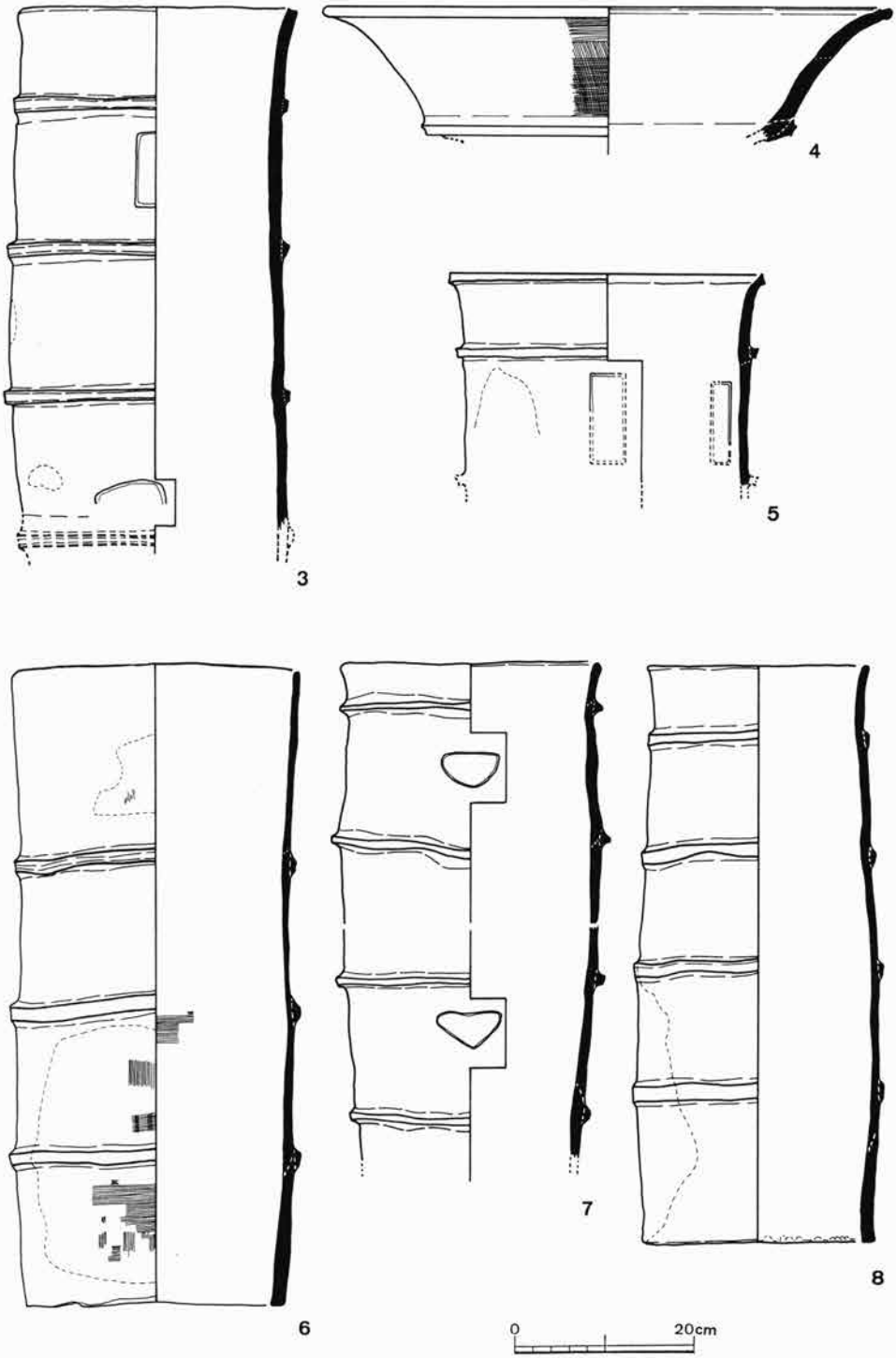
2は，SX2004南棺使用埴輪である。前者同様,棺長調節を目的とした基部打ち欠きがなされ，器高は不明(残存高62cm)である。残存個体中タガは4条巡るが，口縁から2段目のタガは，大きく外方に突出(残存高3cm)する鍔状の特異な形態を示す。透孔は，縦長の長方形(10cm×5cm)で，タガ間の対向する位置に2孔，1段おき，同方位に穿孔する。成形・調整技法は，器表の磨耗が激しく判然としないが，外面に縦ハケを施した後に断続的

な横ハケを施した痕跡が認められる。焼成は土師質で，黒斑が広い範囲にみられる。

3は，SX2002本体に転用された普通円筒埴輪である。基底段を打ち欠いており，タガが4条(5段相当)残存する(残存高78cm)。口縁段が他(約17cm幅)に比べやや狭い(12cm)。成形技法は，内面下半に下から上への丁寧な縦ナデが確認されるにすぎないが，これによって粘土帯の接合痕をほとんど消している。外面調整は，全体に器表が磨耗しており明確ではないが，口縁に近づくほど傾く左上がり縦ハケ(1次)→タガの間の一部に数条施す横スリナデ(板ナデ，2次)を基本とする。また，口縁段は，全面に断続的な横スリナデ(2次)を施した後，その上半から内面にかけて丁寧な横ナデを用いて口縁を成形している。内面調整は，下半部に断続的な縦スリナデを行った後，全面にやや左上がりの丁寧な横スリナデ(2次)を施す。また，口縁段では，下半に横スリナデ後に顕著な横方向のヘラ削りが重層するようにみられる。タガは，各面が幾分内湾する台形を呈し，側面が下方に傾く。透孔は，口縁から2段目に縦長の長方形(10cm×5cm)，4段目に下方に円弧がくる半円形が各1孔，同方位に穿孔される。焼成は，土師質で，やや軟質である。黒斑が外面の対向する位置に縦長にみられる。外面の一部に顔料が残る。

8は，SX2007本体に使用されていた埴輪である。最大径が体部下半にくる胴膨らみの形態を示す(口径25.2cm・器高65.4cm)。タガは4条巡り，口縁段は，他段(約13cm幅)に比べ狭い(幅9cm)。成形技法は残らない。内底部の肥厚部分を，器体を倒立させることなく指オサエで平滑にする。外面調整は，断続的縦ハケ(1次)→縦ハケ(2次)→断続的横スリナデ(2次)を基本とする。1次調整の縦ハケは，重層するように丁寧に行われ，底端部より右上がりに始まった後，ほどなく垂直に移行し口縁に至って左傾する。横スリナデは，タガ間に数条部分的に施すにすぎない。中には明らかに断続的な横ハケと認識できるか所もある。内面調整は，口縁に近づくほど傾度を強める左上がり縦ハケが全面に用いられ(2次)，部分的に静止痕をとどめる断続的ハケ技法がみられる。タガは，幅が広く，各面がやや内湾する突出度の低いものである。透孔は，残存部分(約40%残)には存在しないが，あっても交互配列は考えられない。焼成は，土師質で，黒斑が下半の広い範囲に楕円状にみられる。

6は，SX2005南棺使用埴輪である。全体に遺存状態が悪い。底部を除いて非常に薄手で厚さ0.7cmを測るにすぎない(口径32.2cm・器高73.0cm)。タガは，3条存するが，最上段の幅を考慮すると，器表磨耗で剥離痕が直接確認できないものの，更に上位にもう1条存在したことが推察され，他の埴輪同様，幅の狭い口縁段を形成していたものと考えられる。調整技法は，器表磨耗が激しく明確ではないが，外面に縦ハケ→部分的横スリナデ，あるいは縦ハケ→幅の広い横ハケ(A種)がみられる。また，内面には丁寧な横ハケが断片



第41図　瓦谷遺跡20bt出土遺物実測図 (2)

的に残る。タガは断面M形で，あまり突出しない。透孔は，残存部に残らない。土師質焼成で，黒斑が底部から口縁にかけて縦長にみられる。

7は，SX2005北側使用埴輪である。上下に破砕されているが直接は接合しない(図上復元)。口縁段が異常に狭く，口縁部はわずかに外反している。器表が激しく磨耗して成形・調整各手法を窺うことができない。タガは，残存個体中4条存在する。タガの断面は，側面が下向する台形を呈するが，磨耗によりシャープさを失う。隅丸逆三角形の透孔が1段おきに同方位に穿孔されている。土師質で，口縁寄りに黒斑がみられる。

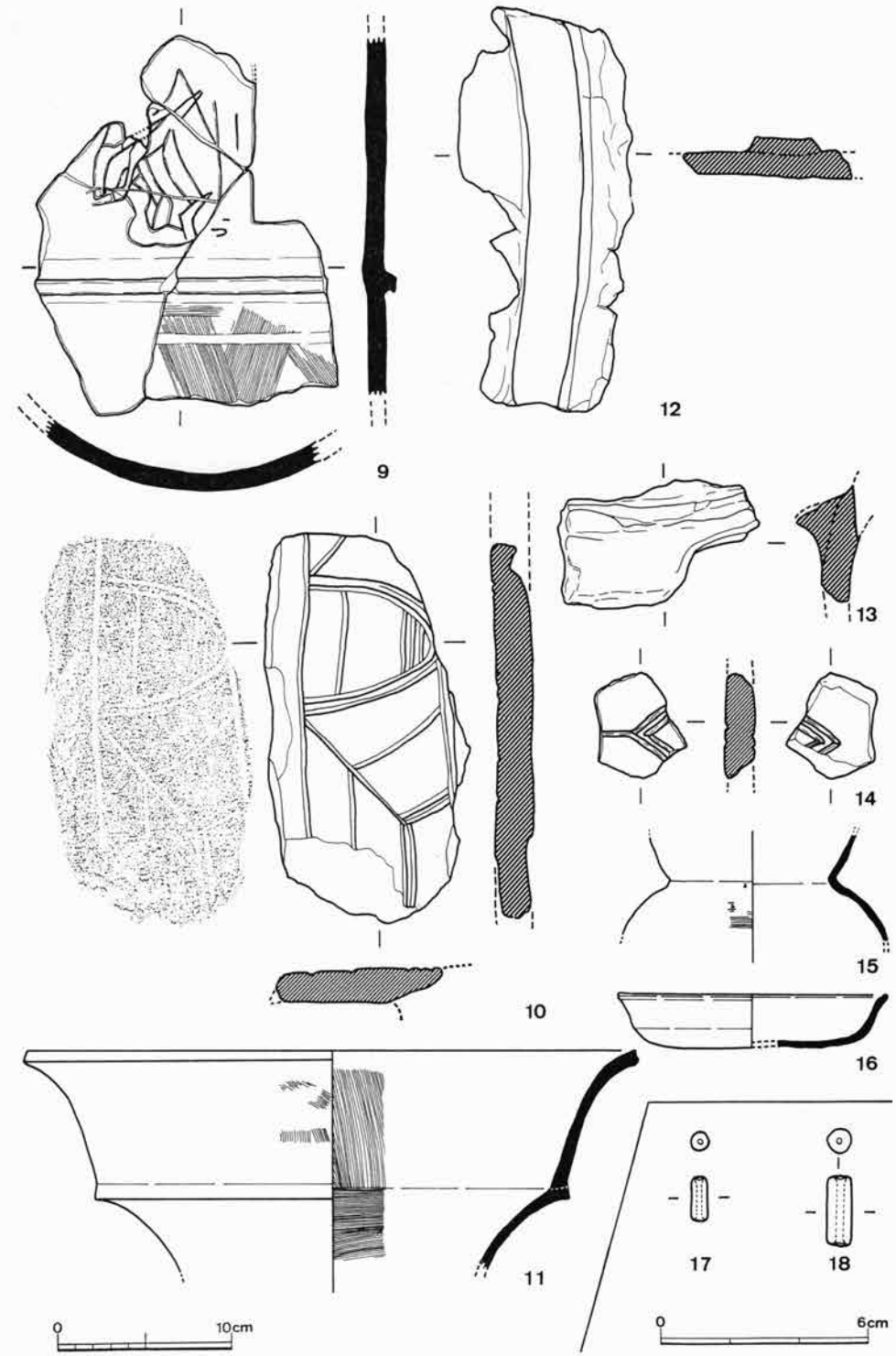
5は，SX2002北小口閉塞埴輪で口縁付近を残すのみ(口径44.0cm)である。口縁段が下段(幅16cm)に比べ狭い(幅8cm)。口唇部は，横ナデによって外方にひねりだされてタガ状を呈する。外面調整は，口縁に近づくにつれナナメハケに移行する左上がり縦ハケ(1次)→静止痕をとどめない継続的横ハケ(2次)で，口縁段は横ハケが全面に及ばずスリナデ状を呈す。内面は，全面に左傾するB種横ハケ(1次)が施された後，口縁段に限り丁寧な横スリナデ(2次)を加える。タガは側面が下向する断面M形である。縦長長方形の透孔の痕跡が残る。土師質で，外面に広く黒斑がみられる。

朝顔形埴輪4・11は，いずれも口縁部の破片でSX2001下層から出土した。4は，頸部と口縁部の境が「く」字形に屈曲し，その外面に断面がM形を呈するタガ状凸帯を巡らせる。口縁部は大きく外反し，端部は丸く終わる。口縁部外面に縦ハケ→横ハケ調整が残る。11は，頸部が外反し，さらに口縁へと「く」字状に屈曲外反するもので，口頸部の境目(二重口縁の接合部)外面に断面三角形の擬口縁状凸帯が巡る。薄手の造りで，口縁端部は外傾する面をもつ。内面調整は，頸部横ハケ，口縁部縦ハケと手法を使い分ける。外面は，磨耗が激しく縦ハケ痕をわずかにとどめるにすぎない。

10は，盾形埴輪の側辺部破片で，調査区西端の耕地造成土中から出土した。扁平な板状を呈する外縁部(厚さ2cm・幅12cm)の前面にはヘラ状工具を用いた直弧文の線刻がみられ，縁枠を表現している。一側面に残る剝離痕から軸部円筒の前面付近に貼り付けて盾面を形成していたことが窺える。直弧文は，いわゆる「忍岡系」に属し，古い様相を呈する。全体としては側辺が緩く弧状に突出し，その形態・模様構成は，奈良市佐紀陵山古墳出土の盾形埴輪に近似するものと考えられる。

管玉17・18は，いずれも軟質の緑色凝灰岩を石材とし，全体に丸みをもち淡緑色を呈する。ともに両面穿孔である。17(長さ12mm・直径1.2mm)は，SX2002墓坑内より出土，18(長さ20mm・直径7mm)は，SX2001西溝上層埋土中より出土した。

9は，通常の普通円筒埴輪の外面にヘラによる線刻が施されたもの。線刻された文様は直弧文を意識したものであり，幾分形骸化しているが比較的その原形をとどめている。



第42図　　瓦谷遺跡20bt他出土遺物実測図 (3)
(9～11・15・17・18：瓦谷遺跡20bt，12・13：瓦谷遺跡10bt，16：瓦谷遺跡・鰯谷22bt)

4. ま　と　め

今回の調査は，これまで実態が明確でなかった瓦谷遺跡に対する最初の発掘調査であり，遺跡の範囲確認とあわせてその性格の一端を知ることができた。瓦谷20bt地区においては，主に埋葬に関わる遺構が複数検出され，この地区が古墳時代の墓域として利用されていたことが判明した。以下，遺構の意義，問題点を列記してまとめとする。

(1)SX2001は，弥生時代の「方形周溝墓」の形態を伝統的に残した埋葬遺構(段築，葺石，埴輪列を備えたいわゆる「典型的な古墳」と区別する意味で仮に「小型方墳」の呼称を用いる)である。築造時期は，周溝内から出土した埴輪類の多くが元来墳丘上に樹立されていたものであると理解すれば，概ね4世紀末～5世紀前半に比定することができる。一般に，この種の小型方墳の埴輪の樹立形態は，墳丘の段築確認が困難なことも加え，不明な点が多く，埴輪片の出土をみない等，その樹立が想定できないものも少なくない。この周溝内で出土した埴輪片をみると，口縁部を含む器体上半の破片の占める割合が高く，これらが周溝内に落ち込んだ時点では依然としてその基底部の多くが墳丘(台状部)上に残存していたことが窺える。そして台状部がさらに削平を受け埴輪の基底をも失った段階では，周溝はほぼ埋没していて底部破片の混入の余地を残さなかったと解釈できる。いずれにせよ埴輪の樹立が想定できる希有な例として重視すべき小型方墳といえる。一方，SX2008は，主体部，伴出遺物こそ検出されなかったが，この種の遺構の群在性および形態の類似から同種の小型方墳とみなすのが妥当であると考える。ところで，この種の小型方墳は，検出例が近年増加の一途を辿り，乙訓地域を除いた南山城圏内においても城陽市14例[注4]，宇治市2例[注5]等が確認されている。木津町地内に限っても，内田山古墳群[注6]の2例が知られており，今回のものを加え4例目になる。これら小型方墳の一般的存在形態を概観すると，ほとんどが単独で存在することはなく，複数群在するのを通例とする。さらにこれらは，前方後円墳を頂点とする典型的な古墳に付随するタイプと付近に典型的な古墳が見い出せない(あるいは存在しない)タイプに大別される。前者は，主墳に対する従属的性格をもつもので，主墳の被葬者につらなる一族の成員墓として主墳築造後に相次いでその周囲に築造されたと考えられる。瓦谷遺跡の場合，調査区に近接して典型的な高塚古墳たる瓦谷古墳が存在することから前者の類型に入る。同類型を南山城圏内に求めると，例えば城陽市の芝ケ原10・11号墳とその南に並列する6基の小型方墳，同宮ノ平遺跡に所在する宮ノ平1～3号墳と4・5号墳(小型方墳)等が挙げられ，今回の成果は，この地域においてはむしろこうしたあり方が一般的であることをより強調する一資料となった。

(2)検出した4基の埴輪棺は，SX2007がSX2004に並列するのを除けば，南北に縦列する配置をとり，それぞれを繋ぐ線が中心を西方に置く緩い円弧を描いている。これらの棺体に

使用された埴輪は，本来樹立されるべく製作された円筒埴輪の転用と考えられ，中に楕円断面や[注7]無透孔等の特異な形態を示すものが存在することについては，これを棺を意図して製作した特製棺とみなすよりはむしろ，この時期の円筒埴輪の一形態としてとらえるべきと考える。築造(埋納)時期に関しては，使用埴輪の時期が必ずしも棺として埋葬された時期と一致するとは限らないが，少なくともその上限を埴輪の特徴から概ね4世紀末～5世紀前半に求めることができる。そして，先の配置形態に加え，個々の埴輪棺に時期差がほとんどないことから，これらが計画的に且つ比較的短期間のうちに形成されたことが看取される。副葬品は，SX2002墓坑内の管玉1点のみで皆無に等しい。多くが成人を埋葬するだけの規模を有せず，単棺式のものは，明らかに小児埋葬に供せられたものである。埋葬頭位がすべて南枕であることは，南上がりの自然地形に規制されたものと解される。このような明確な埴輪棺の検出は，木津町地内では初見であり，南山城圏内においても城陽市11例，[注8]宇治市4例[注9]を数えるにすぎない。特に今回の埴輪棺は，4世紀代に遡上する可能性が指摘できることから，これらの中では最古の部類に属する。すでに指摘されているように，埴輪棺は，その埋葬される地点が古墳の墳丘内と古墳の周辺に大別できるが，いずれの場合も古墳に付随するのを原則とする。また，単独で存在するよりは，同一古墳の内外に複数検出される場合が多い。いうまでもなく瓦谷遺跡の場合，後者の古墳の周囲に群在する類型に入る。ただ，帰属する古墳に関しては，瓦谷古墳とSX2001の二通りが考慮の対象になる。前者をとった場合，埴輪の配置形態がSX2001を無視するようにみえることが重要な要因になり得る。また，後者の場合，出土埴輪の時期幅がほとんどない点が指摘できる。ただ，出土埴輪で論ずる場合，瓦谷古墳の調査が十分行われていない現状では単純な比較はできない。したがって，この点に関しては，将来の瓦谷古墳の埴輪の精緻な調査を待って再度検討したい。

(3)今回の調査は，瓦谷古墳の墳丘部を直接対象にしなかったが，調査区北西端でその外郭施設の存在を示唆する遺構(SX2009)を確認した。検出したのは，後世の著しい地形改変によってその一部を残すにすぎないが，その形状から周濠の可能性が高い。これによって，この古墳の少なくとも南側に濠が存在していたことが窺える。ちなみに，周濠外縁からマウンド中心までの距離は約25mで，これを折り返して求めた直径は約50mを測る。また，今回検出された小型方墳や埴輪棺は，先の論理から瓦谷古墳に先行しないであろう。

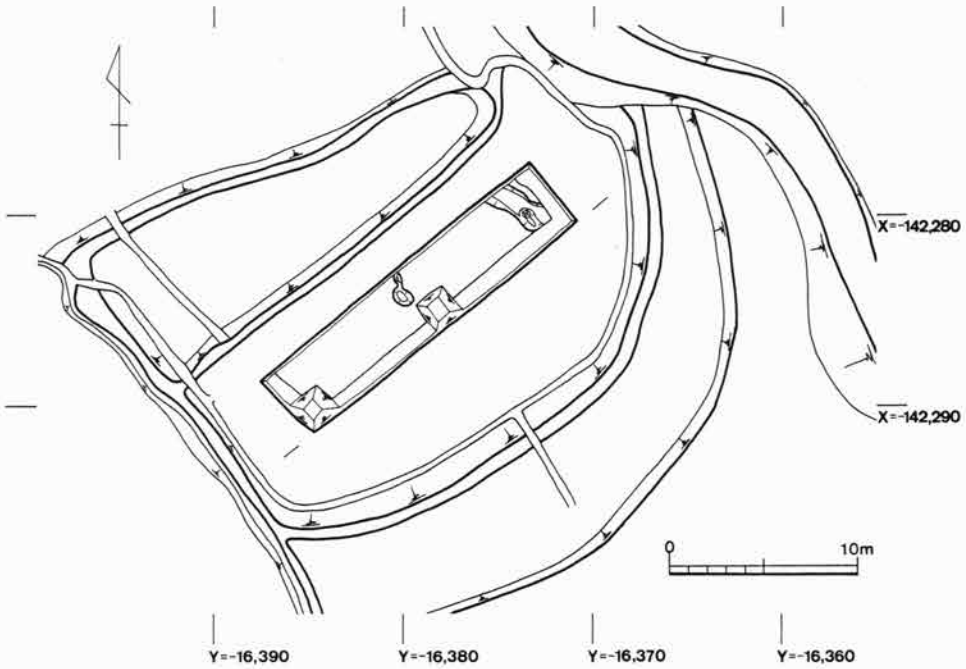
(4)出土遺物の大半を占める埴輪類は，南山城地域においてこれまで調査されている埴輪の中では比較的古い様相を呈する。その主だった要素を示すと，①出土個体の約半数が外面2次調整に縦ハケを用いる。②野焼きの徴証たる黒斑がすべての個体の表面に広範にみられる。③透孔に円形はみられず，長方形・半円形・三角形とバラエティに富む。④楕円

断面，胴膨らみ，鍔状凸帯等未だ定形化していない形状のものが存在する。以上が列挙し得る。また，これ以外に，⑤内外面の調整に条痕をとどめないスリナデやケズリが多用される。⑥口縁段が他の段に比べ狭い等の特徴が見い出せる。なお，埴輪棺に使用されている埴輪とSX2001溝内出土のそれとは，後者の細片・磨耗化が進んでいるものの，両者に際立った相違はなく，同期とみて大過ない。

B　10bt（第43・45図，図版第25-1）

1.　調 査 の 概 要

当該地は，瓦谷古墳の立地する丘陵尾根の北側に隣接する小規模な谷状地形に位置し，中でも瓦谷古墳に最も近接する地点にあたる。現況は，棚田状に造成された水田で，標高45.6mを測る。調査は，水田の畦畔に沿って幅4m・長さ18mのトレンチを設定し，一部深掘りして層位の確認を行った。基本層序は，上位よりⅠ.現耕土(GL-20～25cm，以下同)，Ⅱ.床土及び水田造成土(－30～45cm)，Ⅲ.暗灰色系土(－50～85cm)，Ⅳ.灰色粘質砂(－55～90cm)，Ⅴ.青灰色系の粘質砂と同系の砂礫の互層(－60～16cm)，Ⅵ.腐植土混じりの粘土層(それ以下)である。この内，Ⅲ層は，色調から更に3層に分層可能であり，中世までの遺物細片が出土しており，下層の布目瓦片を上限とする包含層と認識できる。Ⅳ層は，比



第43図　瓦谷遺跡10bt平面図

較的硬く締まっており，奈良期の須恵器片が若干混入する。軟弱地盤を被覆するような様相を呈し，同期の整地層の可能性が残る(第45図)。図示した小規模な溝状遺構は，同層を成立面とする。また，トレンチ南寄りのⅣ層上面において蓋形埴輪片数点が出土した(第42図12・13)。

12は，笠部の縁辺部で，幅の広い粘土帯を外面に貼付する。13は，円筒部と笠部の接合部付近の破片である。これらは，比較的近接して出土したものの，より上位から崩落したものと考えられる。Ⅵ層は，全く遺物を含まない自然堆積層である。

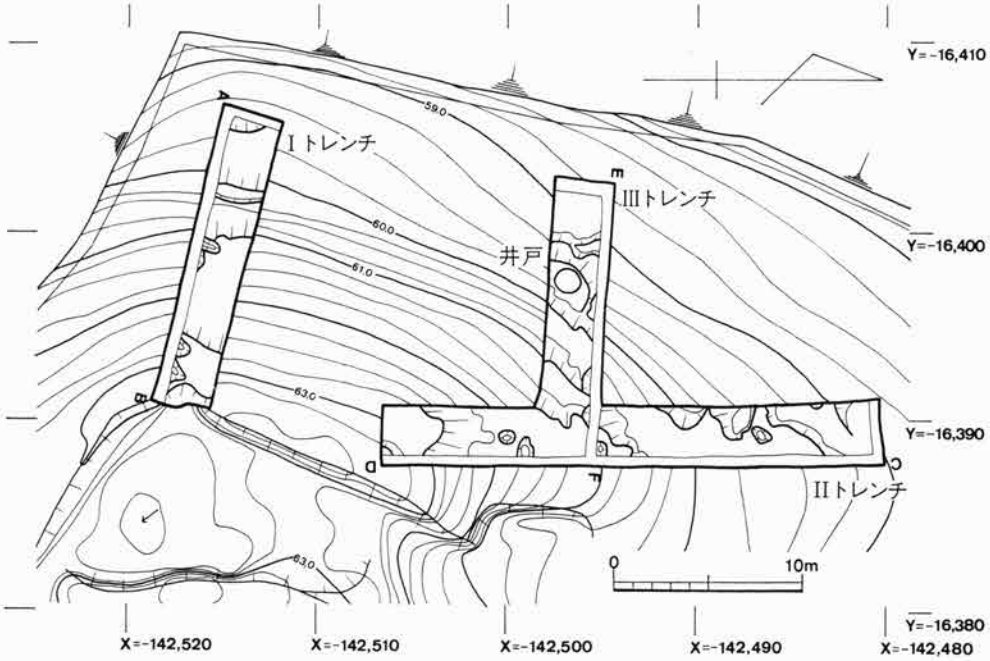
2. ま と め

調査の結果，顕著な遺構こそ検出されなかったが，古墳・奈良期から中世にかけての遺構が周辺に存在する可能性を窺わしめる状況が確認された。

C　51・52bt(第44・45図，図版第26)

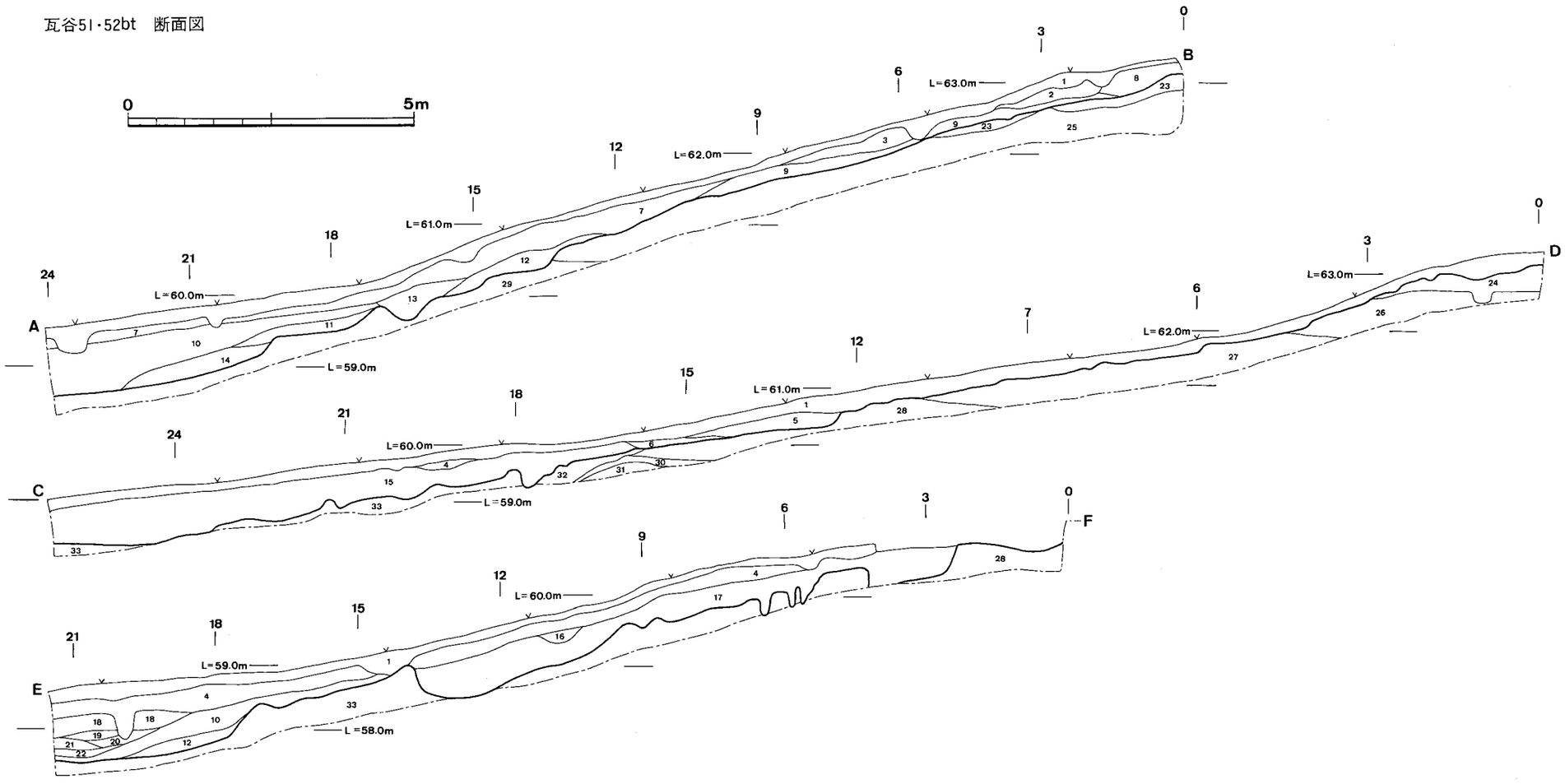
調査の概要

調査地は，20bt地区の南方に開く東西方向の谷地形を挟んで南に対峙する丘陵尾根部の先端付近に位置する。現在は，竹藪・畑地として利用されており，番地内の最高所付近(標高約63m)が土採りで削られている。調査は，斜面に沿って，直交するトレンチ(幅3m)



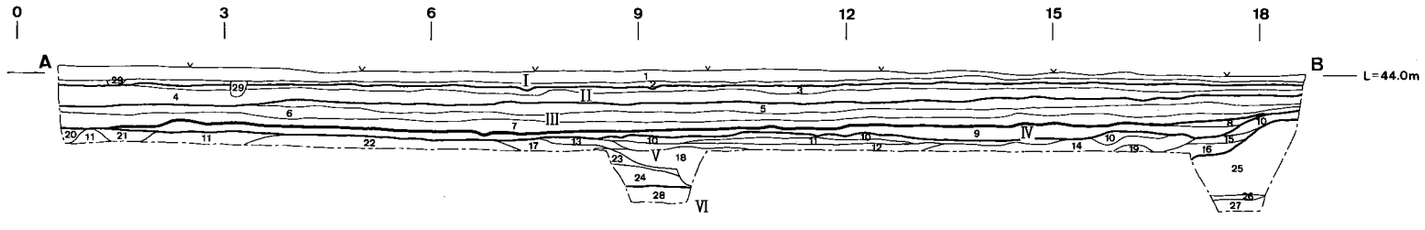
第44図　瓦谷遺跡 51・52bt 平面図

瓦谷51・52bt　断面図



1.黒灰色土(表土)
2.暗黄茶色混礫土
3.暗黄灰色砂質土
4.暗黄茶色土
5.灰褐色土
6.暗黄灰色土
7.暗灰色土(腐植土)
8.暗黄茶色土(礫少混)
9.淡黄灰色砂質土
10.茶灰色土
11.淡茶灰色土
12.茶灰色土(礫少混)
13.暗褐灰色土(地境溝)
14.淡茶灰色土(茶褐色土混)
15.暗茶褐色土
16.暗黄茶色土(黄褐色土混)
17.暗茶灰色土
18.灰褐色砂質土
19.暗黄褐色土
20.茶灰色混礫土
21.茶灰色砂質土
22.褐色土
23.淡茶褐色砂質土
24.淡黄茶色粘土
25.淡赤褐色砂質土
26.淡茶褐色砂質粘土
27.灰色粘土
28.褐灰色粘土
29.黄褐色粘質土
30.茶褐色砂礫
31.青灰色粘土
32.淡青灰色粘土
33.黄褐色粗砂礫土

瓦谷10bt　断面図(トレンチ東壁断面)



1.暗灰色粘質土
2.灰色土
3.灰褐色土
4.褐灰色土
5.暗青灰色土
6.暗灰色土
7.黒灰色土
8.淡灰色粗砂(流堆)
9.灰色粘質砂
10.灰色粗砂
11.淡青灰色粘質砂
12.暗灰色粗砂礫
13.暗灰色粗砂
14.青灰色粘質砂
15.灰色粗砂(小礫少混)
16.灰色粗砂礫
17.淡青灰色砂
18.灰色粗砂礫
19.暗灰色粗砂
20.暗灰色粗砂礫
21.灰色粗砂
22.暗灰色粗砂
23.灰色粘質粗砂
24.暗灰色砂礫
25.青灰色粘質砂土
26.淡青灰色粘土
27.青灰色砂質土(粘土混)
28.黒灰色粘土(礫混)
29.暗渠

0　5m

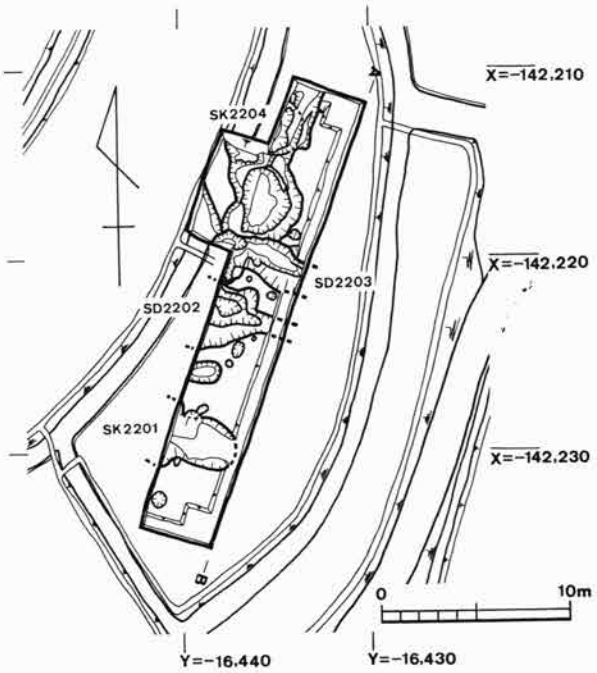
第45図　瓦谷遺跡10・51・52bt断面実測図

を3本設定して行った。層位は，斜面下半では2次的崩落土(無遺物)の堆積がみられるが，基本的には現表土直下が大阪層群に属す粘質土系地山となる。調査の結果，近年の土採りによるとみられる若干の地形の凹凸と漆喰固めの井戸1基を地山面で検出したのみで，顕著な遺構・遺物は全く確認されなかった。

D 鰯谷22bt(第46図，図版第25)

1. 調査の概要

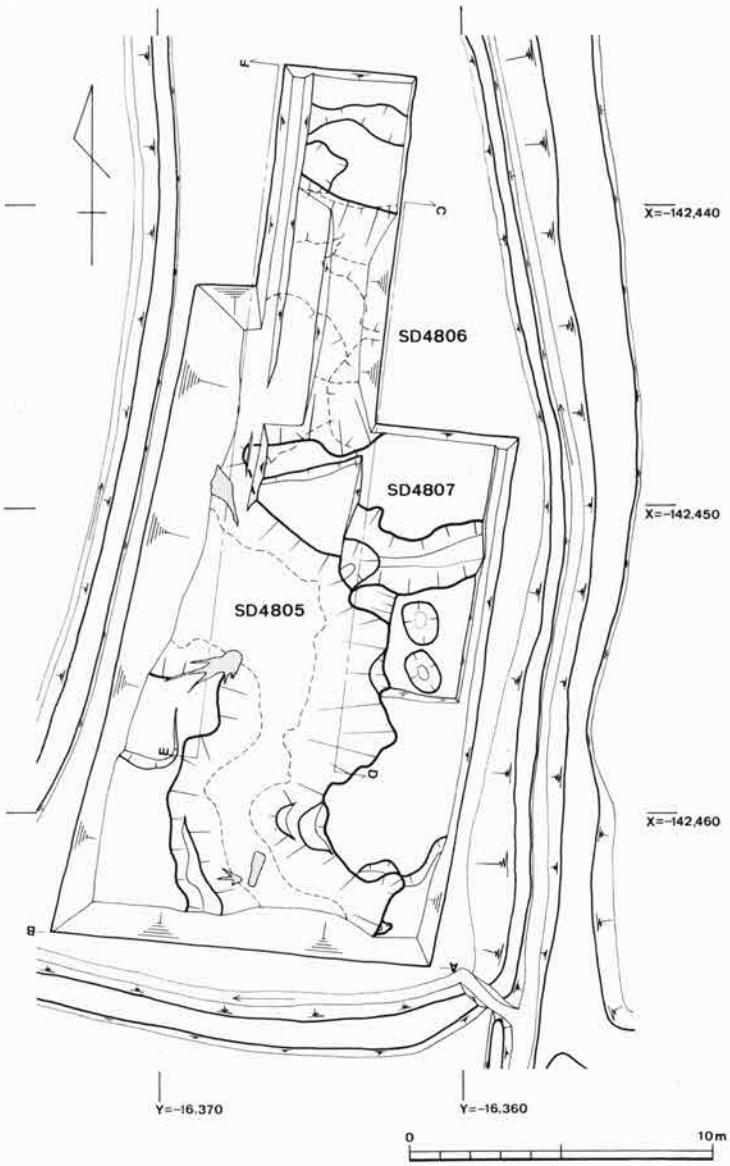
当該地は，瓦谷古墳の北方約100m，瓦谷遺跡10btの所在する谷地形が平野部に開くその谷口部に位置する。現在水田として耕地利用されており，西側の沖積平野部との比高は約3mを測る。調査は，幅4m・長さ25mの南北トレンチを設定し，一部断ち割って層位を確認し，遺構の検出に応じて一部西側に拡張して行った。その結果，溝あるいは不定形土坑状遺構が複数重複した状態で検出された。これらは，SK2201で奈良期の遺物1点(第42図16)が出土したのを除くと伴出遺物が皆無で，時期判定が困難である。形態から判断してそれほど恒常性のない小規模な自然流路の可能性が高い。当地の基本層序は，上位からⅠ.現耕土(GL−15〜20cm)，Ⅱ.床土・水田造成土(−15〜65cm)，Ⅲ.暗褐灰色粘質系土(−25〜35cm)，Ⅳ.灰褐色酸化系流れ堆積土，Ⅴ.青灰色還元系流れ堆積土(−105〜155cm)，Ⅵ.硬く締まった暗灰色系砂質土(−150〜180cm)，Ⅶ.暗灰色系流れ堆積土(それ以下)となる。平面図に図示した遺構は，4層を成立面として掘り込まれ，深いもので底が7層に達するものもある(SK2004)。各遺構内の埋土は，基本的には暗灰色系のシルトを主体に若干の砂礫が混入するもので，洪水等によって急速に埋没したものではない。



第46図　瓦谷遺跡(鰯谷22bt)実測図

2. まとめ

検出された流路状遺構は，



第47図　瓦谷遺跡48bt遺構実測図

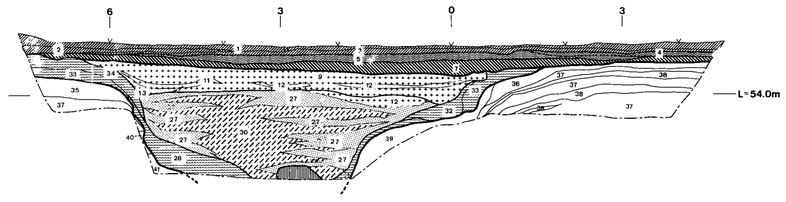
機能時期を明確にし難いものの，当地に該当遺構の存在することを証したもので，当該地が遺構の認められる遺跡の範囲内にあることを示している。

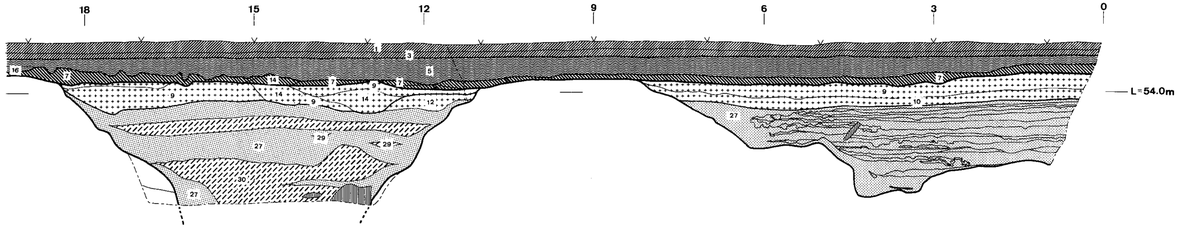
E　39・48bt（第30・47～51図，図版第27・28）

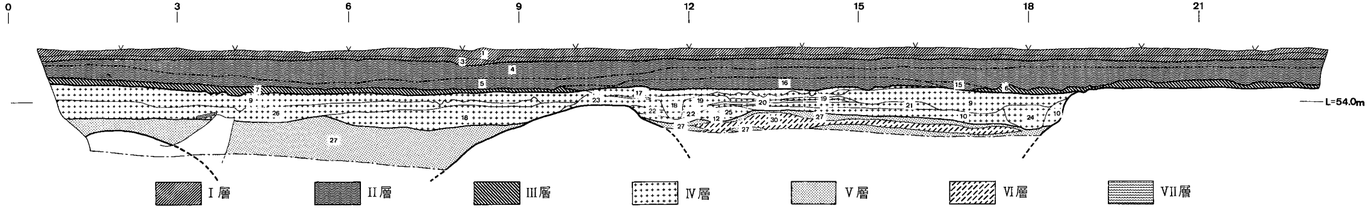
1.　調査の概要

調査地は，20bt地区の立地する丘陵の南側の谷部に位置する。この谷地形は，東西にのびる幅約50mの主谷に南から支谷がとりつく地勢を示しており，その合流部付近に48btが，それより下流（西方）へ約50m離れて39bt がそれぞれ所在する。調査前の現況は，谷の最奥部に土堤による溜池を築造し，その前面を棚田状に耕地化しており，奥から3筆目に当たる48btにおける標高は55.6m，39btとの比高は2.90mを測る。

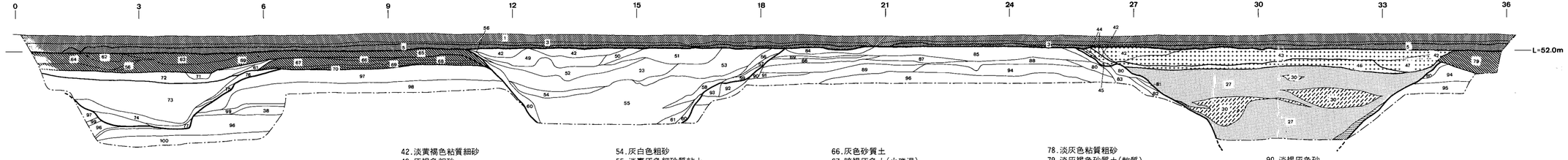
両地区とも主谷の主軸に直交するトレンチを設定し，層位確認に主体をおいて調査を進めた。結果，古墳時代前期の良好な遺物を比較的多量に包含する流路状遺構を確認した







1.暗灰色粘質土(表土)
2.黒灰色粘質土(腐植土)
3.灰褐色土(床土)
4.暗褐灰色粘質土(少し黄色味を帯びる)
5.暗褐灰色粘質土(4より暗い色調)
6.暗灰色粘質粗砂土
7.灰色砂土
8.青灰色粘質砂土
9.灰色粘土
10.淡灰色粘土
11.灰色粘質粗砂土
12.淡灰色砂
13.淡灰色砂質シルト
14.灰色砂礫
15.暗褐灰色粗砂
16.暗灰色粘質土
17.暗灰色シルト
18.淡灰褐色砂
19.淡灰色細砂(青灰色粘質細砂混)
20.灰色細砂質シルト
21.淡褐灰色砂
22.灰色粘質砂
23.淡青灰色粘質細砂
24.灰色粗砂(小礫混)
25.淡灰褐色粗砂礫
26.灰色砂(やや粘質)
27.暗茶灰色植物質腐蝕シルト
淡青灰色細砂(やや腐蝕)
灰色粗砂
の互層
28.暗灰色粗砂土(根茎類密混、炭混)
29.灰白色砂
30.灰色粗砂礫
31.暗灰色粘質粗砂土(小礫混)
32.灰色粘質砂(炭礫混)
33.灰色粘質土(上半やや酸化)
34.灰色粗砂質土
35.灰色シルト
36.淡青灰色砂質土
37.淡青灰色細砂
38.淡灰色粗砂
39.淡青灰色粘質砂土(上半暗灰色に漸移)
40.灰色粘質細砂
41.灰色細砂

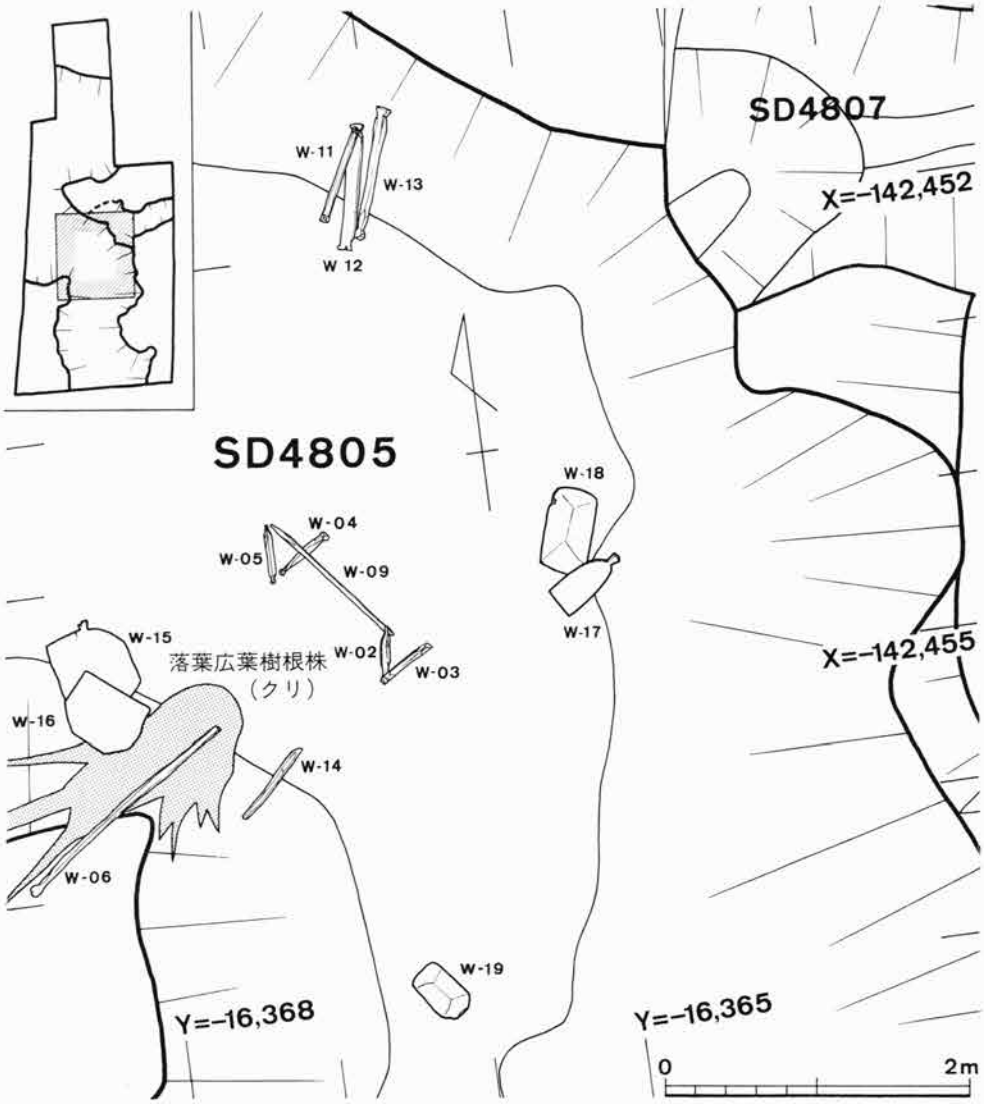


42.淡黄褐色粘質細砂
43.灰褐色粗砂
44.淡灰褐色砂質土(硬く締まる)
45.淡黄灰色粘質土
46.淡青灰色シルト(10と近似)
47.灰色粗砂(高杯出土層)
48.暗茶灰色植物質腐蝕土(単純層)
49.淡茶褐色粗砂
50.淡灰色粘質細砂
51.淡茶褐色砂(灰色粘質砂混)
52.淡灰褐色粘質細砂
53.淡灰色粘質細砂
54.灰白色粗砂
55.淡青灰色細砂質粘土
56.淡褐灰色砂(硬く締まる)
57.淡褐灰色粗砂(硬く締まる)
58.淡青灰色粘質砂
59.暗褐灰色粘質細砂(やや還元)
60.暗灰色粗砂質シルト
61.暗灰色シルト
62.茶灰色砂質土
63.茶灰色砂質土(灰褐色粘質土混)
64.茶褐色～淡茶褐色砂質土
65.暗褐灰色土(小礫混、硬く締まる)
66.灰色砂質土
67.暗褐灰色土(小礫混)
68.褐灰色粘質土(やや粘質)
69.褐色粘質砂(強酸化)
70.淡青灰色粘質砂
71.淡褐灰色粘質砂
72.灰色粘質砂
73.灰色粘質細砂(灰色粗砂礫混)
74.灰色粘質粗砂
75.暗灰色粘質砂土(小礫混)
76.暗灰色粘質粗砂土(硬く締まる)
77.淡青灰色シルト(灰色粗砂混)
78.淡灰色粘質粗砂
79.淡灰褐色砂質土(軟質)
80.淡青灰色砂質シルト
81.暗茶灰色砂質シルト
82.淡青灰色シルト(やや砂質)
83.淡紫灰色粘質土
84.淡茶褐色粘質砂
85.灰褐色砂質シルト(やや酸化)
86.暗灰色シルト
87.淡褐灰色細砂質シルト
88.淡緑灰色砂質シルト
89.灰色粘質砂土
90.淡褐灰色砂
91.青灰色粗砂質シルト
92.暗灰色粘質土
93.灰色粘質土
94.淡青灰色粘質砂土(粗砂礫混)
95.暗茶灰色土～灰色粘質砂土
96.淡青灰色シルト(同系砂質シルト混)
97.灰色粘土
98.暗青灰色粘質砂
99.黒灰色粗砂土
100.灰色粗砂

0 5m

第48図　瓦谷遺跡39・48bt断面実測図

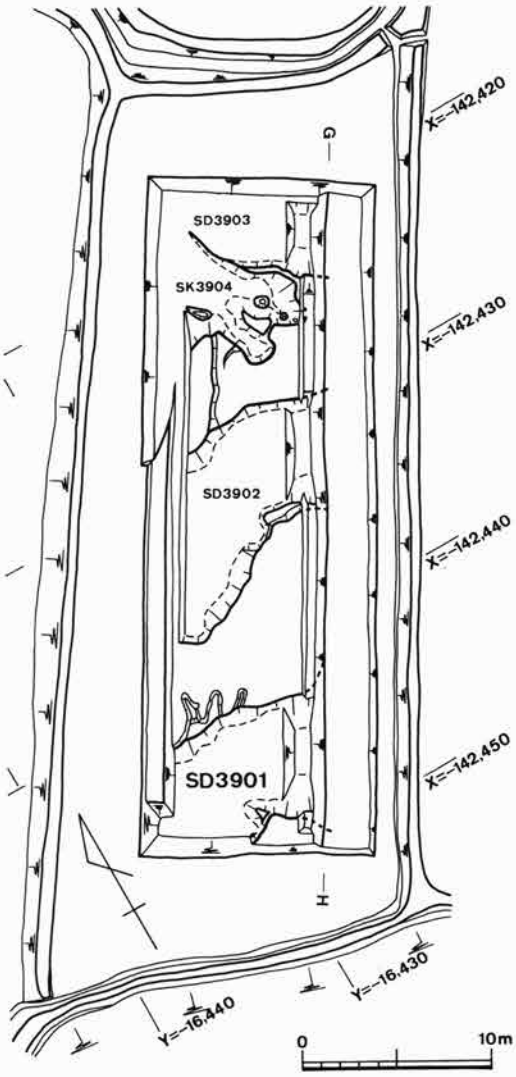
(上段左：48bt南壁A-Bセクション，上段右：48bt西側C-Dセクション
中　段：48bt東側E-Fセクション，下　段：39bt東壁G-Hセクション)



第49図　SD4805 遺 物 出 土 状 況

ので，適宜調査区を拡張しその拡がりを追及した。この流路状遺構は，両地区にわたって検出され，一連のものと理解されるので，ここでは両地区を一括して扱うことにする。

なお，ここでは遺構の層位的なあり方を中心に報告し，遺物に関しては，簡単に触れるにとどめる。層位は，両地区とも基本的には共通する。上位より，Ⅰ.耕作土・床土，Ⅱ.暗褐灰色系粘質土，Ⅲ.灰色砂土または褐灰色系砂質土，Ⅳ.青灰色系無遺物層となる。この内，2層には，相対的に48btが厚く，土色よりさらに数層に分層できる。奈良期および



第50図　瓦谷遺跡39bt遺構実測図

中世以降の弱磨耗の遺物が混入する包含層である。Ⅲ層の灰色砂土は，48btに限りみられる硬く締まった薄層（厚5～20cm）で，地盤の軟弱部分を覆うような様相を呈することから人為的な整地土の可能性がある。一方，褐灰色系砂質土は，39btの北半部に広くみられ，還元土と酸化土が混合した比較的堅固な擬似グライ土である。両地区においてこの層を成立面とする浅くて不定形の土坑状遺構（48bt，平面図に明示），および小規模なピット状遺構（39bt，断面確認のみ）が若干存在する。埋土はⅡ層に類似しⅡ層相当の遺物が若干出土した。Ⅳ層は，谷地形で水分が多いため強く還元を受けたグライ土である。砂礫・砂・シルト・粘土が互層となって水平または斜方向に堆積し，48btでは砂層が，39btでは粘土層がその主体を占める。両地区とも現耕作面からこの層までの深さは，70cmを越えず，当地がいわゆるグライ土壌水田であることを示している。

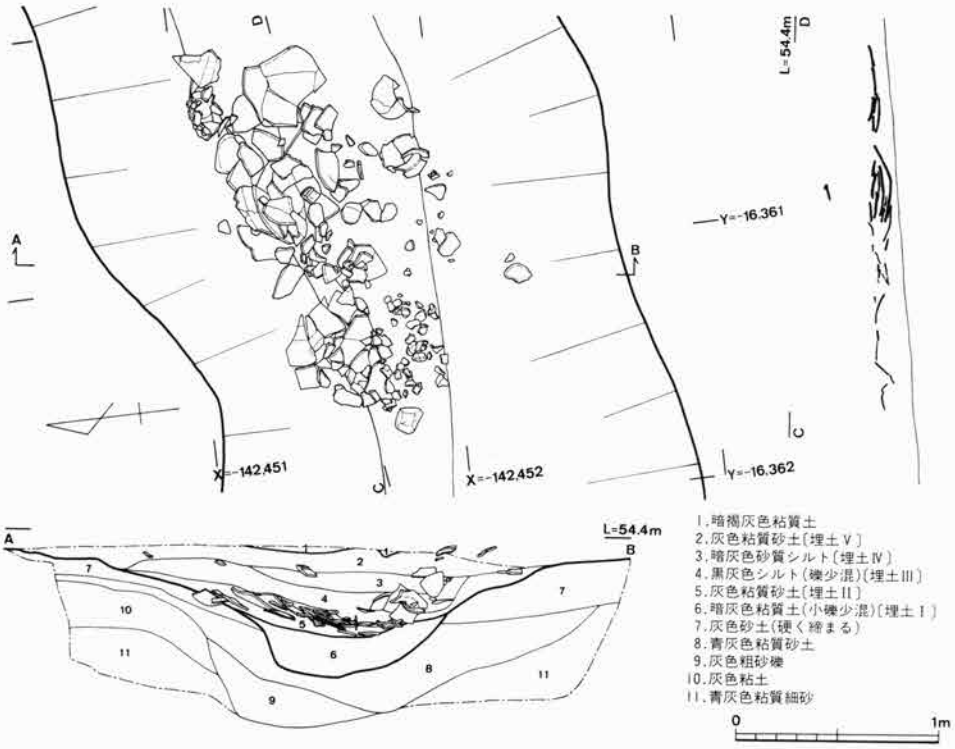
2. 検出遺構

検出した遺構は，流路状遺構計５条，溝１条，大小の不定形土坑，ピット状土坑である。前二者は，Ⅳ層（39btでは一部Ⅲ層）を，他は，Ⅲ層を成立面とする。ここでは，古墳時代前期に機能し埋没した前者を説明の対象とする。

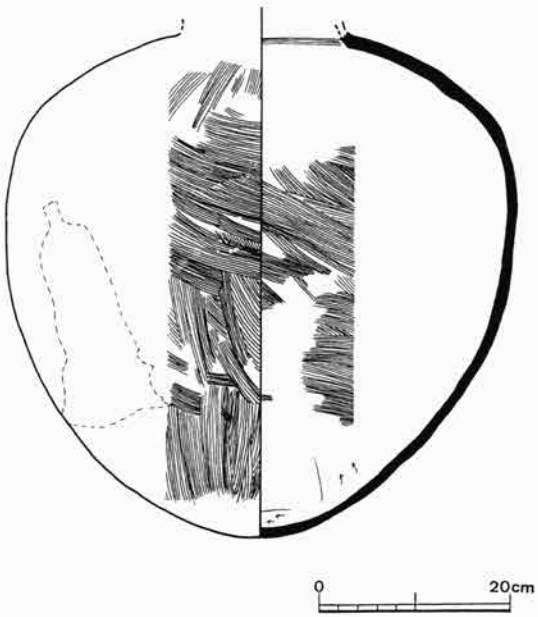
流路状遺構は，両トレンチで検出されたが崩落の危険から全面掘削していない。いずれも主軸の方位を谷筋のそれに合わせる。これらは，主に埋土の相違から次の二類に大別される。Ⅰ類は，斜面縁に暗灰色シルトが薄くみられるものの，全体としては淡褐色系の砂

礫と灰色～青灰色系粘質砂・シルトが堆積するもの。SD3902・3903が相当する。その状況から比較的短期間に埋没したことが窺われるが，伴出遺物が皆無で機能時期を特定できない。Ⅱ類は，埋土に腐植土を多量に含み良好な遺物が出土するのを特徴とする。SD4805・4806・3901がこれにあたる。後者についてさらに説明を加える。これらは，調査範囲が狭いこともあって全体形状を明確にし難いが，南の支谷に沿って北上してきたSD4805が調査区内でS字状に蛇行しながら東西に流れをもつSD4806と48bt付近で合流し(第47図)，これがさらに西流してSD3901につながるものと考えられる(第50図)。各溝とも溝底まで掘り下げていないが，斜面に大小の凹凸を残し幾分内湾する断面形状を示し，その傾斜角はかなり大きい。溝中埋土は，3層に大別し得る。上層は，灰色粘土層で炭を若干含むものの，遺物はほとんど出土しない。砂礫層の間層を挟むか所がある。中層は，腐植土と灰色粗砂の互層に部分的に灰色系粗砂礫の間層が加わるもので，互層から磨耗を受けない布留期の遺物が多量に出土した。腐植土を細かくみると，分解が不完全で葉・根茎類等の有機物がそのまま残留する泥炭土と，その変質が進んで暗茶灰色シルト化したものがわずか数cm厚で交互に堆積している。下層は，腐植土混じりの暗灰色粘質砂層で，斜面縁辺部下半で確認した。中層に次いで出土遺物が多い。この堆積状況から判断して，Ⅱ類の流路状遺構は，Ⅰ類のような比較的急速な流れ堆積によって埋没したのではなく，一定周期で繰り返される緩い流れ堆積とよどみ沈殿によって徐々に埋没したことが想定される。遺物は，出土状況から埋土中の任意の位置に包蔵されたものと，斜面に貼り付くように出土したものとの区別が可能だが，いずれの場合も，器表にほとんど磨耗痕がみられず，これは，投棄された位置をほとんど動かなかったことを示している。両者に時期的な差は見い出し得ない。また，これらの中に含まれる木製品の出土状態(第49図参照)は，他の遺物のそれと変わらないが，中層上半に集中する傾向がある。この他SD4805斜面上縁付近に落葉広葉樹の根株が3か所現位置を保って残存する。

SD4807は，48btトレンチ中程で検出された東西方向の溝状遺構である。流路状遺構の合流部付近でこれにとりつき，長さ4m相当を確認した。断面形状は，斜面が緩やかに開くU字形を基本にし，一部底部付近がさらに深くなる二段構造を呈するか所がある。溝中埋土は5層に分層でき，無遺物の最下層が下段部分を埋没させた段階でその上面に大壺をはじめとする布留期の土師器が一括投棄されている(第51・52図)。その状況から大壺は，投棄された時点で概ね原形を保持していたが，後に土圧によって破壊されたようすが窺われる。なお，最上層埋土中に布目瓦が混入することから，この時期まで溝としての形状を残していたものと考えられる。



第51図　SD4807 遺物出土状況



第52図　SD4807 出土土器実測図

3. 出土遺物(第52～57図)

調査によって得られた遺物資料は，古墳時代の土師器・木製品，奈良時代の須恵器，中世以降の土器類で，古墳時代の遺物が圧倒的多数を占める。これらは，遺存状態が良好で格好の観察対象となりうるが，近く本調査に備えなお多くの遺物を現地にとどめたままこれを採取しておらず，これをも含めた形で体系的に報告するのがより適切であると考える。よって，ここでは今回任意に取り上げた遺物の実測図を掲載し，木製品に関してはこれに観察表を添え報告に

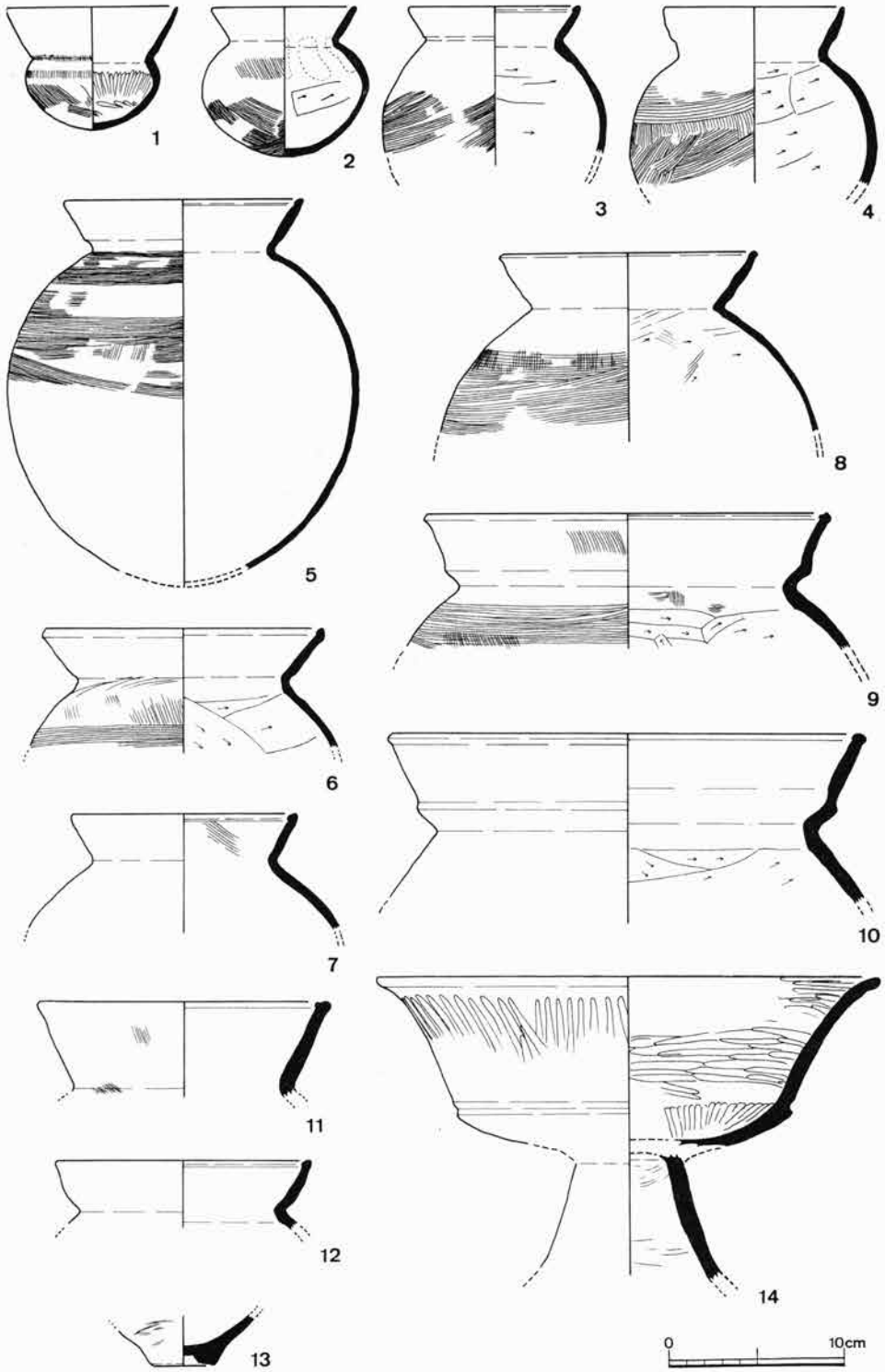
代えたい(付表4，図版第29•30)。

4. ま　と　め

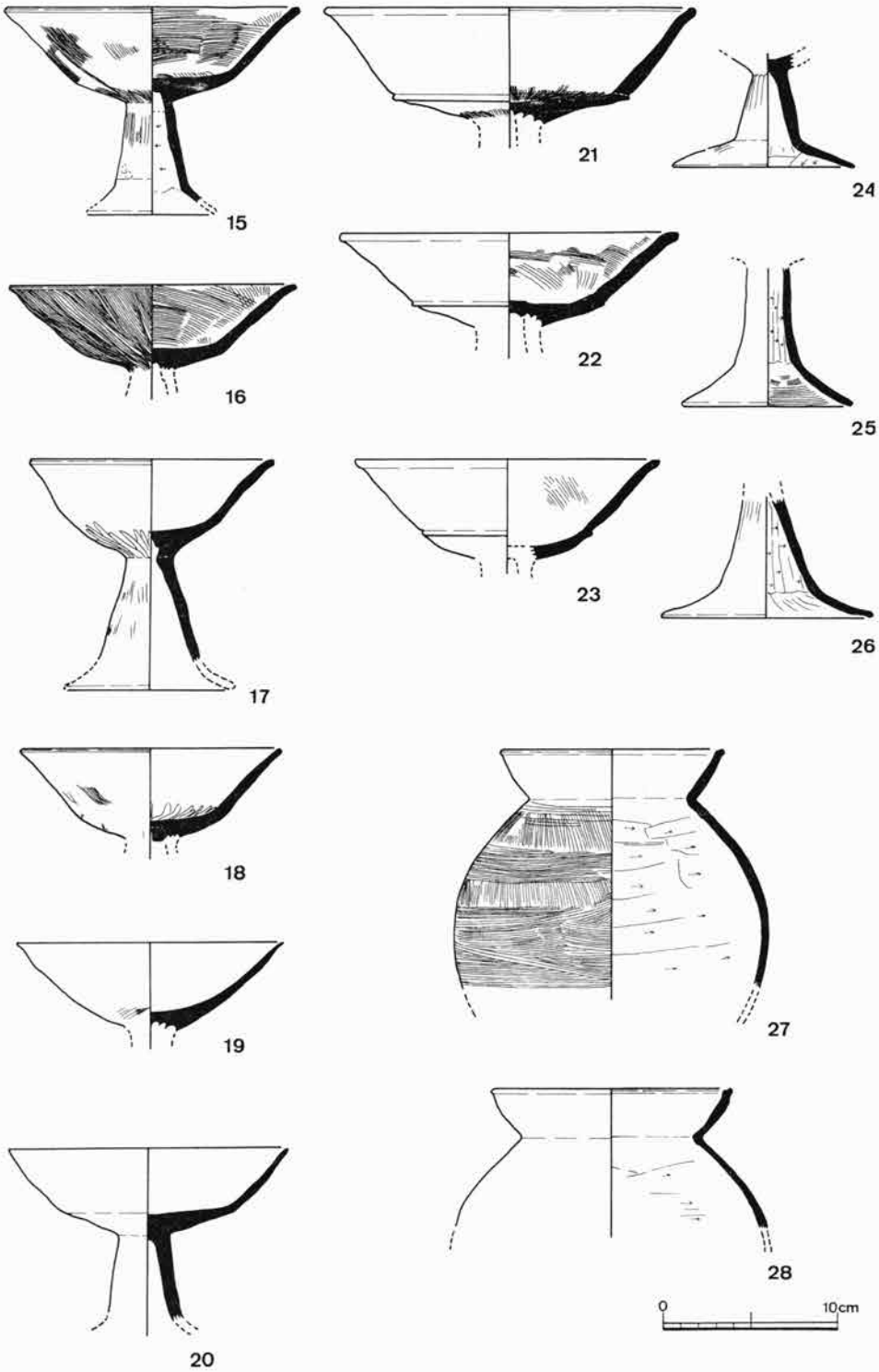
今回の調査によって，瓦谷遺跡では先の20btの立地する丘陵部だけでなく，それに南接する谷部においても良好な遺物を多量に包蔵する遺構の存在が明確となった。この様な状況が遺跡全般にわたって拡がるのか，この地区を含めたより狭い領域にのみ局地的にみられる現象であるのかの判断は，先の瓦谷10bt・鰯谷22btの成果が前者を否定するものの，全体のごく一部しか調査していない現状では，より広範な調査を待って決すべき課題である。それはともかく，39•48btの所在する谷地形で検出された古墳時代の遺構は，自然の力によって掘開された自然流路の可能性が高く，そこに人為的な形跡があまり認められない。この点で，墓域として利用された20bt地区とは際立った相違を示す。しかし，これらの遺構内から生活と密接に結びつく日常什器をはじめとする遺物が多量に出土したことは，人々

付表4　瓦谷遺跡48bt溝SD4805出土木製品一覧表

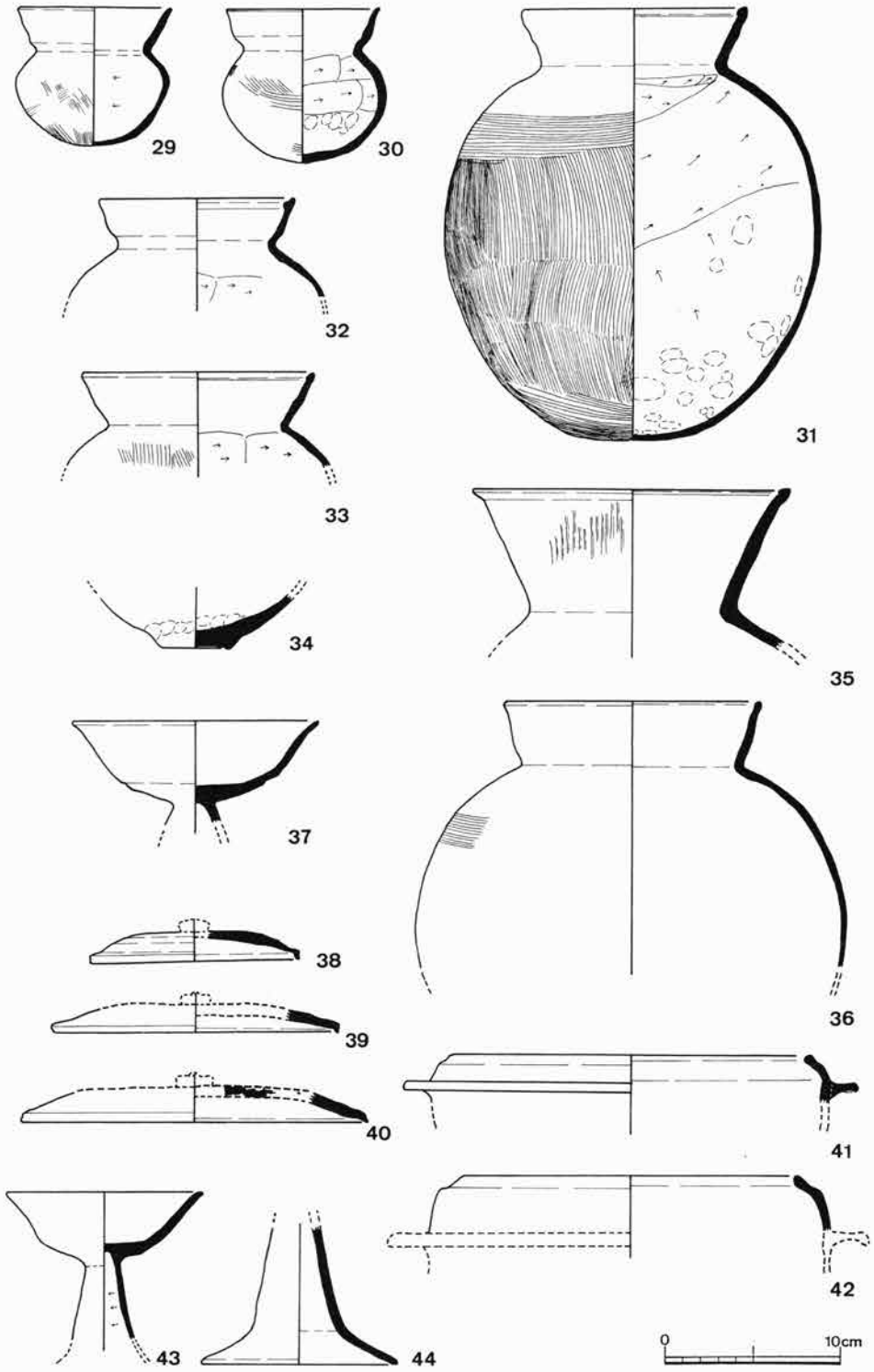
番号(図版番号)	出土層位(標高)	用途・機能別器種	法量(cm)長×幅×厚さ	木取り	樹種
W-02 (1)	中層 53.71m	有頭棒状木製品	37.7×4.9×2.5	辺材	コウヤマキ
W-03 (2)	中層 53.70m	有頭棒状木製品	40.6×5.1×4.6	辺材	コウヤマキ
W-04 (4)	中層 53.68m	有頭棒状木製品	40.7×4.8×3.9	辺材	コウヤマキ
W-05 (3)	中層 53.69m	有頭棒状木製品	40.1×3.5×3.5	辺材	コウヤマキ
W-06 —	中層 53.79m	有頭棒状木製品	165.0×6.6×5.2	芯持材	コウヤマキ
W-07 (8)	上層 不明	有頭棒状木製品	66.1×5.1×4.3	辺材	コウヤマキ
W-09 (12)	中層 53.71m	有頭棒状木製品	110.0×3.2×2.3	辺材	ヒノキ
W-10 (11)	中層 不明	棒状品	92.0×4.3×4.3	辺材	ヒノキ
W-11 (7)	中層 53.57m	有頭棒状木製品	66.0×5.8×3.2	辺材	コウヤマキ
W-12 (10)	中層 53.60m	有頭棒状木製品	81.5×8.2×3.9	辺材	コウヤマキ
W-13 (9)	中層 53.63m	有頭棒状木製品	87.0×7.4×5.0	辺材	コウヤマキ
W-14 (5)	中層 53.78m	棒状木製品	58.7×5.3×3.4	辺材	不明
W-15 (14)	中層 53.63m	木棺小口板	75.2×51.6×4.4	板目材	コウヤマキ
W-16 (13)	中層 53.67m	木棺小口板	53.4×41.0×3.4	板目材	コウヤマキ
W-17 (17)	中層 52.37m	狭鍬または鋤先(未製品)	52.1×22.8×2.3	板目材	広葉樹
W-18 (15)	中層 52.35m	広鍬またはエブリ(未製品)	57.0×31.4×5.1	柾目材	広葉樹
W-19 (16)	中層 52.36m	広鍬またはエブリ(未製品)	44.1×24.6×2.7	柾目材	広葉樹
W-20 (6)	重機掘削中	有頭棒状木製品	61.9×3.8×3.2	辺材	不明



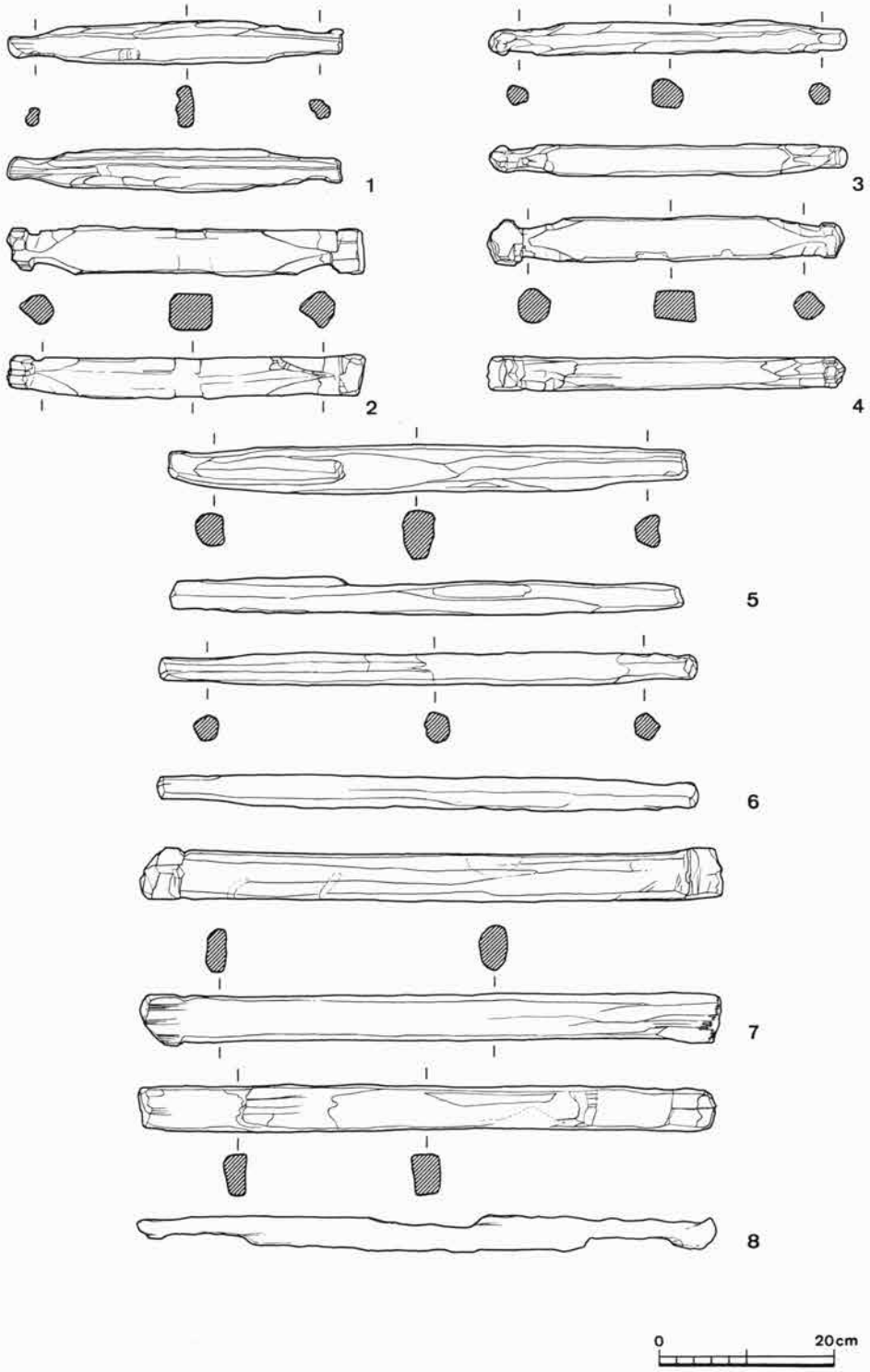
第53図　瓦谷遺跡39・48bt出土遺物実測図 (1)



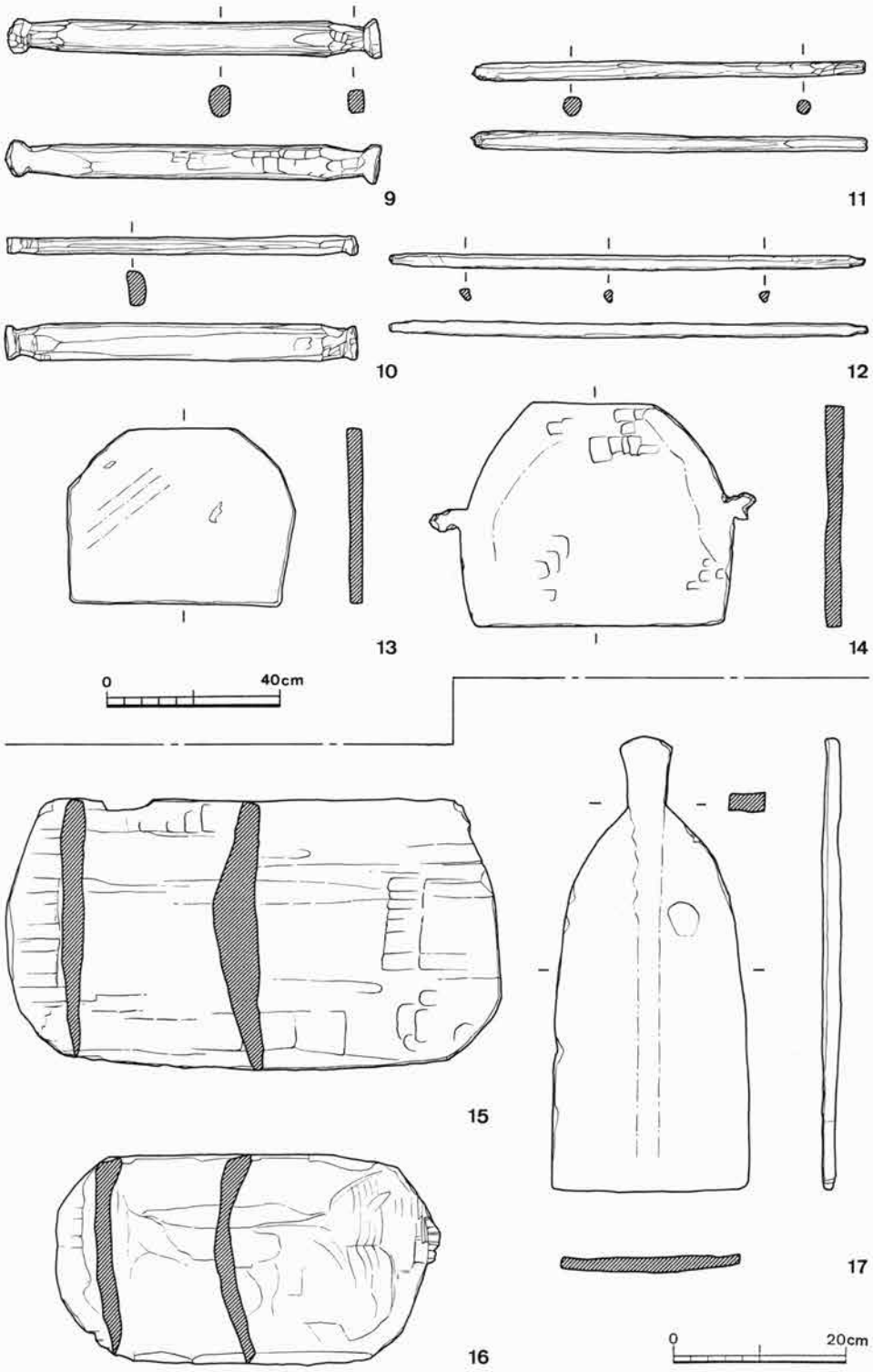
第54図　瓦谷遺跡39・48bt出土遺物実測図 (2)



第55図　瓦谷遺跡39・48bt出土遺物実測図 (3)



第56図　瓦谷遺跡39bt出土木製品実測図 (1)



第57図　　瓦谷遺跡39bt出土木製品実測図　(2)

の生活の痕跡を色濃く示すわけで，居住区が近在することを想定し得る。流路の性格は，とりわけⅡ類として抽出したものに関しては，その堆積状況から一定周期をもって開かれる流路形のよどみの状態を想定することが可能であろう。この場合，より下流域に井堰等の止水施設が想定されるが調査区内には存しない。ただ，SD3901において原位置を失ったしがらみ状の自然木がまとまって出土したことはこれを示唆している。要するに，谷筋に沿って流下する自然流路を最大限利用しながらもその数か所を止水することで谷水を堰止め，必要に応じて水田域に注水するという灌漑施設にこの遺構の性格を求めたい。遺構内から出土した遺物は，その保存環境から極めて残存状態が良好である。これによりこの遺構の存続期間が古墳時代前期の比較的短期間であったことが判明する。また，土器類に混じって出土した木製品は，有頭棒を除くと農具の未製品が目立つ。さらに木棺小口板の出土は，全国的にみてもまれで，材質が高野槙であることから年輪年代測定に好資料を提供し得る。

以上，いくつかの推論を混じえて結語としたが，残された課題や問題点はなお多い。これらは，今後より広範な調査を行うことによって自ずと氷解するものと考える。

（伊賀高弘）

(2) 上人ケ平遺跡

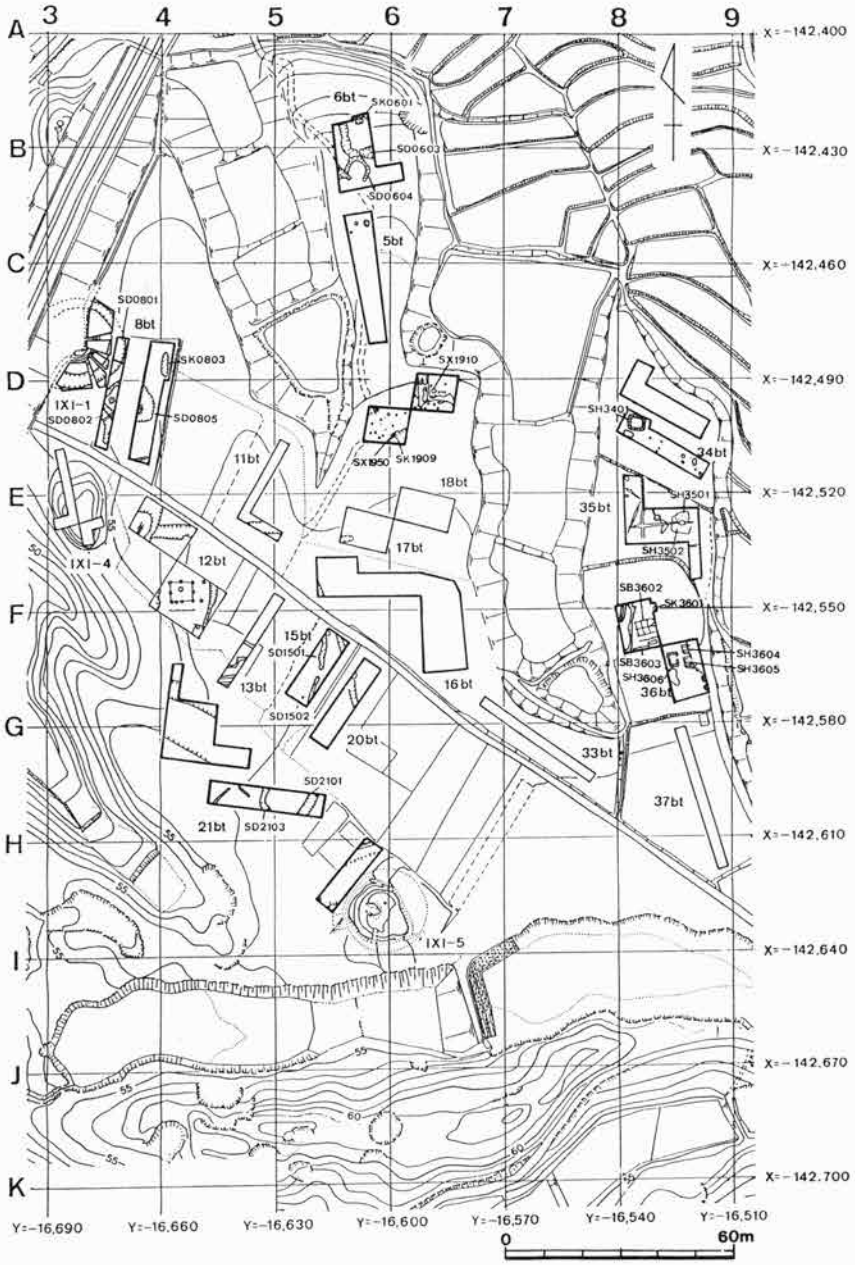
1. はじめに

上人ケ平遺跡は，昭和59年度に一度調査されている[注10]。この時の調査では，2間×3間の掘立柱建物跡1棟や，柵列が2列，溝4条などが，東西・南北に整然と区画された状態で検出された。また，奈良時代の土器や瓦は，この台地全域に分布する様相を呈しており，遺跡の広範囲に奈良時代の遺構が埋蔵されていることが予想された。

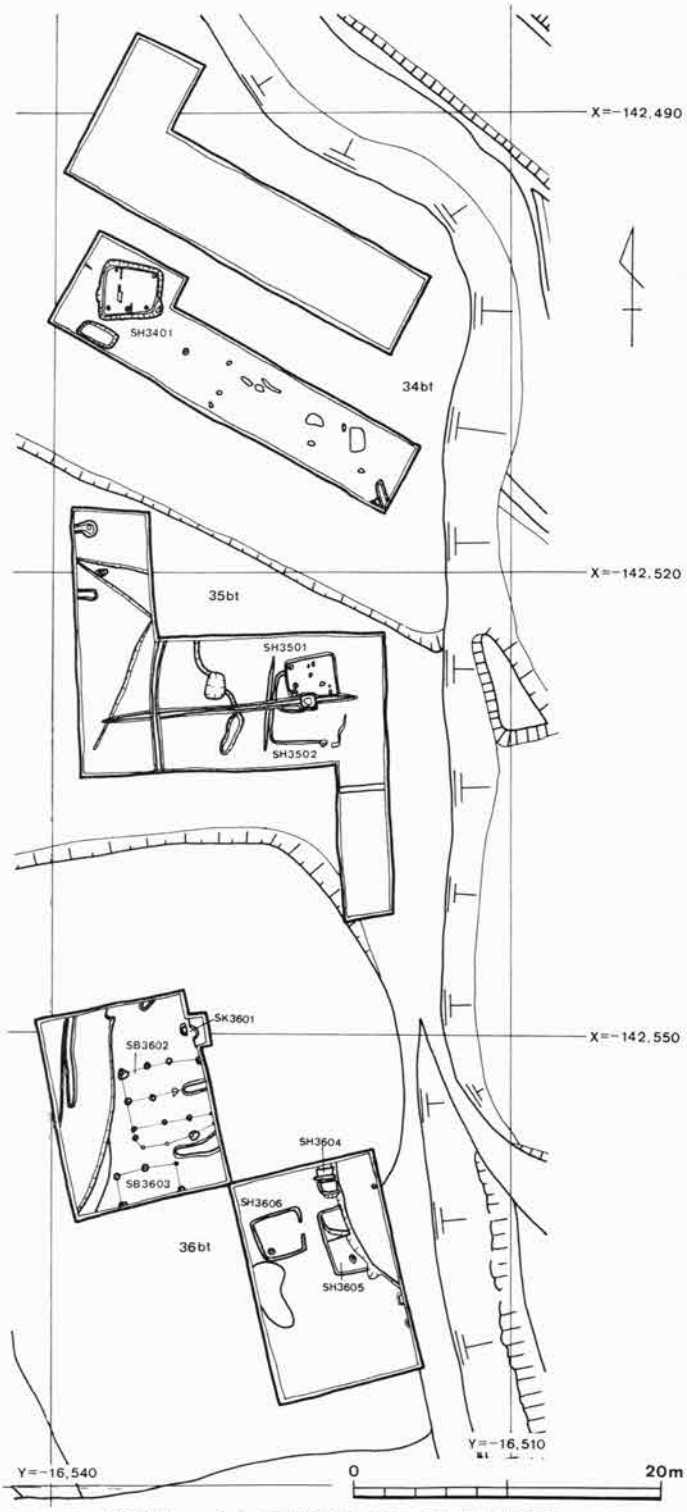
これらの調査結果を踏まえ，昭和62年度の調査より，奈良時代の遺構の相互の関係を明らかにする事を目的として全域を地区割りすることとした。地区割りは，この遺跡の北西に位置する国土座標のX＝−142,400・Y＝−16,750を原点とし，30m毎の方眼割りとする。Y＝−16,750を1ラインとし，東にむかって30m毎にアラビア数字で表示し，X＝−142,40をAラインとし，南にむかって30m毎にアルファベットで表示することとする。このX座標とY座標によって区画された30mの方画を大地区とし，西北隅の交点をその地区名とする(例えば2B)。大地区の中は，3m毎の方眼割りとし，大地区割りと同様の表示法をとる。但し，地区の表示は，すべて小文字によって表示するものとする。この3m毎の方眼割りを小地区とする(第58図)。

2. 調査の概要

上人ケ平遺跡では，昭和59年度の調査を合わせると，現在までに合計17地点(26トレンチ)で試掘調査を行っている。昭和59年度の調査によると，遺跡は，西部に密に確認され，東部では希薄な様相を呈している。また，遺構は，古墳時代と奈良時代のものが多く，他



第58図　上人ケ平遺跡調査地位置図



第59図　上人ケ平遺跡34・35・36bt遺構実測図

の時代についてはほとんど確認できていない。昭和61年度の調査では，遺跡の北半で北にむかってのびる3条の小丘陵を中心に調査区を設定した。これは，工期にかかわる事情によるものである。また，遺跡地の南も，その範囲確認のため調査区を設定した。以下，調査によって検出した遺構のうち，主なものについて報告したい。

（戸原和人）

(1)　34bt（第59図，図版第31-2）

上人ケ平遺跡の北よりで，3本に分れる尾根の内，東尾根の先端部に位置する。ここでは2か所トレンチを設定し，北を1トレンチ，南を2トレンチとした。34-1トレンチでは，開墾などによる削平を受けており，表土直下で地山面を検出した。遺構・遺物は確認しなかった。

34-2トレンチは，34

-1トレンチの南に位置する。基本的な層序は，表土・淡黄褐色粘質土(床土)・灰褐色土・黄褐色粘質土(地山)の4層である。灰褐色土層は中世以降の整地層で，瓦器等の破片を含む。ここでは古墳時代の竪穴式住居跡1基(SH3401)・土坑3基を検出した。

SH3401は，一辺4.0～4.4mの隅丸方形の竪穴式住居跡である。四周を幅20～30cmの壁溝がめぐる。住居中央の床面には，溝状に炭が入る。住居跡南東の壁溝内から，土師器の高杯1点が出土している。この土器から判断すると，布留式期の住居跡と考えられる。

(2)　35bt(第59図)

34btの南に設けたトレンチである。調査区の両側(東西)は，尾根裾にむかって緩やかに下がる地形を示し，トレンチの西部では，大正時代頃まで行われていた茶畑の開墾によって削平されており，遺構は検出されなかった。しかし，東部では古墳時代の竪穴式住居跡2基と土坑2基を検出した。

SH3501は，一辺が約3.1mの竪穴式住居跡である。削平を受けており，残存高は約5cmである。住居跡の南辺には，一辺約0.9mの方形の土坑があり，その中央には，直径0.4mの円形土坑がさらに深く掘り窪められていた。ここから，小型丸底壺(布留式)が1点出土した。

竪穴式住居跡SH3502は一辺が約5mの方形を呈し，SH3501と重複して検出された。切り合い関係から，SH3501の建て替えと考えられる。

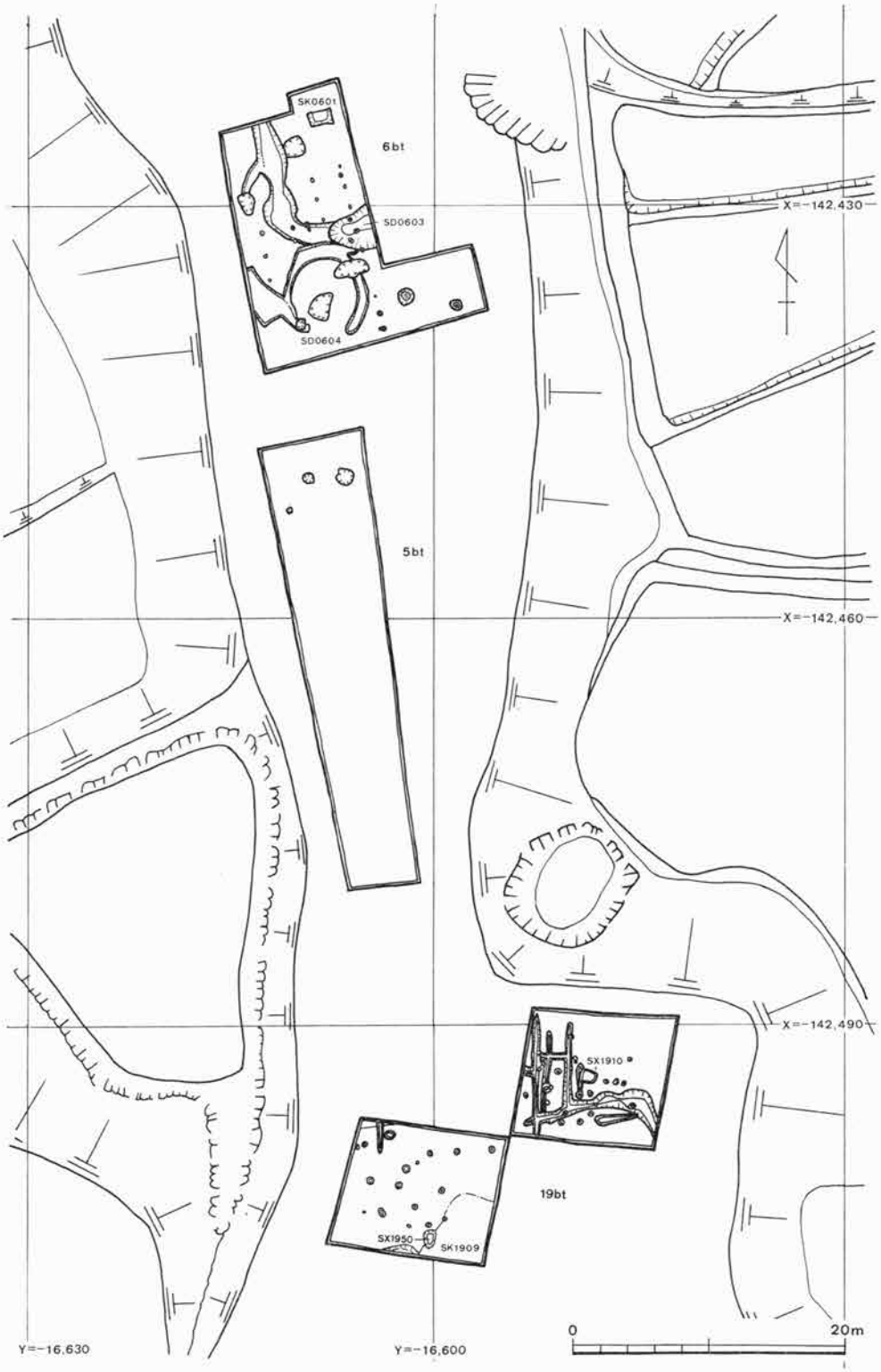
(3)　36bt(第59図)

35btの南方にあり，尾根の基部に位置する。この地区は四分割法により，2か所のトレンチを設定し，北西を1トレンチ・南東を2トレンチとした。1トレンチでは，掘立柱建物跡2棟と土坑1基などを検出した。また2トレンチでは，竪穴式住居跡3基と土坑などを検出した。

掘立柱建物跡は，直径30cmの柱掘形をもち，柱間が1.8～2.1mを測る。南に庇をもつ2間×3間以上の東西棟SB3602をトレンチの中央部で，同じく2間×1間以上の南北棟SB3603をトレンチ南よりで検出した。

土坑SK3601は，断ち割りによって確認したため全体的な形状は不明であるが，直径1.2mの円形，もしくは楕円形の土坑と思われる。坑内からは，土師器の甕(布留式)が出土した。また，包含層の中から奈良時代の布目瓦などが出土している。

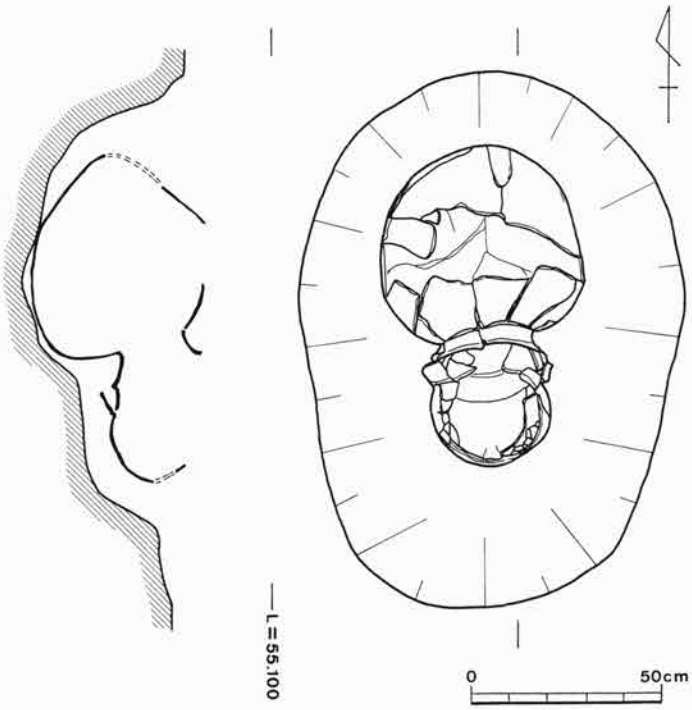
竪穴式住居跡SH3604とSH3605は，後世の削平により東側がいずれも削平されている。残存する西辺でSH3604が2.0m，SH3605が4.2mをそれぞれ測る。SH3606は，平面台形を呈し，北辺で3.4m，南辺で2.8mを測り，東西の各辺が3.0mを測る。また，それぞれの住居跡には幅20cm程度の周壁溝がめぐる。　(荒川　史)



第60図　上人ケ平遺跡5・6・19bt遺構実測図

(4)　6bt（第60図，図版第32）

上人ケ平遺跡の北よりで，３本に分かれる尾根のうち，中央尾根の先端部に位置する。周溝状遺構や土坑・ピットなどを検出した。現地表面下0.1mまでが耕作土層で，以下は基盤層である。遺構は，この基盤層に掘り込まれたものについて検出したが，一部整地層もみとめられており，この層に掘り込まれた遺構も検出している。



第61図　SX1920 実 測 図

周溝状遺構SD0603はＬ字状に曲がる溝で，南北9.0m・東西7.0mにわたり検出した。断面はU字状で，幅1.3～2.0mを測り，深さ0.1～0.3mを測る。溝はさらに北にむかってのびていたと考えられるが，丘陵先端部は後世の開発によって削平をうけており，遺構を確認することはできなかった。東にむかってのびる東西溝は，調査地のさらに東側に広がると考えられる。今後引き続き拡張して調査をする必要があるものと考えられる。溝内からは，弥生式土器と考えられる小さな破片などが数多く出土している。

周溝状遺構SD0604は，ほぼ円形に巡る溝で，溝の心々による復元径は5.5～6.5mを測る。溝は，南側で切れているが，後世の削平によるものか，本来の形状を留めているのかについては明らかでない。溝の断面はU字状で，幅0.6～1.0mを測り，深さ0.05～0.1mを測る。溝内からは，弥生式土器と考えられる小さな破片など数多く出土している。

土坑SK0601は，調査地北東寄りで検出した，平面が方形状を呈する土坑である。北側はSD0603同様に削平をうけており，全体の規模を窺うことはできない。東西1.7m・南北の残存長1.0mで，深さ0.1mを測る。土坑内からは，庄内併行期の加飾の壺が出土した。

ピットP-001は，土坑SK0601の北西に隣接して検出した。当初，直径30cm・深さ20cm程度の小型のピットと考えたが，その後の調査により土坑状の遺構であることが明らかに

なった。遺構内から弥生式の小型甕が出土している。

(5) 5bt(第60図，図版第33-1)

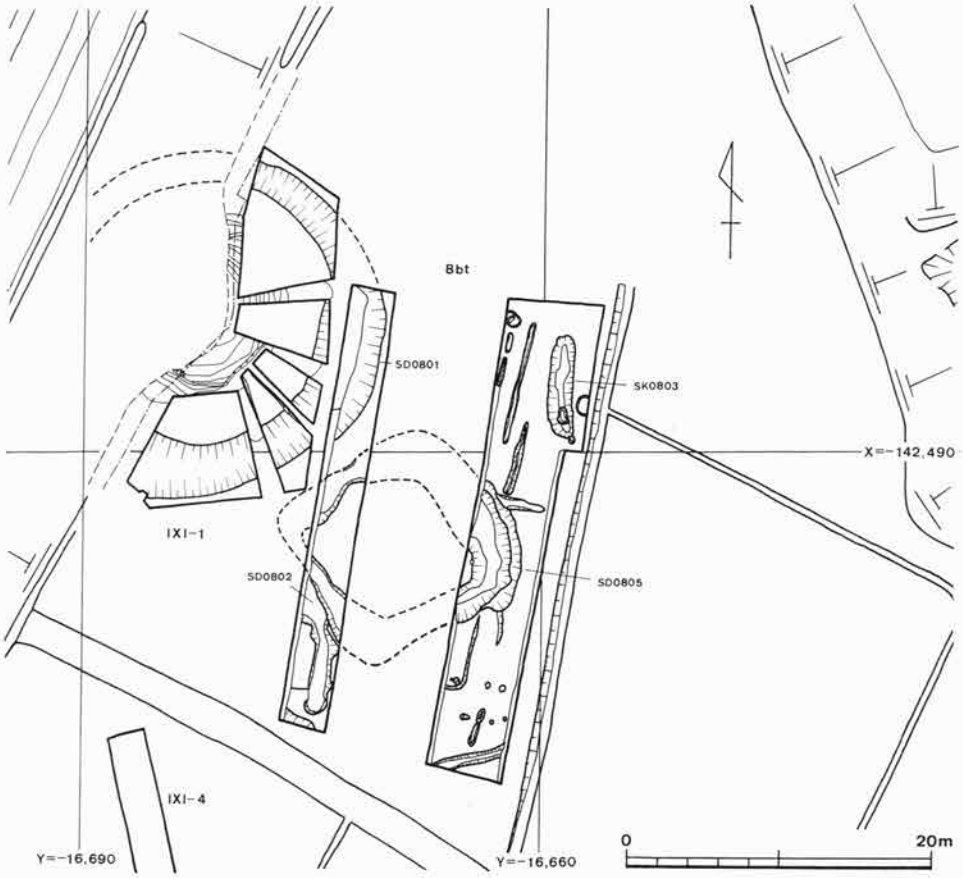
6btの南に設定したトレンチである。後世の畑作のために削平を受けており，顕著な遺構を検出するには至らなかった。現地表面下0.1mまでが耕作土層で，以下は基盤層(いわゆる大阪層群)である。耕作土中からは，布目瓦や桟瓦が出土した。

(6) 19bt(第60・61図，図版第34)

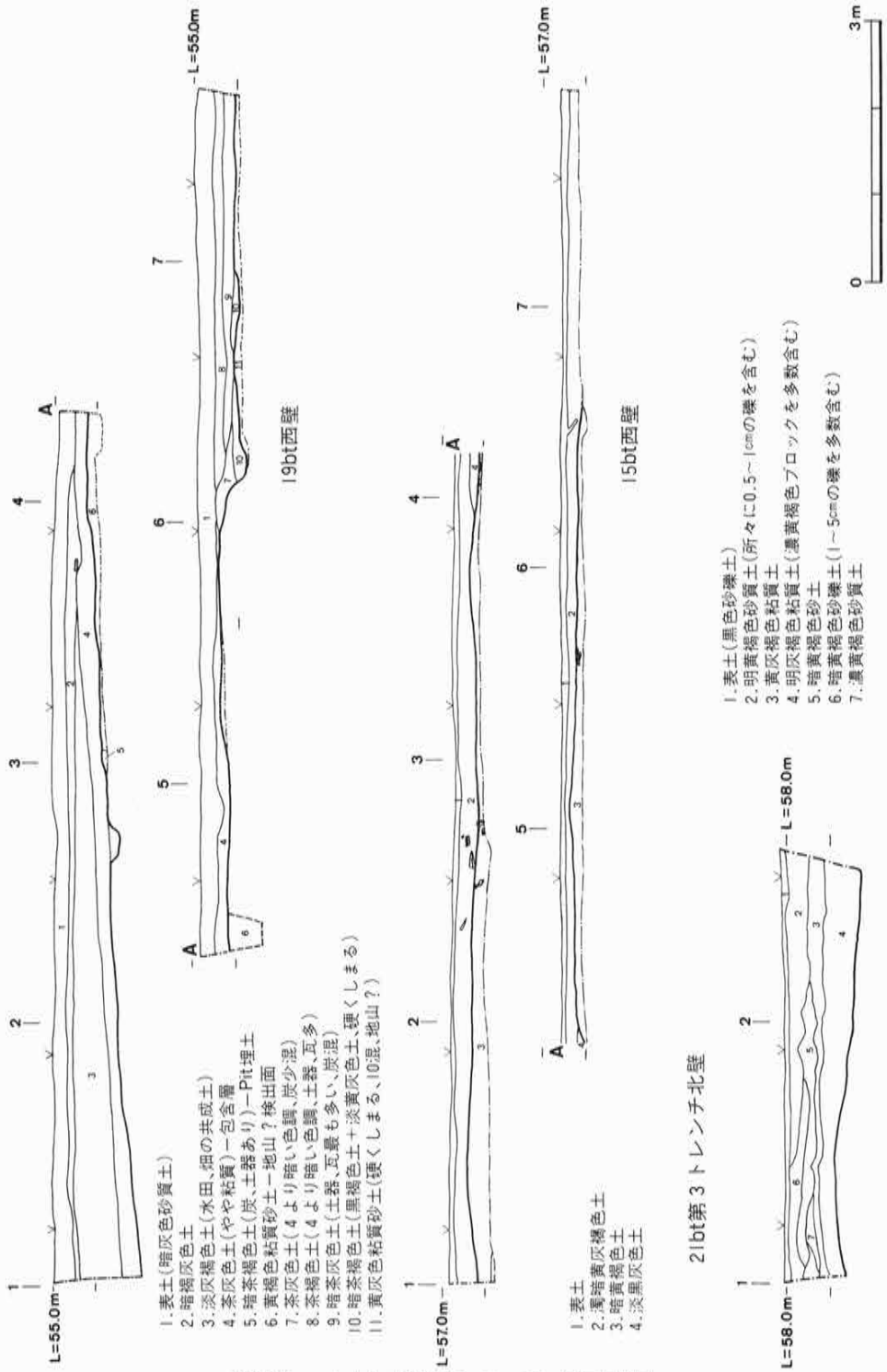
中央尾根の基部で5btの南に位置する。畑地の一筆を十字に四等分し，その北東と南西にトレンチを設けた。本調査地の地形は，現在畑地に造成されているため平坦であるが，本来，南から北と，西から東にむかって緩やかに下っていく様相を呈している。

調査では，奈良時代の溝や焼土坑，ピット，土器・瓦溜りと古墳時代前期の甕棺墓を検出した。

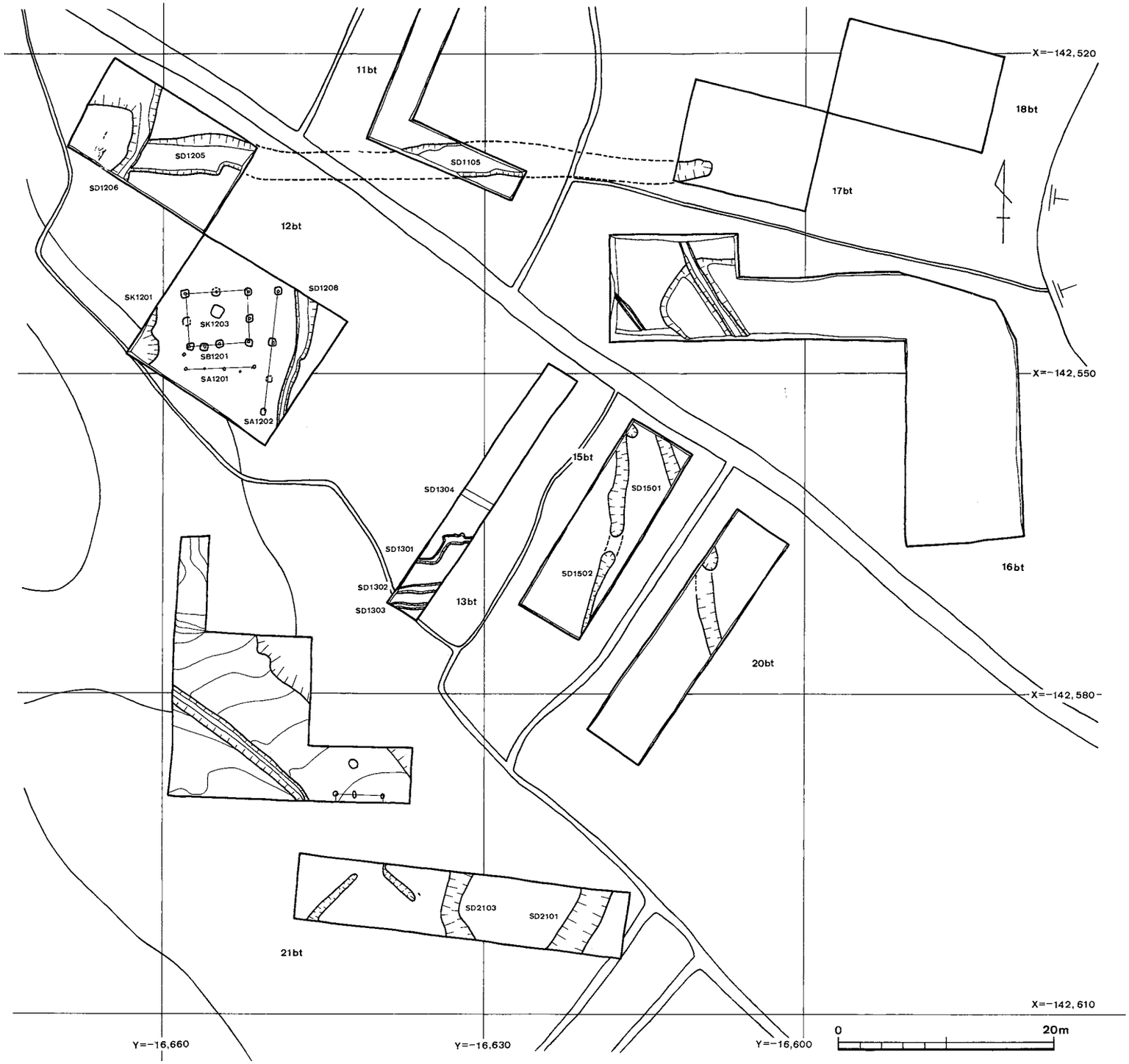
焼土坑SX1910は，北東トレンチのほぼ中央で検出した，主軸を東西にもつ平面長方形



第62図　上人ケ平遺跡2・8bt遺構実測図



第63図　上人ケ平遺跡15・19・21bt断面実測図



第64図　上人ケ平遺跡11～13・15～17・20・21bt遺構実測図

の土坑である。その規模は，東西1.3m・南北1.0mで，深さ0.3mを測る。高温で焼かれた壁面が厚さ3cm程度認められる。西辺部では修復が行われており，繰り返し使用されたことが窺える。坑底には木炭と灰の層が認められるが，遺構の年代を決定する遺物も含まれておらず，また，その構造を復元するような資料も得られなかった。このほか，この遺構に関連すると思われる資料としては，土坑周辺で鉱滓と考えられる遺物が出土している。

土器・瓦溜りSK1909は，西南トレンチの南よりで検出した不定形の遺構である。この遺構はさらに東及び南に広がると考えられる。検出した規模は東西3.5m・南北4.5mで，深さ0.2mを測る。遺構内からは，須恵器では，杯，同蓋，壺，甕などが出土した。土師器では，杯，皿，高杯，甕などが出土し，瓦類では，軒丸瓦，丸瓦，平瓦，塼，器台状の瓦質製品などが出土した。

甕棺墓SX1920は，SK1909の西よりで，同遺構の下層より検出した。遺構は，主軸を南北にもち，東西0.9～1.0m，南北1.4～1.5mの平面隅楕円形の掘形内に布留式土器の大型二重口縁壺と二重口縁の甕を用い合せ口としている。棺内からは，ガラス小玉9点が出土した。

(6) 8bt(第64図，図版第35・36)

昭和59年度に調査した上人ケ平1号墳の東に位置し，南北トレンチ2本を設定した。調査により，上人ケ平1号墳の周溝の一部SD0801と，周溝遺構SD0802・0805，土坑SK0803などを検出した。

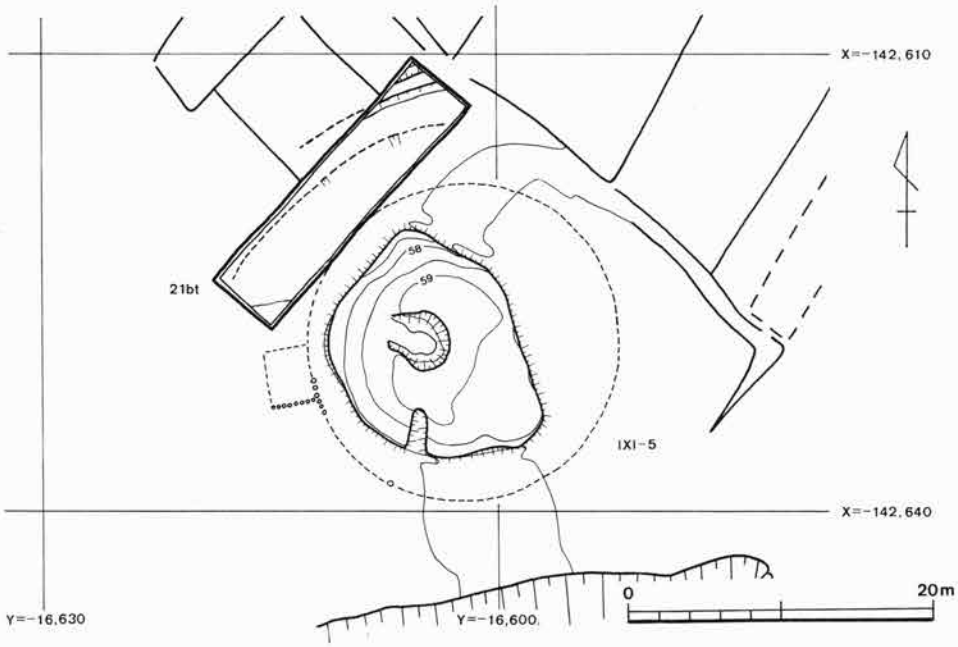
周溝SD0802・0805は，東および西トレンチでそれぞれ検出した周溝状の遺構で，一辺約7mで方形に接合するものと考えられる。西トレンチ部分は，後世の開発により削平をうけており，その規模を明らかにすることはできないが，東トレンチ部分は，比較的よく旧状をとどめており，幅約3.0m・深さ約0.5mを測る。溝内からは，土師器甕，黒斑をもつ蓋形埴輪・水鳥の頭部と考えられるものなどの形象埴輪の破片や須恵器の円筒埴輪などが出土した。

土坑SK0803は，6.3m×1.5m，深さ約0.3mを測る。土坑底より土師器の高杯と直口壺が置かれた状態で出土した。

(7) 15・16・20bt(第63・64図，図版第33-2・21)

台地のほぼ中央に位置する。調査により，この調査区周辺は，奈良時代に整地されており，同時代の遺構が上下2層で検出されることを確認した。上層では，南北にのびる溝2条とピットを検出した。下層では，地層確認のための断ち割りにより，15・20btで，昭和59年度に13btで検出した東西溝の延長と考えられる溝の断面を検出した。

溝SD1501は幅約1.5mで，9.5m長を検出した。溝SD1502は幅約1.3mで，8.0m長を検出した。溝内からは多量の布目瓦が出土した。



第65図　上人ケ平遺跡21bt 3 トレンチ，市坂 5 号墳関連遺構実測図

(8)21bt(第63～65図，図版第38～40)

台地の南よりで，市坂瓦窯の北に位置する。1 トレンチでは，幅約5.2mの谷と調査地の東寄りで一辺30cmの柱穴 3 個を一列に検出した。谷の肩部では，埴輪や布目瓦が広く散布しており，埋没時にはその上に周辺から幾度かにわたり土を入れた状況が窺えた。

2 トレンチは，1 トレンチの南に隣接して設定した。この調査区では溝を 4 本検出した。

溝SD2101は，幅約2.7m・深さ約0.5mを測り，長さ約6.2mを検出した。溝内からは上層で布目瓦・土師器・須恵器，中層で埴輪が出土した。

溝SD2103は，幅約2.0m・深さ約0.2mを測り，長さ約6.0mを検出した。溝はトレンチ南側で東に曲がる様相を呈する。溝内から布目瓦・土師器・須恵器・埴輪などが出土した。

3 トレンチは，上人ケ平 5 号墳の北西で，同古墳に接して設けたトレンチである。調査により，同古墳の周濠と，その外側で堤状の遺構を検出した(第65図)。

周濠は，2 段に掘り込まれており，幅約5.0m・深さ約0.6mを測る。外堤状の遺構は，幅約2.0m・高さ約0.5mを測り，なだらかな隆起をもつ。周溝の上・中層からは布目瓦・土師器・須恵器，中・下層で埴輪が出土した。

3. 出　土　遺　物(第66～71図)

今回の調査で出土した遺物は，弥生・古墳・奈良・鎌倉～室町の各時代のものがある。

弥生時代の遺物としては，石鏃，弥生式の小形甕がある。古墳時代の遺物としては，古墳時代初頭(庄内併行)の壺・同前期(布留式期)の小形壺・高杯，同中期の直口壺・高杯・甕・各種の埴輪類がある。奈良時代の遺物としては，土師器(皿・杯・高杯・甕)・須恵器(皿・杯・杯蓋・高杯・壺・甕・鉢)・軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・塼などがある。鎌倉～室町時代の遺物としては，現耕作土や包含層中より瓦器椀・羽釜の細片が出土している。以下，出土した遺物のうち主なものについて報告したい。

第66図-1は6bt，SK0601からの出土である。円盤状の平底底部と玉葱形の胴部，円筒形の頸部から直線的に外方へ開き，垂下して端面をもつ口縁からなる。器面は保存状態が悪く観察が困難であるが，外面は全体にミガキ調整を施し，仕上げているものとみられる。内面の一部にはハケ調整痕が認められる。体部下半には焼成時の黒斑を留める。肩部にはクシ描きの直線文と，その上部に起伏が大きく右に傾く波状文を施す。口縁端面は図のように観察されたが，波状文を施していたのかもしれない。また，円形浮文等は観察できていない(口径16cm・腹径29.5cm・器高29.5cm)。

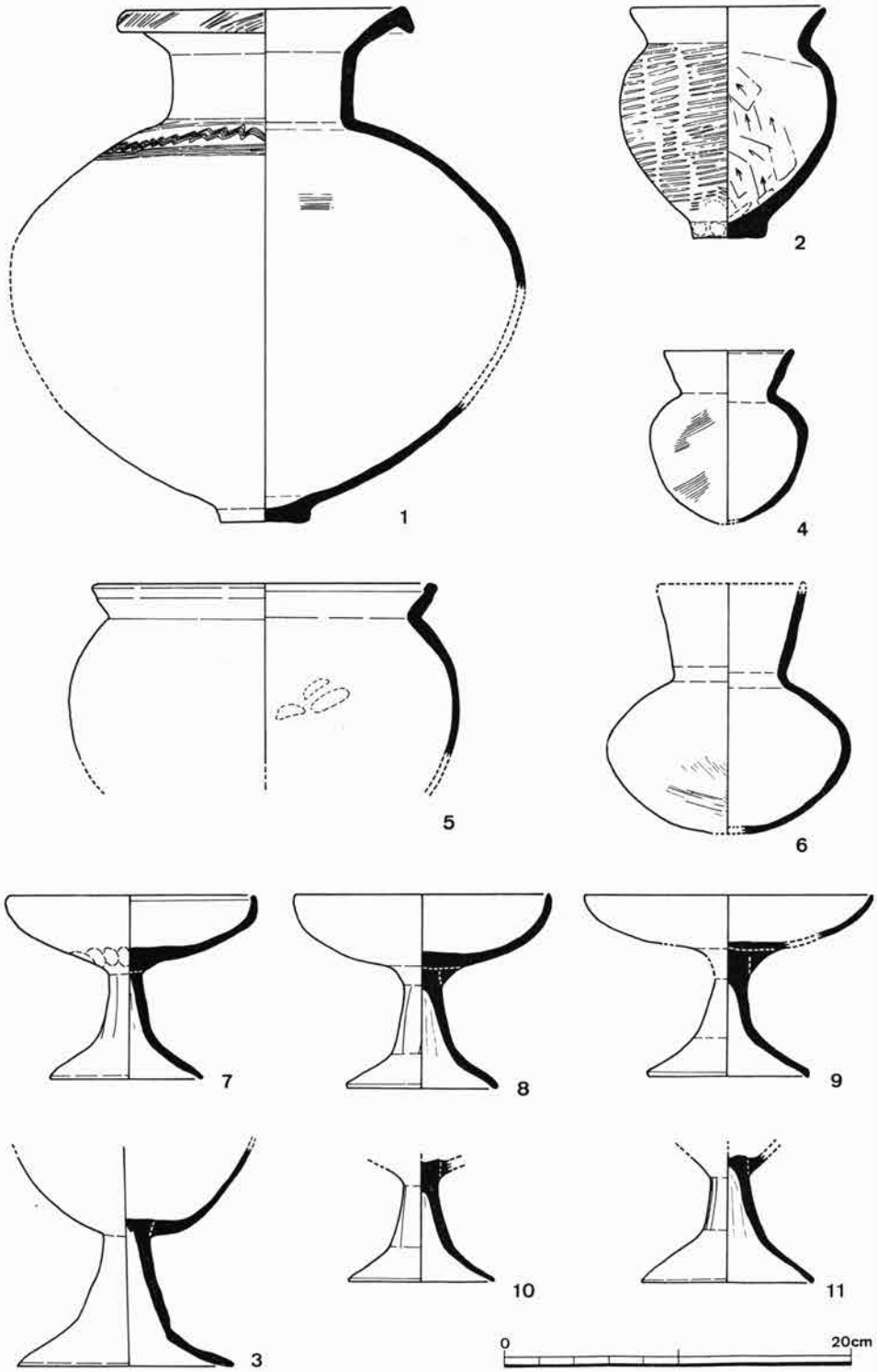
2は6bt，SK0601の北西に隣接したピット状の遺構からの出土である。突出した平底の底部から倒卵形の体部と，斜め上方に外反する口縁部よりなる。底部外面は指押さえによる整形ののち未調整。体部は，タタキ整形ののち未調整。タタキ原体の幅は，3cmほどと粗い。内面は，底部から頸部まで左上方へ傾くヘラ削り。口縁部は，内外面とも横ナデを施す(口径11cm・腹径12.5cm・器高13.2cm)。

3は34bt，SH3401からの出土である。中空の柱状部は斜め下方へのび，裾部は屈曲して大きく開き，端部は丸くおわる。杯部は端部を欠くが，椀状の体部をもつ。脚とは脚柱上端部に粘土紐を巻き上げ杯部を整形することで接合されている。脚柱内面上端には整形後の回転削りに用いた工具の支点になった穴が明瞭に残る(脚底径12.3cm・脚高7.5cm)。

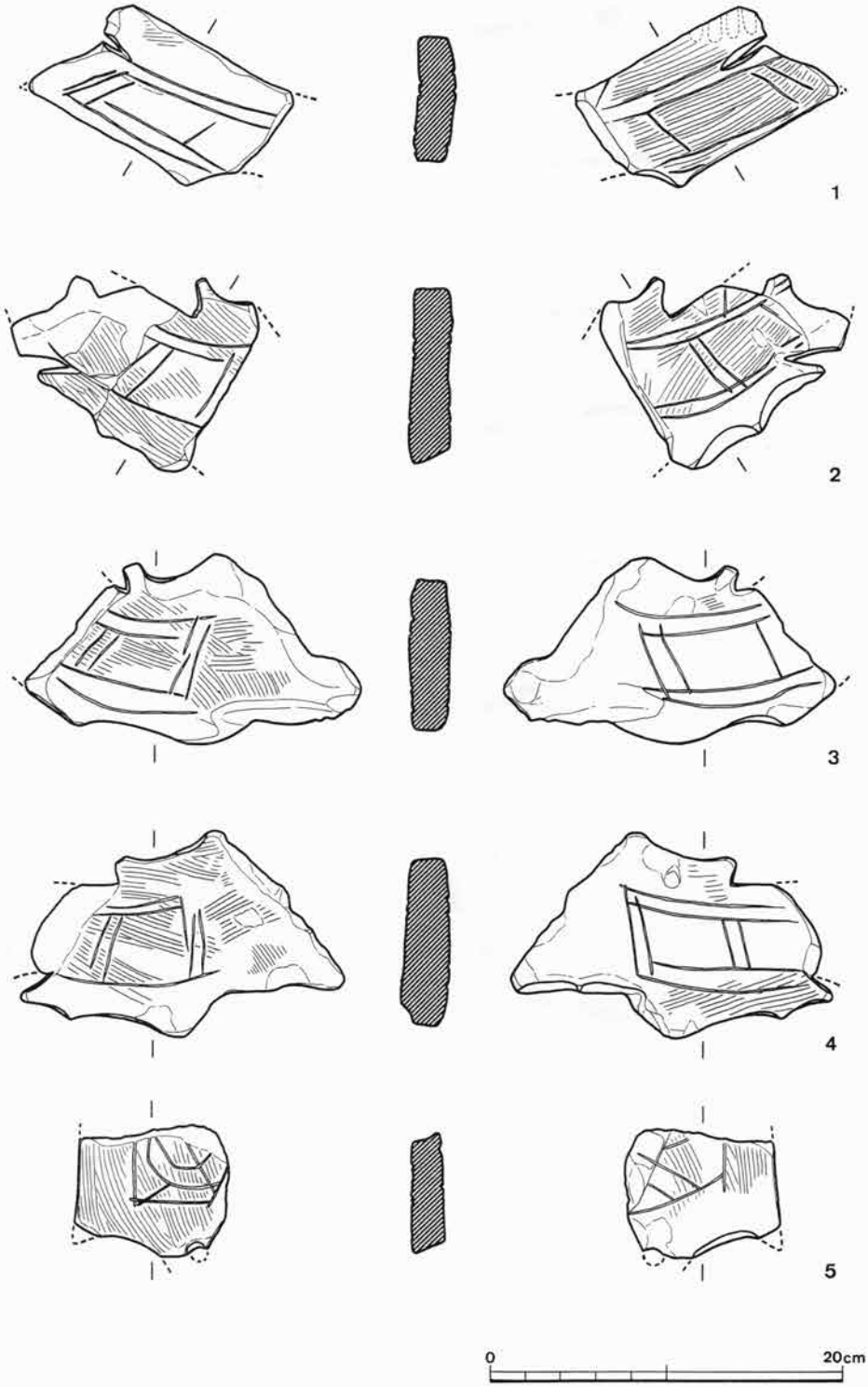
4は35bt，SH3501からの出土である。肩の張った球形の体部と，頸部で外湾したのち斜め上方に外反ぎみに立ち上がる口縁部とからなる。保存状態が悪く，観察困難であるが，体部外面にハケ調整の痕跡を留める(口径7.3cm・腹径9.2cm・器高10.0cm)。

5は8bt，SD0805からの出土である。球形の体部と，斜め上方へ立ち上がり，端部内面を肥厚させる口縁部からなる(口径19.3cm・腹径22.5cm)。

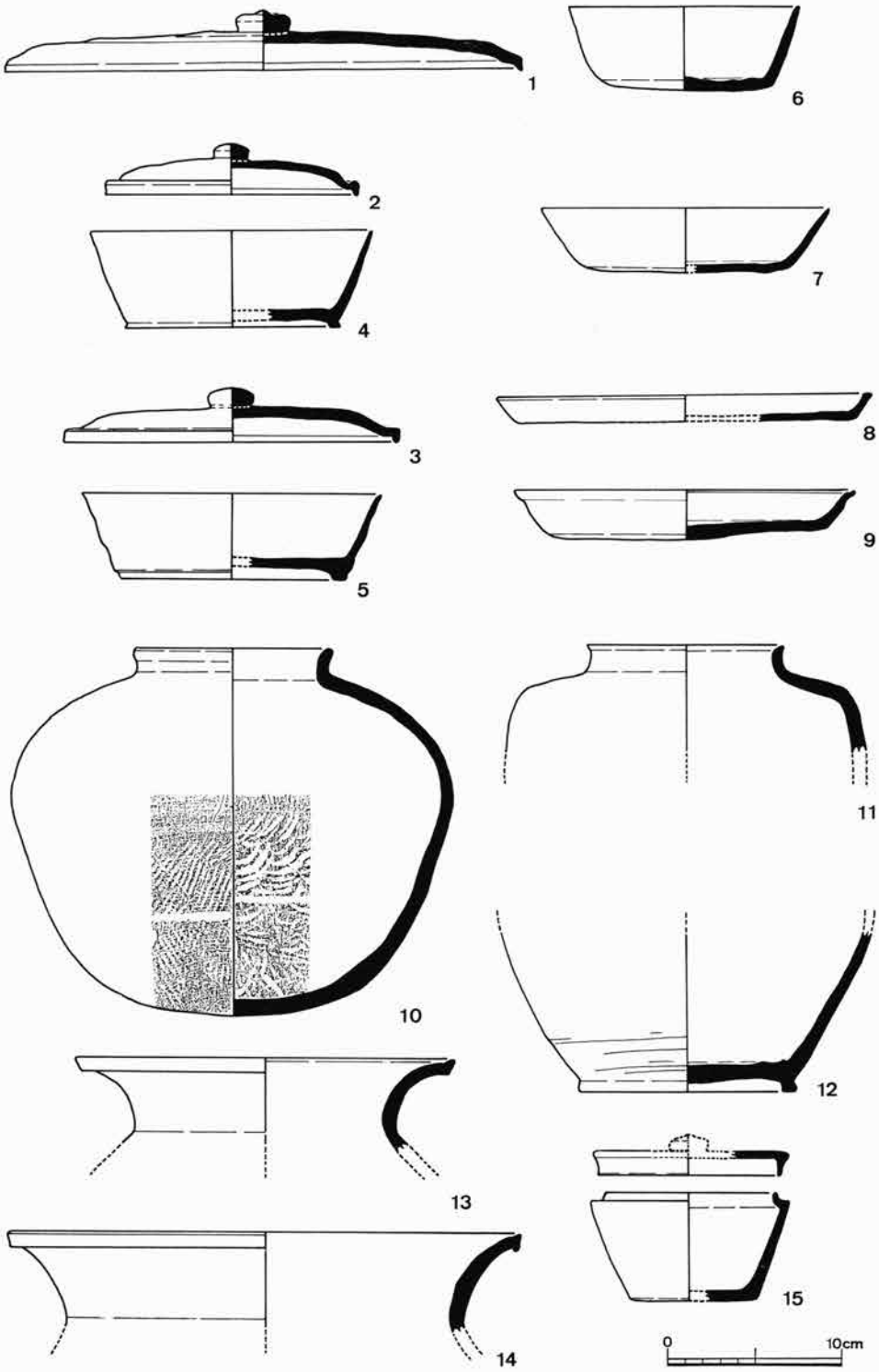
6～11は8bt，SK0803よりの出土である。直口壺6は，玉葱状の体部と直線的に外方へ立ち上がる口縁部とからなる。口縁端部を欠いている。保存状態が悪く，観察困難であるが，体部外面にハケ調整の痕跡を留める(推定口径8.5cm・腹径15.0cm・器高14.5cm)。7・8は，まるく内湾する口縁を持った杯部と，接合部から下方にむかってゆっくり拡がり，脚高の1/3でラッパ状に拡がる脚柱部からなる。杯部は，保存状態が悪く，観察困難であ



第66図　上人ケ平遺跡6・34・35bt出土遺物実測図



第67図　上人ケ平遺跡SD0805出土遺物実測図



第68図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図 (1)

るが，脚部との接合のため充塡した粘土の上から指押さえを施したもの(7)がある。脚部は，内面に柱状部をすぼめた時のシワがつくもの(7・8・11)があり，外面は，ヘラで縦にナデて稜のつくもの(7・8・10・11)がある。船橋O-Ⅱもしくは H-Ⅱ に併行するもの(注11)か(7．杯部口径15.2cm・器高10.7cm，8．杯部口径14.6cm・器高11.2cm，9．杯部口径16.5cm・器高10.5cm)。

第67図は，小型方墳の周濠SD0805よりの出土である。1～4は蓋形埴輪の立ち飾り部の破片である。厚さ2.2～2.6cmの粘土板造りで，周縁をヘラ状工具によって弧状に削り取り，成形したのち表裏にヘラ描きの線刻を施す。一次調整のハケは1cm当たり10本を単位とし，二次調整に用いたハケは13本を単位とする。5は，全体に小ぶりで，下部に直径12mm程度の円孔を焼成前に穿っている。あるいは蓋形埴輪の立ち飾り部の破片であるかもしれない。

第68～71図は，土器・瓦溜りSK1909よりの一括出土である。遺構内からは，奈良時代の須恵器・土師器・瓦などが出土している。出土した土器の器種は，平城宮の分類(注12)によると，須恵器杯A・B，同蓋A・B，皿A，壺A・B・C・D，甕A，平瓶，土師器杯A・B，皿A，高杯A，甕Aなどである。また，瓦では軒丸瓦，丸瓦，平瓦，瓦塼，器台状の瓦質製品などがある。金属製品では，鉄製鎌，鉄斧(手斧)，鋏，釘などが出土したが，ここでは須恵器・瓦について報告することとし，全体の報告については改めて行いたい。

須恵器杯Aは，平坦な底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部を有し，端部は丸くおさまる。高台は，底部外縁にとりつき，断面が外傾するもの(4)と，水平のもの(5)とがある(4．口径16.1cm・器高5.6cm，5．口径17.2cm・器高5.0cm)。

杯蓋には，平らな頂部と屈曲する縁部をもつA形態のもの(2・3)と，頂部からなだらかに端部に至り段をもたないB形態のもの(1)とがある(1．口径29.7cm，2．口径14.5cm，3．口径19.1cm)。

杯Aには，底径に対して器高がやや高いもの(6)と，口縁部が広がりぎみのもの(7)とがある(6．口径13.2cm・器高4.7cm，7．口径16.5cm・器高3.7cm)。

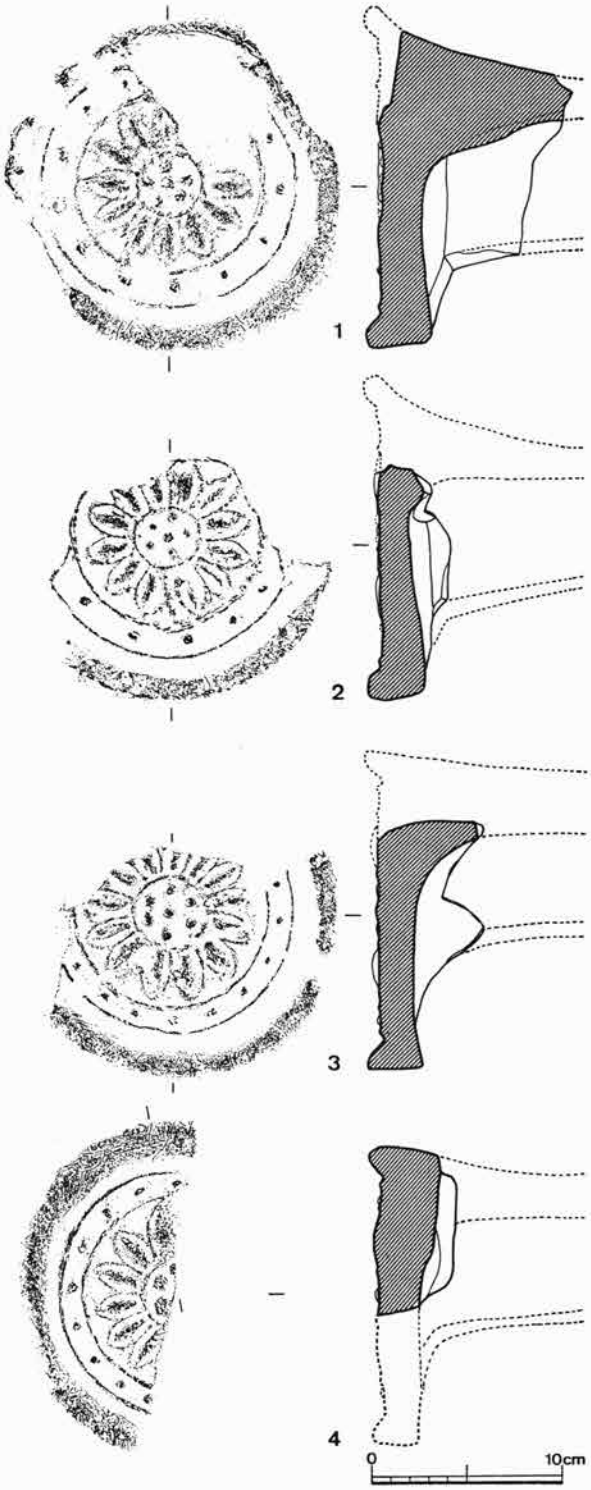
皿Cには，口縁端部が平坦で外傾するもの(8)と，土師器杯Aのように端部を内側に巻き込むもの(9)とがある(8．口径21.4cm・器高1.5cm，9．口径19.5cm・器高3.0cm)。

10・12は壺Aである。肩の張った胴部に直立する短い口縁をもち，高台を有する器形であるが，10は高台をもたない個体である(10．口径11.0cm・器高21.0cm・胴部径25.5cm，12．底径12.5cm)。

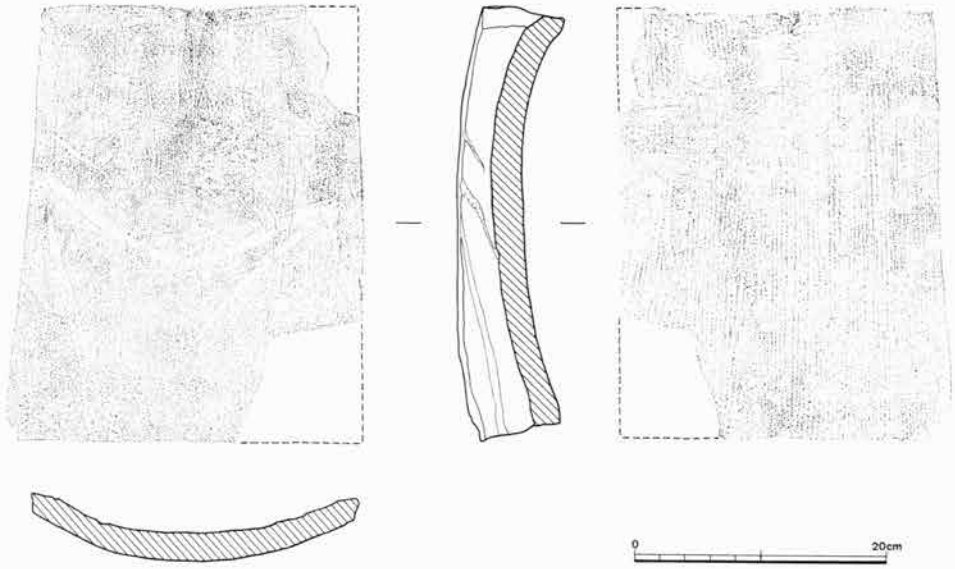
11・13・14はいずれも口縁部片であり，全体を窺うことはできない。11は，肩部で鈍い稜をなし短く外反ぎみに立ち上がる口縁をもつ壺Bである(口径11.2cm)。13は，肩部か

ら大きく外反し端部をつまみあげる広口の口縁で，壺Qにあたる(口径21. 8cm)。14は13同様の頸部から口縁端部を上下につまみだし面をもたせるもので，甕Aにあたる（口径29. 5cm)。15は壺Eの蓋と身である。内湾気味に斜め上方に開く胴部と，肩部に稜をもち短く外反する口縁からなる。蓋は，扁平な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなり，頂部に宝珠つまみをもつ(15. 口径9. 7cm・器高6. 2cm・蓋口径10. 4cm)。

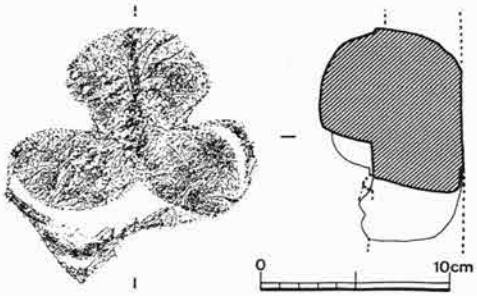
軒丸瓦は昭和59年度の調査で，平城宮瓦型式の6133A型式と6235A型式を確認している。今回の調査では，現在までに確認されている十数点の軒丸瓦の内で6133C型式を新たに確認した(第69図)。1・2は，内区の蓮子が1+5で弁数が12枚，3・4は，内区の蓮子が1+6で弁数が13枚ある。また，各々の欠落部分を拓影で接合し補うと，1・2の外区珠文数13，3・4の外区珠文数18と復元できる。これらの特徴により，前者を6133A型式，後者を6133C型式と判断した。また，それぞれの同形式



第69図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図 (2)



第70図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図 (3)



第71図　上人ケ平遺跡20bt出土遺物実測図

の瓦は，同笵であることも明らかとなった。さらに，平城宮出土軒瓦型式一覧掲載(注13)の同型式瓦とも概ね同笵であろうと考えられる。

平・丸瓦は最も多量に出土した遺物である。焼成時の焼け歪みや破損によって全体を窺えるものは少ないが，そのうち何点かは観察可能なものが出土している(第70図)。平瓦は全長34. 3cm，推定広端部幅推定28. 5cm，狭端部幅推定28. 5cm・厚さ2. 2cmを測る。凸面は縦位の縄叩きを施した後，未調整である。凹面は布の圧痕を留めるほかは，狭端部側で横方向にヘラ削りと，側面に1～2回の縦ケズリで調整している。第71図は，鬼瓦の鼻部片である。昭和59年度にも同型式のものが出土している。

4. ま　と　め

上人ケ平遺跡の調査は現在も進められている。丘陵の北端で発見された弥生時代末～古墳時代前期にかけての遺構・遺物や広域に広がりをもつ古墳時代の遺構・遺物は，この台地が早くから土地利用されていた状況を窺わせるものである。

昭和59年度の調査結果を踏まえてみると，検出した遺構群は，一定のまとまりとしてと

らえることができる。すなわち，(1)調査地北部の東尾根では，布留式土器の出土する住居跡や土坑などをまとまって検出した居住地域。(2)中央の尾根は，庄内期の壺が出土した墳墓や布留式土器を使用した土器棺を検出した墓域。(3)西尾根は，古墳時代中期の円墳・方墳・土坑などの一群を検出した墓域。さらに，５号墳の周辺でも方形墳等の遺構を検出しており，これらの古墳群は，５号墳から１号墳(前記西尾根)にむかってのびる丘陵の主脈に沿って脈々と造営されたものと考えられる。

個々の古墳の造営時期や，古墳群の広がりについては今後の調査・研究を待たねばならないが,方墳と円墳が群立する状況は,古墳造営期の社会的背景を特徴的に表わしているものと考えられる。上人ケ平５号墳は，昭和13年に一部調査され，帆立貝式の古墳であることが報告されている。(注14) 今回の試掘調査では，墳丘を取り巻く周濠と外堤状の遺構を確認した。上人ケ平古墳群の中にあって５号墳は，その規模や占地の状況からも盟主的位置をもった古墳であるといえる。

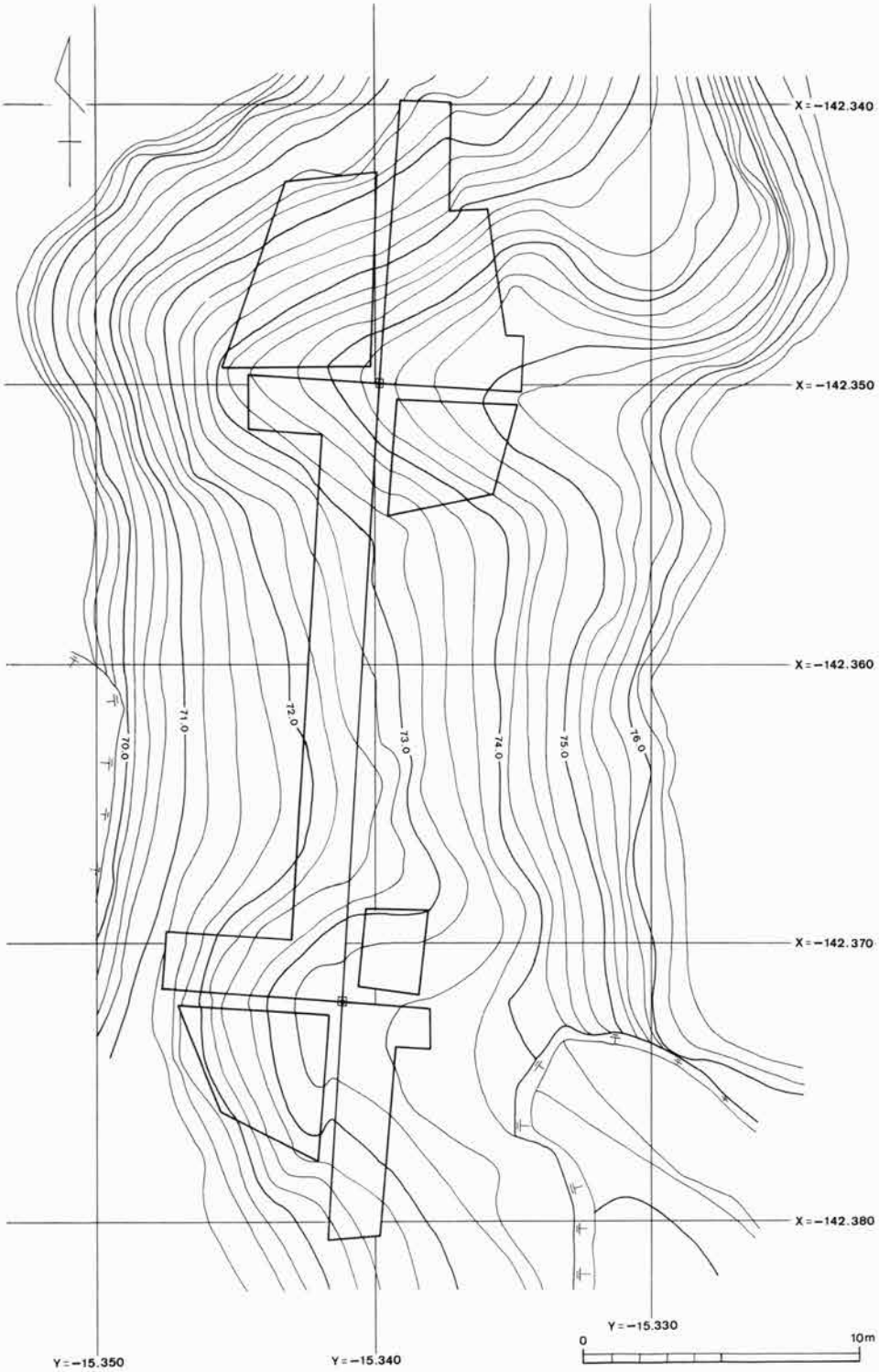
この古墳群を成立させた母体となる集落は，上人ケ平遺跡の北部に広がる瓦谷遺跡からさらに西部の平野部が想定できる。なぜならば,瓦谷遺跡39•48btの調査において確認された旧河道周辺部での当時の生活領域の一端が明らかになったからである。また，その生産基盤は，この瓦谷水系の水を制御していたことが想定されることにより，(注15) 広大な木津平野の南部に求めることができる。

奈良時代の遺構群は，遺跡の中央部で主に検出されている。これまでに検出された遺構からは，建物を中心とした東西，南北の溝による区画が設けられているようすが窺える。これらの遺構群は上下二層よりなり，さらに下層に古墳時代の遺構が前記の状況で埋もれている可能性が指摘できる。

奈良時代の遺構は，昭和61年度の調査では，さらに東に拡がる様相を示している。この遺跡には布目瓦が全域に散布しており，同時代の遺構が全域に広がる可能性がある。

これら奈良時代の遺構群は，(1)計画的に開発されたものと解釈されることや，(2)南に所在する市坂瓦窯で平城宮大膳職所用の瓦を焼いていること，などを考えあわせると，この瓦窯の操業にかかわる各種の施設としてこの台地上に営まれた可能性を指摘できるのではないだろうか。さらに，(3)一括投棄された土器群は，この台地の上で食生活が営まれていたことを示すものであり，瓦生産に携わった人々の生活の場として位置付けができる可能性をも考えておきたい。

（戸原和人）



第72図　第27・28地点(菩提1・2号墳)地形測量図

(3)　第27・28地点（菩提１・２号墳）

1.　調査の概要(第72・73図，図版第41・42)

第27・28地点(菩提１・２号墳)は，井関川を構成する一支流によって開析された一支谷を望む尾根の西側斜面に立地する。

調査は，27地点と28地点の中央を結ぶ線を主軸ラインとし，これを基準として四分割法によってトレンチを設定した。これによって古墳と考えられていたマウンドが，砂層・砂礫層・粘土層からなる自然地形であることが判明した。27地点と28地点の中間部では，尾根上から流れ出た雨水などによって，砂礫層が削られたようすを観察することができた。

調査は，昭和61年10月４日から11月26日まで実施し，発掘面積は180m²である。

2.　ま　と　め

以上の結果から，第27・28地点は当初考えられたような古墳ではなく，自然地形であることが判明した。

（荒川　史）

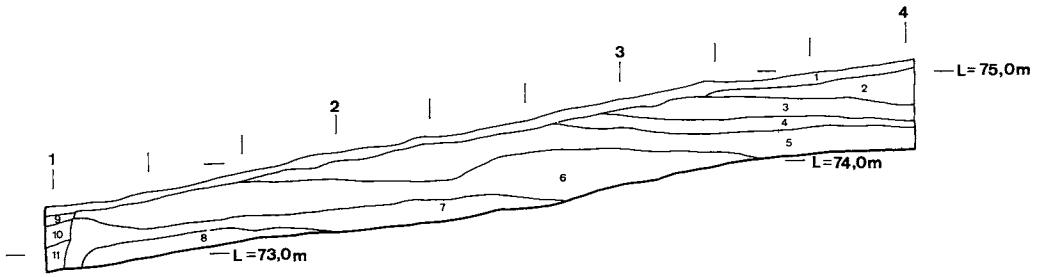
おわりに

昭和61年度に実施した調査成果の概略は，既述したとおりである。とりわけ瓦谷遺跡・上人ケ平遺跡で検出した古墳時代の諸遺構・諸遺物は，本地域の古墳時代前半期の歴史的様相を考察する上で，重要な意義を有している。すなわち，木津川を挟んだ北岸に所在する相楽郡山城町椿井大塚山古墳が築造されて以後，土師七ツ塚古墳群出現までの空白期間を正に充塡することを意味し，椿井大塚山古墳の多量の埋納鏡が示す政治的権力がその後どのような解体過程をたどったのか，また本地域の歴史的役割がいかに変貌していったのかを解明する上での重要な手懸りを提供してくれているものと高く評価できよう。それはまた奈良山丘陵と表裏の関係にある本丘陵が，奈良県佐紀盾列古墳群などに代表される大和政権の一側面をも考究する際に重要な位置を占めていると言えよう。

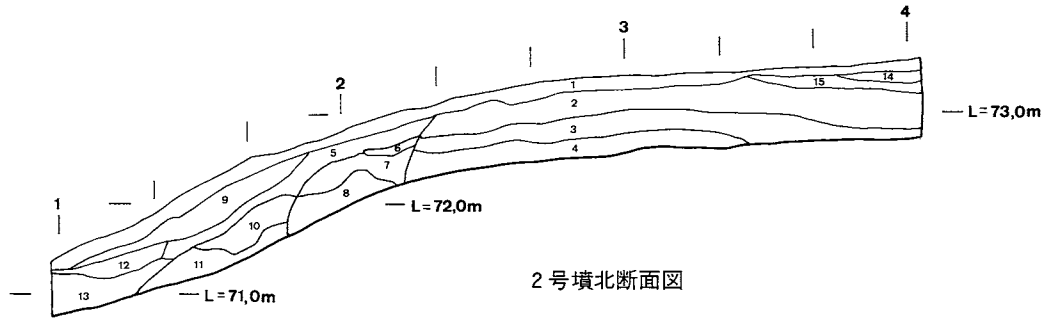
断片的な試掘調査の成果ではあるが，こうした大きな歴史的視点に立脚して今後の調査に対処していきたい。そのためには奈良県側との共同研究を強力に推進していく必要があろう。

最後に，調査に協力頂いた地元関係者並び諸機関に対して深謝すると共に，今後も引き続き御指導・御鞭撻をお願いして末尾にかえたいと思う。

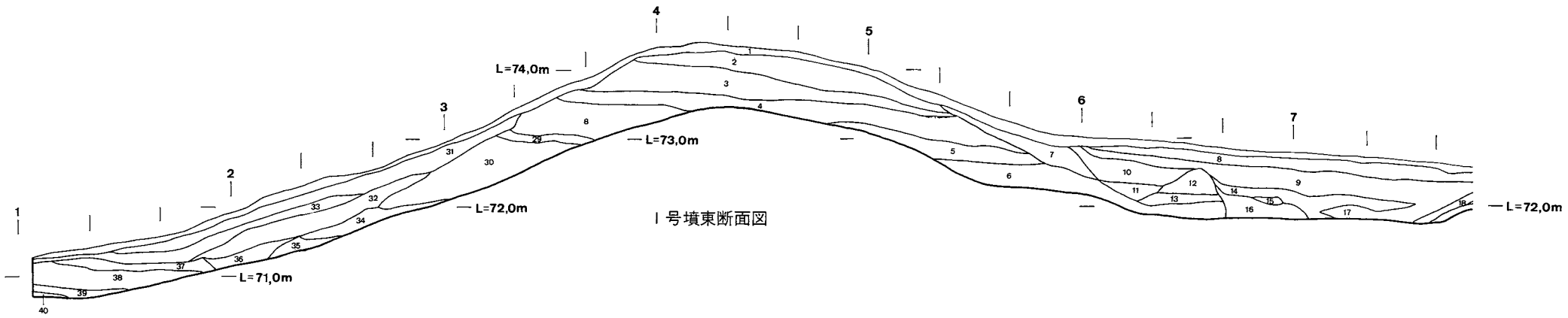
（松井　忠春）



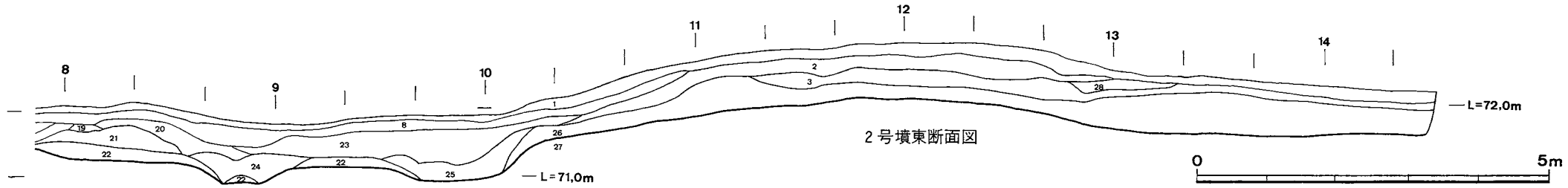
1号墳北断面図



2号墳北断面図



1号墳東断面図



2号墳東断面図

第73図　第27・28地点(菩提1・2号墳)断面実測図

1号墳・2号墳東断面図
1.黒灰色腐植土（表土）
2.淡茶褐色粗砂土（礫混、径5cmの亜円礫）
3.淡黄褐色粗砂礫土（礫少混、径5cmの亜円礫）
4.淡黄白色粗砂（小礫少混）
5.淡黄褐色粗砂礫
6.淡黄白色砂礫（淡灰色砂と淡黄白色粗砂礫との互層）
7.暗黄褐色土（径10cmの大礫、数点混入）
8.茶灰色土（黄色味、やや粘質）
9.黄灰色土（やや粘質）
10.(暗)黄灰色土（やや粘質）※8～10は近似
11.(暗)茶灰色土
12.黄茶色混礫土（礫径2cm）
13.淡黄茶色土
14.(暗)黄灰色土（小礫混）
15.茶灰色土
16.暗茶灰色土（やや粘質）
17.16とほぼ同質（やや褐色っぽい）
18.黄茶色粗砂礫土（径3cm）
19.黄白色砂
20.茶灰色土（粗砂礫径2cm少混）
21.淡黄褐色粗砂礫
22.淡黄灰色粗砂礫
23.暗茶灰色土（やや粘質）
24.暗茶灰色混礫土（礫径3cm）
25.暗茶灰色混礫土（礫径4cm、暗黄茶色粗砂混）
26.黄茶色砂質土
27.淡黄白色粗砂礫土
28.茶褐色土（粗砂礫少混）
29.白色砂
30.淡黄褐色砂礫
31.茶褐色土（礫少混）
32.淡茶褐色土（礫多く含む）
33.茶褐色土
34.淡黄褐色砂礫
35.淡黄褐色砂
36.淡茶褐色土（礫を多く含む）
37.淡黄褐色砂礫
38.白色砂礫
39.淡黒褐色砂
40.灰白色粘土

1号墳北断面図
1.表土（黒色腐植土）
2.濃黄褐色砂質土（2～3cmの小礫を少し含む）
3.白色砂礫（1～10cmの礫を多数含む）
4.淡黄褐色砂
5.淡黄褐色砂礫（1～4cmの礫を多数含む）
6.白色砂礫（0.3～0.5cmの礫を多数含む）
7.白色砂礫（1～7cmの礫を多数含む）
8.淡黄褐色砂礫（0.5～3cmの礫を少し含む）
9.淡茶褐色土
10.茶褐色土
11.淡茶褐色土

2号墳北断面図
1.黒灰色腐植土
2.淡茶褐色粗砂土
3.淡黄褐色粗砂礫土
4.淡黄白色粗砂土
5.暗黄茶色粘質砂土
6.赤褐色土
7.淡茶灰色土（径3cmの礫が少し混じる）
8.淡黄白色粗砂土
9.黄茶色粘質砂土
10.暗黄褐色粘質砂土
11.暗茶灰色粘質砂土
12.暗茶褐色土（径3cmの礫が少し混じる）
13.茶灰色粘質砂土（礫を少し含む）
14.淡黄色粘質細砂
15.茶色砂土（酸化）

注1　黒坪一樹・小山雅人・戸原和人・松井忠春「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
小山雅人・戸原和人・松井忠春「木津地区所在遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

注2　現地調査に参加していただいた方々は以下の通りである(敬称略)。
調査補助員　石田真一・岩前忠英・岩前良幸・植村滋人・大倉伸也・大谷健二・河野一臣・兼定信和・北埜善史・木下年史・木村和彦・小泉裕司・滋井秀明・滋井雅明・武田一郎・多田誠一・辰巳龍郎・田中達也・田中康夫・細川貴久・松田嘉之・水野哲郎・宮本純二・森本祐一・吉川啓太

注3　瓦谷古墳に関しては，1984年に地形測量調査が行われ，直径24.0～34.0m，高さ3.5～5.5mの規模を有する円墳とされる(『木津町史』資料篇Ⅰ　木津町　1984年)。

注4　その内訳は，芝ケ原遺跡6基，正道遺跡6基，宮ノ平遺跡2基，芝山遺跡4基。

注5　岡本遺跡(現地説明会資料から)

注6　大槻真純「内田山古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982
松井忠春・小山雅人・戸原和人「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

注7　同じ南山城圏内では飯岡車塚で楕円断面の埴輪が樹立された状態で検出されている。吉村正親「飯岡車塚古墳発掘調査報告」〔周溝部調査〕(綴喜古文化研究会　1976)

注8　その内訳は，車塚4基，赤塚1基，芝ケ原遺跡5基，宮ノ平遺跡1基，下大谷1号墳1基。

注9　金比羅山古墳3基

注10　注1　昭和59年度調査

注11　「河内船橋遺跡出土遺物の研究2」(『大阪府文化財調査報告書』第11輯　大阪府教育委員会)　1962

注12　「平城宮発掘調査報告Ⅺ」(『奈良国立文化財研究所30周年記念学報』第40冊　奈良国立文化財研究所)　1982

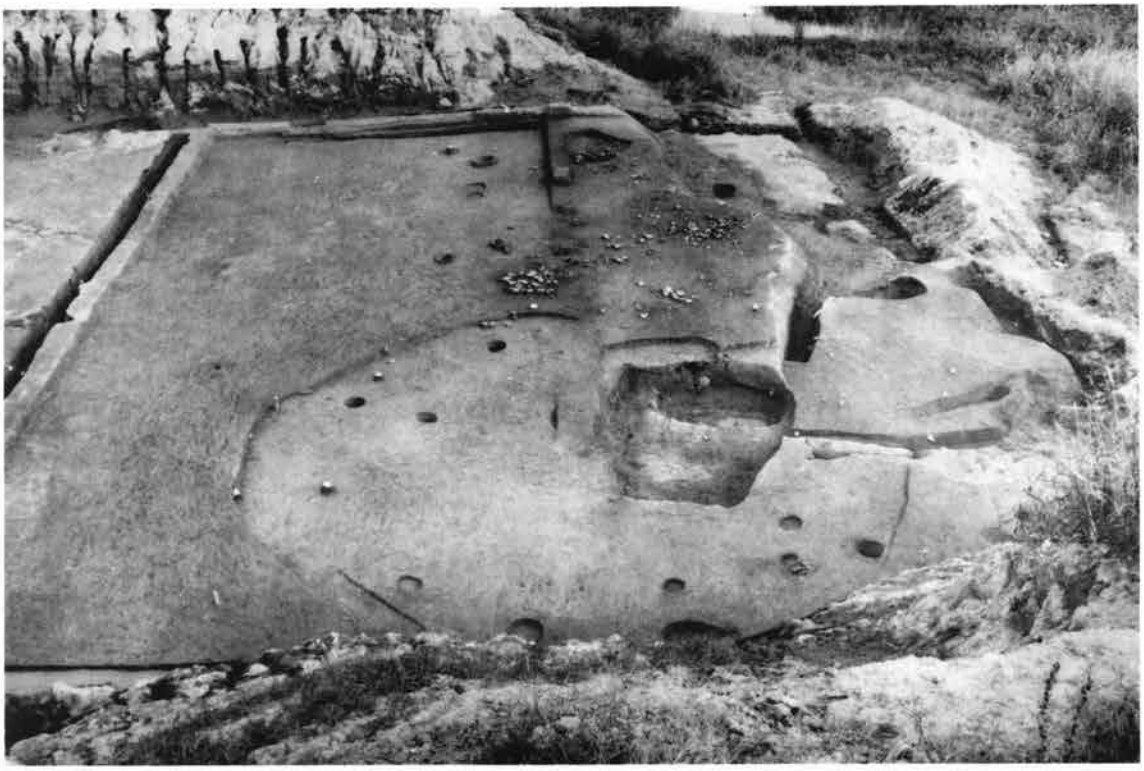
注13　『平城宮出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所　1978

注14　梅原末治「木津市坂の一古墳」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査會報告』第20冊　京都府)　1940

注15　本文77頁，瓦谷遺跡39・48bt(まとめ)の項による。

図　　版

図版第1　志高遺跡

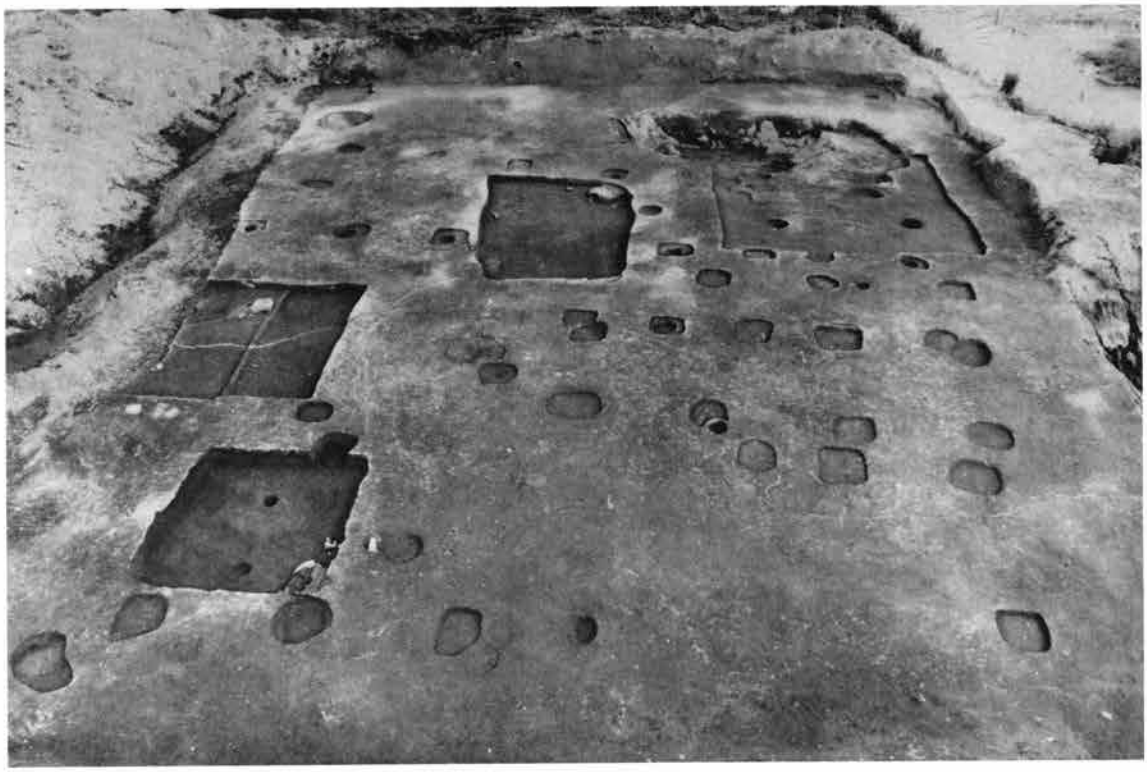


(1)　A地区縄文時代前期後葉全景（北西から）

(2)　縄文時代前期遺物出土状況（左・深鉢形土器，右・玦状耳飾り）

図版第2　志高遺跡

(1)　A地区弥生時代全景（北西から）



(2)　A地区方形竪穴式住居跡群（北西から）

図版第3　志高遺跡

(1)　A地区掘立柱建物跡群（下層・北西から）

(2)　A地区掘立柱建物跡群（上層・北東から）

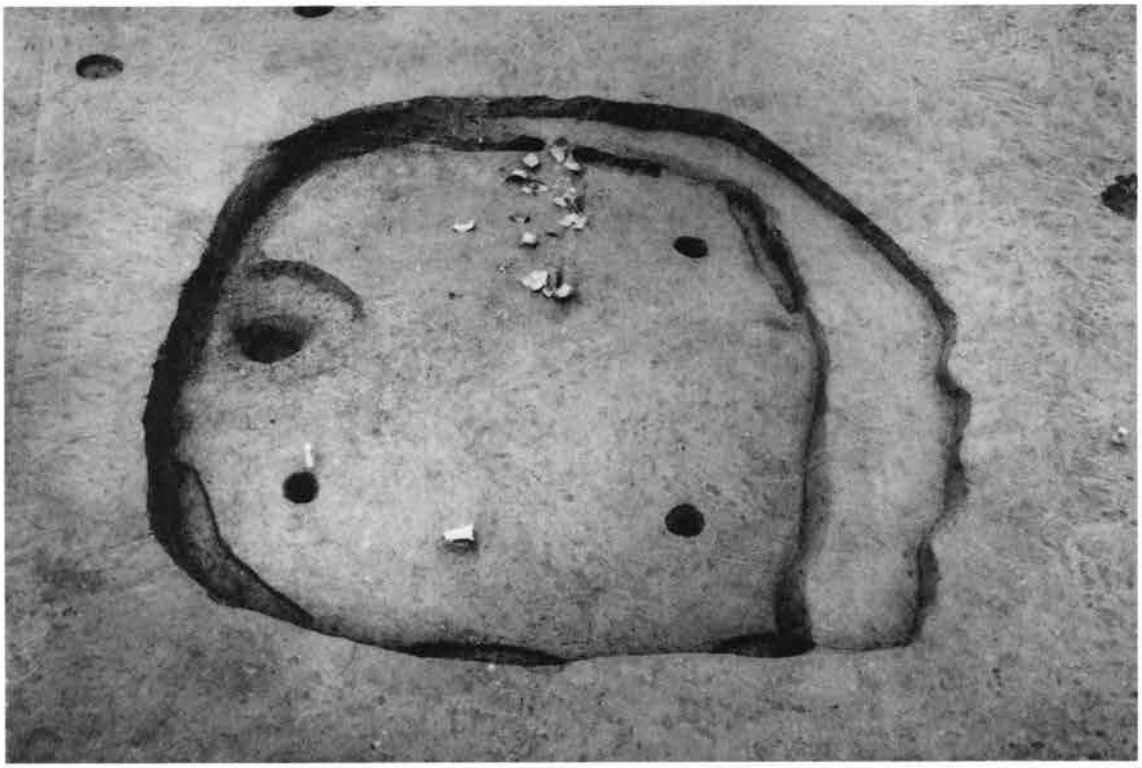
図版第4　志高遺跡

(1)　B地区弥生時代墳墓群全景（南東から）

(2)　B地区弥生時代全景（南から：手前がSX86231）

図版第5　志高遺跡

(1)　C地区全景（北東から）



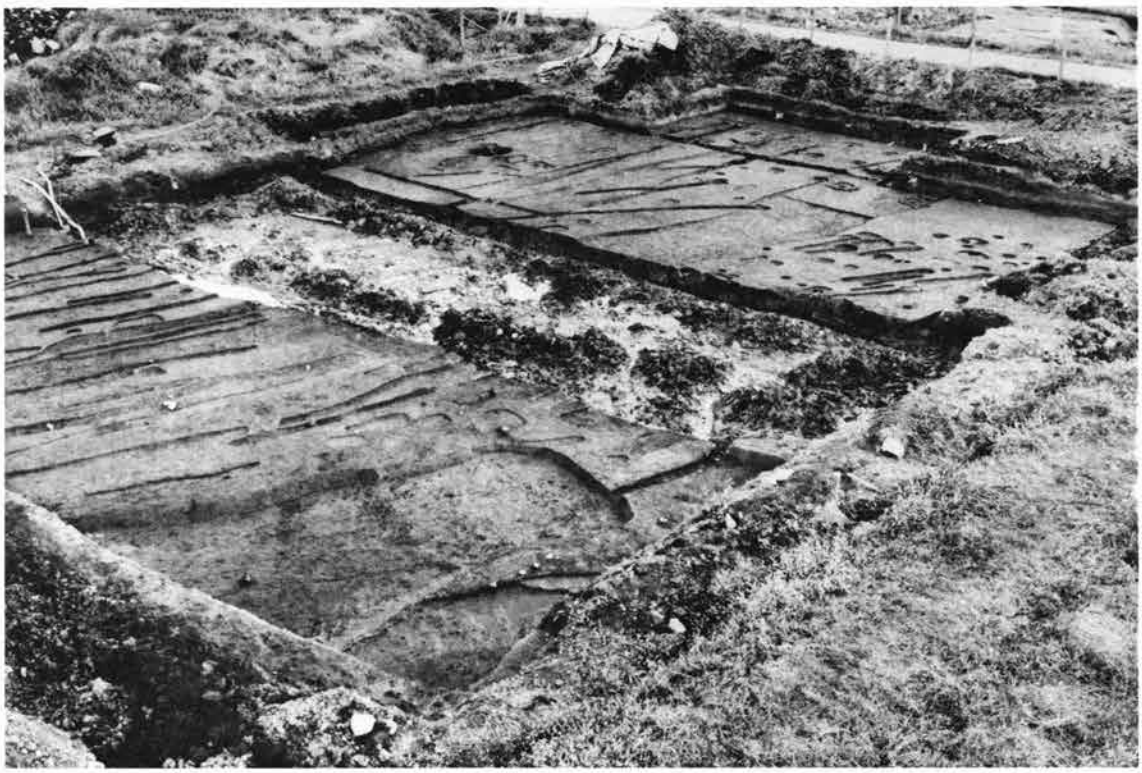
(2)　竪穴式住居跡（S H86246：北東から）

図版第6　千代川遺跡第12次

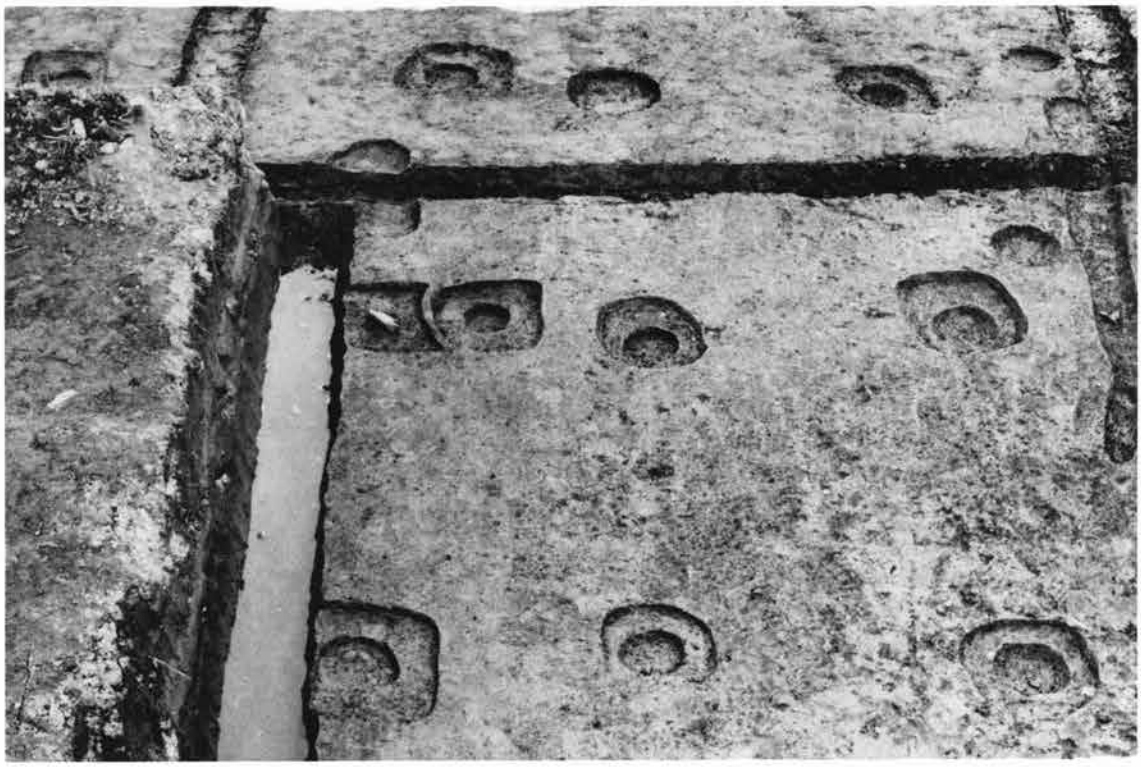
(1) 調査地遠景（南からの空中写真）

(2) 調査地全景（東からの空中写真）

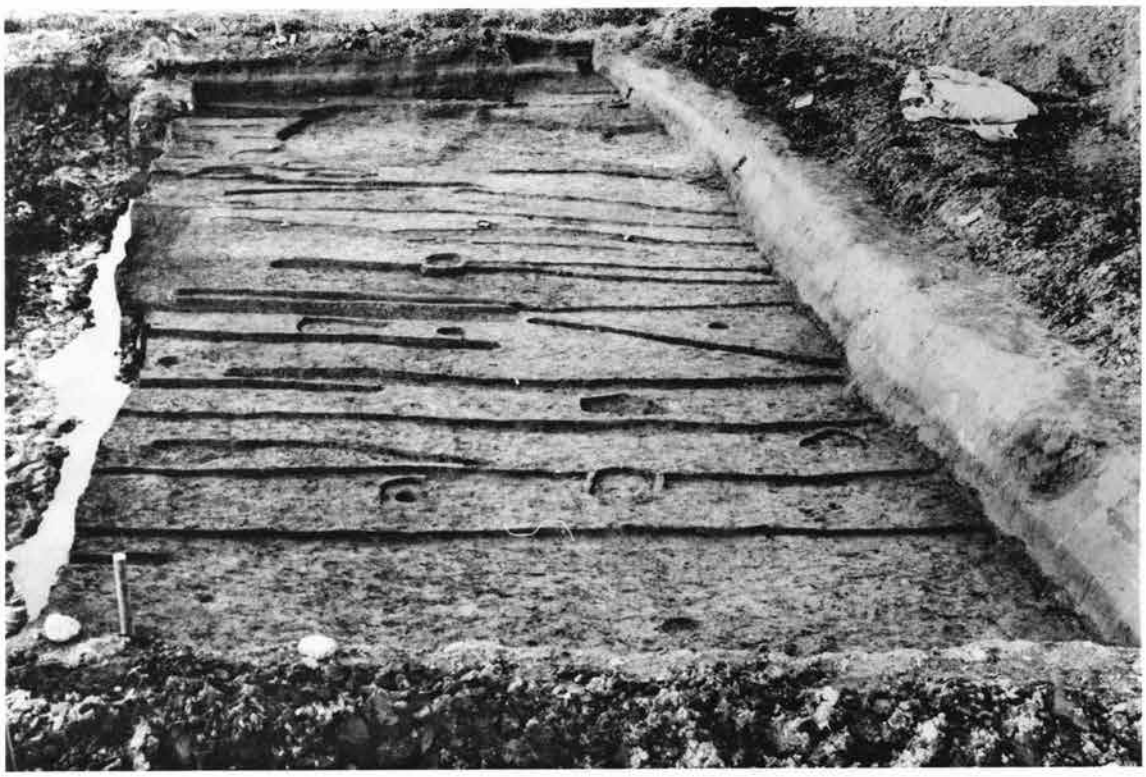
図版第７　　千代川遺跡第12次



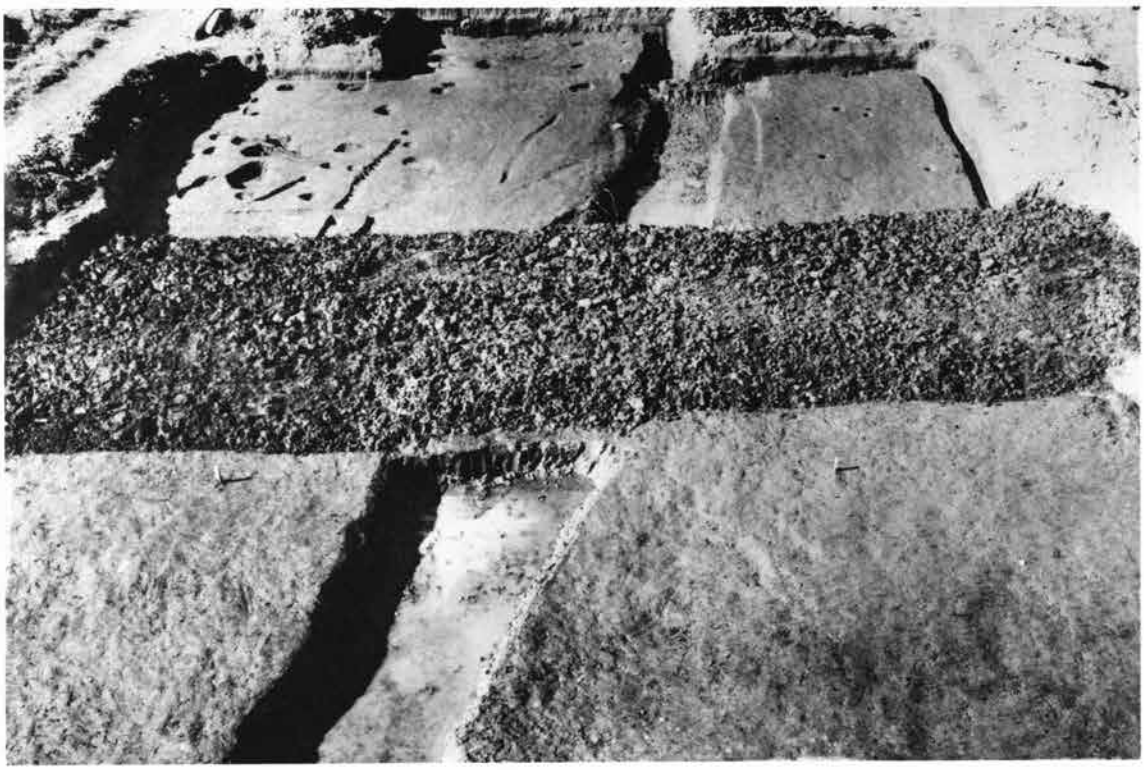
(1)　５トレンチ(奈良時代遺構面)全景（北東から）



(2)　掘立柱建物跡(ＳＢ12074)検出状況（西から）



(1)　５トレンチ東半部奈良時代素掘り溝群検出状況（南から）



(2)　５トレンチ(弥生時代遺構面)全景（東から）

(1)　６トレンチ全景（南東から）

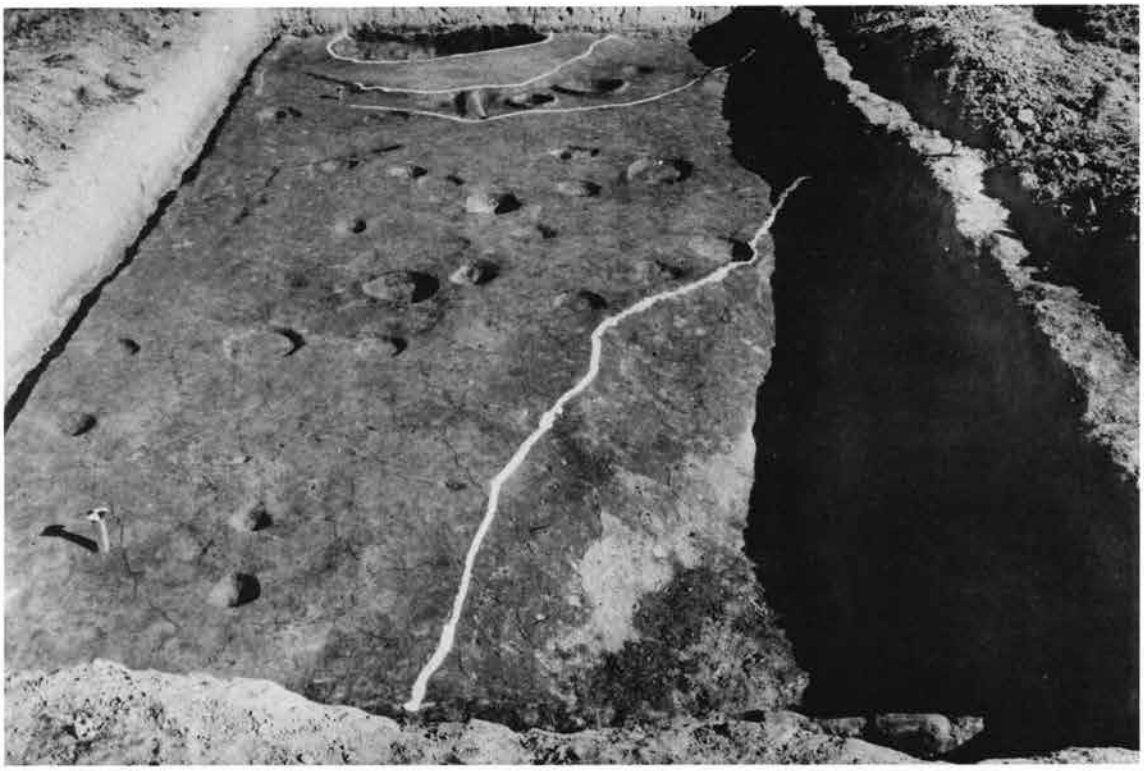
(2)　掘立柱建物跡（ＳＢ12107）検出状況（西から）

(1)　掘立柱建物跡(ＳＢ12108・12109)検出状況（北から）

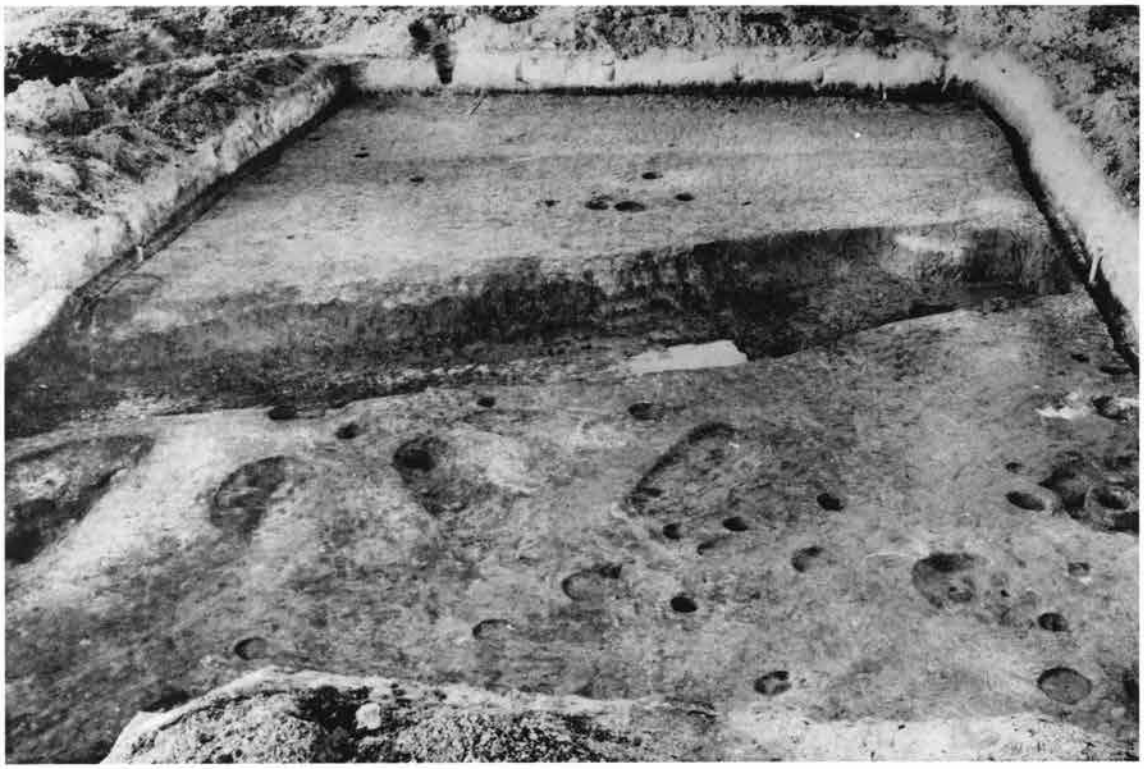
(2)　土坑(ＳＫ12076)検出状況（北から）

(1)　7トレンチ全景（南から）

(2)　ＳＤ12121遺物出土状況（西から）



(1)　8トレンチ全景（西から）

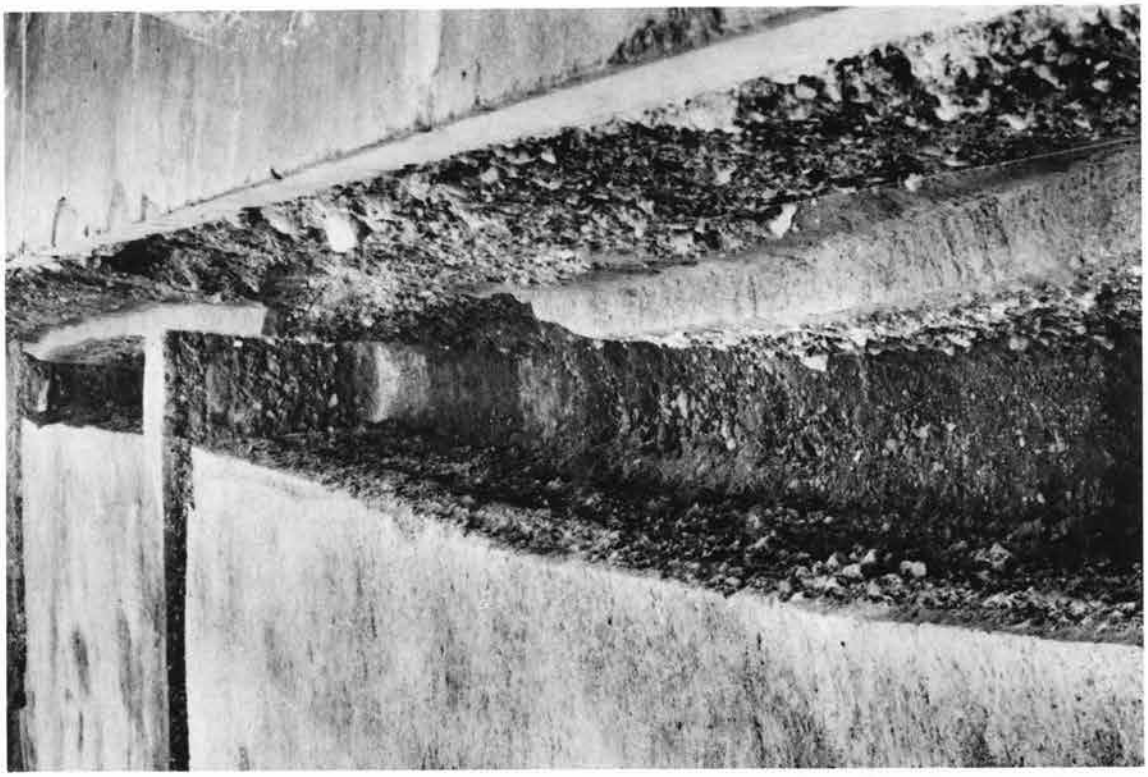


(2)　9トレンチ全景（南から）

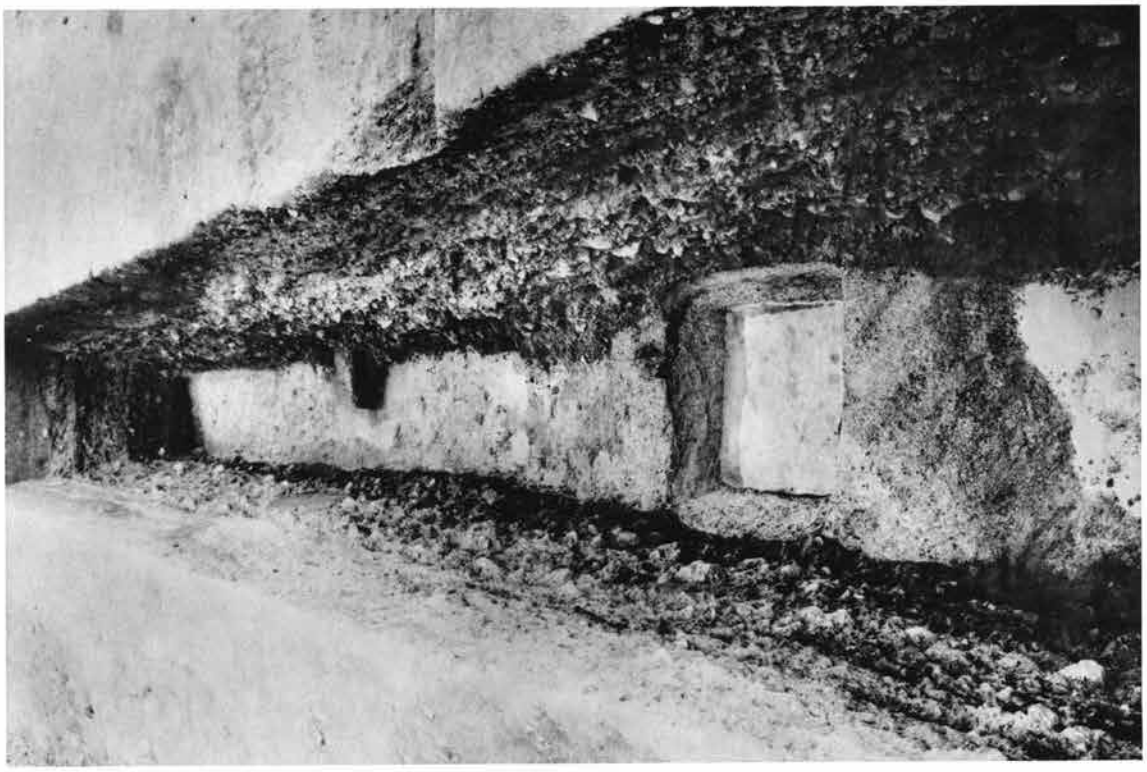
図版第13　　長岡宮跡第185次

(1)　調査前全景（東から）

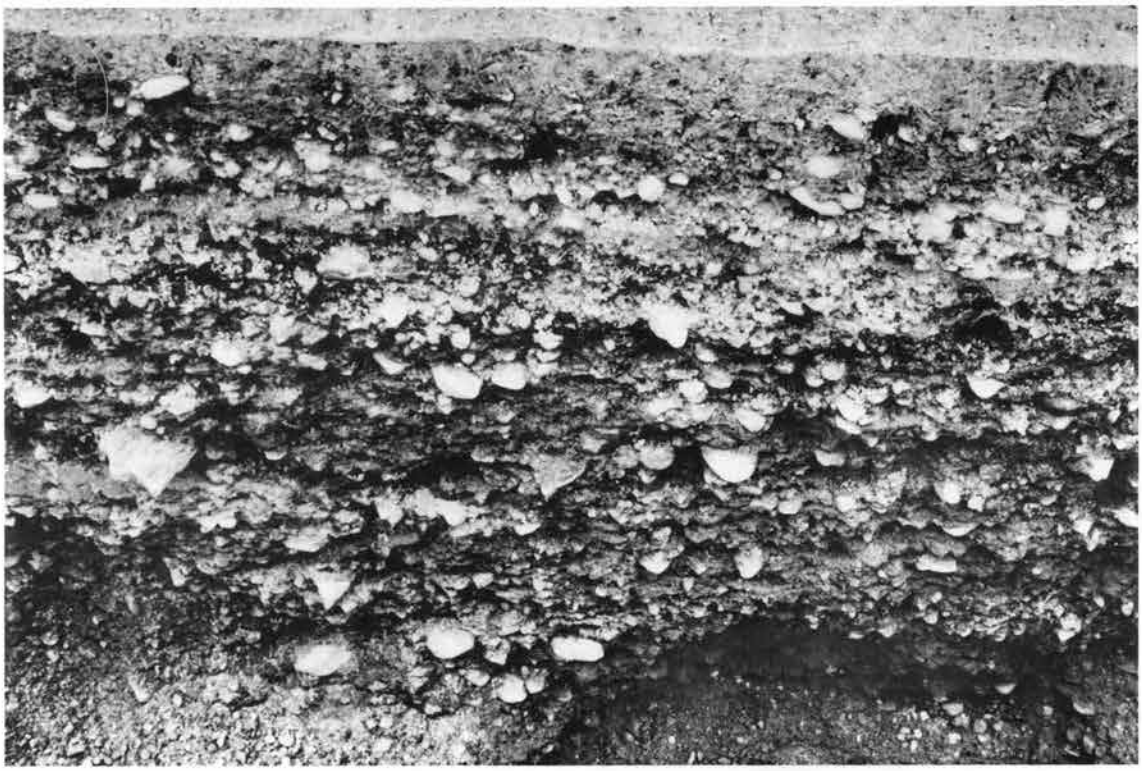
(2)　トレンチ全景（東から）



(2) トレンチ1・2・3（西から）



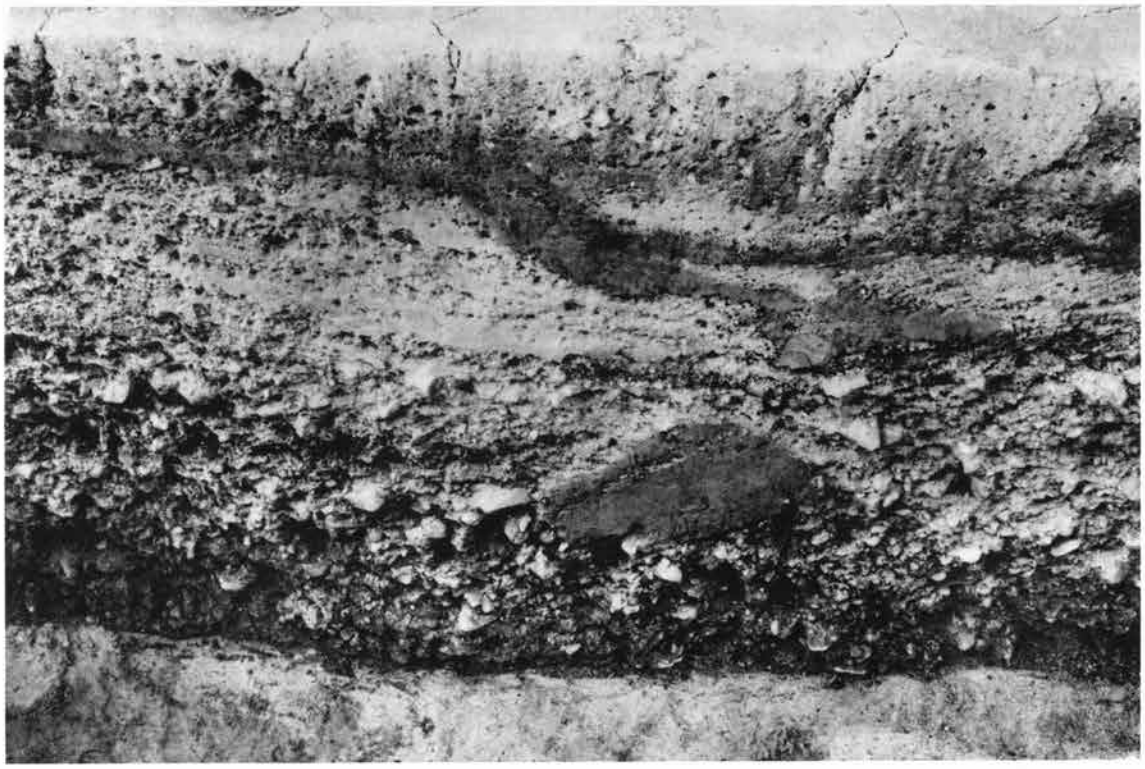
(1) トレンチ4（西から）



(1) トレンチ1断面（北から）

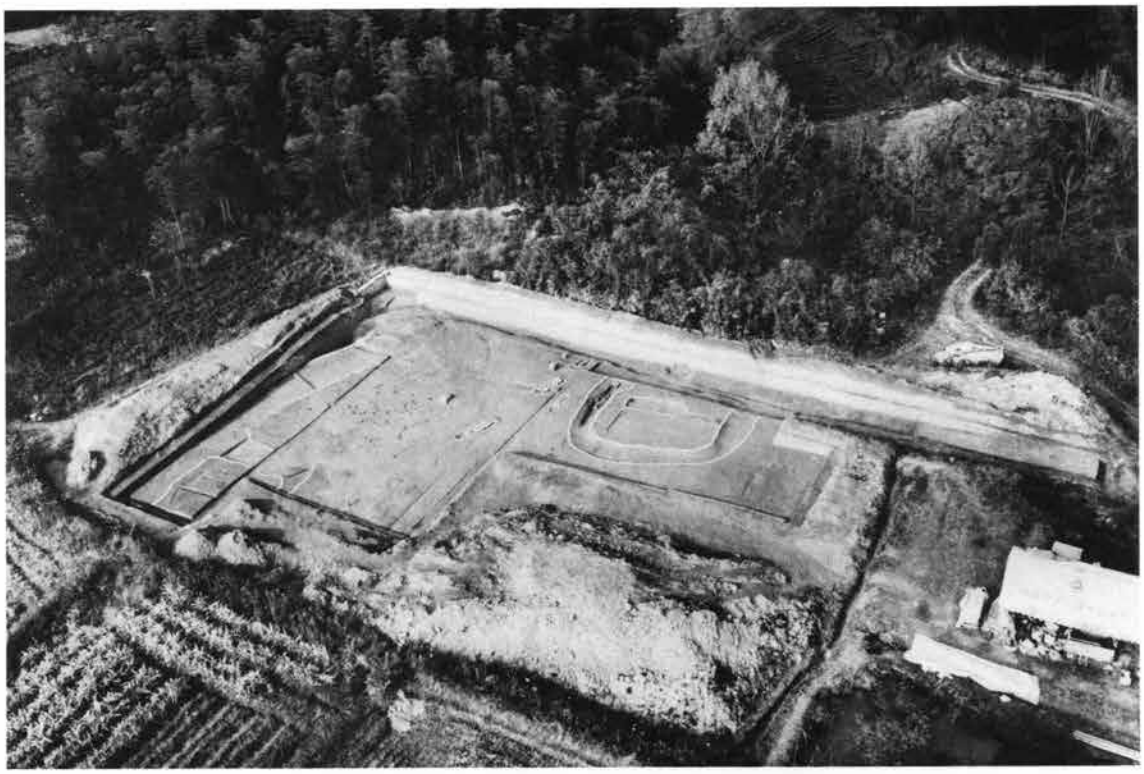
(2) トレンチ2断面（北から）

(1) トレンチ3断面（西から）

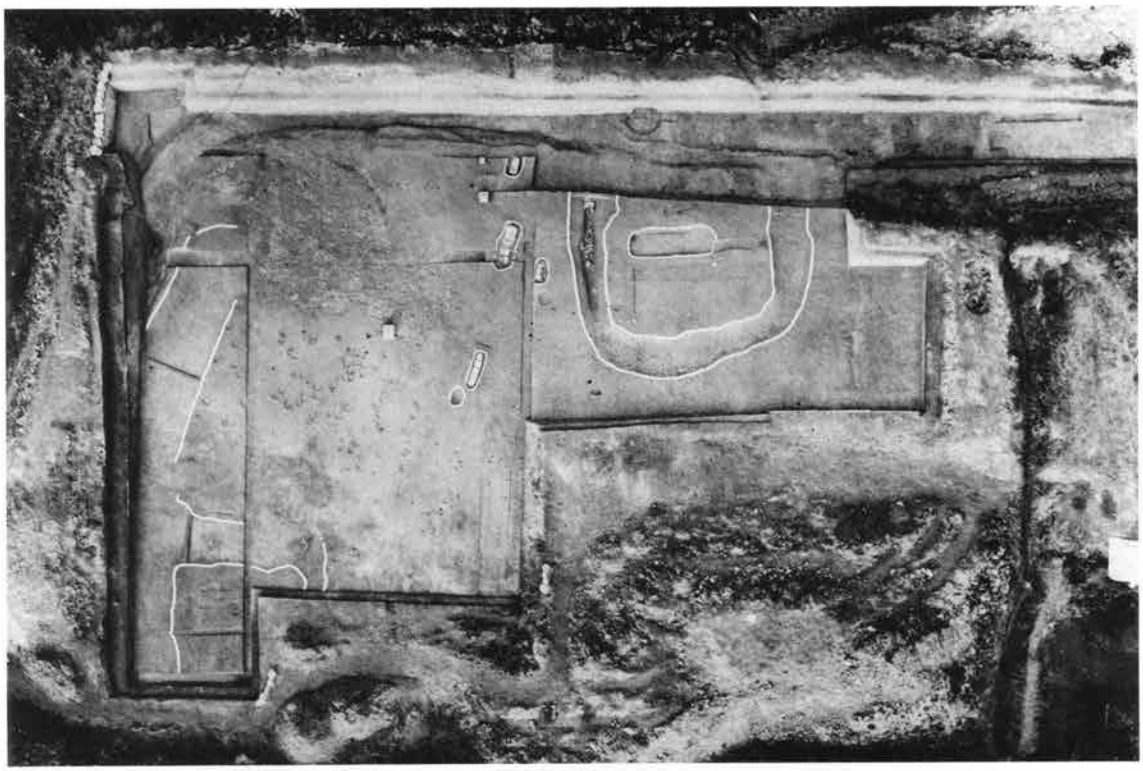


(2) トレンチ4断面（北から）

図版第17　瓦谷遺跡



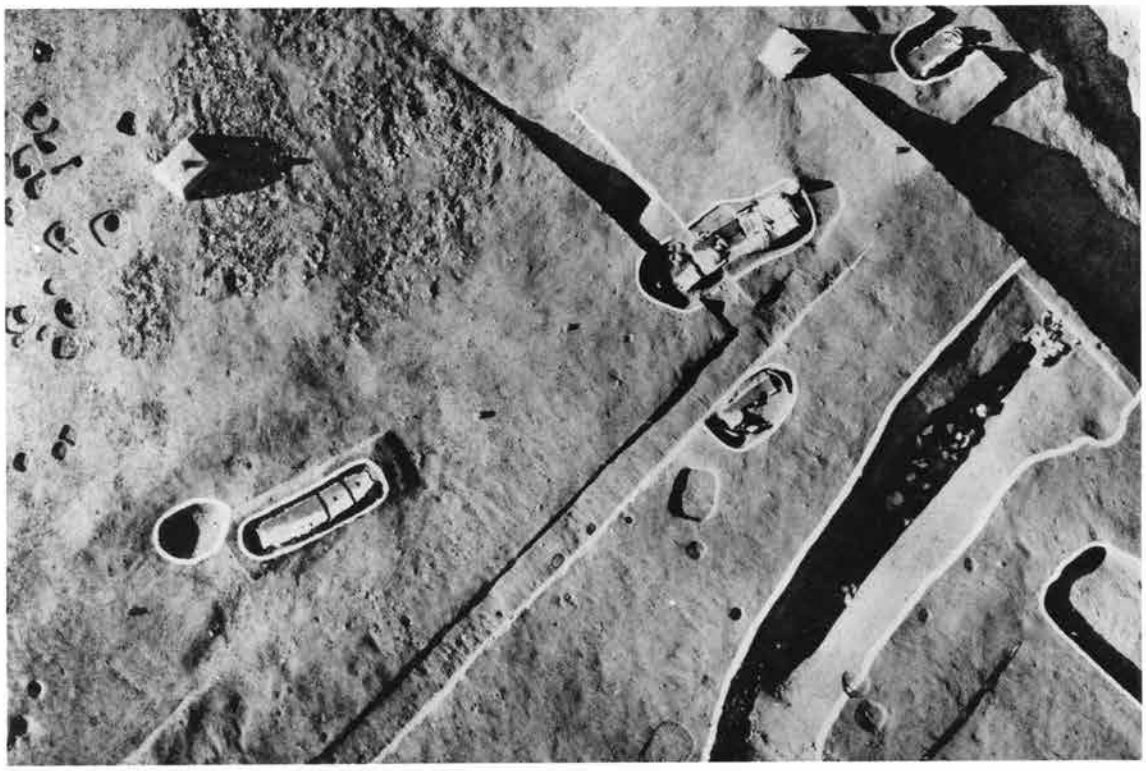
(1) 瓦谷遺跡20bt全景－1（南南東から）



(2) 瓦谷遺跡20bt全景－2（上方が北）

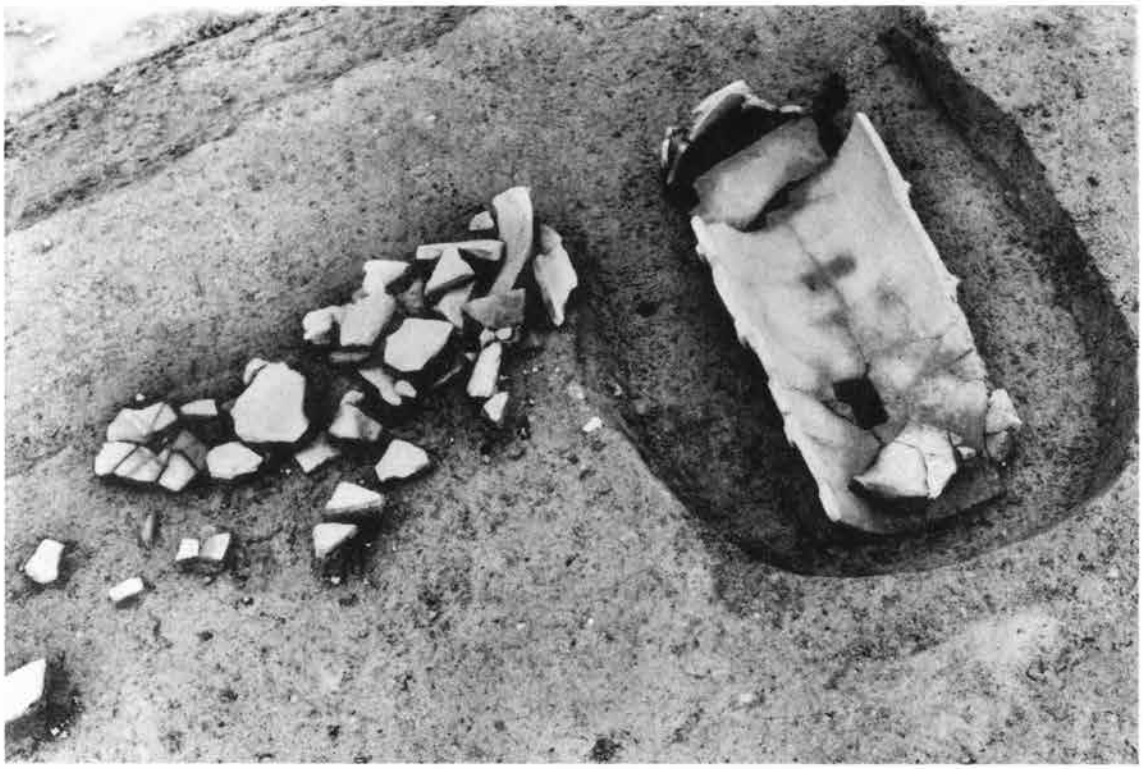
図版第18　瓦谷遺跡

(1)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2001と埴輪棺群（西から）

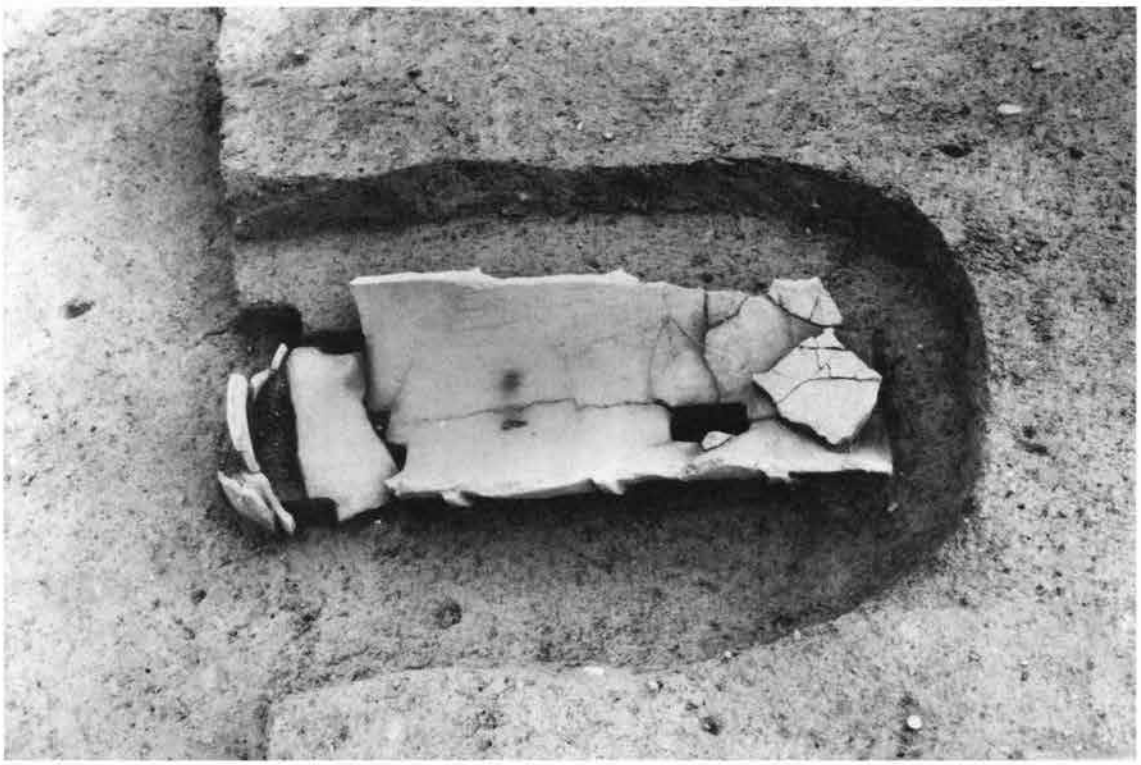


(2)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2001西辺溝と埴輪棺群（右上方が北）

図版第19　瓦谷遺跡

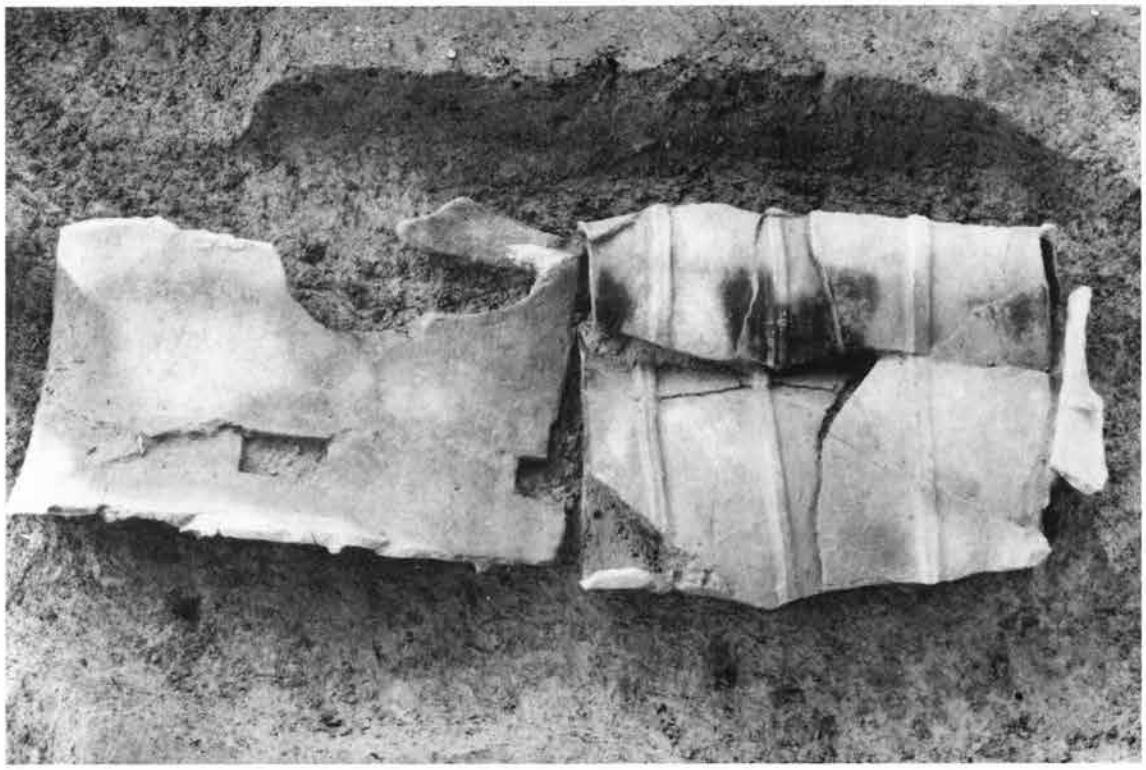


(1) 瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2002－１（移動埴輪片を残した状態，南西から）



(2) 瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2002－２（西から）

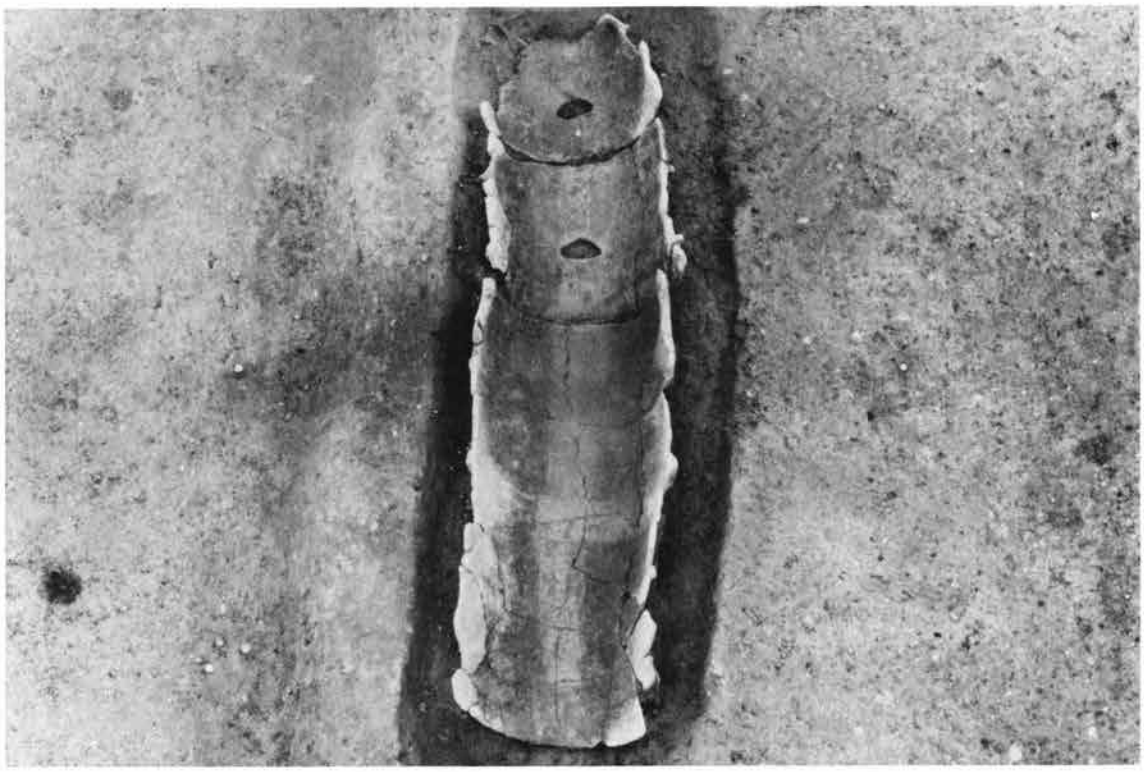
図版第20　瓦谷遺跡



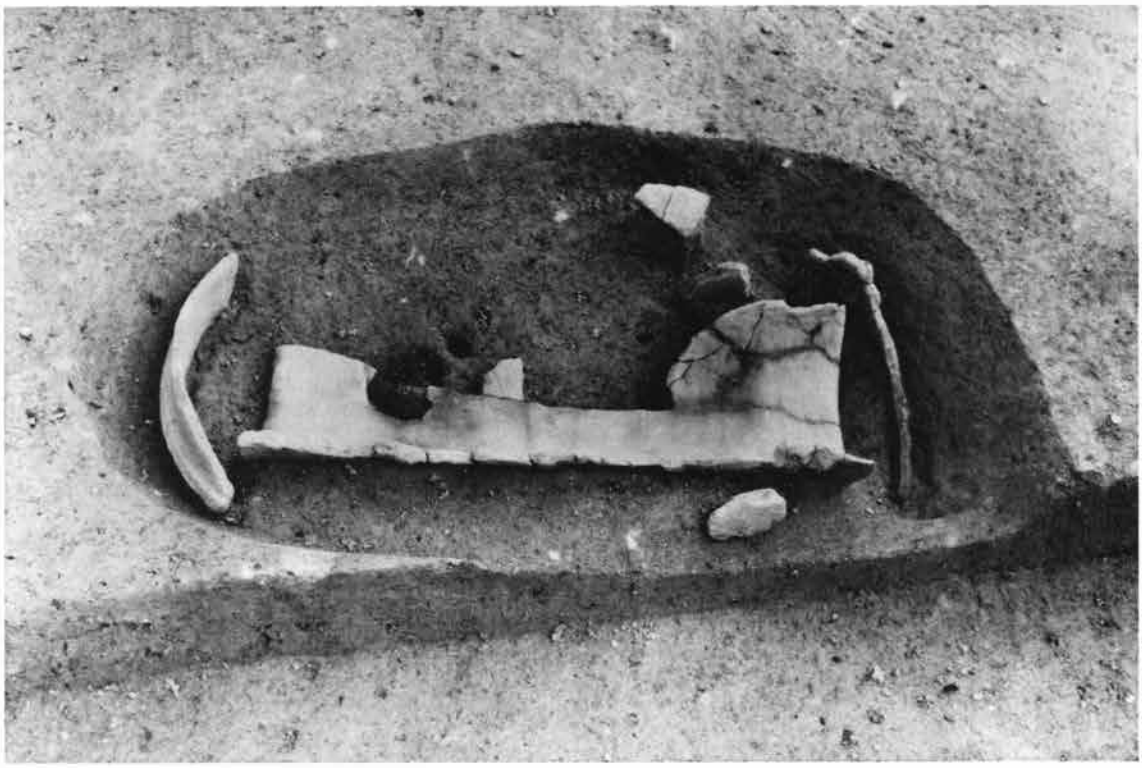
(1) 瓦谷遺跡20bt　S X2004－1（連繋部被覆埴輪撤去後の状態，東から）

(2) 瓦谷遺跡20bt　S X2004－2（北小口閉塞状態，北から）

図版第21　瓦谷遺跡



(1)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2005（南から）



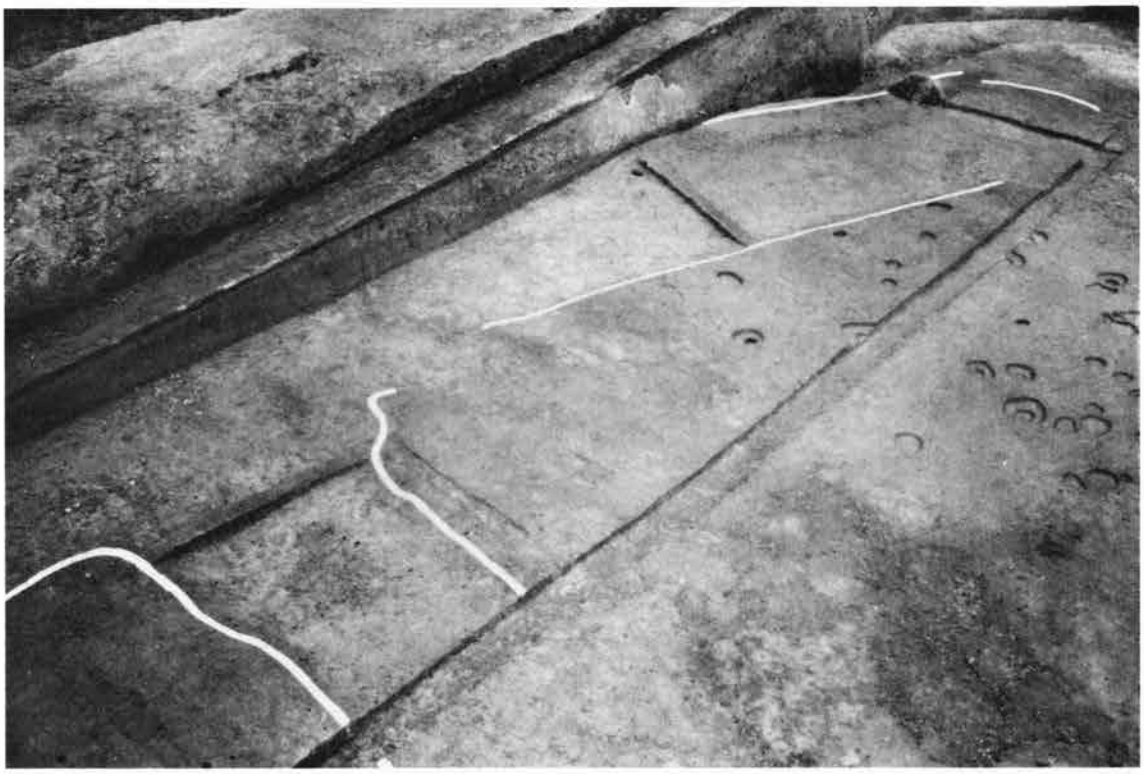
(2)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2007（西から）

図版第22　瓦谷遺跡

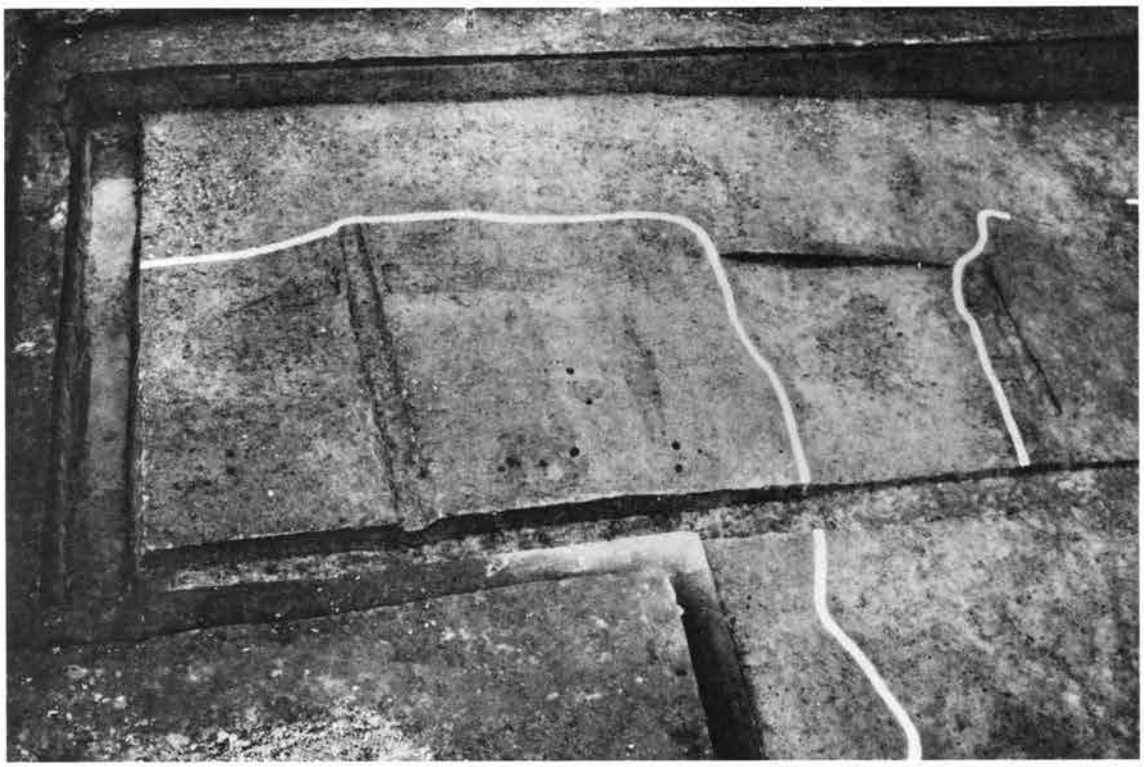
(1)　瓦谷遺跡20bt　トレンチ西半部全景（北から）

(2)　瓦谷遺跡20bt　ピット群検出状況（北から）

図版第23　瓦谷遺跡



(1) 瓦谷遺跡20bt　S X2003・S X2008（手前，南東から）



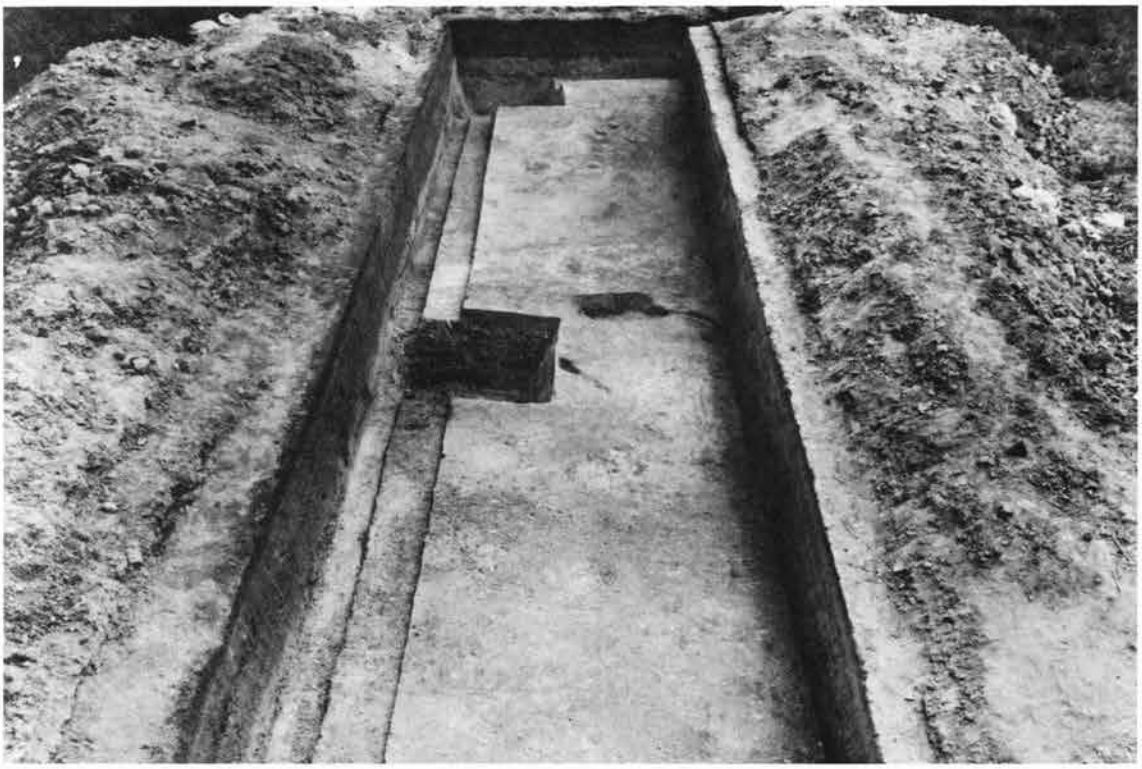
(2) 瓦谷遺跡20bt　S X2008（東から）

図版第24　瓦谷遺跡

(1)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2009(葺石)の残存状況（東から）

(2)　瓦谷遺跡20bt　ＳＸ2009断ち割り横断面近接状況（西から）

図版第25　瓦谷遺跡



(1) 瓦谷遺跡10bt　トレンチ全景（北東から）

(2) 鮒谷22bt　トレンチ全景（北から）

図版第26　瓦谷遺跡

(1) 瓦谷遺跡51・52bt　検出状況（Ⅱトレンチ，北から）

(2) 瓦谷遺跡51・52bt　漆喰井戸検出状況

図版第27　瓦谷遺跡

(1) 瓦谷遺跡48bt　トレンチ全景（北から）

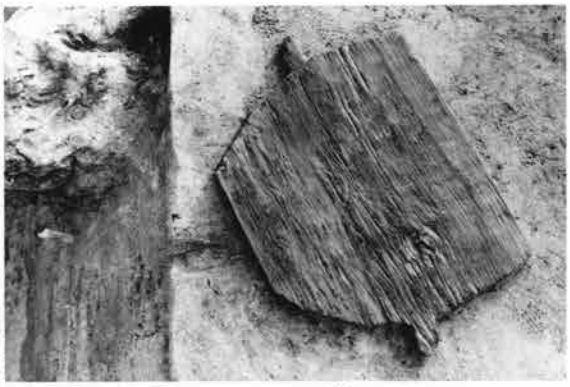
(2) 瓦谷遺跡48bt　ＳＤ4905検出状況（北から）

図版第28　瓦谷遺跡

(1)　S D4805　W—02～05・09（西から）

(2)　S D4805　W—11～13（西から）

(3)　S D4805　W—15・16（西から）



(4)　S D4805　W—15（北から）

(5)　S D4805　W—17・18（西から）

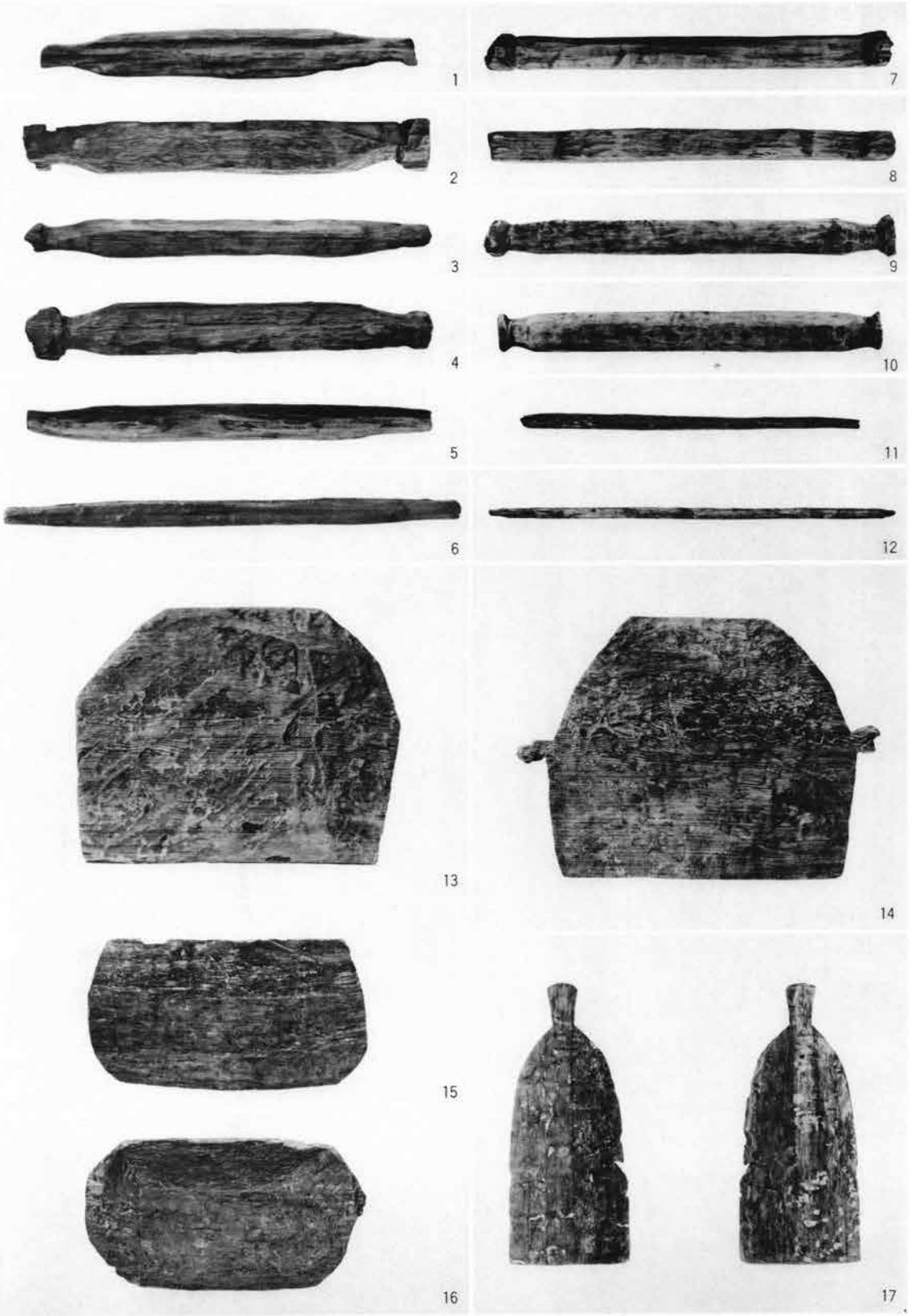
(6)　S D4805　W—18（北から）

(7)　S D4807　土器出土状況（東から）

(8)　S D4807　土器出土状況（南から）

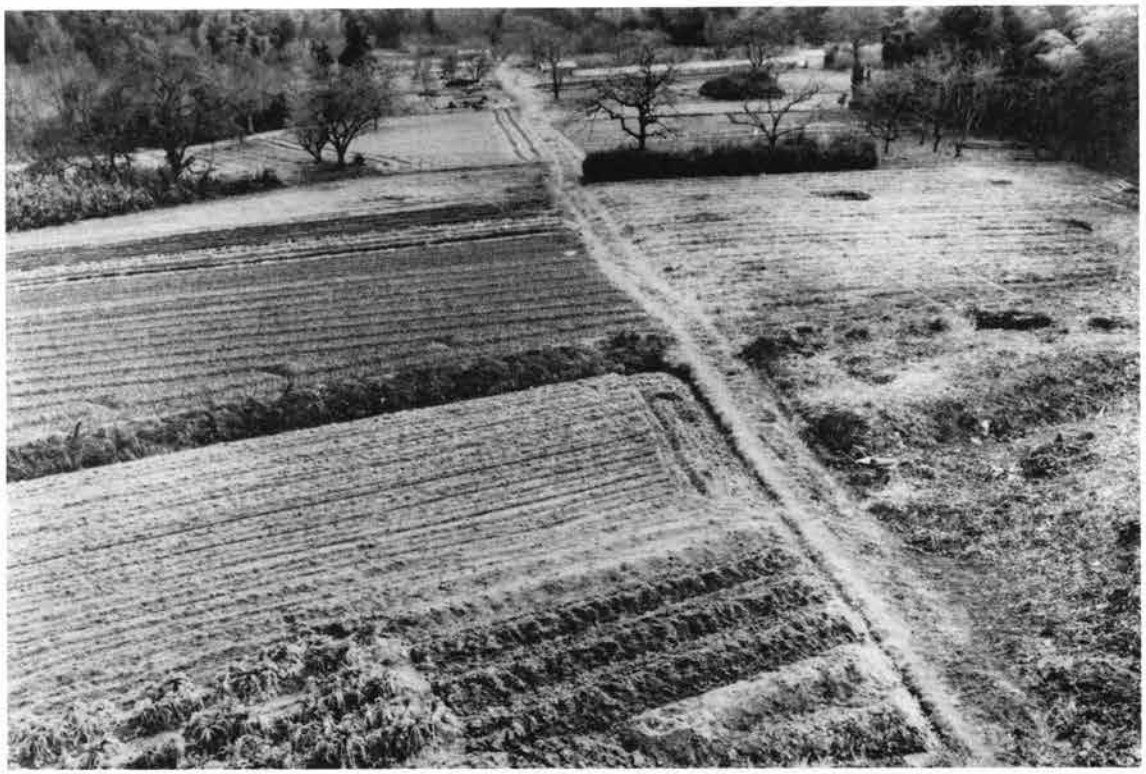
瓦谷遺跡48番地地区遺物出土状況

瓦谷遺跡出土遺物―1（実測図番号に照応）



瓦谷遺跡出土遺物―2　木製品（実測図番号に照応）

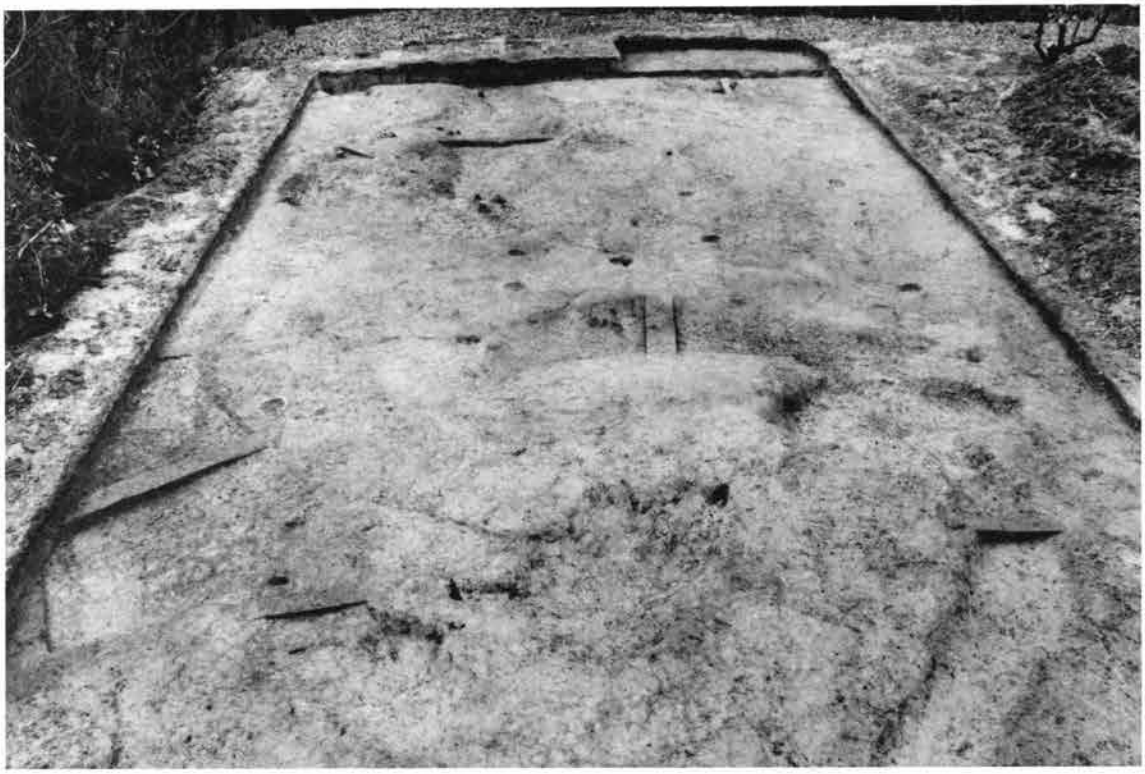
図版第31　上人ヶ平遺跡



(1) 上人ヶ平遺跡現況（北西から）

(2) 上人ヶ平遺跡34bt遺構検出状況（西から）

図版第32　上人ヶ平遺跡

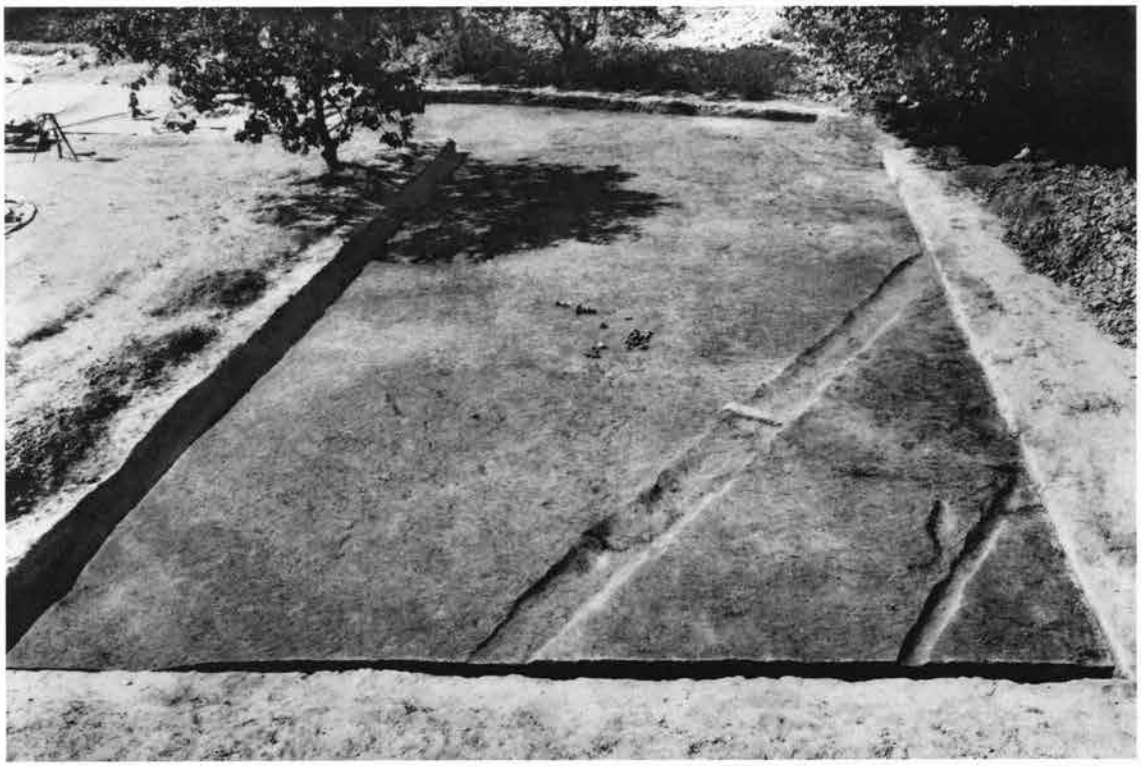


(1)　上人ヶ平遺跡６bt遺構検出状況（南から）

(2)　上人ヶ平遺跡６bt S K0601（北から）

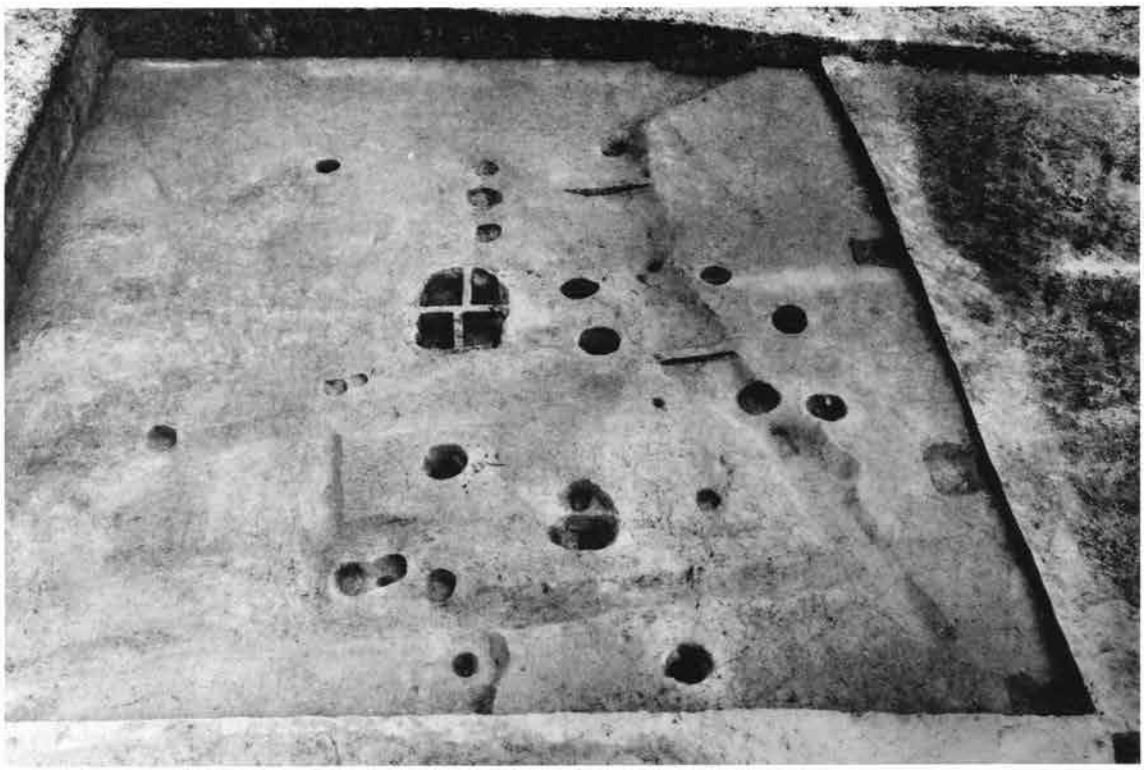
図版第33　上人ヶ平遺跡

(1)　上人ヶ平遺跡５bt検出状況（南から）

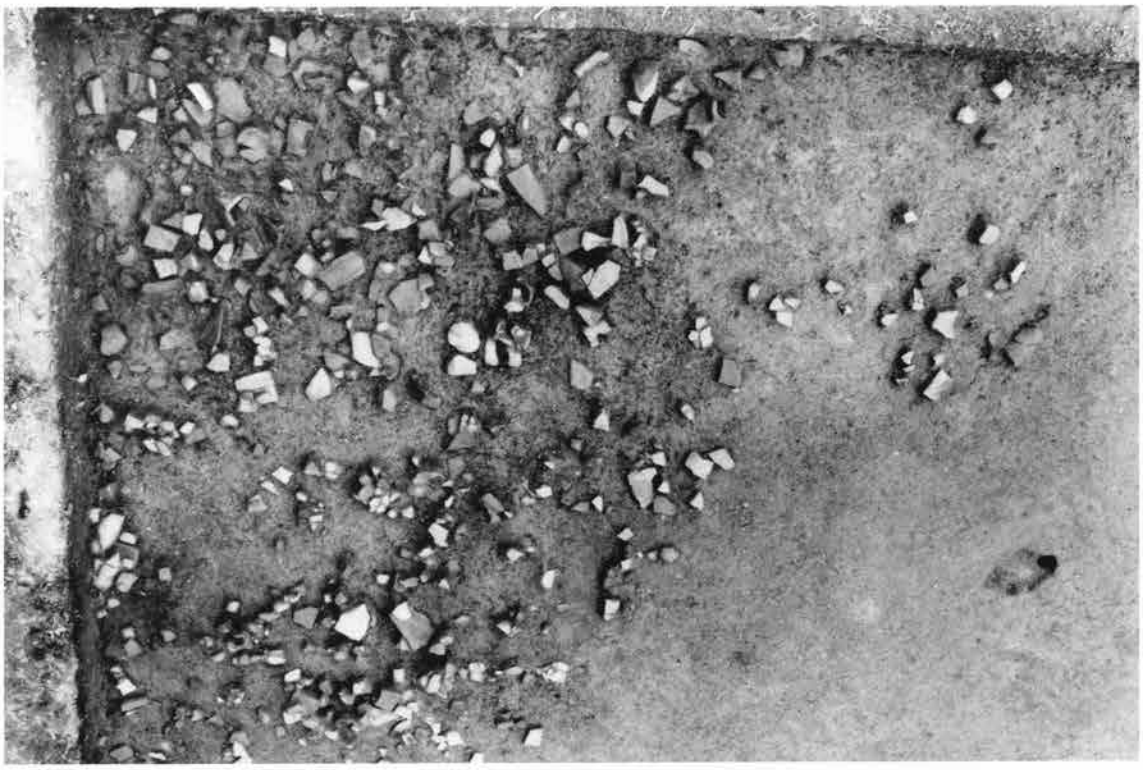


(2)　上人ヶ平遺跡16bt東部検出状況（南から）

図版第34　上人ヶ平遺跡

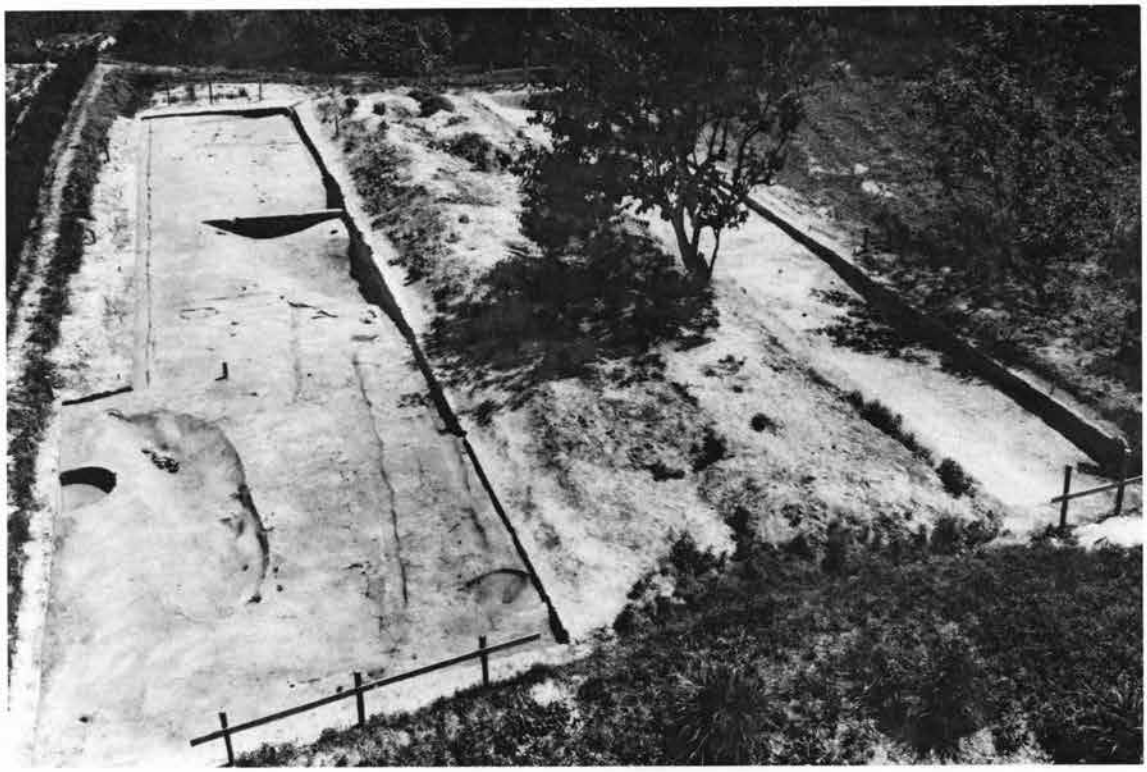


(1)　上人ヶ平遺跡19bt１トレンチ遺構検出状況（西から）

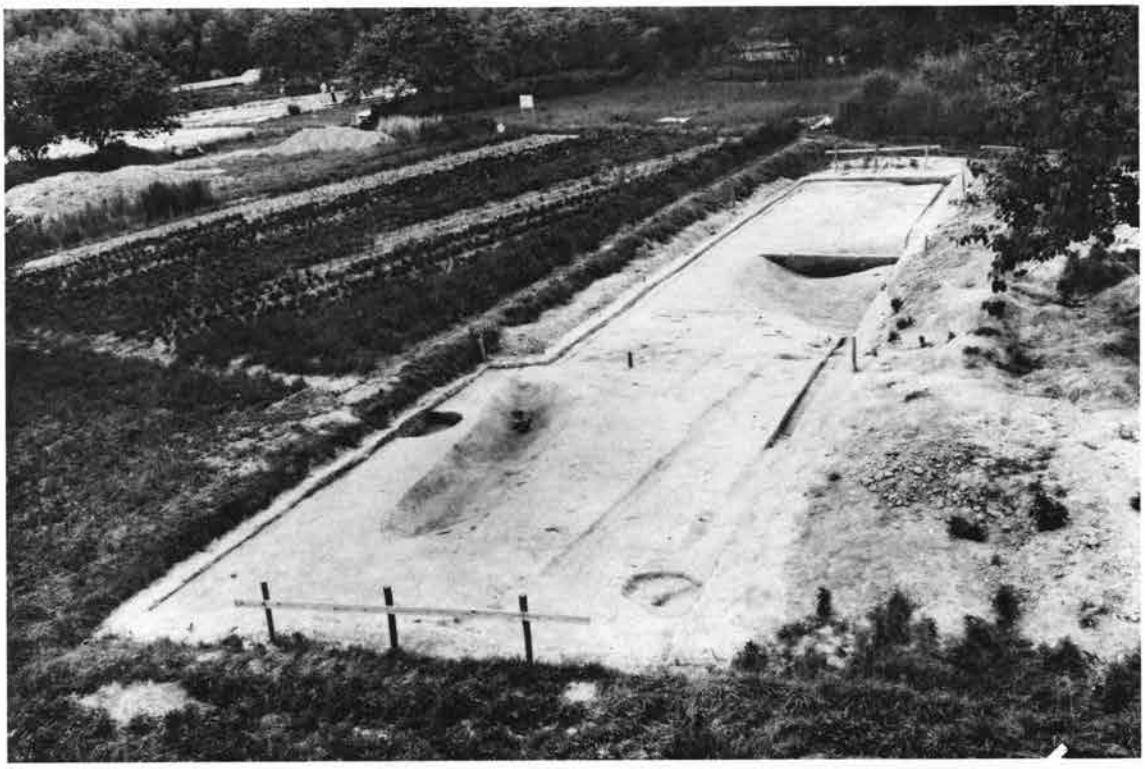


(2)　上人ヶ平遺跡19bt ＳＫ1909検出状況（上方が南）

図版第35　上人ヶ平遺跡

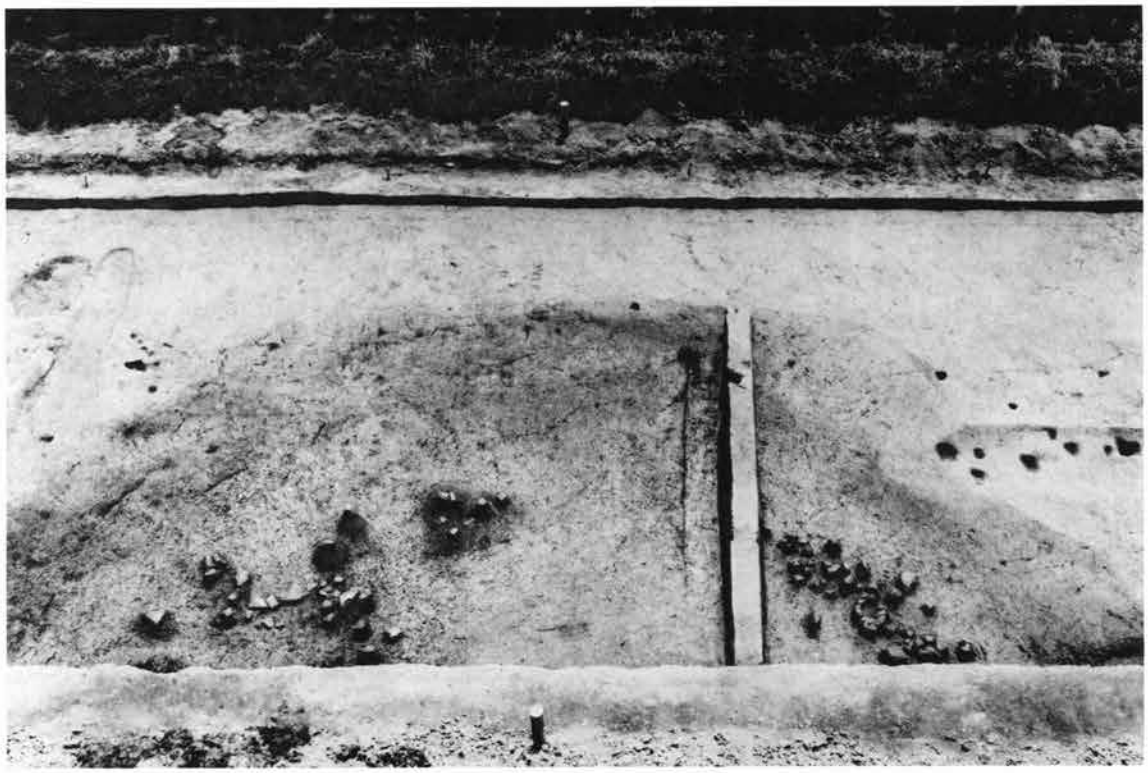


(1) 上人ヶ平遺跡８bt遺構検出状況（北から）



(2) 上人ヶ平遺跡８bt２トレンチ遺構検出状況（北西から）

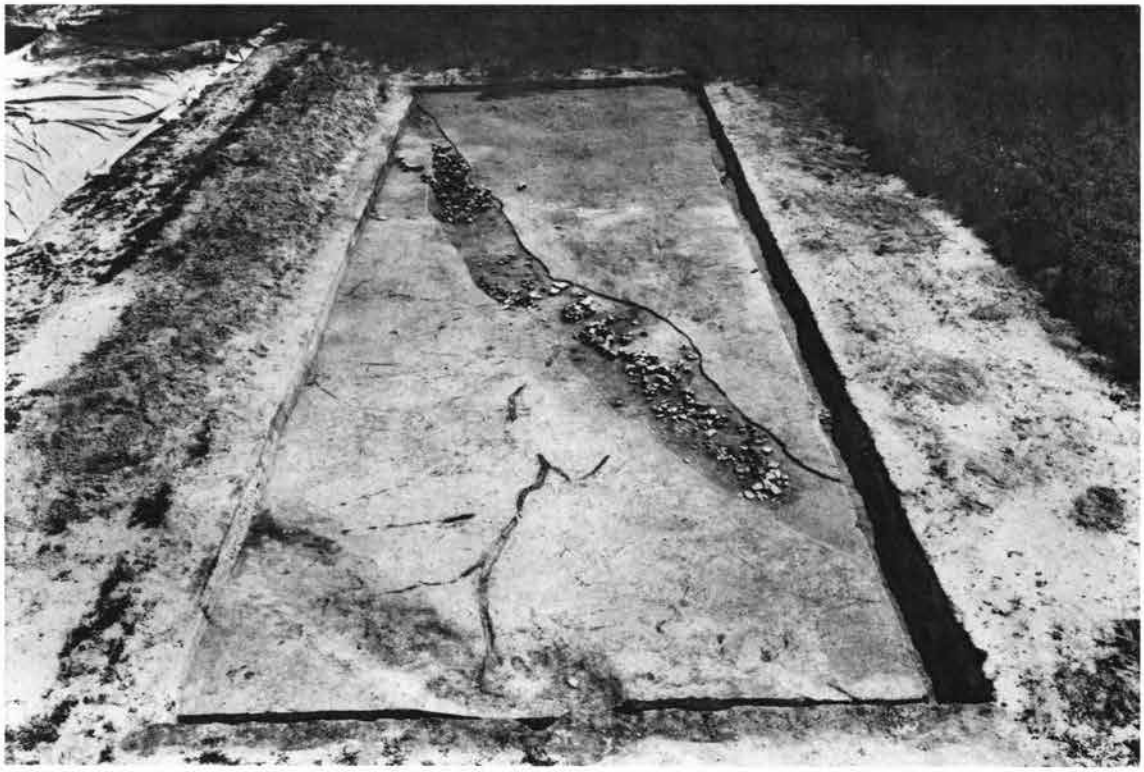
図版第36　上人ヶ平遺跡



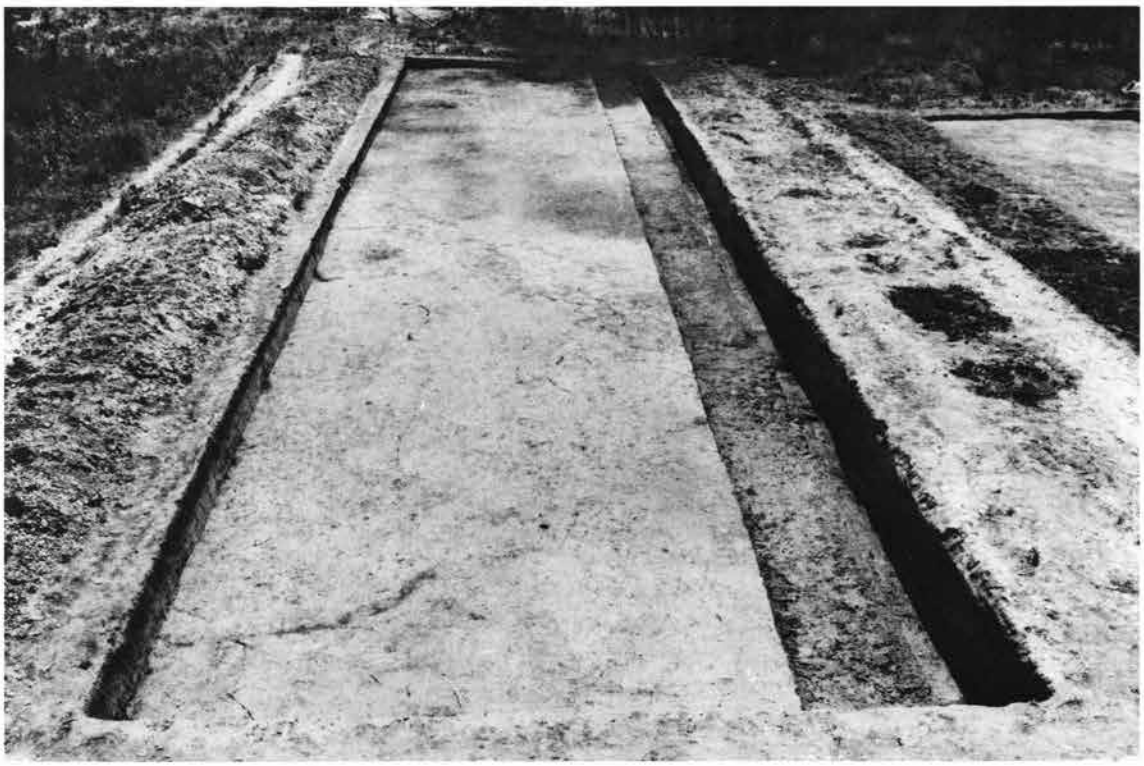
(1)　上人ヶ平遺跡８bt S D0805検出状況（西から）

(2)　上人ヶ平遺跡８bt S K0803遺物出土状況（左が北）

図版第37　上人ヶ平遺跡



(1) 上人ヶ平遺跡15bt遺構検出状況（北から）



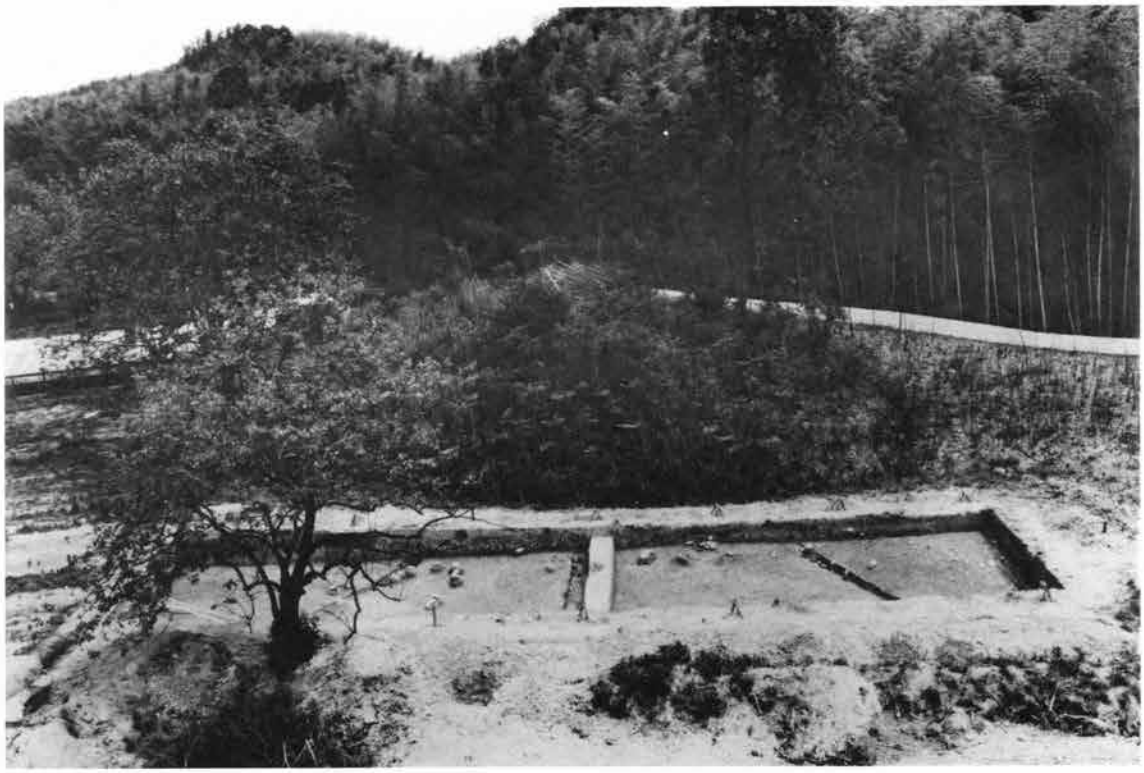
(2) 上人ヶ平遺跡20bt遺構検出状況（北から）

図版第38　上人ヶ平遺跡

(1)　上人ヶ平遺跡21bt１トレンチ遺構検出状況（南から）

(2)　上人ヶ平遺跡21bt２トレンチ遺構検出状況（東から）

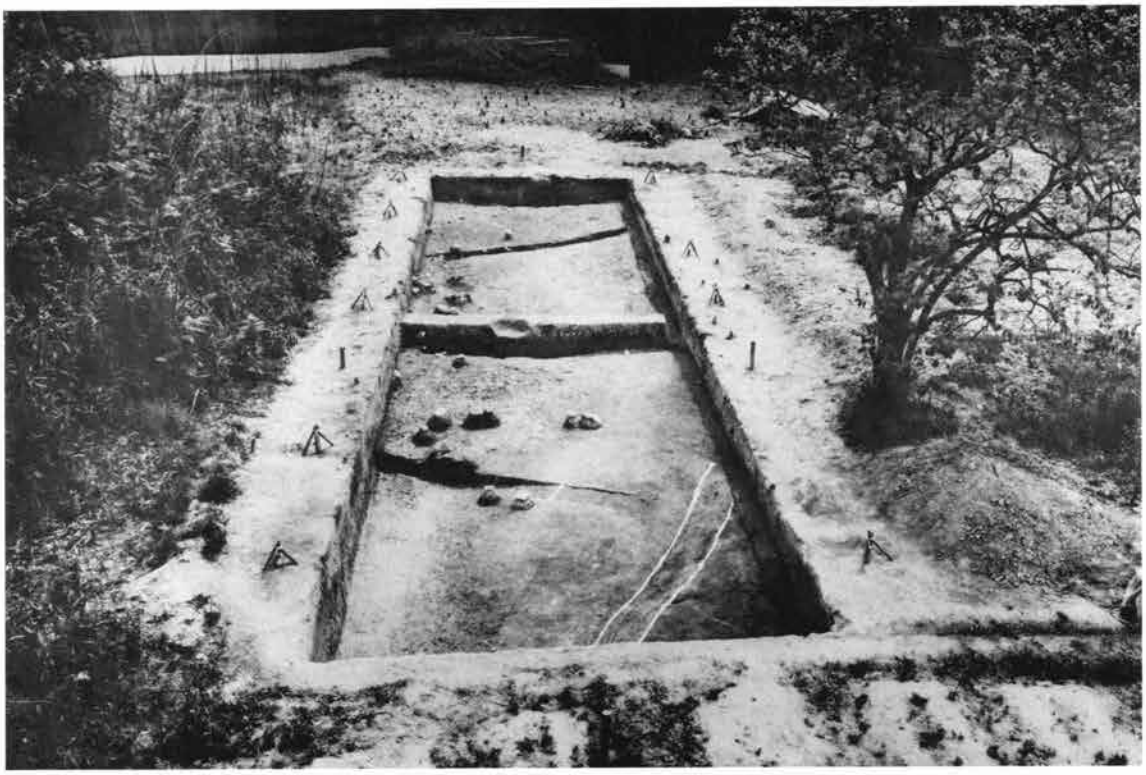
図版第39　上人ヶ平遺跡



(1)　上人ヶ平遺跡21bt３トレンチ・上人ヶ平５号墳全景（北西から）

(2)　上人ヶ平遺跡21bt３トレンチ遺構検出状況(1)（南西から）

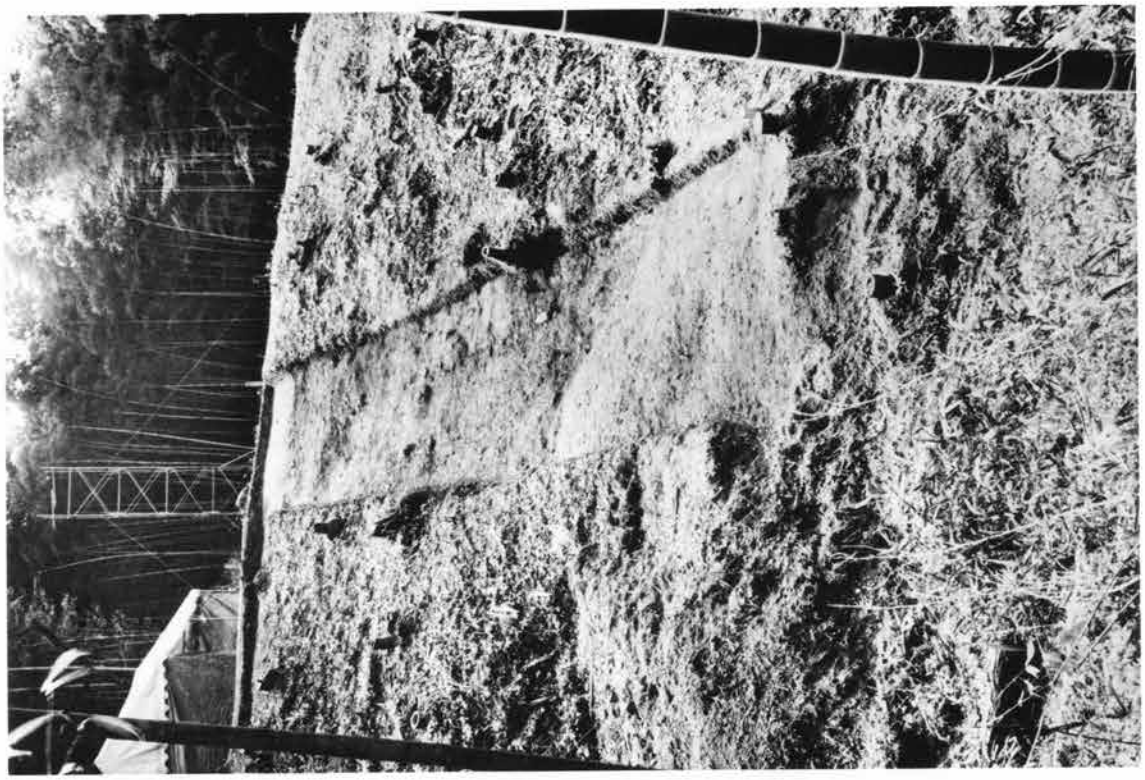
図版第40　上人ヶ平遺跡



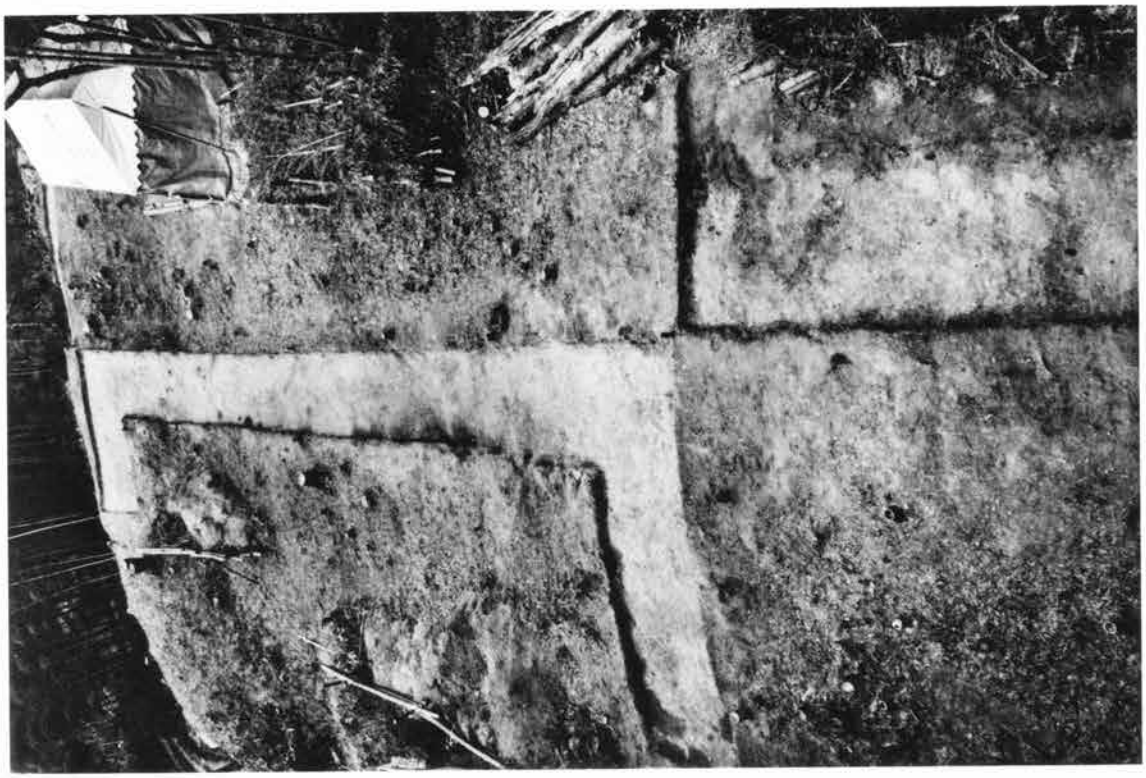
(1)　上人ヶ平遺跡21bt３トレンチ遺構検出状況(2)（南西から）

(2)　上人ヶ平遺跡21bt遺物出土状況（西から）

図版第41　第27・28地点（菩提１・２号墳）

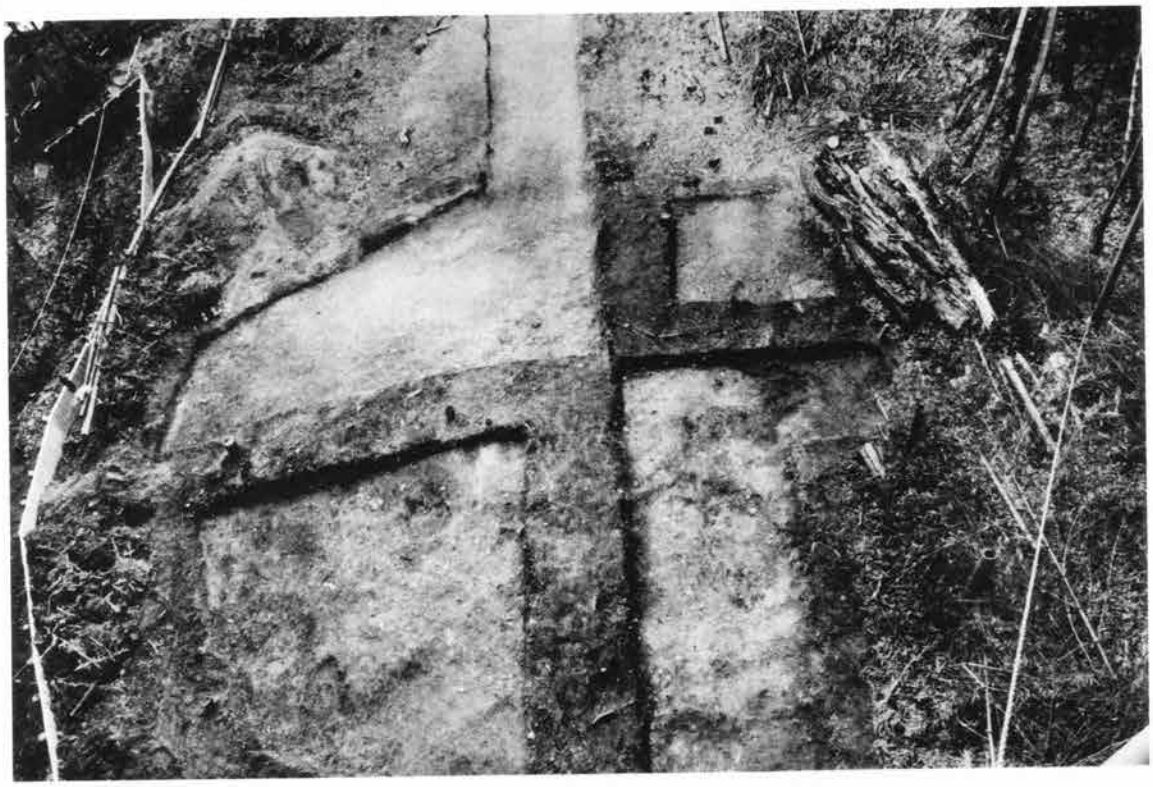


(2)　第28地点（菩提２号墳）調査状況



(1)　第27・28地点（菩提１・２号墳）全景

図版第42　第27・28地点（菩提１・２号墳）



(1) 第28地点（菩提２号墳）調査トレンチ全景

(2) 第27地点（菩提１号墳）調査トレンチ全景

京都府遺跡調査概報 第26冊

昭和62年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）